大学入試センター年報

昭和52年度

昭和54年3月

大学入試センター

大学入試センター年報

昭和52年度

総　目　次

まえがき

昭和52年度事業報告

Ⅰ　昭和52年度大学入試センターに係る主要事項……（ 1 ）

Ⅱ　大学入試センター関係法令・規則……（ 4 ）

昭和52年度共通第１次学力試験試行テスト実施報告

Ⅰ　総　　論……（ 29 ）

Ⅱ　共通第１次学力試験試行テストの実施について……（ 32 ）

Ⅲ　共通第１次学力試験試行テスト試験問題について……（ 77 ）

Ⅳ　共通第１次学力試験試行テストの成績結果について…（ 239 ）

Ⅴ　共通第１次学力試験試行テストに関する追跡調査
について……（ 267 ）

ま　え　が　き

共通第１次学力試験と第２次試験とから成る新しい大学入学者選抜試験は昭和54年度から実施されることとされた。その趣旨とするところは、従来の大学入学試験に対する批判に応え、高等学校における正常な教育を歪めることのないことに留意し、かつ多くの資料によって入学者を決定すべきであるということにあった。

この新しい入学試験制度は、国立大学協会が国立大学における入学試験の改善をめざして、長い年月にわたって研究討議を行ってきたものであるが、この研究の結論にもとづき、文部省において、大学入試改善会議の議を経て制定されたものである。

大学入試センターは、この新しい入試制度における第一段階としての共通第１次学力試験を各大学と協力して実施するための国立大学共同利用の機関として、併せて大学入学者選抜方法の改善に関する調査研究を行う機関として、昭和52年５月２日に設置された。

大学入試センターはその設置以来、共通第１次学力試験実施にむけてその整備に鋭意努力をつづけているが、昭和52年は実施前年のこともあり、その実施に遺漏のないことを期するため、大規摸な試行テストを行った。これはセンターの管理・事業部所管にかかるものであるが、ここに「大学入試センター年報」の名のもとにその報告をすることとした。昭和53年以降、共通第１次学力試験が実施されることとなるが、これらの事業については、今後ひきつづき年次報告の形式で、「大学入試センター年報」の巻を重ねて公表することとしたい。

国立大学協会における調査研究においては共通第１次学力試験についての実施研究を行ってきたが、これら調査研究の結果は昭和50年以来、「国立大学入学試験改善調査研究報告書」の名で公表されてきた。この「大学入試センター年報」(昭和52年度）はそれと継続する性格をもっているとみることもできる。

なお、大学入試センターには、大学入学者選抜方法の改善に関する調査研究を行うべき研究部が設置されているが、今後、この研究部が整備されるに伴って、研究報告が行われることになるが、これについては、この「大学入試センター年報」とは別の機関誌をもって公表することを予定している。

昭和52年度事業報告

Ⅰ　昭和52年度大学入試センターに係る主要事項

Ⅱ　大学入試センター関係法令・規則

Ⅰ　昭和52年度　大学入試センターに係る主要事項

月	日	事　　項
5	2	国立学校設置法の一部が改正され、国立大学入学者の選抜に関し、共通第１次学力試験の問題作成・採点その他一括して処理することが適当な業務を行い、かつ、大学入学者選抜方法の改善に関する調査研究を行うための機関として、大学入試センターが設置された。 所　長　　加藤　陸奥雄 組　織　　所長（定員　1） 　　研究部（情報処理、追跡、評価の３部門）（定員　3） 　　管理・事業部（総務課、事業課）（定員　24）
	13	国立大学協会と、評議委員候補者等の人事、その他重要な事項について連絡協議を行うこととし、第１回の連絡協議を行った。 （評議員・運営協議員の各候補者の選考、専門委員会委員任命の方針、等について協議した。）
	24	教科専門委員会委員を任命し、直ちに、試験問題作成の作業を開始した。
6	16	第１回の評議員会を開催した。 （諸規程の審議、運営協議員会委員候補者の選考、共通第１次学力試験試行テスト（以下「試行テスト」という。）実施計画の審議を行った。）
	30	文部省から「昭和54年度以降における大学入学者選抜実施要項」の通知が発せられた。
7	2	第１回の運営協議員会を開催した。 （共通第１次学力試験実施大綱案、試行テスト受験案内案の審議を行った。） 研究部情報処理部門の助教授に、清水留三郎（東京大学教養学部助教授併任）が任命された。 「昭和54年度大学入学者選抜に係る共通第１次学力試験実施大綱（以下「実施大綱」という。）を発表した。
	4	実施大綱及び試行テストに関する国・公立大学説明会を開催した（全国６ブロック、13日まで）。
	18	試行テストの受験案内の交付を開始した。
	28	第１回の実施方法専門委員会を開催した。 （共通第１次学力試験の実施期日について審議を行った。）
8	4	高等学校及び教育委員会側と、共通第１次学力試験に関する連絡協議の場を設けることについて、事前協議を行った。

月	日	事　　項
8	23	公立大学の共通第１次学力試験利用に伴い、国・公立大学の連絡体制等について協議されたい旨、国立大学協会に申し入れを行った。
9	1	試行テストの志願票の受け付けを開始した（９月30日まで）。
	16	高等学校、教育委員会に対する「実施大綱」の説明会を開催した（全国７ブロック、10月７日まで）。
	30	試行テスト志願者の募集を締め切った（志願者数63,609人、うち点字による受験希望者を含む身障者83人）。
10	8	第１回の共通第１次学力試験等連絡協議会総合部会を開催した。 （協議会設置の趣旨、目的を確認し、また、実施大綱説明会の概況を説明した。）
	17	国立大学協会と連絡協議会を開催し、実施大綱説明会において提出された要望事項の伝達を行った。
	25	文部省から、「大学入学者選抜方法の改善に関する会議」の議に基づき、共通第１次学力試験の実施時期を再検討するよう依頼があった。 試行テストの受験志願に対する受験票の送付を開始した（28日まで）。
11	4	実施方法専門委員会を開催し、試行テストの実施細目を審議した（５日まで）。
	17	国立大学協会総会において、共通第１次学力試験実施期日の繰り下げについて検討することが承認された。
	21	試行テスト実施担当者会議を開催し、その実施体制について協議した。
12	8	国立大学協会第２常置委員会が開催され、共通第１次学力試験の実施期日が審議された。
	24	試行テストを実施した（25日までの２日間）。 （志願者　63,609人，　所定の教科を受験した者　39,673人）。
	25	試行テストの正解例を公表した。
1	19	運営協議員会において、共通第１次学力試験実施時期の繰り下げ及び共通第１次学力試験等連絡協議会に試験問題部会を設けることが了承された。 文部省の「大学入学者選抜方法の改善に関する会議」が、共通第１次学力試験実施時期の繰り下げを決定した。
	20	試行テストの科目別平均点を公表した。
	26	実施方法専門委員会を開催し、追試験及び再試験の受験資格基準を審議した。

月	日	事　　項
1	30	文部省から「昭和54年度以降における大学入学者選抜実施要項の一部改正について」の通知が発せられ（共通第１次学力試験実施時期の繰り下げが決定し）、これに伴い２月１日付けで実施大綱の一部改正を行った。
2	1	第１回の共通第１次学力試験等連絡協議会試験問題部会を開催し、試行テストの試験問題についての評価検討を行った。
3	30	２月１日開催した試験問題部会の検討結果に基づき、教科専門委員会問題作成部会長会議を開催した。

Ⅱ　大学入試センター関係法令・規則

大学入試センター関係法令

国立学校設置法（抜粋）

（昭和24年法律第150号
一部改正52.5.2法律第29号）

第3章の4　大学入試センター

（大学入試センター）

第9条の5　国立大学の入学者の選抜に関し、共通第1次学力試験の問題の作成及び採点その他一括して処理することが適当な業務を行うとともに、大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査研究を行う機関として、大学入試センターを置く。

2　大学入試センターは、国立大学以外の大学の要請に応じて、当該大学の入学者の選抜に関する業務の実施に協力することができる。

3　大学入試センターは、東京都に置く。

4　第1項の共通第1次学力試験に関し必要な事項は、文部省令で定める。

附　則

1　この法律は、公布の日から施行する。

国立学校設置法施行規則（抜粋）

（昭和39年文部省令第11号
一部改正52.5.2省令第18号）

第5章　大学入試センター

（大学入試センター）

第47条　大学入試センターに置かれる職の種類並びに大学入試センターの組織及び運営の細目については、大学入試センター組織運営規則（昭和52年文部省令第20号）の定めるところによる。

（共通第1次学力試験）

第48条　国立学校設置法第9条の5第1項の共通第1次学力試験は、各国立大学が大学入試センターと協力して、国立大学に入学を志願する者の高等学校の段階における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を判定することを主たる目的として、同一の期日に同一の試験問題により、共同して実施するものとする。

附　則

1　この省令は、公布の日から施行する。

教育公務員特例法（抜粋）

（昭和24年法律第1号
一部改正52.5.2法律第29号）

（教育公務員以外の者に対するこの法律の準用）

第22条　国立又は公立の学校において教員の職務に準ずる職務を行う者、文部省設置法（昭和24年法律第146号）第14条及び第36条第1項に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第3章の3及び第3章の4に規定する機関の長（同法第9条の4第2項に規定する研究所の長を含む。）並びにその職員のうち専ら研究又は教育に従事する者、国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手並びに国立又は公立の専修学校又は各種学校の校長及び教員については、政令の定めるところにより、この法律の規定を準用する。

附　則

1　この法律は、公布の日から施行する。

教育公務員特例法施行令（抜粋）

（昭和24年政令第6号
一部改正52.5.2政令第135号）

第3条の2　文部省設置法（昭和24年法律第146号）第14条及び第36条第1項に掲げる機関（日本芸術院を除く。）並びに国立学校設置法（昭和24年法律第150号）第3章の3及び第3章の4に規定する機関の長（同法第9条の4第2項に規定する研究所の長を含む。以下この条において同じ。）並びにその職員のうち専ら研究又は教育に従事する者並びに国立養護教諭養成所設置法（昭和40年法律第16号）による国立養護教諭養成所の所長、教授、助教授及び助手については、法第4条、第7条、第11条、第12条、第19条、第20条及び第21条中国立大学の学長及び教員に関する部分の規定を準用する。この場合において、これらの規定中「大学管理機関」とあるのは次の各号の区別に従って読み替え、これらの機関の長及びその職員をそれぞれ学長及び教員に準ずる者としてこれらの規定を準用するものとする。

一　法第4条第1項については、国立学校設置法第3章の3及び第3章の4に規定する機関の長及びその職員にあっては「文部省令で定めるところにより任命権者」、その他の機関の長及びその職員にあっては「任命権者」

二　法第4条第2項、第7条、第11条及び第12条については、「任命権者」

附　則

1　この政令は、公布の日から施行する。

大学入試センター組織運営規則

（昭和52年文部省令第20号
一部改正53.4.1省令第12号）

（職員の種類）

第1条　大学入試センター（以下「センター」という。）に、次の職員を置く。

一　所長

二　教授

三　助教授

四　事務職員

五　技術職員

2　所長は、センターの業務を掌理する。

3　教授は、研究に従事する。

4　助教授は、教授の職務を助ける。

5　事務職員は、庶務、会計等の事務に従事する。

6　技術職員は、技術に関する職務に従事する。

（内部組織）

第2条　センターに、次の三部を置く。

一　管理部

二　事業部

三　研究部

（管理部及び事業部）

第3条　管理部においては、庶務、会計及び施設等に関する事務を処理する。

2　事業部においては、共通第1次学力試験の実施等に関する事務を処理する。

3　管理部及び事業部に、その所掌事務を分掌させるため、文部大臣が別に定めるところにより、課を置く。

4　管理部及び事業部並びに課に、それぞれ部長及び課長を置き、事務職員又は技術職員をもって充てる。

5　部長は、所長の命を受け、部の事務を掌理する。

6　課長は、上司の命を受け、課の事務を処理する。

（研究部）

第4条　研究部においては、大学の入学者の選抜方法の改善に関する調査研究を行う。

2　研究部に、次の五研究部門を置く。

一　情報処理研究部門

二　追跡研究部門

三　評価研究部門

四　試験方法研究部門

五　試験制度研究部門

3　研究部に部長を置き、教授をもって充てる。

4　部長は、所長の命を受け、部の事務を掌理する。

（評議員）

第5条　センターに評議員15人以内を置く。

2　評議員は、センターの事業計画その他の管理運営に関する重要事項について、所長に助言する。

3　評議員は、国立大学の学長その他の学識経験のある者のうちから、所長の推薦を受けて、文部大臣が任命する。

4　評議員は、非常勤とする。

5　評議員の任期その他評議員に関し必要な事項は、別に文部大臣が定める。

（運営協議員）

第6条　センターに運営協議員21人以内を置く。

2　運営協議員は、共通第1次学力試験の実施計画に関する事項その他のセンターの運営に関する事項で所長が必要と認めるものについて、所長の諮問に応じる。

3　運営協議員は、センターの教授及び助教授並びに国立大学の学長及び教員その他の学識経験のある者のうちから、所長の推薦を受けて、文部大臣が任命する。

4　運営協議員は、非常勤とする。

5　運営協議員の任期その他運営協議員に関し必要な事項は、別に文部大臣が定める。

（専門委員）

第7条　センターに、別に定める定数の範囲内で、専門委員を置く。

2　専門委員は、所長の定めるところにより、共通第1次学力試験に関し、実施方法の検討、試験問題の作成その他の専門的事項を処理する。

3　専門委員は、センターの教授及び助教授並びに国立大学の教員のうちから、所長が任命する。

4　専門委員は、非常勤とする。

5　専門委員の任期その他専門委員に関し必要な事項は、別に所長が定める。

附　則

この省令は、公布の日から施行する。

大学入試センターの所長等の選考基準

（52.12.26文部大臣裁定）

（趣　旨）

第１　大学入試センター（以下「センター」という。）の所長の採用並びに教授及び助教授の採用及び昇任の選考の基準は、この裁定に定めるところによる。

（所長の選考基準）

第２　所長となることのできる者は、次の各号の一に該当する者で、人格が高潔で学識が優れ、かつ、教育行政に関し、識見と経験を有する者とする。

一　博士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。以下同じ。）を有する者で教育研究上の指導能力があると認められる者

二　研究上の業績が前号の者に準ずると認められる者で、教育研究上の指導能力があると認められる者

三　センター又は大学（旧大学令（大正７年勅令第388号）による大学を含む。以下同じ。）において教授の経歴のある者

四　研究所、試験所等（教育若しくは研究に関する機関を含む。）に10年以上在職し、研究上の業績があると認められ、かつ、教育研究上の指導能力があると認められる者

（教授の選考基準）

第３　教授となることのできる者は、次の各号の一に該当する者とする。

一　博士の学位を有する者

二　研究上の業績が前号の者に準ずると認められる者

三　大学において教授の経歴のある者

四　センター又は大学において助教授の経歴があり、研究上の業績があると認められる者

五　研究所、試験所等に10年以上在職し、研究上の業績があると認められる者

（助教授の選考基準）

第４　助教授となることのできる者は、次の各号の一に該当する者とする。

一　第３に規定する教授となることのできる者

二　大学において助教授又は講師（常時勤務の者に限る。）の経歴がある者

三　大学において３年以上助手又はこれに準ずる職員としての経歴があり、研究上の能力があると認められる者

四　修士の学位（外国において授与されたこれに相当する学位を含む。）を有する者で、研究上の能力があると認められる者

五　研究所、試験所等に５年以上在職し、研究上の業績があると認められる者

附　則

この基準は、昭和52年12月26日から実施する。

教育公務員特例法施行令第３条の２の規定に基づく大学入試センターの所長等の選考の手続に関する省令

（昭和52年文部省令第22号）

（趣旨）

第１条　大学入試センター（以下「センター」という。）の長及びその職員のうち専ら研究に従事する者に関する教育公務員特例法施行令（昭和24年政令第６号）第３条の２において準用する教育公務員特例法（昭和24年法律第１号）第４条第１項の選考の手続については、この省令の定めるところによる。

（所長の選考の手続）

第２条　センターの所長の採用の選考は、大学入試センター組織運営規則（昭和52年文部省令第20号。以下「規則」という。）第５条第１項に規定する評議員で構成する会議が推薦（当該推薦に当たっては、規則第６条第１項に規定する運営協議員（以下「運営協議員」という。）で構成する会議の意見を聴くものとする。）をした者について行うものとする。

（教授及び助教授の選考の手続）

第３条　センターの教授及び助教授の採用及び昇任の選考は、センターの所長が推薦（当該推薦に当たっては、運営協議員で構成する会議の議を経るものとする。）をした者について行うものとする。

附　則

この省令は、公布の日から施行する。

大学入試センター評議員規程

(52.5.2文部大臣裁定)

(評議員の任期)

第1　評議員の任期は、2年とする。ただし、補欠の評議員の任期は、前任者の残任期間とする。

(評議員の職務の遂行)

第2　評議員は、大学入試センター組織運営規則（昭和52年文部省令第20号）第5条第2項に定める職務を行うに当たっては、会議を開いて協議を行うものとする。

2　前項の会議の運営に関し、必要な事項は、大学入試センター所長が定める。

附　則

この規程は、昭和52年5月2日から実施する。

大学入試センター運営協議員規程

(52.5.2文部大臣裁定)

(運営協議員の任期)

第1　運営協議員の任期は、2年とする。ただし、補欠の運営協議員の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営協議員の職務の遂行)

第2　運営協議員は、大学入試センター組織運営規則（昭和52年文部省令第20号）第6条第2項に定める職務を行うに当たっては、会議を開いて協議を行うものとする。

2　前項の会議の運営に関し必要な事項は、大学入試センター所長が定める。

附　則

この規程は、昭和52年5月2日から実施する。

大学入試センターの内部組織に関する訓令

(昭和52年文部省訓令第16号
全部改正53.4.1訓令第5号)

大学入試センターの管理部に置かれる課は庶務課及び会計課とし、事業部に置かれる課は事業課及び情報処理課とする。

附　則

この訓令は、昭和53年4月1日から実施する。

大学入試センター専門委員の会議に関する規程

昭和52年6月16日
大学入試センター規程第3号

(昭和52年8月2日一部改正
昭和53年3月14日一部改正
昭和53年4月1日一部改正)

第1章　総　則

(趣旨)

第1条　大学入試センター組織運営規則（昭和52年文部省令第20号。以下「規則」という。）第7条第1項の規定に基づき、大学入試センター（以下「センター」という。）に置かれる専門委員が規則第7条第2項の職務を遂行するに当たっては、それぞれ会議を開いて協議するものとし、会議の組織及び運営については、この規程の定めるところによる。

(専門委員会)

第2条　センターに置く専門委員の会議（以下「委員会」という。）及び専門委員（以下「委員」という。）の数は、次のとおりとする。

一　教科専門委員会　　200人以内

二　実施方法専門委員会　　20人以内

2　委員会に部会を置く。

(委員の任期)

第3条　委員会の委員の任期は2年とし、原則として1年ごとに委員の半数を改選する。

2　委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長等)

第4条　それぞれの委員会に委員長を置き、委員のうちからセンターの所長が委嘱する。

2　各委員は、センターの所長の指名により、いずれかの部会に属するものとする。

(会議)

第5条　会議は、センターの所長が必要と認めたときは、委員長と協議し、委員長がこれを招集する。

2　委員会は、構成員の過半数の出席がなければ、会議を開くことはできない。

(議決)

第6条　委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決する。ただし、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

（臨時委員）

第７条　専門委員の会議には、第２条第１項の各号に規定する委員のほか、特別な事項について調査審議するため臨時委員を置くことができる。

２　臨時委員に関する事項は、別に定める。

第２章　教科専門委員会

（趣旨）

第８条　第２条第１項第１号に定める教科専門委員会の組織及び運営については、第１章に定めるもののほか、この章の定めるところによる。

（目的）

第９条　教科専門委員会は、センターの所長の委嘱により、共通第１次学力試験（以下、この章及び次章において「試験」という。）に関して、次の事項を処理する。

一　試験の問題作成の基本方針の策定及び問題の作成に関すること。

二　試験の問題作成に関し、教科・科目間の調整に関すること。

（部会）

第10条　教科専門委員会に、科目別等の試験問題を作成するため、次表のとおり部会を置く。

部会の名称	分担事項
国語問題作成部会	「現代国語」及び「古典Ⅰ甲」の試験問題の作成
倫・社問題作成部会	「倫理・社会」の試験問題の作成
政・経問題作成部会	「政治・経済」の試験問題の作成
日本史問題作成部会	「日本史」の試験問題の作成
世界史問題作成部会	「世界史」の試験問題の作成
地理問題作成部会	「地理Ａ」及び「地理Ｂ」の試験問題の作成
数学問題作成部会	「数学一般」及び「数学Ⅰ」の試験問題の作成
基礎理科問題作成部会	「基礎理科」の試験問題の作成
物理問題作成部会	「物理Ⅰ」の試験問題の作成
化学問題作成部会	「化学Ⅰ」の試験問題の作成
生物問題作成部会	「生物Ⅰ」の試験問題の作成
地学問題作成部会	「地学Ⅰ」の試験問題の作成
英語問題作成部会	「英語Ａ」及び「英語Ｂ」の試験問題の作成
ドイツ語問題作成部会	「ドイツ語」の試験問題の作成
フランス語問題作成部会	「フランス語」の試験問題の作成
特別問題作成部会	身体に障害のある者のための試験問題の作成

２　各部会の番号及び委員の数は、別に定める。

（部会長）

第11条　各部会に部会長を置く。

２　部会長は、各部会の構成員のうちから互選する。

３　部会長は、各部会の会務を掌理する。

４　部会長の任期は１年とする。

（会議）

第12条　部会は、３分の２以上の委員の出席がなければ、これを開催することができない。

第３章　実施方法専門委員会

（趣旨）

第13条　第２条第１項第２号に定める実施方法専門委員会の組織及び運営については、第１章に定めるもののほか、この章の定めるところによる。

（目的）

第14条　実施方法専門委員会は、センターの所長の委嘱により、試験に関して、次の事項を処理する。

一　試験の実施方法の基本方針の策定及び実施方法に関すること。

二　試験に関する情報処理の基本方針の策定及び情報処理に関すること。

（部会）

第15条　実施方法専門委員会に、前条各号に定める事項を分担するため、次表のとおり部会を置く。

部会の名称	分担事項
実施方法部会	試験の実施に関する事項
情報処理部会	試験に関する情報処理に関する事項

２　各部会の委員の数は、別に定める。

（部会長）

第16条　各部会に部会長を置く。

２　部会長は、部会の構成員のうちから互選する。

３　部会長は、各部会の会務を掌理する。

（会議）

第17条　部会は、３分の２以上の委員の出席がなければ、これを開催することができない。

第4章　雑　則

第18条　委員会の庶務は、次の表の第一欄・第二欄に掲げる委員会・部会ごとに第三欄に掲げる課において処理する。

第一欄	第二欄	第三欄
教科専門委員会	――――――	事業課
実施方法専門委員会	実施方法部会	事業課
	情報処理部会	情報処理課

第19条　この規程に定めるもののほか、会議の細目については、別に定める。

第20条　この規程の改廃は、委員会の議を経て、所長が行う。

附　則

この規程は、昭和52年6月16日から施行し、昭和52年5月24日から適用する。

附　則

この規程は、昭和52年7月28日から施行する。

附　則

この規程は、昭和53年3月14日から施行する。

附　則

この規程は、昭和53年4月1日から施行する。

共通第1次学力試験等連絡協議会に関する申し合せ

昭和52年10月1日
申し合せ第3号
(昭和53年4月1日一部改正)

1　連絡協議会は総合部会及び試験問題部会で構成し、その構成員は、次のとおりとする。

(1)　総合部会

(大学入試センター)

所長

運営協議会委員（実施方法専門委員会委員長及び教科専門委員会委員長）

管理部長

事業部長

(高等学校)

全国高等学校長協会会長

職業科に係る高等学校長協会の代表者3名

全国普通科高等学校長協会に属する入試制度研究委員会委員長

全国高等学校長協会に属する東京地区以外の代表者1名

(教育委員会)

都道府県教育長協議会第1部会主査

都道府県教育長協議会入試制度研究担当委員1名

全国都市教育長協議会会長

全国都市教育長協議会常任理事1名

全国都道府県教育委員会等指導事務主管部課長の代表者1名

(2)　試験問題部会

(大学入試センター)

所長

教科専門委員会委員長

教科専門委員会の各部会長（特別問題作成部会を除く。）15名

(高等学校、教育委員会)

全国都道府県教育委員会等指導事務主管部課長の代表者1名

15科目について、各都道府県教育委員会が推薦する者45名

2　会議招集の手続き

(1)　総合部会

大学入試センター、高等学校又は教育委員会のいずれかの構成員から要請があったとき開催する。

(2)　試験問題部会

年2回程度、開催する。

注　いずれの場合も、センターの所長が会議を招集する。

3　会議の成立

総合部会にあってはセンター、高等学校及び教育委員会側から各3名以上、試験問題部会各分科会にあっては、センターの1名を含め2名以上、の出席を必要とする。

大学入試センター専門委員の会議における臨時委員に関する細則

昭和52年10月13日
大学入試センター細則第1号
(昭和53年4月1日一部改正)

(趣旨)

第1条　大学入試センター専門委員の会議に関する規程（昭和52年大学入試センター規程第3号第7条第1項に定める大学入試センター専門委員の会議における臨時委員（以下「臨時委員」という。）については、この細則の定めるところによる。

(臨時委員の委嘱)

第2条　臨時委員は、教科専門委員会又は実施方法専門委員会の各委員長の推薦に基づき、大学入試センターの所長が委嘱する。

(任期)

第3条　臨時委員の任期は、委嘱した年度の末までとする。

(会議)

第4条　臨時委員は、各専門委員会の各委員長の要請に応じて当該専門委員会等に出席し、必要な意見を述べることができる。

2　臨時委員は、各専門委員会等の会議開催に必要な出席者数に含まないものとする。

3　臨時委員は、議決に加わることができない。

(雑則)

第5条　臨時委員に関する庶務は、大学入試センター専門委員の会議に関する規程（昭和52年大学入試センター規程第3号）第18条に規定する課において処理する。

第6条　この細則の改廃は、各専門委員会の議を経て所長が行う。

附　則

この細則は、昭和52年10月13日から施行し、昭和52年8月2日から適用する。

附　則

この細則は、昭和53年4月1日から施行する。

大学入試センター運営協議員の会議に置く特別委員会に関する細則

昭 和 53 年 3 月 14 日
大学入試センター細則第２号

（趣旨）

第１条　大学入試センター運営協議員の会議に関する規程（昭和52年大学入試センター規程第２号。以下「規程」という。）第５条第１項に規定する大学入試センター（以下「センター」という。）運営協議員の会議に置く特別委員会（以下「特別委員会」という。）の委員の構成等については、この細則の定めるところによる。

（委員）

第２条　特別委員会の委員は、センターの運営協議員のうちから、運営協議員の会議の議を経てセンターの所長（以下「所長」という。）が委嘱する。

（委員長）

第３条　各特別委員会に委員長を置き、特別委員会構成員のうちから、所長が指名する。

（会議）

第４条　特別委員会は、委員長がこれを招集する。

２　特別委員会の開催に必要な定足数は、各特別委員会の定めるところによる。

３　特別委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決する。ただし、可否同数のときは、委員長の決するところによる。

（報告）

第５条　特別委員会の委員長は、調査、審議等の結果又はその経過を運営協議員の会議の議長に報告しなければならない。

（専門員）

第６条　特別委員会に、調査、審議等を行おうとする内容に応じて、センターの教員及び大学入試センター専門委員の会議に関する規程（昭和52年大学入試センター規程第３号）に規定する専門委員（臨時委員を含む。）のうちから専門員を置くことができる。

（雑則）

第７条　特別委員会に関する庶務は、規程第６条の規定にかかわらず別に定める課が処理するものとする。

第８条　この細則に定めるもののほか、特別委員会に関する必要な事項は別に定める。

第９条　この細則の改廃は、運営協議員の会議の議を経て所長が行う。

附　則

この細則は、昭和53年３月14日から施行し、昭和53年２月17日から適用する。

大学入試センター運営協議員の会議に置く試験問題特別委員会における申し合せ

昭和53年３月14日

申し合せ第４号

１．大学入試センター運営協議員の会議に置く試験問題特別委員会において審議する事項は、次のとおりとする。

(1)　共通第１次学力試験の試験問題の文章表現、問題の構成、出題方法、解答方法及び解答記入上の注意等について一般的原則を規定すること。

(2)　前号の規定に準拠し、各教科専門委員会問題作成部会長から提出された試験問題について、点検・照合を行うこと。

(3)　その他共通第１次学力試験の試験問題等について、所長が必要と認める事項について調査・審議すること。

２．大学入試センター運営協議員の会議に置く特別委員会に関する細則（昭和53年大学入試センター細則第２号）第６条に規定する専門員については、次のとおりとする。

(1)　教科専門委員会に属する委員（臨時委員を含む。次号において同じ。）で、

ア　用語・用字法等の専門員　　若干名

イ　点字関係の専門員　　若干名

(2)　実施方法専門委員会に属する委員　　若干名

３．この申し合せは、昭和53年３月14日から施行し、昭和53年２月17日から適用する。

昭和52年度共通第１次学力試験試行テスト実施報告

Ⅰ　総　　論

Ⅱ　共通第１次学力試験試行テストの実施について

Ⅲ　共通第１次学力試験試行テスト試験問題について

Ⅳ　共通第１次学力試験試行テストの成績結果について

Ⅴ　共通第１次学力試験試行テストに関する追跡調査について

目　　次

Ⅰ　総　　論 …… (29)

1　試行テスト実施の目的 …… (29)

2　試行テスト実施の概要 …… (29)

3　試行テスト実施の結果の概要 …… (31)

Ⅱ　共通第１次学力試験試行テストの実施について …… (32)

1　試行テストの実施計画 …… (32)

2　試行テストの実施日程 …… (35)

資　料　(1)　試験当日のスケジュール …… (37)

(2)　試行テスト実施スケジュール（その１～その２） …… (38)

(3)　試行テスト実施スケジュール（点字受験用）・(その１～その２) …… (40)

3　実　施　組　織 …… (42)

資　料　(1)　試行テスト実施組織 …… (43)

(2)　共通第１次学力試験（試行）実施委員会 …… (44)

4　志願票の受付、受験票の送付等 …… (46)

(1)　志願票の受付 …… (46)

(2)　受験票の発行と送付 …… (46)

資　料　受験者心得 …… (47)

5　受　験　者　数 …… (49)

資　料　(1)　試行テスト志願者数集計表 …… (50)

(2)　試行テスト都道府県別志願者数調べ …… (51)

(3)　事前選択科目選択者集計表 …… (52)

6　電話ファクスネットワーク …… (52)

7　事　故　等……（ 52 ）
8　情報処理システム等……（ 52 ）
9　身体に障害のある受験者に対する配慮 ……（ 57 ）
(1)　身体に障害のある者に対する措置……（ 57 ）
(2)　身体に障害のある受験者調べ（障害別による）……（ 58 ）
資　料　(1)　身体に障害のある受験者の心得……（ 59 ）
(2)　身体に障害のある受験者（点字受験）の心得 ……（ 61 ）
(3)　身体に障害のある受験者数（障害別による）……（ 63 ）
10　共通第１次学力試験試行テストに関するアンケート調査結果……（ 65 ）
11　共通第１次学力試験試行テストの実施に関する各大学の意見……（ 66 ）

Ⅲ　共通第１次学力試験試行テスト試験問題について……（ 77 ）

1　試験問題の作成方針、正解例の公表……（ 77 ）
2　試験問題に関する意見・評価……（ 78 ）
(1)　国　　語……（ 79 ）
ア　各大学の意見……（ 79 ）
イ　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（ 80 ）
ウ　全国高等学校国語教育研究連合会からの意見……（ 88 ）
エ　日本国語教育学会からの意見……（ 96 ）
オ　教科専門委員会問題作成部会報告書……（ 97 ）
(2)　社　　会……（103 ）
ア　倫　理・社　会……（103 ）
(ア)　各大学の意見……（103 ）
(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（103 ）
(ウ)　全国高等学校倫理・社会研究会からの意見……（106 ）
(エ)　教科専門委員会問題作成部会報告書……（108 ）
イ　政　治・経　済……（112 ）
(ア)　各大学の意見……（112 ）

(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（112 ）
(ウ)　教科専門委員会問題作成部会報告書……（117 ）
ウ　日　本　史……（126 ）
(ア)　各大学の意見……（126 ）
(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（126 ）
(ウ)　教科専門委員会問題作成部会報告書……（129 ）
エ　世　界　史……（135 ）
(ア)　各大学の意見……（135 ）
(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（135 ）
(ウ)　教科専門委員会問題作成部会報告書……（141 ）
オ　地　　理……（145 ）
(ア)　各大学の意見……（145 ）
(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（145 ）
(ウ)　全国地理教育研究会からの意見……（151 ）
(エ)　教科専門委員会問題作成部会報告書……（153 ）
(3)　数　　学……（158 ）
ア　各大学の意見……（158 ）
イ　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（160 ）
ウ　日本数学教育学会からの意見……（163 ）
エ　教科専門委員会問題作成部会報告書……（164 ）
(4)　理　　科……（168 ）
ア　物　　理……（168 ）
(ア)　各大学の意見……（168 ）
(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（168 ）
(ウ)　日本理化学協会からの意見……（171 ）
(エ)　日本物理教育学会からの意見……（173 ）
(オ)　教科専門委員会問題作成部会報告書……（174 ）
イ　化　　学……（176 ）
(ア)　各大学の意見……（176 ）

(イ) 共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（176）
(ウ) 日本理化学協会からの意見……（180）
(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書……（181）
ウ 生　　物……（186）
(ア) 各大学の意見……（186）
(イ) 共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（186）
(ウ) 日本生物教育学会からの意見……（192）
(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書……（195）
エ 地　　学……（199）
(ア) 各大学の意見……（199）
(イ) 共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（199）
(ウ) 日本地学教育学会からの意見……（202）
(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書……（204）
オ 基 礎 理 科……（209）
(ア) 各大学の意見……（209）
(イ) 共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（209）
(ウ) 教科専門委員会問題作成部会報告書……（211）
(5) 外 国 語……（219）
ア 英　　語……（219）
(ア) 各大学の意見……（219）
(イ) 共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（221）
(ウ) 教科専門委員会問題作成部会報告書……（223）
イ ド イ ツ 語……（230）
(ア) 各大学の意見……（230）
(イ) 共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（230）
(ウ) 教科専門委員会問題作成部会報告書……（232）
ウ フ ラ ン ス 語……（236）
(ア) 共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書……（236）
(イ) 教科専門委員会問題作成部会報告書……（237）

Ⅳ 共通第１次学力試験試行テストの成績結果について……（239）
1 科目別平均点一覧……（239）
2 教科別成績分布図……（241）
3 科目別成績分布図……（247）
4 選択状況表（人数別）……（265）
Ⅴ 共通第１次学力試験試行テストに関する追跡調査について……（267）

Ⅰ 総　　論

1　試行テスト実施の目的

昭和54年度大学入学者選抜共通第１次学力試験の実施に当たって、実施計画を予定どおり遅滞なく実施できるよう万全を期することを目的として、次の諸点に留意し、その試行テストを実施した。この目的のもとに、大学入試センターは、各国立・公立大学と協力して全国にわたり大規模な試行テストを行い、実施計画の円滑な遂行を確認するとともに、各大学においても試験実施についての経験を積むこととした。

試行テストの実施結果に基づき、必要がある場合は、適切な技術的修正を加え、共通第１次学力試験の実施について遺漏のないよう万全を期さねばならない。

(1)　共通第１次学力試験の実施計画

(2)　試験問題作成・答案採点から成績提供までの処理システム

(3)　電算機及び光学マークシート読取り装置（ＯＭＲ）の正常稼動、事故対策等

(4)　試験問題等の印刷製造、輸送等

(5)　大学における実施体制の整備と要員の訓練

2　試行テスト実施の概要

試行テストは、大学入試センターと全国立・公立大学120校（国立87校、公立33校）が協力して、高等学校３年生等（盲学校、聾学校及び養護学校の高等部在学者、高等学校等の卒業者、大学入学資格検定合格者を含む。）を対象として実施したが、その概況は次のとおりであった。

(1)　実　施　期　日

昭和52年12月24日（土）午後及び25日（日）の２日間

(2)　出題教科・科目等

本試験と同様５教科18科目出題、そのうち受験教科・科目　５教科６～７科目

１教科200点、合計1,000点満点

第１日目……国語（100分）、社会（120分）の２教科

第２日目……数学（100分）、外国語（100分）、理科（120分）の３教科

試験時間　合計９時間（点字問題受験者は1.5倍）

(3) 試　験　場　数

一般試験場…… 198会場

点字問題試験場……　6会場

合　　計…… 204会場

(4) 志　願　者　数

63,609人（2,105高等学校）

うち、点字問題受験者29人

身障者受験者53人（点字問題受験者を除く。）

(5) 受　験　者　数

第１日目　47,905人　　欠席率24.7%

第２日目　40,067人　　欠席率37.0%

うち、点字問題受験者　29人　　欠席率　0%

身障者受験者　44人　　欠席率17.0%

(6) 全教科受験者数

39,673人

うち、点字問題受験者　27人

身障者受験者　41人

(7) 試験監督等要員数

延7,600人（国・公立大学の教員及び職員）

(8) 全教科受験者の平均点等

平均点　555.69点（1,000点満点）

最高点　927　点

最低点　30　点

標準偏差　124.17点

(9) 読取り答案（マークシート）枚数

220,905枚

うち、無効（零点）とした答案枚数1,510枚　全数の0.7％

(10) 事　故　等

ア　実施大学における試験妨害による事故　　なし

イ　試験問題の電話ファクスによる訂正　　1件

ウ　正解例の新聞広告による訂正　　1件

(11) 試験問題の評価

高等学校の教科担当教員、教科別教育研究団体、各国立・公立大学からの試験問題に関する意見・評価をセンターの教科専門委員会各科目別問題作成部会で検討する。

3　試行テスト実施の結果の概要

試行テストは、「共通第１次学力試験の実施計画」(本書32ページ参照) 等に準じて実施したが、受験者数は当初計画の80,000人を下回った。しかし、大学入試センター及び各大学における試験実施上の全般にわたる措置について、必要な経験を得るとともに、実施計画等の策定及び修正に関する有益な資料が得られ、試行テストの目的を達したと考えられる。

この試行テストの実施結果からみて、当初の実施計画は大筋において変更の必要がないことが確認された。

実施計画、各種の処理システム、試験問題の作成等及び各種の事故対策等の細部については、若干の修正を行う必要を生じたが、これらについては各種の専門委員会で検討を行うこととしている。

特に、共通第１次学力試験の実施期日の繰り下げに当たっては、この試行テストの実施結果を勘案して決定されたものである。

また、試験問題については、高等学校の教科担当教員等で構成する共通第１次学力試験等連絡協議会試験問題部会、教科別の全国的教育研究団体、各国・公立大学に意見・評価を求めた結果、各問題の細部にわたって意見・評価が提出された。

細部においては、まだ問題はあるが大勢においては、「高等学校において、真面目に学習に努めていれば、60%程度の解答が得られる問題」「基礎的でよく工夫された問題」「指導要領、教科書の範囲・程度を逸脱していない問題」である等の評価を得ている。

これらについては、関係者からの意見・評価と大学入試センター自身の統計的分析評価をあわせて、教科専門委員会各科目別問題作成部会において検討中であるが、今後とも、理解力、表現力についても、より深く評価でき、かつ、主として多肢選択による客観式の検査方法として適した試験問題の作成に改善する努力を重ねなければならない。

Ⅱ　共通第１次学力試験試行テストの実施について

1　試行テストの実施計画

大学入試センターは、次のとおりの昭和52年度共通第１次試行テスト実施計画を、昭和52年６月16日決定し、これに基づき試行テストを実施することとした。

昭和52年度共通第１次学力試験試行テスト実施計画

（昭和52年６月16日）

昭和52年度共通第１次学力試験試行テスト（以下「試行テスト」という。）は、この実施計画に基づき実施するものとする。

１．目的とその実施

(1)　試行テストは、昭和54年度以降の大学入学者選抜に係る共通第１次学力試験の実施方法等について試行することを目的とする。

(2)　試行テストは、各国立大学が大学入試センターと協力して、同一の期日に同一の試験問題により共同して実施する。

２．実施に当たっての業務分担

試行テストの実施に当たっての業務は、大学入試センターと各国立大学が次のとおり分担する。

(1)　大学入試センターは、試行テストの実施に当たり、試験問題等の作成・印刷及び輸送、試行テスト要項等の作成、出願の受付、受験票の交付、監督者要領等の作成、答案の採点・集計、試験成績その他資料の各大学あての送付、その他これらに関連する業務。

(2)　各国立大学は、試行テストの実施に当たり、試験場の設定、試験監督等の選出、試行テスト要項等の交付、試験の実施、答案の整理・発送、その他これらに関連する業務。

３．対　　象

試行テストの対象は、次に掲げる者のうち試行テストの受験を希望する者８万人について行う。

(1)　高等学校を卒業した者又は昭和53年３月に卒業見込みの者

(2)　文部大臣の行う大学入学資格検定に合格した者又は昭和53年３月までに資格を取得する見込みのある者

４．出題教科・科目等

(1)　試行テストの出題は、高等学校学習指導要領に準拠し、主として高等学校においてすべての生徒が履修する科目から行う。

(2)　試行テストの出題教科・科目等は次のとおりとする。

国　語　　国語は、現代国語及び古典Ⅰ甲を出題する。

社　会　　社会は、倫理・社会、政治・経済、日本史、世界史、地理Ａ及び地理Ｂを出題し、２科目を選択解答させる。ただし、地理Ａ及び地理Ｂの２科目を選択することはできない。

数　学　　数学は、数学一般及び数学Ⅰを出題し、１科目を選択解答させる。ただし、数学一般を選択解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者に限る。

理　科　　理科は、基礎理科、物理Ⅰ、化学Ⅰ、生物Ⅰ及び地学Ⅰを出題し、基礎理科１科目又は基礎理科を除く科目から２科目を選択解答させる。ただし、基礎理科を選択解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者に限る。

(3)　出題範囲については、共通第１次学力試験の実施期日の時点における高等学校の履修の状況に配慮する。

(4)　試行テストは、多肢選択による客観式の検査方式により出題する。

５．試行テスト要項等の交付

(1)　試行テスト要項及び出願に必要な書類等は、大学入試センターが作成し、昭和52年７月中旬から各国立大学において交付する。

(2)　試行テスト要項及び出願に必要な書類等の交付を受けようとする者は、原則として出身高等学校長を経由して、出身高等学校最寄りの国立大学に請求する。

6．出　　願

試行テストの出願は、次によるものとする。

(1)　出願の期間は、昭和52年９月１日（木）から９月30日（金）までとする。

(2)　出願の方法は、次のとおりとする。

ア　高等学校を卒業した者及び昭和53年３月卒業見込みの者は、出願に必要な書類をとりまとめ、出身高等学校長を経由して大学入試センターに郵送により提出する。

イ　大学入学資格検定合格者等は、出願に必要な書類を取りまとめ、直接大学入試センターに郵送により提出する。

7．受験票等の交付

大学入試センターは、出願を受理した志願者に対し、受験番号、試験場等を記載した受験票等を昭和52年11月下旬までに直接郵送により交付する。

8．試験場の指定等

(1)　大学入試センターは、受験希望者に対し、次により試験場を指定する。

ア　昭和53年３月高等学校を卒業見込みの者（通信制の課程によるものを除く。）については、原則として出身高等学校の最寄りの国立大学が設定する試験場

イ　高等学校を卒業した者及び通信制の課程による卒業見込みの者については、受験希望者の希望を考慮し、出身高等学校の最寄りの国立大学が設定する試験場又は居住地の最寄りの国立大学が設定する試験場

ウ　大学入学資格検定合格者等については、居住地の最寄りの国立大学が設定する試験場

(2)　大学入試センターは、各国立大学に対し、当該大学の規模等に応じて受験希望者の数を割当て、各国立大学は、その割当てに応じた試験場を設定する。

9．実施期日等

(1)　試行テストは、昭和52年12月24日（土）、25日（日）の２日間で実施する。

(2)　実施する各教科の試験時間は、国語、数学及び外国語については各100分とし、社会及び理科については各120分とする。

10．資料の公表

大学入試センターは、試行テストに係る資料を次のとおり公表する。

(1)　試行テストの問題の正解例について、試行テスト実施後速やかに公表する。

(2)　試行テストの科目別全国平均点等について、昭和53年１月中に公表する。

11．成績の請求及び送付

(1)　各国立大学は、当該大学で受験した試行テスト受験者についての試行テストの成績を、大学入試センターが定める方法により大学入試センターに請求する。

(2)　大学入試センターは、各国立大学の請求に基づき、試行テストの成績を各国立大学に対し速やかに送付する。

送付する成績は、試行テスト受験者の個人別の科目別得点及び総得点とする。

(3)　試行テストの個人別成績は、発表しないものとする。

12．身体に障害のある者に対する試験実施上の配慮

(1)　試行テストの実施に当たっては、身体に障害のある受験希望者に対し、障害の種類・程度に応じ、特別の配慮を行う。

(2)　この場合、盲人の受験希望者に対しては、試験問題の点字化、試験時間の延長、特定試験場の設定（全国７地区14大学を予定）等の措置をとることとし、その他の身体に障害のある受験希望者に対しても、介助者の付与等の措置をとることとする。

13．公立大学の協力

各公立大学は、試行テストの実施に関し、試験場の設定、試験監督者の選出等について、最寄りの国立大学に協力するものとする。

2　試行テストの実施日程

試行テストの実施日程は、次のとおりである。

昭和52年５月２日		大学入試センター設置
〃	５月下旬	試行テスト試験問題等作成開始
〃	６月16日	試行テスト実施要項発表

昭和52年	7月4日	試行テスト実施担当者（国・公立大学）会議を開催（第1回）
〃	7月下旬	試行テスト受験案内を国立大学から各高等学校に配布
〃	7月下旬	各国立大学に試行テスト実施委員会を設置、各都道府県高等学校長協会に各国立大学から試行テスト受験希望者数を提示し、高等学校割当てを依頼
〃	9月1日～30日	各高等学校経由試行テスト志願票をセンターで受付
〃	9月～10月	全国7地区で高等学校教員を対象に説明会を開催
〃	11月20日まで	志願者に受験票等を送付
〃	11月21日～22日	試行テスト実施担当者（国立大学）会議を開催（第2回）
〃	12月上旬	各国立大学に試験問題等を発送
〃	12月15日	各国立大学とセンター間の電話ファクスネットワークの運用開始
〃	12月20日	試行テスト大学入試センター実施本部設置
〃	12月24日～25日	試行テスト実施、正解例公表
〃	12月26日～29日	試行テスト答案返送
昭和53年	1月13日	各国立大学に対して試行テスト全般についての意見を求める。
〃	1月20日	試行テストの科目別平均点、最高点、最低点公表
〃	2月10日	共通第1次学力試験等連絡協議会試験問題部会で高等学校の教科担当教員に、試行テスト試験問題の評価を依頼、16教育研究団体に試行テスト試験問題に関する意見を求める。
〃	3月16日～31日	各国・公立大学の請求に応じ、試行テストの成績を提供

〔資　料〕

(1)　試験当日のスケジュール

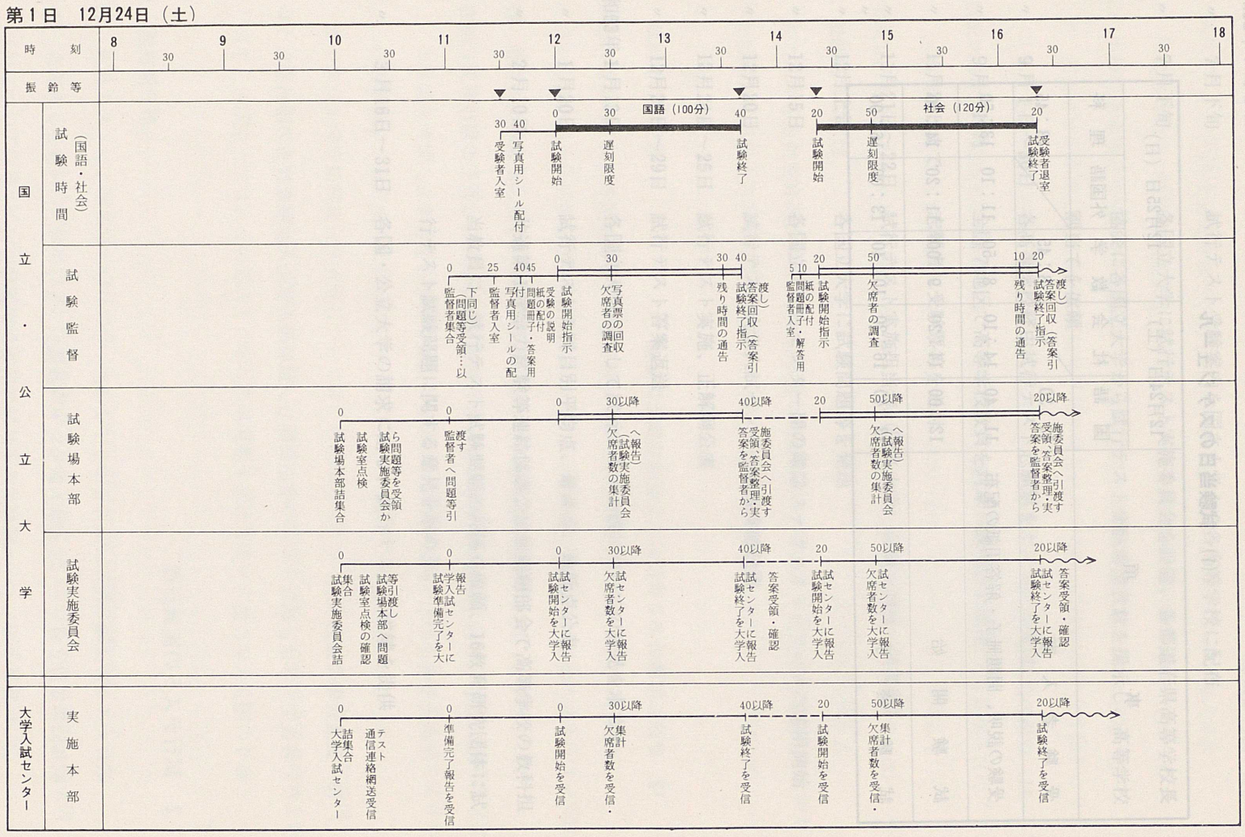
事　　項	12月24日（土）		12月25日（日）		
	国　語	社　会	数　学	外国語	理　科
受験者入室	11：30		8：45		13：45
受験の説明、問題冊子・解答用紙の配布	11：40	14：10	8：50	11：10	13：50
試験開始	12：00	14：20	9：00	11：20	14：00
試験終了	13：40	16：20	10：40	13：00	16：00

〔資　料〕

(2)　試行テスト実施スケジュール　(その１)

大学入試センター

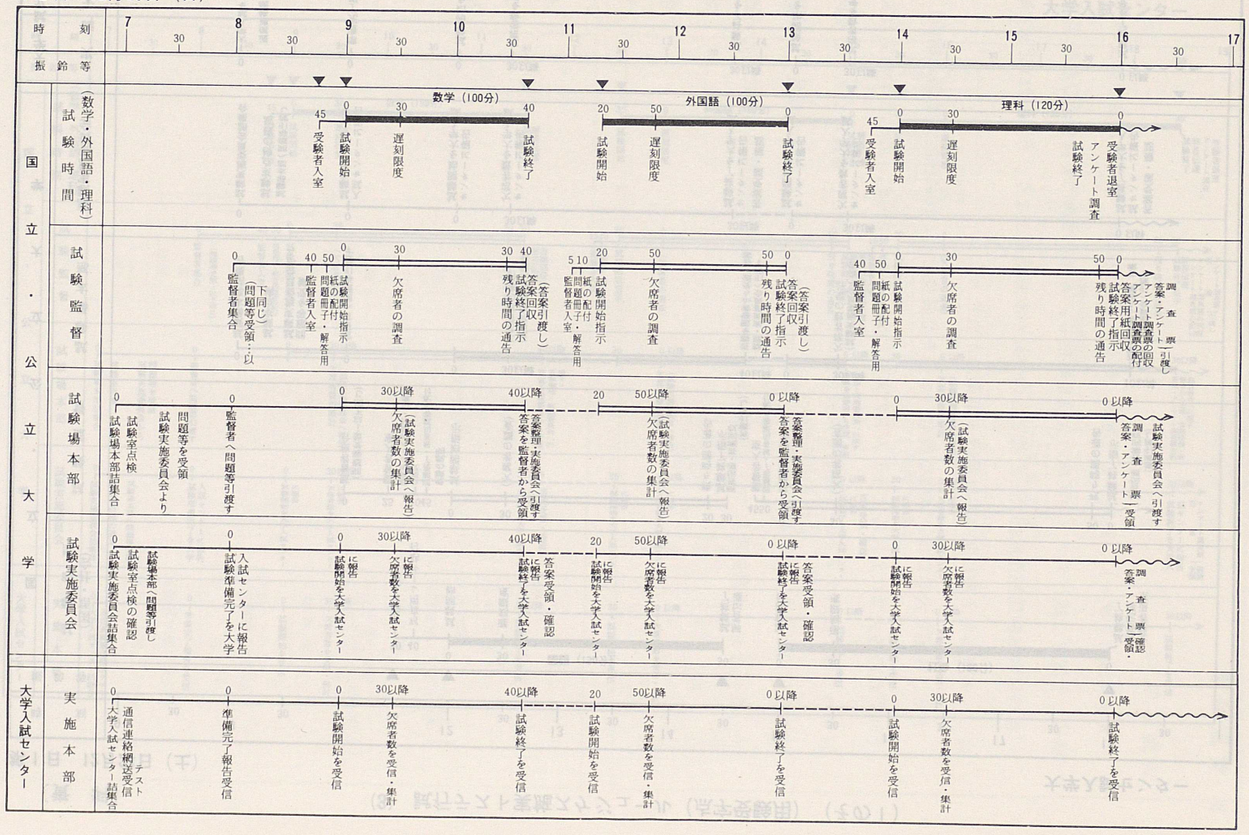
第１日　12月24日（土）



試行テスト実施スケジュール　(その２)

大学入試センター

第２日　12月25日（日）

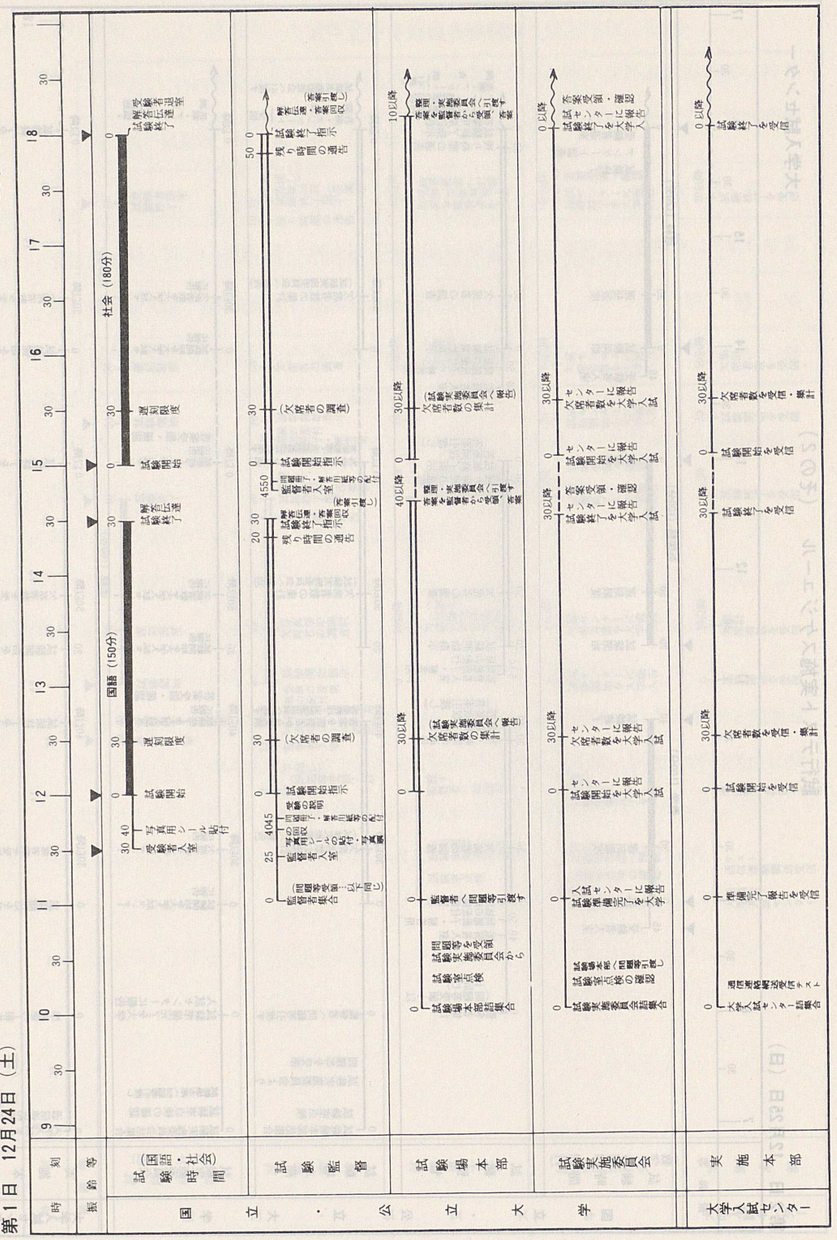


〔資　料〕

(3)　試行テスト実施スケジュール（点字受験用）（その1）

大学入試センター

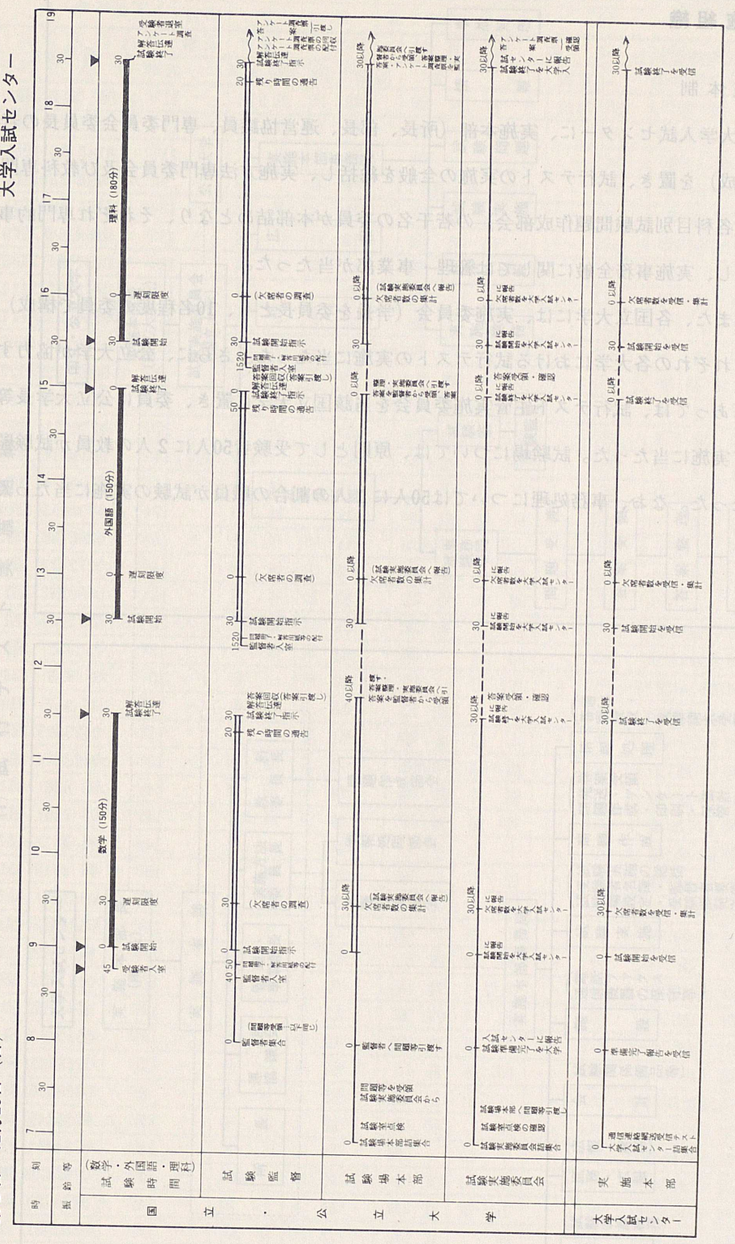
第1日　12月24日（土）



試行テスト実施スケジュール（点字受験用）（その2）

大学入試センター

第2日　12月25日（日）



3　実施組織

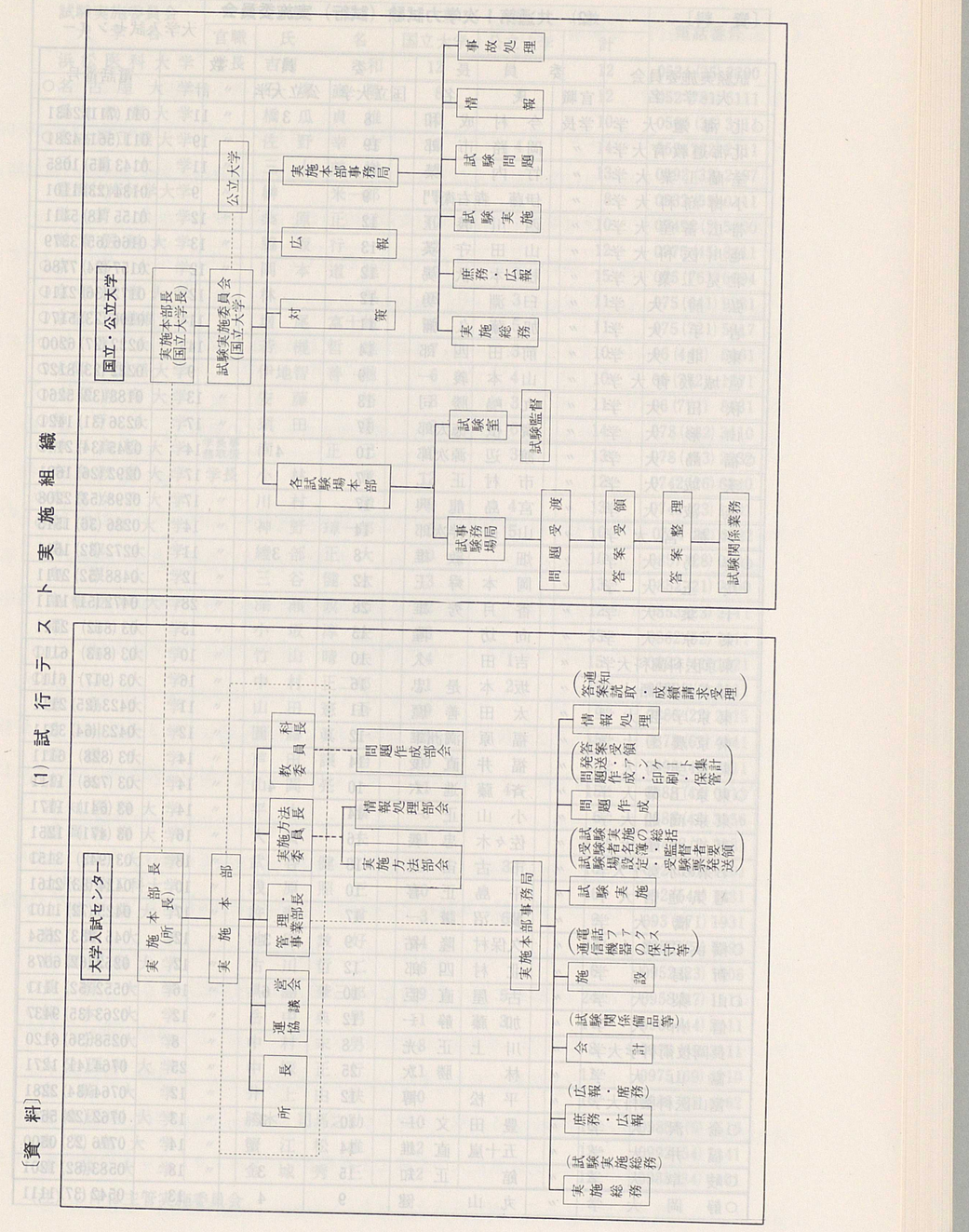
実施体制

大学入試センターに、実施本部（所長、部長、運営協議員、専門委員会委員長の若干名で構成）を置き、試行テストの実施の全般を総括し、実施方法専門委員会及び教科専門委員会（各科目別試験問題作成部会）の若干名の委員が本部詰めとなり、それぞれ専門的事項を担当し、実施事務全般に関しては管理・事業部が当たった。

また、各国立大学には、実施委員会（学長を委員長とし、10名程度の委員で構成）を置き、それぞれの各大学における試行テストの実施に当たった。さらに、公立大学が協力する地区にあっては、試行テスト主管実施委員会を当該国立大学に置き、委員に公立大学長等を加えて実施に当たった。試験場については、原則として受験者50人に２人の教員が試験監督に当たった。なお、事務処理については50人に１人の割合の職員が試験の実施に当たった。

〔資　料〕

(1) 試行テスト実施組織



〔資　料〕　　(2)　共通第１次学力試験（試行）実施委員会

大学入試センター

試験実施委員会 大学名	委員長 官職	委員長 氏名	委員数 国立大学	委員数 公立大学	委員数 計	電話番号
○北海道大学	学長	今村成和	8	3	11	011(711)2431
北海道教育大学	〃	岡路市郎	19		19	011(561)4281
室蘭工業大学	〃	竹内榮	11		11	0143(45)1085
小樽商科大学	〃	伊藤森右衛門	9		9	0134(23)1101
帯広畜産大学	〃	西川義正	12		12	0155(48)5111
旭川医科大学	〃	山田守英	13		13	0166(65)3379
北見工業大学	〃	松本秋男	12		12	0157(24)7786
弘前大学	〃	臼淵勇	12		12	0172(36)2111
岩手大学	〃	加藤久彌	11		11	0196(23)5171
東北大学	〃	前田四郎	14		14	0222(27)6200
宮城教育大学	〃	山本義一	9		9	0222(23)8127
秋田大学	〃	九嶋勝司	13		13	0188(33)5261
山形大学	〃	廣根徳太郎	17		17	0236(31)1421
○福島大学	〃	渡辺源次郎	10	4	14	0245(34)2141
茨城大学	〃	市村正二	17		17	0292(26)1621
筑波大学	〃	宮島龍興	17		17	0298(53)2208
宇都宮大学	〃	山田伴次郎	14		14	0286(36)1515
○群馬大学	〃	畑敏雄	8	3	11	0272(32)1611
埼玉大学	〃	岡本舜三	12		12	0488(52)2111
千葉大学	〃	香月秀雄	28		28	0472(51)1111
東京大学	〃	向坊隆	13		13	03(812)2111
東京医科歯科大学	〃	吉田久	10		10	03(813)6111
東京外国語大学	〃	坂本是忠	16		16	03(917)6111
東京学芸大学	〃	太田善麿	11		11	0423(25)2111
東京農工大学	〃	福原満洲雄	12		12	0423(64)3311
東京芸術大学	〃	福井直俊	14		14	03(828)6111
○東京工業大学	〃	斉藤進六	10	4	14	03(726)1111
東京商船大学	〃	小山正一	14		14	03(641)1171
東京水産大学	〃	佐々木忠義	16		16	03(471)1251
お茶の水女子大学	〃	市古宙三	18		18	03(943)3151
電気通信大学	〃	平島正喜	10		10	0424(83)2161
一橋大学	〃	蓼沼謙一	17		17	0425(72)1101
○横浜国立大学	〃	久保村隆祐	9	3	12	045(333)2654
新潟大学	〃	北村四郎	12		12	0252(62)6078
○山梨大学	〃	古屋直臣	10	6	16	0552(52)1111
信州大学	〃	加藤静一	12		12	0263(35)9437
長岡技術科学大学	〃	川上正光	8		8	0258(36)6120
富山大学	〃	林勝次	25		25	0764(41)1271
富山医科薬科大学	〃	平松博	12		12	0764(34)2281
○金沢大学	〃	豊田文一	10	3	13	0762(22)5645
福井大学	〃	五十嵐直雄	14		14	0776(23)0500
○岐阜大学	〃	舘正知	15	3	18	0583(82)1201
○静岡大学	〃	丸山健	9	4	13	0542(37)1111

試験実施委員会 大学名	委員長 官職	委員長 氏名	委員数 国立大学	委員数 公立大学	委員数 計	電話番号
浜松医科大学	学長	吉利和	12		12	0534(35)2200
○名古屋大学	〃	石塚直隆	8	4	12	052(781)5111
愛知教育大学	〃	橋爪貞雄	10		10	0566(36)3111
○名古屋工業大学	〃	佐野幸吉	10	4	14	052(732)2111
三重大学	〃	三上美樹	13		13	0592(32)2197
豊橋技術科学大学	〃	榊米一郎	8		8	0532(55)0111
滋賀大学	〃	桑原正信	10		10	07492(2)5600
滋賀医科大学	〃	脇坂行一	12		12	0775(45)8811
○京都大学	〃	岡本道雄	12	3	15	075(761)6694
○京都教育大学	〃	林保	8	3	11	075(641)9281
○京都工芸繊維大学	〃	増尾富士雄	6	5	11	075(721)5317
○大阪大学	〃	若槻哲雄	7	3	10	06(443)5061
○大阪外国語大学	〃	伊地智善継	6	4	10	06(772)1271
○大阪教育大学	〃	安藤格	8	3	11	06(771)8131
○神戸大学	〃	須田勇	8	6	14	078(882)3610
○神戸商船大学	学長事務取扱	南正己	10	3	13	078(453)2332
奈良教育大学	学長	小林章	12		12	0742(26)6140
○奈良女子大学	〃	川村徹	9	4	13	0742(23)1131
○和歌山大学	〃	神野璋一郎	5	5	10	0734(22)6122
鳥取大学	〃	綾部正大	10		10	0857(28)0321
島根大学	〃	三谷健次	13		13	0852(21)7100
島根医科大学	〃	深瀬政市	12		12	0853(23)2111
岡山大学	〃	小坂淳夫	33		33	0862(52)1111
○広島大学	〃	竹山晴夫	14	1	15	0822(41)1221
○山口大学	〃	中村正二郎	11	2	13	08392(2)6111
徳島大学	〃	山田憲吾	9		9	0886(23)2315
香川大学	〃	圓藤眞一	15		15	0878(61)4141
愛媛大学	〃	芦田譲治	10		10	0899(41)7111
○高知大学	〃	山岡亮一	11	4	15	0888(44)0113
高知医科大学	〃	平木潔	6		6	0888(43)3156
福岡教育大学	〃	大賀一夫	11		11	09403(2)2381
○九州大学	〃	武谷健二	7	3	10	092(641)1101
九州芸術工科大学	〃	浅原照三	10		10	092(541)1431
○九州工業大学	〃	許斐貢	3	6	9	093(871)1931
佐賀大学	〃	池田数好	24		24	0952(24)5191
佐賀医科大学	〃	古川哲二	6		6	0952(23)1506
○長崎大学	〃	具島兼三郎	19	5	24	0958(47)1111
○熊本大学	〃	岳中典男	11	3	14	0963(44)2111
大分大学	〃	中村末男	8		8	0975(69)3311
大分医科大学	〃	中塚正行	11		11	0975(69)4310
宮崎大学	〃	井上由扶	10		10	0985(23)4462
宮崎医科大学	〃	勝木司馬之助	10		10	09858(5)1510
鹿児島大学	〃	蟹江松雄	12		12	0992(54)7141
琉球大学	〃	金城秀三	12		12	0988(34)0101

（注）○印は主管実施委員会

4　志願票の受付、受験票の送付等

(1)　志願票の受付

9月1日～30日の1か月間に63,609人の志願票の受付を行った。そのうち、約80%の約50,000通の志願票が9月20日以降に送付されてきた。このことから、共通第1次学力試験の実施期日繰り下げに関連して受付期間を短縮しても支障のないことが明らかとなった。

志願票の記入洩れ、誤記入等は765件（受付件数の1.2%）にのぼった。これらについては電話連絡により確認し処理を行ったが、事項別に示すと次のとおりである。

○　届出選択科目（主として数学一般、基礎理科、英語Aを選択解答できる資格のない者の届出）の記入誤り　297　件

○　視覚障害者欄の記入誤り（眼鏡使用者の視覚障害者としての誤解）　194　件

○　記入洩れ　274　件

このほか、受験資格のない高等学校2年生の出願が14校236人に達したがこれらすべての志願票について返送を行った。これらのことから、志願票の書式の改善、身体に障害のある志願者に対する配慮事項を今回行った電話による調査を調査票による調査に改善すること、高等学校における志願票の点検を要請すること等が重要であることが明らかとなった。

(2)　受験票の発行と送付

志願票の審査・修正及び受験場の決定・受験番号の付与等に関しては3週間を要し、受験票は10月26日～29日の4日間に1日15,000通を発送した。さらに一部の再発行分については11月18日までに発送を行った。

発送した受験票のうち、942通（受験票総数の1.5%）について再発行した。これらについては出身高等学校への一括送付、試験場での再発行のいずれかの措置をとったが、その内容は次のとおりである。

○　宛先不明で返送（志願票における住所記入不完全及び住所誤記）されたもの　470　通（0.7%）

○　紛失による再発行を依頼してきたもの　199　通（0.3%）

○　志願票の記入不明確による読取り不能のもの等　273　通（0.5%）

これらのことからも、志願票記入の正確化を高等学校へ要請すること、志願票の審査を強化すること等が必要であることが明らかとなった。

また、受験者心得、受験票、欠席調査表、受験者名簿等の諸帳票類の書式についても、細部に改善を加える必要があることが明らかとなった。

〔資　料〕　受験者心得

1. 試験日程

(1)　試　験　日……12月24日（土曜日）、12月25日（日曜日）

(2)　試験教科……国語・社会・数学・外国語・理科の5教科について試験を行います。

事　項	12月24日（土）		12月25日（日）		
	国　語	社　会	数　学	外国語	理　科
受験者入室	11：30		8：45		13：45
受験の説明、問題冊子・解答用紙の配付	11：40	14：10	8：50	11：10	13：50
試験開始	12：00	14：20	9：00	11：20	14：00
試験終了	13：40	16：20	10：40	13：00	16：00

2. 試験場

試験場については、受験票に表示してあります。試験場の所在地・道順については、受験票の試験場案内欄に記載してあります。

各自が受験すべき試験室は、試験当日、その試験場に掲示します。

掲示の場所は、大学の入口等に指示してあります。

3. 受験者は、試験開始時刻の40分前までに試験場に到着して、係員の指示をうけてください。

4. 試験場の入口で受験票の提示を求めることがあります。なお、受験者の付添者は、試験場構内に入構できないことがあります。

5. 受験票及び写真票は、試験当日必ず携帯してください。

万一、受験票・写真票を紛失又は忘れた場合には、試験場本部に出頭して、その指示をうけてください。試験場本部の場所は試験場に掲示してあります。

6. 受験票及び写真票の写真貼付欄には、同一の写真（3ケ月以内に撮影した無帽上半身タテ4cm、ヨコ3cm）をあらかじめ必ず貼付してください。

7. 試験室においては、机上の受験番号が受験票の受験番号と同一であるかを確認のうえ着席してください。ただし、机上の受験番号は末尾の英字を省略してあります。

8. 受験中は、受験票を常に机上に置いてください。また、写真票は第1日目の国語の試験開始後に回収します。

9. 机上には、Hの黒色鉛筆、プラスチックの消ゴム、以外のものを置いてはいけません。その他

の携行品の措置は監督者の指示に従ってください。

10. 解答には、「Hの黒色鉛筆」「プラスチックの消ゴム」を使用することになっていますので、あらかじめ用意しておいてください。

色鉛筆、ボールペン、シャープペンシルなどを使用した場合には解答が読みとられないおそれがあるので使用してはいけません。

11. 試験時間内の退出は認めません。受験中の発病等やむをえない場合には挙手をして監督者の指示に従ってください。

12. 問題冊子は、試験開始の合図があるまで、絶対に開いてはいけません。

13. 選択科目

(1) 数学一般、基礎理科、英語A、英語B、ドイツ語、フランス語の届出選択科目については、試験場で、他の科目に変更することができません。

社　会……試験場で2科目を選択し、解答

(地理A及び地理Bを2科目として選択することはできません。)

数　学……1科目を選択し、解答

(数学一般を選択解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者で、志願票にその旨記入して届け出た者が受験票で選択を認められた者に限ります。)

理　科……基礎理科1科目を選択し、解答、又は基礎理科1科目を除く科目から2科目を選択し、解答

(基礎理科を選択し、解答できる者は高等学校において当該科目を履修した者で、志願票にその旨記入して届け出た者が受験票で選択を認められた者に限ります。)

外国語……志願票に届け出た1科目を解答

(英語Aを選択、解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者で、志願票にその旨記入して届け出た者が受験票で選択を認められた者に限ります。)

14. 問題冊子は持ち帰ってください。

15. 以上のほかは、試験室においては、すべて監督者の指示に従ってください。

16. 試験室内で、コート類を着用しても差しつかえありません。

17. 身体に障害のある受験者については、「身体に障害のある受験者の心得」を同封してありますから併せて参照してください。

注　意

1．試験場への道順に関し、不明な点があれば、試験実施大学連絡先あて照会してください。

なお、試験室の所在について電話による照会には回答しません。

その他疑問の点があれば、大学入試センターに照会してください。

2．試験場における指示は、掲示によるから、見落さないように注意してください。

3．試験室の下見は許しません。

4．試験場に食堂がないことがありますので、昼食は各自用意してください。

5．受験票を紛失した場合には、本人又は出身高等学校長が、葉書に姓名、高等学校等コード、出身高等学校名（大学入学資格検定合格者にあっては、合格番号）など参考となる事項を記入して、速達で大学入試センターに届け出てください。

受験票の再発行を受けた場合には、“再発行された受験票”のみが有効です。

6．上履きを持参すべき試験場は次のとおりです。

旭川医科大学、八戸高等専門学校、土浦第三高等学校、長岡技術科学大学、富山医科薬科大学、静岡大学工学部、静岡女子大学、岐阜薬科大学、豊橋技術科学大学、滋賀医科大学、大阪大学歯学部、山口女子大学、九州歯科大学。

7．理科の試験終了後にアンケート調査を行いますのでご協力下さい。

連　絡　先　〒153 東京都目黒区駒場2丁目19番1号

大学入試センター　管理・事業部

TEL　03—465—3946

5　受　験　者　数

試行テストは、当初80,000人の高等学校3年生等を対象に計画し、各都道府県高等学校長協会等の協力を得て、受験希望者を募集したが、実際の志願票提出者は、63,609人となった。また、試験実施に際しては、欠席者が多く、最終受験者は、40,067人、受験率は63.0%（欠席率37.0%）となった。

試行テストの受験は当初から義務づけられたものではないこと、また主として昭和53年3月卒

業予定の高等学校3年生を対象としており、直接的には共通第1次学力試験に関係がないことなどから実際の受験者が相当減少するであろうとは、予想されていたことであったが、減少した理由として次のことが考えられる。

① 計画の80,000人を、国立大学については、入学定員の相当数、公立大学については入学定員の半分の数に比例して、各大学に割当てた。(北海道は特別地域として、8,000人とした)各大学はこの割当数をもって各都道府県の高等学校長協会等に協力を求めたが、各大学の入学定員と所在都道府県の国公立大学進学希望者数とが必ずしも比例関係になかったこともあって、都道府県によってはその割当数に過不足を生じた。このことについては、都道府県別国公立大学進学希望者数の推計作業中であったため、調整の余裕がなかったこと。

② 受験者に個人成績を通知することについて、前年からの慣習により事前にかなりの要望があったが、試行テストは共通第1次学力試験と同様に処理するという立場から、それを行わなかったこと。

③ 北海道において欠席率が高いのは、受験が義務的なものでないため気象状況によって受験を放棄した者が多かったと考えられること。

〔資 料〕

(1) 試行テスト志願者数集計表

昭和52年10月25日
大学入試センター

区分	通常者		身体に障害のある者(点字受験者を除く)						身体に障害のある者(点字受験者)						合計
	男	女	男			女			男			女			
			視覚	聴覚	肢体	視覚	聴覚	肢体	視覚	聴覚	肢体	視覚	聴覚	肢体	
(1) 卒業見込者	46,114	16,709	14	11	7	5	3	5	15	0	0	4	0	0	62,887
(2) 卒業者	396	108	7	0	0	1	0	0	10	0	0	1	0	0	523
(3) 検定	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
(4) 大臣指定	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(5) 外国の学校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(6) 認定者	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(7) その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(8) 外国人(1)(卒業見込者)	159	28	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	187
(9) 外国人(2)(卒業者)	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	46,670	16,847	21	11	7	6	3	5	25	0	0	5	0	0	63,600

〔資 料〕

(2) 試行テスト都道府県別志願者数調

昭和52年10月25日
大学入試センター

都道府県名	希望高校数	希望志願者数	志願高校数	志願者数	備考
北海道	242	7,013	144	6,178	
小計	242	7,013	144	6,178	
東北地区					
青森県	35	800	33	783	
岩手県	32	800	27	760	
宮城県	51	1,843	38	1,536	
秋田県	21	600	20	598	
山形県	53	1,200	44	1,127	
福島県	32	650	31	640	
小計	224	5,893	193	5,444	
関東地区					
茨城県	59	1,994	53	1,847	
栃木県	54	709	41	607	
群馬県	42	900	37	861	
埼玉県	83	1,200	78	1,135	
千葉県	74	1,894	65	1,760	
神奈川県	107	1,571	88	1,339	
山梨県	18	795	18	795	
東京都	173	7,513	154	5,650	
小計	610	16,576	534	13,994	
北陸・信越地区					
新潟県	73	1,141	54	1,138	
富山県	44	1,080	43	1,043	
石川県	31	1,277	27	1,071	
福井県	16	600	16	592	
長野県	72	1,291	57	1,129	
小計	236	5,389	197	4,973	
中部地区					
岐阜県	42	850	37	827	
静岡県	65	1,566	62	1,574	
愛知県	107	3,820	100	3,607	
三重県	39	800	30	672	
小計	253	7,036	229	6,680	
京都・大阪地区					
京都府	52	1,632	48	1,199	
大阪府	151	4,057	137	3,887	
小計	203	5,689	185	5,086	
近畿地区					
滋賀県	26	609	16	518	
兵庫県	114	2,514	91	2,007	
奈良県	21	550	21	504	
和歌山県	15	549	17	546	
小計	176	4,222	145	3,575	
中国・四国地区					
鳥取県	16	700	16	695	
島根県	25	586	18	549	
岡山県	21	1,400	19	1,370	
広島県	61	1,402	54	1,359	
山口県	43	872	38	804	
徳島県	20	800	16	735	
香川県	31	700	31	700	
愛媛県	31	1,100	31	1,071	
高知県	21	693	12	453	
小計	269	8,253	235	7,736	
九州地区					
福岡県	90	3,550	80	3,152	
佐賀県	32	900	24	847	
長崎県	36	1,200	34	1,193	
熊本県	35	1,300	31	1,277	
大分県	19	658	14	439	
宮崎県	10	700	10	670	
鹿児島県	31	1,500	28	1,485	
沖縄県	22	900	22	871	
小計	275	10,708	243	9,934	
合計	2,448	70,779	2,105	63,600	

〔資　料〕　　(3) 事前選択科目選択者集計表

事前選択科目選択者（点字受験者を除く。）				
数学一般	基礎理科	英語A	ドイツ語	フランス語
115	158	925	18	9

6　電話ファクスネットワーク

各国立大学とセンターの間に電話ファクスを設置、試験実施に必要な連絡及び報告に使用した。

たまたま発生した問題訂正に関しては、試験場からの問合せのあった時刻から5分後に各大学あて、問題訂正文を発信したが、発信後、各試験室において受験者にその訂正文を伝達するまでに要した時間は次のとおりである。

① 10分以内　24大学　27.6%
② 15分 〃　33 〃　37.6〃
③ 20分 〃　14 〃　16.1〃
④ 30分 〃　11 〃　12.6〃
⑤ 40分 〃　5 〃　5.8〃

7　事故等

試行テストの実施に支障を来たす事故又は妨害行為は発生しなかったが、ビラ配布2件、替玉受験1件、試験場誤り2件、交通機関のストライキ1件があった。いずれの場合も必要な措置を講じた。

8　情報処理システム等

センターの情報処理システムは大別して、次の6サブシステムによって運用されたが、おおよそシステム計画どおりに稼動し、53年度における機器拡張計画の目途が立ち、若干のシステム修正によって、本試験における処理に確信を得た。

① 志願票の入力、各種セットアップ
② 試験場の割当て
③ 受験番号の付与、受験票の発行

④ 答案の読取り及び正解の入力
⑤ 採点処理
⑥ 各大学への成績提供と諸統計の出力

(1) 機器構成

ア　答案の読取りの処理

ウェスチングハウス社製W2300光学マークシート読取り装置3セット（1セットは借用）を使用して、同一答案を3回読取り、主コンピューターで採点処理するために、磁気テープに読取り結果を書き込む作業を行ったが、機器的なトラブルは皆無であった。本試験においては6セットによって処理することとなる。

イ　主コンピューターの処理

先きに述べた答案の読取り以外のすべての処理を5～6多重（同時に行う処理作業の数）で行うため、主コンピューターを設置しているが、機器的なトラブルは全く生じなかった。

○ W2300光学マークシート読取り装置（1セット）の構成

(ア) W 301 スキャナー　1台
(イ) 中央処理装置　(16KW)　1台
(ウ) 磁気テープ装置　(1600ＢＰＩ、9トラック)　2台
(エ) ディスプレイ装置　1台

読取り速度　最大300枚／分　(両面で600ページ／分)
マークシート　222ミリ×279ミリ
読取りマーク数　61列×40行（片面）

○ ＦＡＣＯＭ2300－58（主コンピュター）の構成

(ア) 中央演算処理装置　(主記憶容量　0.64ＭＢ)　1台
53年度に1台増強し、合計2台とし、主記憶容量を1ＭＢに拡張する計画
(イ) 集合ディスクパック装置　(補助記憶装置 200ＭＢ)　8台
53年度に4台増強、記憶容量は2400ＭＢとなる。
(ウ) 磁気テープ装置　(6250/1600ＢＰＩ、9トラック、2台、1600/800ＢＰＩ 9トラック、8台、800ＢＰＩ、7トラック、2台)　12台
(エ) カード読取り装置　(2000枚/分)　2台
(オ) カードせん孔装置　(250枚/分、印刷付)　3台　53年度に1台増強
(カ) ラインプリンタ装置　(680～1600行/分)　5台　53年度に1台増強
(キ) ＣＲＴディスプレイ装置　1920字/面3色カラーハードコピー付　2台

(ク) コンソールディスプレイ装置　　1台
　＃タイプライター
その他、紙テープ読取り装置、紙テープせん孔装置、ＸＹプロッター装置、フロッピイディスク装置、カードせん孔装置（3台、オフライン）等。

(2) 答案のマークミス等

ア　光学読取り装置自体に起因する読取りミスは、次のとおりであるが、セロテープでの答案の補修等で、異常なく答案の読取りを完了した。

答案のジャミング（ひっかかり）　5枚
答案の破損　6枚　} 計11枚

事故発生率　全答案枚数 220,905 枚の 0.005 %

イ　答案のマークミス

(ア) 答案のいたずら書き　16枚
発　生　率　0.007%

この場合、採点せず失格とした。

(イ) 受験番号の未記入、誤記入のもの　712枚
発　生　率　0.3%

この場合、受験番号のマーク欄の未記入及び誤記入のものは、数字記入欄の記入と姓名欄の記入、欠席調査表等と照合したが、本試験の場合は、その照合を行う時間的余裕がないと思われるので、失格となろう。

また、受験番号欄及び姓名欄の未記入のものは失格とした。これらのことに基づき、受験番号欄と受験番号そのものに改善を加える。

(ウ) 科目選択欄の未記入、誤記入のもの　1,510枚
発　生　率　0.7%

この場合、受験番号を記入してあるものは、その教科又は科目を零点として処理した。漢字の科目選択欄が記入され、マーク欄に記入のないものは、理論的には照合できるが、時間的には不可能に近い。

(エ) マークの記入が不明確なもの　5,562マーク
発　生　率　総マーク数14,192万マークのうち 0.004%

同一答案を異る光学マークシート読取り装置で、1回ずつ、計3回読取らせた結果、2～

3回ともそれぞれ異ったマークを読取っていたマーク数は 5,562 マークであった。これらのほとんどは、1つのマークを記入すべき解答記入欄に 2 つ以上のマークをしていた（すなわち、選択肢の1つにマークすべきところを2つ以上マークしていること）もので、答案を肉眼で点検すると、2つ以上のマークの鉛筆の濃度とマークした面積を比較しても区別がつかないものであった。したがって受験者がどのマークを正解として解答したか不明であった。この場合、その設問に対する解答を零点として処理した。

これらの答案のマークミスに関しては、問題冊子の表紙、解答用紙の注意事項、監督者による試験開始前、開始後、終了十分前の3回、合計5回の注意が各教科について行われたにもかかわらず生じたもので、全答案中延約1%となったが、答案は零点として処理した。今後、注意事項の改善を行うことが必要である。

ウ　欠席調査表の記入誤り

欠席調査は、マークシートによる欠席調査表を用い、試験実施大学において行ったが、受験番号の記入誤りが9.0%にのぼった。

これについて、センターにおいて欠席調査表の照合、答案との照合を行ったので答案読取りには支障を生ぜしめなかったのが、多くの時間的ロスを発生した。このことに関しては各大学の実施担当者に対して注意を促すとともに、記入、点検、照合の担当者を特定せしめることが必要である。

(3) 各大学への成績提供

大学で試行テストを受験した者、及び試行テストを受験し昭和53年度入試で当該大学を受験した者の試行テストの成績についての各大学の請求は、磁気テープ、パンチカード、紙テープの3種コンピュータに直ちに入力できる媒体によることとし、センターからはこれらの媒体の形による成績とこれに個人別成績リストを加えて提供した。

これらの成績提供処理に当たって、請求情報が指定外であったもの6枚、請求情報に誤りがあったもの30枚であったが、いずれも再請求を求め、当該大学との連絡調整を行った。

成績請求・提供を

磁気テープで行った大学　58
パンチカードで行った大学　76　} 延 141 大学
紙テープで行った大学　7

(4) 処理時間

各処理システムの実処理時間は、当初計画したとおりであったが、センターと各大学における要員の不慣れ、センター施設の狭さ等から、手作業部分（主として前処理）の時間的ロス等を生じた。しかし、これは処理の日数を重ねるにつれて順次減少して行った。これらを勘案すると、本試験に要する処理時間は、計画どおりほぼ十分であることが確認された。しかし、外的内的要因によるシステムダウン（機器の使用不能又は故障）対策として、バックアップ体制（支援体制）を確立しておく必要がある。

○ 本試験における主な処理時間の推定（60万人の受験者の場合）

① 志願票パンチ作業　20日間

② 志願票入力と入力修正　20日間（10日間は①と重複）

③ 試験場割当と受験番号付与　14日間

④ 受験票作成・発行　23～27日間　1日当り2.5万枚

⑤ 答案読取り処理　20日間（200時間）

$$\frac{\text{答　案……60万人} \times 5\text{枚} \times 3\text{回}}{\text{OMR……1時間7,500枚読取り} \times 6\text{セット（全処理作業）}} = 200\text{時間}$$

⑥ 採点処理　22日間（215時間）　一部は答案読取りと並行処理

⑦ 科目別平均点等算出　25時間　一部は答案読取りと並行処理

⑧ 成績請求提供処理

（二段階選抜45大学分）　90時間　1大学当り平均2時間

（その他の75大学分）　150時間

9 身体に障害のある受験者に対する配慮

1 身体に障害のある者に対する措置

点字問題での受験者29人、その他の身体障害のある受験者44人であった。後者については弱視、難聴、肢体不自由等であったが一般の試験問題・同一試験時間で、ルーペ使用、手話通訳者付与等の措置をとって、支障なく試行テストを実施した。

点字問題受験者に対しては、一般の試験問題を点字で示した。この際点字で示すことが不適当な問題は削除した。

また、試験時間を1.5倍とし、公立盲学校を試験場として、試行テストを実施した。試行テストの結果により、盲学校、聾学校、養護学校関係者から次の点について配慮する必要があるとの申し入れがあった。

(1) 点字問題がサームフォーム（点字印刷の方法）によって複製されているので、手のすべりが悪く解読に時間を要する。通常の製版方式に改めること。

(2) 試験時間の1.5倍が長く、疲労が甚しいこと（2日間で13.5時間）。

(3) 点字化できない問題（漢文等）を削除したが一般受験者との均衡から代替問題を作成した後に試験時間を1.5倍にすること。

(4) 点字受験者1人につき1室で監督者が2人つき、かつ、解答用紙に監督者がマークする（点字解答用紙から受験者が口頭で伝達し、確認する）ことは、ていねいであるが、受験者に対する心理的圧迫が少くない。大部屋の試験室で受験させることが望ましいこと等。

これらに対して、教科専門委員会特別問題作成部会及び実施方法専門委員会で可能な点について配慮するよう検討する必要がある。

2　身体に障害のある受験者調べ（障害別による）

(1)　視覚障害者　（57名）

ア　点字受験を希望する者　（介助を要する）

(ｱ)　全　盲　者　24名
(ｲ)　弱　視　者（文字、数字、記号等で解答１名含む）　6名　……30名

イ　一般受験者と同室でルーペの使用を希望する者

弱　視　者 …… 27名

(2)　聴覚障害者　（14名）

ア　手話通訳者を希望する者　（介助を要する）

(ｱ)　全　聾　者　1名
(ｲ)　難　聴　者　2名　…… 3名

イ　補聴器の使用を希望する者

難　聴　者 …… 3名

ウ　一般の受験者と同室で受験可能な者

難　聴　者 …… 8名

(3)　肢体不自由者等　（12名）

ア　特製の机を使用する者　（介助を要する）筋肉拘縮症 …… 1名

イ　一般の受験者と同室で受験可能な者

(ｱ)　松葉杖の使用を希望する者　下肢不自由（小児マヒ１名含む）4名

(ｲ)　そ　の　他

サリドマイド児（右腕短い）　1名
小　児　マ　ヒ　1名
病　弱　者　1名
慢　性　腎　炎　1名
下肢不自由者　3名　　7名

〔資料〕1　身体に障害のある受験者の心得

昭和52年度共通第１次学力試験試行テストを受験する身体に障害のある受験者に対し、次のような特別の配慮を行ったうえで実施しますので、あらかじめ次の諸点を考慮のうえ受験してください。

なお、ここに記載されたこと以外の事項は、すべて一般の「受験者心得」に準じて取扱います。

1．視覚障害

(1)　全盲の受験者

ア　試験時間は、一般の受験者の1.5倍とします。

イ　試験問題の提示は、点字により行います。

ウ　解答は、点字で行い、試験終了後、それを試験監督者に口頭で伝達し、試験監督者が一般受験者用の解答用紙に記入します。なお、このさいには録音テープにも収録します。

エ　その他書字用具の持参を許可します。

オ　全盲者および弱視者のうち点字受験者に対しては、別途「身体に障害のある受験者（点字受験）の心得」があるので、これを参照してください。

(2)　弱　視　者

ア　一般の試験室で受験可能な受験者

(ｱ)　試験室の窓側の明るい席に着席させます。

また、必要に応じて机上には、照明器具（電気スタンド）を用意します。

(ｲ)　読書拡大鏡の持参を許可します。

イ　点字の受験者　　点字で受験する者は、全盲者の受験に準じて取扱います。

2．聴覚障害

必要に応じて手話通訳者を手配します。また、補聴器の使用を希望する者に対しては、それを許可することとします。

なお、手話通訳者を希望する者については、一般の受験者に支障のない席（試験室の後部座席）に着席させます。

3．肢体不自由者

ア　上肢不自由者に対しては、希望により答案を文字、数字、記号等で解答させます。一般の解答用紙への記入は、試験監督者が行います。

イ　肢体不自由者に対しては、希望により車椅子の使用を許可します。その場合には、別室で受験させます。

ウ　上肢、下肢の不自由な者には、試験室を1階に設定します。

4．そ　の　他

受験者の付添者は、受験者を試験場控室まで誘導し、試験実施中は、控室で待機することができます。なお、付添者は控室入室後は、すべて試験場本部の指示に従ってください。

連絡先　〒153 東京都目黒区駒場2丁目19番1号

大学入試センター　管理・事業部

TEL　03-465-3946

〔資　料〕2　身体に障害のある受験者（点字受験）の心得

（同心得は、点字でも作成し同封してあります。）

昭和52年度共通第1次学力試験試行テストを受験する点字受験者は、あらかじめ次のことを承知のうえ受験してください。

なお、ここに記載されたこと以外の事項は、すべて一般の「受験者心得」に準じて取扱います。

1．試験日程

(1)　試　験　日……12月24日（土曜日）、12月25日（日曜日）

(2)　試験教科……国語・社会・数学・外国語・理科の5教科について試験を行います。

事　　項	12月24日（土）		12月25日（日）		
	国　語	社　会	数　学	外国語	理　科
受験者入室	11：30		8：45		
受験の説明 問題冊子・解答用紙の配付	11：40 11：45	14：50	8：50	12：20	15：20
試験開始	12：00	15：00	9：00	12：30	15：30
試験終了	14：30	18：00	11：30	15：00	18：30
解答伝達	14：30～	18：00～	11：30～	15：00～	18：30～

2．試　験　場

(1)　試験場については、受験票に表示してあります。試験場の所在地・道順については、受験票の試験場案内欄に記載してあります。

各自が受験すべき試験室及び控室は、試験当日、その試験場に掲示します。

(2)　受験者は、試験開始の時刻40分前までに試験場に到着して、係員の指示をうけ受験者控室に入室してください。

3．試験問題の提示方法

試験問題は、点字、触図で示します。

4．解答方法

解答は点字で行い、試験終了後それを試験監督者に口頭で伝達し、試験監督者が一般受験者用の解答用紙に記入します。なお、このさいには、録音テープにも収録します。

5．携　行　品

点字板（定規、点筆）、又は点字タイプライター、定規、ソロバン、コンパス

なお、解答用紙（点字用紙）、レーズライター、レーズライター用紙、下書き用紙（点字用紙）を大学側で用意しますので、用紙類はいっさい持参しないでください。

6．そ　の　他

(1)　受験者には１名の試験監督補助者（盲学校教諭）をつけます。

(2)　受験票・写真票を忘れないように注意してください。

(3)　受験者には、付添者１名をつけることができます。当日、受験者を試験場控室まで誘導し、試験実施中は、控室で待機することができます。なお、付添者は、控室入室後は、すべて試験場本部の指示に従ってください。

連絡先　〒153 東京都目黒区駒場２丁目19番１号
大学入試センター　管理・事業部
TEL　03-465-3946

あなたの受験番号、試験場コード、選択科目を下記に点字で表示してあります。

〔資　料〕３　身体に障害のある受験者数（障害別による）

1．聴覚障害　14名

障害種類	内容	実施大学名	試験場名	備考
聴覚（難聴）	一般受験者と同様の扱い。前列が望ましい。	北海道大学	札幌医科大学	
〃　〃	障害等級（２級）70デシベル補聴器使用 口の動きで解する。前列が望ましい。	北海道教育大学	札幌分校	
〃　〃	一般受験者と同様の扱い。前列が望ましい。	埼玉大学	埼玉大学	
〃　〃	障害等級（３級）口の動きで解する。 一般受験者と同様の扱い。前列が望ましい。	千葉大学	千葉大学	
〃（片耳が聞こえず）	一般受験者と同様の扱い。前列が望ましい。	横浜国立大学	横浜国立大学	
〃（難聴）	一般受験者と同様の扱い。前列が望ましい。	山梨大学	山梨大学	
〃　〃	一般受験者と同様の扱い。前列が望ましい。 口の動きで解する。	東京大学	本郷地区	
〃　〃	障害等級（２級）右102デシベル。 左 97デシベル。 通訳者を要する。	東京学芸大学	東京学芸大学	
〃（片耳が聞こえず）	一般受験者と同様の扱い。前列が望ましい。	東京工業大学	東京工業大学	
〃（難聴）	一般受験者と同様の扱い。補聴器使用。 前列が望ましい。	神戸大学	教養部	
〃（全聾）	通訳者又は筆談要する。障害等級（２級）90デシベル。	和歌山大学	経済学部	
〃（難聴）	通訳者を要する。障害等級（３級）右85デシベル。 左90デシベル。	京都工芸繊維大学	京都工芸繊維大学	
〃　〃	注意事項等はメモが必要。口の動きで解する。 障害等級（３級）50～60デシベル。前例が望ましい。	愛媛大学	教養部	
〃　〃	補聴器使用。口の動きで解する。前列が望ましい。	長崎大学	経済学部	

2．肢体障害　12名

肢体不自由（下肢）	一般受験者と同様の扱い。障害者手帳有等級不明。	北海道教育大学	北海道教育大学	
〃　〃	一般受験者と同様の扱い。松葉杖使用。	弘前大学	教養部	
〃　〃	着席するまでの介助が必要。障害等級不明。	筑波大学	体育・芸術学群	
〃　〃	一般受験者と同様の扱い。松葉杖使用。	横浜国立大学	横浜国立大学	
〃　〃	一般受験者と同様の扱い。松葉杖使用。	岐阜大学	教養部	
〃（慢性ジン炎）	一般受験者と同様の扱い。障害等級（１級）	京都工芸繊維大学	京都工芸繊維大学	
〃（病弱）	一般受験者と同様の扱い。	大阪大学	工学部	
〃（下肢）	一般受験者と同様の扱い。	大阪外国語大学	大阪外国語大学	

障害種類	内容	実施大学名	試験場名	備考
肢体不自由（サリドマイド児）	一般受験者と同様の扱い。右腕が短い。	大阪教育大学	天王寺分校	
〃　（小児マヒ）	一般受験者と同様の扱い。	鳥取大学	教養部	
〃　〃	一般受験者と同様の扱い。松葉杖使用。	山口大学	山口大学構内	
〃　（筋肉拘縮症）	介助要。特製の机使用。障害等級（1級）	熊本大学	黒髪キャンパス	

3．視覚障害　27名

視覚（弱　　視）	ルーペ使用	山形大学	教養部	3名
〃　〃	〃	東京大学	本郷地区	10名
〃　〃	〃	静岡大学	教養部	3名
〃　〃	〃	京都大学	法・経済学部	3名
〃　〃	〃	大阪教育大学	天王寺分校	2名
〃　〃	〃	島根大学	教養部	2名
〃　〃	要望（ルーペ使用。雨の日は照明使用。一般同様、同一問題、同一試験場で受験。）	香川大学	教育学部	1名
〃　〃	ルーペ使用	九州工業大学	九州工業大学	3名

4．視覚障害（点字受験）　30名

視覚	点字により解答	北海道教育大学	道立北海道高等盲学校	1名
〃	文字、数字、記号等で解答	山形大学	県立山形盲学校	1名
〃	点字により解答	東京大学	都立文京盲学校	2名
〃	〃	東京外国語大学	〃	2名
〃	〃	東京学芸大学	〃	2名
〃	〃	東京芸術大学	〃	2名
〃	〃	お茶の水女子大学	〃	2名
〃	〃	一橋大学	〃	2名
〃	〃	京都工芸繊維大学	京都府立盲学校	2名
〃	〃	京都大学	〃	2名
〃	〃	京都教育大学	〃	3名
〃	〃	大阪大学	大阪府立盲学校	2名
〃	〃	大阪外国語大学	〃	2名
〃	〃	大阪教育大学	〃	2名
〃	〃	島根大学	島根県立盲学校	1名
〃	〃	福岡教育大学	県立福岡盲学校	1名
〃	〃	長崎大学	県立長崎盲学校	1名

10　共通第1次学力試験試行テストに関するアンケート調査結果

試行テストの全試験の終了直後に、受験者に対して、試験問題に関するアンケート調査を実施した。その結果は下の図のとおりである。この調査結果によれば、「試験問題の難易」、「問題の文章」、「解答時間」等について、受験者はほぼ満足しているものと考える。

しかし、「数学Ⅰ」の「問題の文章がわかりにくい」が66.0％となっているのが目立っている。これは「解答記入上の注意」がややもすれば難解であったことが主たる原因と考えられるので、教科専門委員会数学問題作成部会において「解答記入上の注意」等について、改善を検討する必要がある。

試行テスト受験者アンケート調査結果

（単位：％）

科目名	受験者数	問題の難易			問題の文章			解答時間		
		やさしい	普通	難しい	わかりやすい	普通	わかりにくい	長い	普通	短い
国語	39,673	15.3	70.5	14.2	29.4	63.1	7.5	14.2	65.3	20.5
数学一般	29	50.6	35.0	14.4	21.7	31.7	46.6	24.5	60.9	14.6
数学Ⅰ	38,615	33.1	47.6	19.3	9.0	25.0	66.0	17.3	65.6	17.1
倫理・社会	6,443	15.7	61.8	22.5	27.8	60.4	11.8	36.0	59.0	5.0
政治・経済	15,361	18.5	59.2	22.3	24.0	60.0	16.0	32.8	60.0	7.2
日本史	25,953	15.1	60.2	24.7	25.7	62.6	11.7	33.1	60.8	6.1
世界史	20,103	13.5	54.8	31.7	25.3	63.2	11.5	30.7	61.3	8.0
地理A	6,866	35.0	54.9	10.1	33.9	59.5	6.6	34.8	59.2	6.0
地理B	4,526	23.3	57.3	19.4	28.6	61.6	9.8	35.7	58.5	5.8
基礎理科	63	24.8	43.0	32.2	26.5	57.3	16.2	72.3	22.8	4.9
物理Ⅰ	22,563	47.4	40.4	12.2	35.6	55.2	9.2	47.0	47.2	5.8
化学Ⅰ	31,507	25.5	55.6	18.9	24.8	57.1	18.1	33.0	56.7	10.3
生物Ⅰ	16,702	19.2	60.8	21.0	24.0	63.0	13.0	54.9	41.7	3.4
地学Ⅰ	8,245	13.6	62.1	24.3	24.3	65.3	10.4	61.9	34.8	3.3
英語B	39,114	16.5	63.2	20.3	30.8	61.7	7.5	10.0	46.3	43.7
英語A	525	11.7	53.4	34.9	28.0	59.0	13.0	15.6	50.2	34.2

注1．ドイツ語、フランス語は受験者が極端に少いため集計から除外した。

注2．解答用紙のデザインについて	(1) 片面使用のもの	良い　21～26％	普通　60～64％	悪い　13％
	(2) 両面使用のもの	良い　21～34％	普通　55～64％	悪い　11～15％
注3．解答用紙の色について	(1) 片面使用のもの	見やすい　31～40％	普通　56～59％	見にくい　5～9％
	(2) 両面使用のもの	見やすい　26～33％	普通　42～58％	見にくい　18～23％

11　共通第１次学力試験試行テストの実施に関する各大学の意見

共通第１次学力試験試行テストの実施事項について、全国立大学87校及び全公立大学33校計120大学に意見を求めた結果、国立大学77校及び公立大学３校から意見が提出された。その意見を要約すると次のとおりである。

1　実施組織について

注　(　)の数字は大学数を示す。

①　受験生の案内、交通整理及び試験妨害等に対処するため、室外監督員を配置した方が望ましい。(1)

②　公立大学及び遠隔地にある学部を独立の実施大学として組織を分離した方がよい。(6)

③　公立大学の自主制と責任体制を明確化するために、国立大学の主管（責任を含む）でなく、センターから直接一括委託方式にしてほしい。(2)

④　試験時間等の統一的なものを除いては適宜大学にまかせてほしい。(1)

⑤　試験関係資料を前もって配布し、その後地域ごとに説明会を開催した方がよい。(2)

⑥　実施委員会の任務に事務的処理を行う事項が多く、実質的には、名目的存在に終った感がある。(1)

2　監督者要領の内容について

①　監督者からの口頭説明事項が多すぎる。(3)

②　一般的に指示項目が多く、煩雑すぎる。特に重要な項目については、一箇所にまとめて明瞭に特記すべきである。(6)

③　注意事項が多すぎて逆に徹底を欠く恐れがある。センターの指示は必要最小限の基本的事項に限り、細部については、各大学の判断にまかせた方がよい。(4)

④　「あらかじめ届出た選択科目についてのみ受験することができる」旨を明記すべきである。(1)

⑤　「解答用紙を汚損したり、折りまげたりしないよう取扱いに注意するよう」明記した方がよい。(2)

⑥　「試験室外に出る時は必ず受験票を携行するよう」明記した方がよい。(2)

⑦　「脱落汚れ等があったら申し出ること」という項目を入れた方がよい。(1)

⑧　受験番号等の記入もれを監督員が指示して記入させることの可否を明示してほしい。(13)

⑨　黒板に試験教科名と試験時間を書く作業は受験者の入室前が望ましい。(2)

⑩　試験直前の注意事項が多い。各時限共通のものは、１時限目のみにしてはどうか。(6)

⑪　「受験票と写真票は切り離すこと」の項目を入れた方がよい。(1)

⑫　受験生入室用の振鈴指示があった方がよい。(5)

⑬　受験生を着席させた後に、「コート云々」「参考書云々」は不都合、入室前に掲示で注意すべきことではないか。(1)

⑭　試験終了から答案引渡しまでの時間が短い。(2)

⑮　監督者が受験生に説明する注意事項については受験者心得にも明示してほしい。(1)

⑯　「写真用シール配布(副)」の項目が必要である。(2)

⑰　各教科の残り時間通告の事項等は確認させる様な教示文にした方がよい。(1)

⑱　試験日時、試験教科の表が見にくいので、スケジュール表のような見やすいものにしたらどうか。(1)

3　受験者心得について

①　受験生に事前に遅刻時間の限度を指示した方がよい。(2)

②　１科目でも欠席した場合のその後の受験の可否を明確化してほしい。(3)

4　試験実施に係る諸問題について

(1)　問題訂正等について

①　問題訂正文の伝達時間に不公平が生じるので発表時刻を指示した方がよい。(3)

②　解答に直接関係のないミスは「問題訂正」ではなく「連絡事項」として送ってほしい。(1)

③　訂正文の板書はできるだけ避け正誤表を受験生に配布した方がよい。(1)

④　訂正文を問題冊子に折り込むのは煩雑である。むしろ、板書にした方がよい。(1)

(2)　試験時間の長短について

①　解答時間が長すぎる。(1)

②　各教科共20分位短縮できるのではないか。(1)

③　各教科とも100分位でいいのではないか。(2)

(3)　配布時間について

①　試験問題等の配布時間が短い。(3)

② 数学の問題は注意事項が多いので、8時50分の配布時間では遅すぎる。(2)

(4) 休憩時間について

① 両日共に短かすぎる。教科順番を変えることによって日程に余裕をもたせた方がよい。(5)

② 監督者及び受験生の昼食時間が短かすぎる。(35)

(5) 選択科目について

① すべて届出選択制にして、試験場での変更は認めさせないようにする。(2)

② 選択科目特に数学一般についての選択ミスが多く、指導注意を徹底すること。(2)

(6) 監督者の入室について

① 集合時間が早すぎる。各大学の実情に合わせて適宜決めた方がよい。(19)

② 社会、外国語及び理科の監督者の集合時間をもっと早くした方がよい。(1)

(7) 受験者の入室について

① 冬期の試験ゆえ受験者の集合時間を少し遅くした方がよい。(4)

② 受験票の確認を各試験室入口でやるよりも試験場入口で確認した方がよりスムーズに実施できるのではないか。(9)

③ 社会、外国語の試験についても受験生の入室時刻を指定してほしい。(2)

④ 写真照合は各大学の実情に応じて行えるよう弾力性をもたせてほしい。(3)

⑤ 写真照合は科目ごとに試験中にした方がよい。(10)

⑥ 入室から開始までの時間が長い。(2)

(8) 時間内退室について

① 試験開始後適当な時間が経過したら退室を認めたらどうか。(14)

② 終了時30分前頃からの退室を認めたらどうか。(1)

③ 試験開始後30分～40分経過したら退室させてもいいのではないか。(4)

(9) 受験番号表について

① 厚手のしっかりした用紙を使用してほしい。(3)

② 受験番号を大きく記載できるよう、もう少し大きい用紙にする等デザインに工夫がほしい。(3)

(10) そ の 他

終了10分前に行う各種の記入事項についての注意は終了時の方がよい。(3)

5 問題冊子、解答用紙について

(1) 問題冊子について

① 問題冊子用の封筒（袋）をセンター側で用意してほしい。できない場合は、各冊子の厚さ(50部単位）を連絡してほしい。(9)

② 問題冊子のまとめは、100部を単位とし、50部・25部に統一した方が分封に都合がよい。(2)

③ 問題冊子の注意事項と解答用紙の字句が同一でないものがあるので統一すべきである。(1)

④ 監督員、本部責任者、実施委員等にも配布するため、予備の問題冊子は多めに送付してほしい。(2)

⑤ 数学の解答記入上の注意が複雑すぎる。(6)

⑥ 社会の問題冊子及び解答用紙中に記載されている倫・社、政・経の用語の統一をはかってほしい。(2)

⑦ 外国語の冒頭指示文は、不適当なので、改良していただきたい。(1)

⑧ 2時限目から欠席者の問題冊子等は配布しない方がよいのではないか。(1)

⑨ 「数学Ⅰ」、「数学一般」は別に印刷した方がよい。(4)

(2) 解答用紙について

① コーナーカットをもっと大きくした方がよいのではないか。(5)

② マークシートのマーク形の角をとったことは非常によい。(1)

③ 形式、色、デザイン等非常によく、用紙が一枚であるのもよい。(1)

④ 社会・理科の解答用紙については、各科目指定してある方が間違いが少ないのではないか。(5)

⑤ 解答用紙控にミシン目を入れて受験者に利用しやすいようにしたらどうか。(7)

⑥ 解答用紙控の利用頻度が低いので、つける必要はないのではないか。(1)

⑦ 電子計算機で処理するので、回収方法は受験人数と枚数チェックだけでよいのではないか。(1)

6 試験調査表、欠席調査表

(3) 試験調査表について

① 試験調査表の用途が明確でない。(3)

② 廃止してもいいのではないか。(1)

③ 試験調査表の返送は意味がないように思われる。(1)

④ 成績請求事務等に必要なため、送付しないで実施委員会に保管しておきたい。(2)

⑤ 試験調査表の名称を欠席調査表とした方がよい。(1)

⑥ 試験調査表及び欠席調査表を一本化して、監督者が欠席調査表に直接記入するような方法はないか。(1)

⑦ 欠席者の受験番号のみを記載する方法はとれないか。(2)

⑧ 空欄が多いので、A4版の大きさにして100名記入できる位の処理方法はとれないか。(1)

⑨ 試験調査表の「頁計」「総計」もしくは「累計」の欄を設けてほしい。(1)

⑩ 試験室ごとにチェックできるよう使用しやすいものにしてほしい。(2)

⑪ 各教科・試験室ごとに同一のものが2枚必要である。紙が薄く、巡回しながら○印をつけるのは困難、レ印の方式がよい。(3)

(2) 欠席調査表について

① 一試験室一枚あてにしたらどうか。全試験室の分については総括票を一枚加えたらどうか。(6)

② もう少し簡易な方法はないだろうか。転記ミスがかなりでやすい。記入方法に一考を要する。(12)

③ 試験調査表回収後に欠席調査表を作成するので、相当時間がかかる。一考を要する。(3)

④ 欠席調査表の記載は実施本部、監督者のいずれかが行うかは大学で適宜選択できるようにした方がよい。(1)

⑤ 二教科目以降の欠席者はその分だけを処理するようにはできないか。(2)

⑥ 一受験者に対して五教科記入できる一覧形式はとれないか。(1)

⑦ 利用方法等必要性を十分に説明した方がよい。(1)

⑧ 簡素化をはかるため、受験番号を印刷して欠席科目の方をマークした方がよい。(1)

⑨ 作成する場合、多人数で作成できるよう考慮してほしい。(1)

⑩ 欠席調査表の記入例を明示してほしい。(1)

⑪ 転記ミスを防ぐため、欠席者の調査は、磁気テープかパンチカードの方が能率的であるように思われる。(1)

⑫ 転記ミスを防ぐため、最初の教科の欠席者についてマークすれば、その後は各教科ごとにその増減分の受験番号をマークするだけで処理できないか。(1)

⑬ 欠席者数調査の際に、試験調査表を回収し、作成したらどうか。(1)

⑭ マークシートに記入する欠席者人数は一枚につき20名単位の方がよい。(1)

⑮ マークシートに記入する欠席者人数は一枚につき10名単位の方がよい。(1)

7 受験票、写真票、シールについて

(1) 受験票について

① 受験番号が各試験場共通なため、試験場をまちがえる恐れがある。各試験場で番号を変えるか、通し番号とする等の配慮がほしい。(9)

② 受験票再発行にあたって実施本部に資料がないため、本人かどうかの確認方法がとれない。明確化してもらいたい。(14)

③ 受験票の再発行を簡略化してほしい。共通事項は電算機で印字し、当日書き入れる事項を減少した方がよい。(3)

④ 再発行の際の写真撮影のためのポラロイドカメラを各試験場で準備した方がいいのではないか。又、この必要性があるのかどうか指示してほしい。(5)

⑤ 受験票の受験番号が小さく照合しにくい。(1)

⑥ 二日目の受験に際して、受験票を忘れた場合の処置について明示してほしい。(5)

⑦ 「受験票再発行台帳」の試験終了後の扱い方があいまいである。(1)

⑧ 再発行の際の記入例を示してほしい。(1)

⑨ 再発行の際、受験番号及び注意事項等を記載した「仮受験票」を受験者に渡し、試験終了後、手続きを取るようにしたらどうか。(1)

⑩ 不正受験防止のため、受験票・写真票等を高校に一括送付し、写真及びシールは高校側で貼付させ、実施大学に一括送付させた方がよい。(1)

⑪ 受験票の氏名欄は、コンピューター打ち出しのため、判読しがたい。その他の欄に受験者に漢字で自筆させたらどうか。(2)

(2) 写真票について

① 綴じ穴が小さすぎる。(14)

② もう少し厚くし、穴をもっと内側にあけてほしい。(7)

③ 写真を忘れた場合の処置について明確化してもらいたい。(6)

④　写真票の回収時間を試験開始前にしたらどうか。(1)

⑤　写真票と受験票が間違いやすい。(1)

⑥　仮受験票を作成した後の照合確認のため、写真票は事前に実施大学に送付した方がよい。(5)

⑦　写真票の氏名欄はコンピューター打ち出しのため、判読しがたい。漢字で自筆させたらどうか。(1)

⑧　回収した写真票の取扱いについての明示がほしい。(3)

⑨　回収時間はシールの配布後の方がよいのではないか。(1)

⑩　受験票から写真票を切り離す場合、手間がかかる。位置を考慮してほしい。(2)

(3)　シールについて

①　シールのミシン目が不十分で切り離すのに困難。(4)

②　受験票の写真欄にシールを貼る場合、枠を位置づけてほしい。(2)

③　受験生の負担緩和のため、シール貼付は出願時に処理できないだろうか。(3)

④　シールは事前に受験生に配布し、貼付の上、持参させた方がよいのではないか。(2)

⑤　シールの模造、不正使用防止の見地から、使用年の数字等を印刷すべきである。(1)

8　問題冊子・解答用紙の輸送について

(1)　輸送について

①　発送コード等、大学コードを基とした枝番号方式とするよう検討してほしい。(1)

②　保管・管理の面から実施一週間前に到着するよう輸送計画を検討してほしい。(2)

③　問題冊子・解答用紙・解答記入上の注意については、25枚単位に合紙を入れてセンターから送付していただきたい。(1)

(2)　封印について

①　コンテナに付す番号は封印番号又はコンテナ番号のいずれかを一連番号にした方が確認しやすい。(1)

(3)　コンテナの大きさについて

①　重量は運搬等の面から軽量化してもらいたい。一人で運搬できる位の大きさにできないか。(7)

②　コンテナの量が膨大となるので簡単にコンパクトにできないか。(3)

(4)　解答用紙袋について

①　袋の表記に大学会場名記入欄を設けた方がよい。(1)

②　ビニールはすべり易く、密封できず回収袋としては適当ではない。クラフト封筒を使用した方がよいのではないか。(8)

③　半透明の表紙にした方が中味の文字と重ならなくて読み易いように思われる。(2)

④　空気孔をあけるようにしてほしい。(1)

⑤　ビニール製ゆえに記入がむずかしく、特殊なペンを使用するので乾きにくく不適当である。(5)

⑥　仕分枚数欄を設けてほしい。(1)

⑦　試験監督員の責任所在を明確にするための氏名・捺印欄を設けてほしい。(2)

⑧　試験室用と返送用に区別する必要はない。(2)

(5)　返送について

①　解答用紙の返送は受験した者だけでよいのではないか。又返送の必要性があるのか明示してほしい。(4)

②　答案返送枚数の指示（「200番単位」「200枚単位」）の統一をはかってほしい。(2)

9　大学入試センターと各大学等との連絡体制

①　送受信回数の簡略化　(12)

○　当日の試験開始・終了時間の報告だけでいいのではないか。

○　開始・終了の報告は省略化した方がよい。

○　欠席者の報告はまとめて一回だけでよいのではないか。

○　欠席者報告は省略してもよいのではないか。

②　諸報告様式の大きさをＢ５版に統一してほしい。(1)

③　各教科の試験開始・終了時及び準備完了報告の時点を明確化せよ。(3)

④　実施本部と各試験場との連絡を密にするために各試験場にもファクスの設置を望む。(13)

⑤　公立大学にもファクス設置を望む。(2)

10　予算、設備等について

①　大学の規模及び事情に応じて予算措置をしてもらいたい。(6)

② 補助監督員（警備員、医療関係者、交換手、ボイラーマン）の経費を考慮してほしい。(15)

③ 学外に試験場を設置した場合の教職員の旅費について考慮してほしい。(2)

④ 暖房費について地域的に基準を設けてほしい。(4)

⑤ 管理職に対する手当も考慮してほしい。(2)

⑥ 試験問題保管庫の予算措置。(7)

⑦ 各試験場においての保管設備、警備措置も必要である。(5)

⑧ 事務担当者と監督者との謝金及び超過勤務手当の格差を是正してほしい。(1)

⑨ 成績請求の電算プログラム等共用できるものは見本を配布するか統一をはかり合理化に努めてほしい。(1)

11 成績請求について

① 成績請求票のとじ穴が小さすぎる。(3)

② 紙テープで成績請求をした場合、マークカードに受験番号を記入するが、その際、末尾のアルファベットを数字におきかえる作業がある。この作業は間違えやすいので省略するか、他の方法があるか一考を要する。(1)

③ 迅速、かつ省略化のうえからマークカードを使用して受験生がマークする方法はとれないか。それと同時に番号ならびに試験場コードをセンターでパンチして、受験生に受験票と同時に送付して頂けないか。(1)

④ 成績請求の際、受験者の受験番号及び成績のほかに、氏名、性別、卒年、課程、出身学校コードなどのデーターも提供してほしい。(1)

⑤ レコード・フォーマットの作成に対して説明不足である。特に発行回数について不明である。(1)

⑥ 氏名欄のコンピューター打ち出しは判読しがたい。その他の欄に受験生に漢字で自筆させたらどうか。(1)

⑦ 2次試験の受付において、センター発行の成績請求票と再発行成績請求票との取扱い及び処置について指示してほしい。(1)

12 点字問題受験者関係

(1) 休憩時間について

① 「解答伝達」の時間を考慮すると休憩時間が少なすぎる。(4)

② 「解答伝達」が休憩時間にくいこむにもかかわらず教科間の間隔が一般受験者の場合より

も短い。十分な休憩及び昼食時間がとれず体力的、精神的疲労度がはげしい。一考を要する。(1)

(2) 問題冊子について

① 紙質がサーム・フォーム使用のため、点字が読みにくい。普通の模造紙の方がよい。(3)

(3) 出題様式について

① マークシートの転記の方法は好評であった。(1)

② 図形問題は読みやすかった。(1)

(4) 試験時間について

① 理科・社会の解答時間が長すぎる。途中で休憩時間は入れられないだろうか。(1)

② 全体的に試験時間が長すぎる。(2)

③ 入室してから試験開始指示の時刻までの時間が長すぎる。(1)

(5) 監督者要領の内容について

① 「解答伝達」のとき、単に「……読みあげてください」とあるが、これを機械的に行うと監督者からの応答がないこともあるので、受験生は正確に伝達されているか不安を抱いているようである。解答ごとに復唱してからマークしたらどうか。(1)

(6) そ の 他

① 弱視者についても盲学校の生徒と同様に扱うべきだ。(1)

② 選択科目（社会・理科）について、一般受験者と同様、当日の選択を認める扱いにできないか。(1)

③ 予備問題の冊子がないので、実施本部において問題訂正の確認や伝達に支障をきたした。(1)

④ 身障者の受け入れ基準を全国的に明確化すべきである。(1)

⑤ 一般受験者と同じ試験場でもよい。(1)

⑥ 試験場の設定は大学間のローテーションで決定してほしい。(1)

⑦ 削除した問題に対しては、事前に周知させるか、削除の部分の解答番号を抹消しておく等の方法をとらないと転記の際疑問がでる。(1)

⑧ 解答方法についての注意事項が理解しにくい。(1)

13 そ の 他

① 監督者要領とは別に試験場本部用の実施要領をあらたに作成してほしい。(5)

② 不正受験防止等の観点から2次試験受験者の写真及び受験票については、1次試験時に使用したものと同じ写真と受験票を求めるよう、各大学に提案した方がよいのではないか。(7)

③ 受験案内の配布について現役分だけは高等学校単位で一括してもいいのではないか。(1)

④ 高校コードと試験場コードの桁数を変えた方がよい。(2)

⑤ 試験場コードと受験番号が混同しやすい。(2)

⑥ 訂正の印刷物については、枚数の正確を期してほしい。(2)

⑦ 「大学入試センターへの連絡事項」用紙を作ってほしい。(1)

⑧ 受験環境を一定にするために、「騒音」の項目を入れてほしい。(1)

⑨ 資料、説明書類、連絡事項等を各項目ごとに整理して冊子にまとめた方がわかりやすい。(2)

⑩ 高校側で受験に際しての指導注意を徹底すべきである。(3)

⑪ 正解例の公表は全科目終了後に発表した方がよいのではないか。(1)

⑫ Hの鉛筆という指定は厳密に守らせることは困難である。範囲をひろげられないか。(3)

⑬ Hの鉛筆を使用しなければならない理由を明示せよ。(5)

⑭ Hの鉛筆の周知徹底。(8)

⑮ マーク用以外に計算等を行う場合にHBの使用を認めさせてもいいのではないか。(1)

⑯ 試験場設定は各学部及び教養部単位にしたい。(1)

⑰ 試験場設定は、静岡、浜松の二市としたい。(1)

⑱ 試験場を東部地区（徳山又は岩国）に設けることはできないか。(1)

⑲ 壱岐、対馬在住の受験生の便宜をはかるために、福岡地区を受験地にしてほしい。(1)

⑳ 各大学への配布部数明細の明示をしてほしい。(1)

Ⅲ 共通第1次学力試験試行テスト試験問題について

1 試験問題の作成方針、正解例の公表

(1) 試行テストの教科・科目等は次のとおりであるが、その出題にあたっては高等学校学習指導要領に準拠し、主として高等学校において、普通科・職業科等を問わず、すべての生徒が履修する科目（外国語は選択科目であるが大学教育の要件として出題）から行った。

「社会」の教科のうち、日本史については、履修進度に配慮し、高等学校学習指導要領の「(7) 現代の世界と日本」（第二次世界大戦終結後の事象）は出題範囲から除外したが、中学校における履修程度の出題を行うことがあるとした。

試行テストは、マークシートを解答用紙に使用する、主として多肢選択による客観式の検査方式により出題したが、特に数学については、数値、記号、符号をそのままマークさせる方法で解答を求めた。

(2) 正解例の公表

正解例は、その日に実施した教科について、点字問題による試験の終了後に、報道機関を通じて公表した。「英語B」の正解例の公表後、転記誤りが発見されたので翌日の全新聞(朝刊)に訂正広告を掲載し、報道機関にも通知した。

試行テスト教科・科目及び試験時間等

教　科	試験時間	配　点	出 題 科 目	解　　答
国　語	100分	200点	現代国語と古典Ⅰ甲	現代国語と古典Ⅰ甲をあわせて解答
社　会	120	200	倫　理・社　会 政　治・経　済 日　本　史 世　界　史 地理A又は地理B	試験場で2科目を選択し、解答 （地理A及び地理Bを2科目として選択することはできない）
数　学	100	200	数　学　一　般 数　学　Ⅰ	1科目を選択し、解答 （数学一般を選択解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者で、志願票にその旨記入して届け出た者に限る）
理　科	120	200	基　礎　理　科 物　理　ⅠⅡⅠ 化　学　Ⅰ 生　物　ⅠⅠ 地　学	基礎理科1科目を選択し、解答、又は基礎理科1科目を除く科目から2科目を選択し、解答 （基礎理科を選択し、解答できる者は高等学校において当該科目を履修した者で、志願票にその旨記入して届け出た者に限る）
外国語	100	200	英　語　A 英　語　B ドイツ語 フランス語	志願票に届け出た1科目を解答 （英語Aを選択し、解答できる者は、高等学校において当該科目を履修した者で、志願票にその旨記入して届け出た者に限る）

2　試験問題に関する意見・評価

共通第１次学力試験の試験問題に関しては、実施された試験の問題について、高等学校の教科担当教員の意見・評価を求め、爾後の問題作成にその意見・評価を必要に応じて反映させることとしている。このため、共通第１次学力試験等連絡協議会試験問題部会（１科目当り高等学校の教科担当教員３人全教科合計45人、センターの問題作成責任者15人、総合計60人程度で構成）を設置している。

試行テストの問題についても、この試験問題部会を２月10日に開催し、意見・評価を求め、高等学校委員からの評価報告が提出された。また、教科・科目別の全国的な教育研究団体（16団体）に対しても、試行テストの問題に関する意見を求めた。

これらの意見・評価は、国・公立大学からの意見と合わせて、教科専門委員会の各科目別問題作成部会にフィードバックし、爾後の試験問題作成のための貴重な参考資料とすることとしている。

なお共通第１次学力試験試行テストの試験問題について、全国立大学87校及び全公立大学33校計120大学に意見を求めた結果、国立大学33校及び公立大学４校計37大学から意見が提出された。教科別では、国語６大学（国立６）、社会５大学（国立４、公立１）、数学26大学（国立24、公立２）、理科11大学（国立10、公立１）、外国語10大学（国立10）である。

(1)　国　　語

ア　各大学の意見

国語の試験問題について６国立大学から意見が提出された。

1　国語全般の意見について

注（ ）の数字は大学数を示す。

(1)　全体に出題された問題の原文が長文で、短時間の間に果たしてこれを読みこなし、考えるという余裕がないように思われる。（1）

(2)　設問をもっと明確に、平易に表現する必要があるように思われる。また、条件判断した場合、二様の答えが想起されるようなもののないよう留意を要する。（1）

(3)　読む、書くという国語の本質的な学力と、客観的な解答法との間にやはり大きい距離があると感じた。問題は、いずれもよく考えられているが、それでは補いえない客観テストの限界があると思われる。（1）

(4)　試験問題のなかには、理論的思考を評価するには不十分なものが出題されていると考えられる部分があるので、今後問題作成上留意されたい。（1）

2　各設問の一般的内容について

(1)　問題Ⅰについて

問題文は面白い。問２は、a・bのところだけを考えれば答えがでてくるしくみになっている。a－bのセットで一種類になっているから意図的にそうなったか。結果的にそうなったか。問５の選択肢の表現「人間との類推」は気になる。（1）

(2)　問題Ⅱについて

問題文・設問ともに適当と思う。しかし、全問とも選択肢法による設問なので、選択肢が正解を誘導するきらいがどうしてもあろう。（1）

(3)　問題Ⅲについて

素材、設問共に適当と思う。問１の翡翠は知らない生徒が多いと思われる。（1）

(4)　問題Ⅳについて

従来もいくどか入学試験に出題された箇所であり、本文は適切なものと言える。設問もひととおり各種の読解力をみるもので変化はある。ただ、全体としての印象はやや平易すぎる感があり、やはり選択肢形式の限界か。(1)

(5) 問題Vについて

ア 問題文の送り仮名について〈曰ハク〉となっているが〈曰ク〉が慣用されているのではないか。設問は難かしすぎず、かといって易しすぎず適当である。(1)

イ 漢文の問題について、我が国の自衛隊の存在を連想させるような箇所があり、かつまた素直でない。もっと普通の漢文らしい材料がありはしないだろうか。(1)

イ 共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（国語）

1 試験問題の構成と内容等

(1) 昭和51年度試行テストから、現代国語3問題、古文、漢文各1問題という比重で出題され昭和52年度もこの構成が踏襲された。これは、出題の範囲が現代国語、古典Ⅰ甲とされていることを踏まえ、かつ、高等学校における現代国語、古典Ⅰ甲の履修状況が、現代国語は標準単位7単位、古典Ⅰ甲は標準単位2単位となっている点に即応して、比較的に現代国語を重視した出題がなされたものである。第1問題の内容は、高等学校学習指導要領の「第1　現代国語」の中の「B読むこと」の(2)にある「イ、論説、評論などを読む」に当たるものであり、第2問題、第3問題の内容は、同じく「ウ、詩歌、随筆、小説、戯曲などを読む」の中の「随筆」「小説」に当たるものである。第4問題の内容は、同じく学習指導要領の「第2古典Ⅰ甲」の「2　内容」に示されている（古文）の「物語類」に当たり、第5問題のそれは同じく（漢文）の「史伝類」に当たるものと言える。また、各問題の設問もそれぞれ学習指導要領に示されている「目標」に沿い、指導事項に準拠しており、各設問の難易度も現在の高等学校生徒の国語の履修状態に対して、総合的には、ほぼ妥当適切であると考えられる。

(2) 第1問題の素材は湯川秀樹氏の自然哲学とでも言うべきもので、科学論として斬新で説得力の豊かな文章であり適切だと思われる。学習指導要領によっても、「読むこと」の領域の中で、特に論理的文章の読解力が要求されていることからも、また、この種の論説に近い作品が教科書にも多く採択されている実態からも、当を得た出題であろう。

(3) 第2問題の素材は随筆風のマスコミ論としてニュースの客観性を論じたものであり、高校生に興味のある内容であるが、試験問題としては、今少し密度の高い文章を選んでほしい。

(4) 第1問題と第2問題との関連について言えば、今回の場合は、第1問題は科学の哲学的論考、第2問題はマスコミ論として比較的に現実的な論点を持つものということで、問題の素材に幾分の変化は持たせてあるものの、いずれも、主として論理的思考力を問う内容であるので今少し、たとえば、本格的な論説に対する明快な記録、報告の文章など、その組み合わせに工夫がほしいところであろう。

(5) 第3問題の素材は漱石の「彼岸過迄」の一節であるが、小説のジャンルで、評価定まらぬ現代の作品でなく、近代的古典と言うべき作品から出題される傾向は極めて望ましいと言える。ただ、今回の第3問題の場合は、何分、小説の一場面の抜粋であり止むを得ない点もあるが、高校生の鑑賞問題の素材としてはやや軽い内容のものではなかろうか。今一つ深い思考力や感受性を確かめる内容のものが望ましい。また、鑑賞にかかわる設問の場合は、設問の客観性を確保する意味からも、別に参考的資料を提示してそれとのかかわりにおいて解答させる等の配意が必要な場合が多いように思われる。第3問題の鑑賞力をみる若干の設問では部分点を与える方法も講ぜられているようであるが、それならそれで、正答例でそのことを明示しておくべきであろう。

(6) 第4問題は「大鏡」の一節であるが、基本的古典に対する読解力をみる面でも、人物や心理に対する考察力をみる面でも適切な場面が取りあげられている。ただ、難易度から言えば、古典Ⅰ乙に含まれる古典Ⅰ甲（明確さを欠く概念規定であるが、受験生の大多数は古典Ⅰ乙を履修している実態からの規定である。）の学力ならば、ほぼ妥当な問題であろうが、文字通り古典Ⅰ甲の履修程度ではかなり読解に抵抗があるものと考えられる。

(7) 第5問題の素材は、今日の高校生の実態から言えば、論旨の展開の筋道にはついていけるが、その興味関心には遠い内容であると考えられる。その点、素材の選択に一考を要すると思われる。難易度については、上記の第4問題の場合と同じ問題点を持っていよう。

(8) 総合的に言えば、現代国語3問題、（そのうち、主として論理的思考力を問うもの2問題、鑑賞力を問うもの1問題）、古文、漢文は各1問題で、試験問題としての全体のバランスは極めてよい。また、現代国語に関する問題では、語彙力のテストがおさえられている点、古文、漢文に関する問題では、文語文法や訓点について古典Ⅰ甲の範囲でとどめられている点、総体に区々たる文学史的知識が問われていない点等、十分な配意がなされているように思われる。

2 試験問題の範囲と程度、設問数等

(1) 第1問題、第2問題の素材は高等学校3年段階に適応したものであり、設問も所謂難問奇問に当たるものはない。第3問題の素材は上述の通り一考を要するし、設問の方法にも、後で触れる

ように、若干の問題が残されていよう。

(2) 第4問題、第5問題については、古典Ⅰ甲の範囲をどうみるかが最も重要な課題であろう。古典Ⅰ甲としての問題文の選択、及び設問の方法については、これまでの試行テストごとに検討され、51年度の出題でやや方向が定まり、本年度はその線上で問題の選定がなされたようである。(専門委員会報告等) それによると、〝古典Ⅰ甲と古典Ⅰ乙の中間をねらった〟とされるが、その基準は甚だ曖昧なものである。文字通り、古典Ⅰ甲の範囲とすれば、その標準単位は2単位、週当たり2時間で古文漢文を平均的に学習している実態を踏まえて出題されるはずである。しかし、実際上は、大多数の受験生は古典Ⅰ乙及び古典Ⅱまで履修しており、額面通りの古典Ⅰ甲の範囲の出題ではおよそ学力の判定資料としては極めて不十分なものとならざるを得ない。したがって、今回のように、古典Ⅰ甲と古典Ⅰ乙の中間的範囲、あるいは、古典Ⅰ乙に含まれる古典Ⅰ甲の範囲での出題となるわけであるが、それならそれで、今回の第3問題、第4問題の内容の範囲程度は妥当ということになろう。だが、反面、古典Ⅰ甲の範囲という大原則を尊重するならば、今回の問題は、古典Ⅰ甲の範囲を逸脱しないまでも、古典Ⅰ甲としては、かなり高度の問題と言わざるを得ない。このような矛盾は、試行テストだから許容されるものの、早晩、建て前と実態とのずれを解消しなくてはならないと思われる。

(3) テスト時間については、5問題、100分で、ほぼ妥当と思われる。なお、今回の試行テストでは特に指摘される点はなかったが、一般的に言えば、客観テストで選択肢が設定されているがために、理解に廻りくどさや混乱を徒らに起こさないよう、設問の方法を十分に吟味してほしい。

(4) 現代国語に関する3問題の配点合計が140点、古典に関する2問題の配点合計が60点とされていることについては、学習指導要領に示されている「現代国語」標準単位7単位、「古典Ⅰ甲」標準単位2単位の比率に即したもののようであるが、古典に関する2問題が文字通り古典Ⅰ甲の範囲にとどまっていない点があるとすれば、配点面だけ幾分形式的機械的な受けとめ方がなされているようにも思われる。

(5) 各問題の設問数は6～7程度、全体で32の設問数は試験時間、問題の難易度、分量等と比較して、概ね、妥当と思われる。

(6) そ の 他

ア 古文における文語文法、漢文の訓点等については、古典Ⅰ甲の範囲では出題が大幅に制限されることになろうが、それらの学習程度が各大学の第二次試験で果してテストされるかどうか。古典Ⅰ乙を多く履修している普通高校の実態に留意され、高等学校の古典の指導に歪みを招かないよう配意していただきたい。

イ 共通第1次試験では高等学校で現在使用している教科書からの出題は避けることになると思われるが、今回の試行テストで第4問題の素材が一部の教科書に収録されていることもあるので、この点については慎重を期していただきたい。

3 試験問題の出題方法

(1) 第1問題について

ア 第1問題、第2問題ともに空所補充の設問がやや多い。欠落部分が多いため、論旨の展開の筋道が追いにくくなり、文の自然な読みとりを妨げることが懸念される。第2問題では特にその点が痛感される。空所補充をなるべく避け、思考過程そのものを問う配意を望みたい。

イ **問1**は空所補充ではあるが、文脈に即して読解する力をみる設問として適切と思われる。

ウ **問2**は段落相互の関連の理解度をみる設問であるが、選択肢がa～dの組み合わせ方式であることは却って手がかりを与え過ぎて、段落相互の内容の関連についての仔細な検討を省く結果となるので、注意を要すると思う。

エ **問3**は単なる書き取り問題でなく、語の意味用法等語彙力を総合的に問う形式で極めて適切だと思われる。ただし、問われている漢字は余りに基礎的なものが多く、それはそれでよいとする見方もできるが、一面、やや平易に過ぎた感もある。なお、eの「キ用」の「器」、iの「発ゲン」の「現」は同一の漢字が問題文中にあるので、設問の対象からなるべくはずした方が望ましい。

オ **問4**、**問5**は要旨要点を読みとる設問として適切と思われる。

カ **問6**は「自然力」についての前の部分の説明を手がかりに推論していく力をみる設問であるが、空所補充だけに幾分高度の設問と思われる。

キ 総じて言えば、第1問題の設問は難易のバランスがよくとれているように思われる。なお問題文中に引用されている「天道不言而品物亨歳功成」の書き下し文については、原文を尊重するとはいえ、当然、歴史的仮名遣いで表記されるべきであろう。

(2) 第2問題について

ア **問1**は文脈に即した語の用法の理解力をみる設問であるが、全体的に語彙力を問う設問がやや乏しいだけに不可欠の設問であろう。ただ、問われているこの箇所、この選択肢では平易に過ぎる点もある。たとえば、空所dなどは、実際上は、わずか4語の中から1語を選択する結果となっているので、一考する要があろう。なお、語彙力のテストに関連して言えば、漢字のよみに関

する設問が皆無であるので、これについても検討する必要があると思われる。

イ　**問2**は空所補充の設問であるが、空欄アの設定は文章の全体的把握力をみる意味で有効であろう。空欄イについては、問6において、「ニュースの第一の性格」に関係する段落を問う設問があり、その解答の手がかりとなる内容が空欄イに補填される事柄に当たっている。したがって、この部分を欠落部分とすることは極めて不適当だと考えられる。つまり、問2で空欄イが補充できない場合は問6も一部解答が困難となるので、この種の設問は避ける必要がある。

ウ　**問3**、**問4**については、平易で基礎的な設問も必要であるという意図は十分了解できる。しかし、余りに平易に過ぎて、設問のための設問、作為的な空所補充といった感じをまぬがれない点もある。問3は止むを得ぬとしても、問4はことにその感が深く、空所が増加することによって二重のマイナスを招く結果となっている。

エ　**問5**は段落の内容上の関連をおさえた、かなり高度だが必要度の高い設問であろう。

オ　**問6**の問題点については、上記2で触れた通りである。

カ　問題文中の「描象」「プリミティブ」の各語には注をつける必要があるように思われる。なお、特に第二問題において目立つが、たとえば「次」「古い」「通ずる」「受ける」等、教育漢字に当たるものが仮名書きになっているのは、仮に著作権にかかわる問題が介在するとしても、国語教育の立場から考えて不可解である。検討いただきたいと思う。

(3)　第3問題について

文学作品を出題するにあたって、小説というジャンルに注目し、かつ、夏目漱石の作品から出題されたことは、まず敬意を表する。

小説を出題する場合、主として①登場人物の心理や人間関係・②場面・③表現・④作者の4つの観点を考慮して、作品の選択と設問づくりが行われる。

そこで、当該のⅢの問題文をこの4つの観点から考察して、問題としての適否を考えてみたい。①については、複雑な人間関係がみられず、宵子という人物を確実にとらえることに注目すればよいわけで、この観点からすればやさしい問題文といえる。②については、問題文そのものは原作の一部分の摘出であるから、時間的に空間的にもひとつのきまった場面に絞られることになる。したがって、この観点からすれば適切なものといえる。③については、やや古めかしい表現（たとえば「片鬢」「月代」「巾着」など）が見られるが、総じて読みやすく、設問に取りあげられている「けんかでもしやしまいし」ぐらいが特殊な表現といえる。④については、夏目漱石はだれでも知っている文豪であるので、漱石を中心とした文学史の設問があってもよかったと思われる

が、このことについてはあまり強く要求はしない。

ア　**問1**＝「透明な青白い皮膚」に注目すれば正解を得るのはむずかしくはない。比喩表現のあり方をたずねた設問として注目したいのであるが、選択肢の5などあまりに正解から離れすぎていて、もうひと工夫のほしいところである。

イ　**問2**＝日常の会話のひとこまに注目して話し言葉の機微をとらえる設問でけっこうであるが、選択肢3も正解のひとつとみなしたくなる。したがって、選択肢の作り方に検討の余地があると思われる。

ウ　**問3**＝登場人物の人間関係に注目した設問であり、特殊な表現ではあるが、着眼点がよい。この傍線の個所の前の部分を丁寧に読めば正解も得やすい。

エ　**問4**＝そもそも整序問題はむずかしいものと思われているが、この設問もなかなかむずかしい。b・c・d・eの順序のままでも文意が通じるように思われて、かなり考えさせられる設問であろう。最初の文をきめるには、直前の宵子の言葉を吟味するわけであるが、これに最もよく続くものとしてbが考えられるだろう。次に直後の文の「それを千代子がおもしろがって」の「それ」のさす内容を考えるなら、dの文が選ばれることになろう。以上のように両端からせまって行くのが、この設問を解くカギというわけになる。ただし、この設問を少しやさしくするとすれば、L・i・e・oの三文の整序をたずねるという方法も考えられる。ともあれ、難問ではあるが、これぐらいのものが六問中にひとつやふたつあってもよいのではなかろうか。

オ　**問5**＝選択肢の文句はみな空白Dのあとの文章の中の一節というのがユニークな感じがする。しかし、選択肢3だけ抜き出しの文句で、あとは出題者が創作することも考えられないでもないが、かえって不調和を感じ、この設問のしかたでよいように思われる。さて、この設問は何をたずねるためのものであろうか。しいて考えれば、登場人物の動作を適切に表す言葉を見出だすということになるだろうか。それにしても、一考の余地のある設問と言いたい。

カ　**問6**＝「宵子のあどけなさが最もよく描かれているのはどれか』という設問のしかたに、まず問題がないだろうか。日本国語大辞典によれば、「あどけない」は「子供の態度、様子などが、無心で愛らしい。無邪気である。……」と説明してある。この定義と選択肢の文とを対応させてみた場合、1・2・5は宵子の態度または行為のあどけなさを表しており、4は宵子の様子または状態のあどけなさを表しているとみなされる。1の「四つばいになった」と5の「首をさげたまま」は子供のあどけないしぐさであろう。また、2の「イボンイボン」と5の「ちいちい」は、いわゆる赤ちゃんことばであり、あどけなさそのものと言ってもよいほどである。4の「月代」

の様子は、枕草子の「うつくしきもの」が連想されて、これまたあどけなさを表しているといえる。あどけなさのポイントをあげてみると、1は「四つばい」、2は「短い手・よたよた歩き・イボンイボン」、4は「月代を剃らない柔らかい毛」、5は「首を下げる・ちいちい」ということになるだろうか。したがって「最もよく」という問いに照らし合わせた場合、2を正解に選ぶことになるだろう。しかし、1も4も5も捨て難い。グレード別の配点方法がこの設問にとられてよいように思われる。総じて鑑賞を問う設問は、作成も困難であれば解答もずいぶん迷わされるものである。慎重な設問づくりは大切ではあるが、やはり文学作品の出題にあたっては、設けてしかるべき問いでもある。

キ　中略について＝中略の個所は、千代子と宵子との関係をとらえるのには、それほど必要ではないかもしれない。しかし、文学作品は作者の筆の運びを大切にしなければなるまい。また、「国語を愛護する」ことが国語教育の目標のひとつになっている。以上の二点から考えても、原文の継ぎはぎはしていただきたくなく、原作を大切にした出題文のとりあげ方をしていただきたいことを力説しておきたい。

ク　ふりがなと注について＝「四人の子が揃っていた。」の「揃」（そろ）はふりがなが必要である。「矢来・月代・片鬢・巾着」などには簡潔な注があってもよい。ただし、あまりに丁寧な注は、かえって読解の妨げとなるので、注づけには慎重な配慮の必要なことを付言しておく。

(4)　第4問題について

ア　今回の問題文は「大鏡」の一節であったが、この個所は既刊の古典Ⅱ教科書にそっくり採用されている。試行テストでさえ、マスコミが早速とり上げるほど社会的関心を集めている事業だから、54年度実施にあたっては無用の誤解や不公平のそしりを招かぬよう慎重に問題を選定してほしい。

イ　前書きで出典を明示し、主要登場人物に解説を加えたのは、古典Ⅰ甲の程度としてはやや高度と思われる文章だけに適切な配慮であった。解答の直接的なヒントにならない範囲で解説、注を加えるのは甚だ望ましいことであって、今後ともこれを期待したい。ここまで配慮するのならば、その他の登場人物(公信卿、民部卿)や、その他の事項(例えば土御門殿)にも簡単な注記があってもよかったのではないか。

ウ　**問1**、**問5**は基本的語彙の意味を文脈の中でとらえる力のテストである。高校ではかなりの時間をこの学習にあてているが、比較的単純なこの種の質問が他の高度の質問とともに設けられていることは難易のバランスから言って望ましいことである。選択肢の作り方に苦心のあとが認められるが、**問1**では6肢、**問5**では5肢だったのはどういうわけか。

エ　**問2**は、語義の理解、行動主体の把握などを総合的に考えさせるやや高度な問題だが、この場面ではぜひ確認しておきたいポイントであろう。ただし、この設問文では「解釈として」とし、**問1**、**問5**では「意味として」としているのは、はっきりした区別をつけているのだろうか。

オ　**問3**、**問4**ともに妥当な設問であり、特に**問4**で登場人物の心情をとらえさせる質問は適切である。

カ　**問6**選択肢の中に②、⑤のように、それ自体誤りを含んだ肢になっているのは適当ではない。おそらくここでは、〝語彙の知識、文法の知識、文脈に即した読解力〟等を多角的にテストしようとしたのであろうが、なるべく設問の目的を整理して、それにふさわしい選択肢を作ってほしい。

キ　**問7**　この問題文に対しては不可欠の設問である。ただ**問4**の質問とややダブる傾きがあるのはどんなものか。解答に到達する過程を、確かめるような設問との組み合せが考えられないであろうか。

ク　概して言えば、多角的な質問、質問の難易のとりあわせ等、苦心のあとのうかがわれる問題である。

(5)　第5問題について

ア　今回の問題文は旧字体によっている。しかし、現行教科書の中には新字体を採用して旧字体を注記したものもあり、漢字学習の負担軽減の意味からいっても、旧字体を採用した場合には新字体を注記すべきである。

イ　今回の問題「李衛公問対」は史伝の範囲のものであろうが、古典Ⅰ甲の学習程度からいえばかなり高度のものと言わざるを得ない。さらに内容が高校生の興味関心に即応しているかどうか疑問である。問題文選定にあたってはこれらの点を慎重に検討してほしい。

今回の問題文の程度・内容から言って、前書、注がこれでは不充分である。古文についても言及したが、解答に直接関係のない注を与えることは、漢文の場合特に必要かと思われる。

ウ　文中の語句に読みがなをつけるのは賛成だが、そのつけ方に原則を設けてほしい。例えば、「而已」には二度ルビをつけ、「孰」「与」には一度だけというのはどういうわけか。

エ　古文でも言及したが、**問1**、**問2**の設問文の中ではともに「意味として」云々となっているが、要求されている答の性質はかなり違う。受験生が混乱をおこすおそれはないが、別の語を使ったほうがいいのではないか。

オ　**問3**について、一般に問題文中に空欄を設けることは好ましくないが、特に漢文では避けてほしい。受験生は脈絡をたどって文意を把握していくのにかなり努力を要するのだが、空欄の個所でその努力が中断される。空白部を保留したまま先を読み進めていくことは容易でないのである。この文章の場合、どうしても空欄を設けた質問がほしいというのなら、次行の同一語句「其心・我気」を空白にした方がよいと思う。

カ　**問4**について、ここを訓読力テストの個所としたのは適切とは言い難い。傍線部は〝句法〟と言われるほど定式化した訓読の型をもっていないから、受験生はこの部分の意味を考えながら―そして「大」「小」とは何を意味するか不分明のまま訓(よ)みを判断しなければならないのである。正解以外の訓読はどこか不自然だと感じるほど漢文訓読口調に親しんでいる生徒はそう多くはない。

キ　**問5**について、傍線は「可得而知焉」だけでよかったのではないか。また、選択肢の作り方（「……の……」とある後半の部分）に変化をもたせすぎた結果、いたずらにまぎらわしくなっている。要するに「彼」が答なのだから、もっと単純な選択肢をならべても設問の意図は達せられたはずである。

ク　**問6**は訓読力を問う個所としては適切であるが、「者」を「こと」と訓読する知識はⅠ甲の範囲ではない。選択肢中の「もの」の部分を「こと」に統一しても充分問題として成り立つと思う。

ケ　**問7**は総括的な文の把握力をみる設問として欠かせないものであろう。

コ　問題文の要所をとらえ、さまざまの角度から質問を設けているのは敬服するが、基本的には問題文の程度が古典Ⅰ甲をこえているのである。試行テストとは違って受験生の数が飛躍的に増大することが予想される本番にあたっては、問題文の選定に慎重を期してほしい。場合によっては、所謂現代文との融合問題形式を考慮してもよいのではないか。（その場合、現代文と古典との配点比を検討するのは勿論である。）また、漢文特有の語句の訓(よ)みとか、基本的な語句の意味を問う質問を加えるなど、質問の難易の組み合せを考慮してほしい。

ウ　全国高等学校国語教育研究連合会からの意見

1．全般について

試験問題の程度、範囲については、全問5題で、現代文3題、古典2題の配当は妥当である。また、現代文は、論説文、評論文（ないし随筆）、小説文から、古典は古文と漢文から構成されているのも、ジャンルの公平さを保っている。

現代文・古典を通じて、問題文の程度は高校終了のレベルとして、おおむねよろしく、難しからず易しからず、当を得ていると言ってよい。

ただ、古典については、古典Ⅰ甲履修のレベルからすると、漢文がやや難であろう。古典Ⅰ甲は2単位科目で、古文・漢文ともに高きを望めない。特に漢文の学習時数は古文のそれに及ばないのが実情であるから、かなり易しくなければ無理である。受験者の得点分布を知りたいと思うが、普通科高校では古典Ⅰ乙を履修するのが一般的であるけれども、職業科高校では古典Ⅰ甲を履修する形になっているので、この点から、国立大学が職業科高校をしめ出すと見られることになりはせぬかと危惧されるのである。

なお付言すれば、57年から実施される高校教育課程では、国語の必修科目は国語Ⅰだけとなるため、共通1次テストがこれにどのように対処するかは、今後の大きい問題となるであろう。

2．出題方法、形式について

マークシートによる客観テスト形式を採らざるを得ないという制約はあるにしても、今回の出題については、全般的にもっともっと工夫してほしいというのが、偽らない感想である。細部については後述の意見に譲るが、例えば空白個所の穴埋め形式などが、安易に用いられすぎている憾みがある。

また、問題文の内容に応じて、その読解のポイントをとらえて設問化すると共に、その設問によってどのような国語の能力を調べようとするのかとの目的を確認しておかなければ、設問のための設問に終わり、このテストの意義を疑われることになりかねない。

かっての能力テストにしても、出題形式などについてはよく練られていたので、そういうものも参考にして、共通1次テストを権威あるものにしていただきたいと願うのである。

3．出題者について

現在、問題作成に当っておられるのは大学人であろうと思うが、やはり、これに高校教師を加えるほうがよいのではないか。もちろん今回のように、事後に高校側の意見を求められることも必要なことで、その意見を次回の出題に反映させていただきたいが、問題作成の段階で高校側が接触していれば、よりよい問題を作るのに役立つであろうし、生徒らの実態から遊離せずに済むのではなかろうか。1つの検討課題としていただきたい。

4　試験問題について

(1)　問題Ⅰについて

問題文は適切なものが用いられている。物を造り出す「手」と、物を知るための「目」との働きに及び、手によって生み出された機械が目の働きを補って物の本質を見抜く役割を果すことの意義を説くという論旨は一種の科学論として、青少年に読ませたい文章となっている。

問1　文脈上、条件把握の確実なよりどころがある点、適切な問題とみるか、小部分の文脈で考えられるところが安易とみるか、論議を呼ぶ要素を持っている。

「……しようとも、それが……であり」であるから、「……である限りにおいて」という選択肢にはすぐ目がいくであろう。

問2　このようなセットの問題では、接続詞を扱う限りにおいて、その微妙にして多岐にわたる適合性を、複数にすることで客観化し得ているといえないこともないが、ここでは、aで2つに絞られ、bでそのどちらかが決まってしまう。4個所のひとつひとつが完全に分析できなくても推定できる安易な問題といえなくもあるまい。多数組み合わせのよさに加え、もう少し高度なものが望ましい。

問3　いかんせん、レベルが低い。対象に工夫を凝らせば、熟語の構成要素としての漢字の基本的意味を確実に把握するような、基本的学習をうながす良問となろう。やさしすぎるのはよくない。

問4　内容探究問題として、要旨と結びついた適切な問題である。全文を読み通し、本質的な読解をうながすものである。

問5　作者の解釈した「目」「手」である点に注意して選択しなければならないところ、一工夫あるが、(ア)が目についての設問なのに、正解の選択肢⑤だけに目の語があるのはどうであろうか。さらに工夫がほしい。

問6　空欄にした場所がよい。全文の要旨を一文としてまとめたものになることは察せられようが、そのためとにかく全文の趣旨を十分理解する必要があるからである。ただしこのような問題は、部会で考えて決めればよいということにならないよう注意すべきであろう。前問にも言えることだが、選択肢の文章の文体が本文となじんでいないのが気になる。

(問題Ⅰについて総評)

Ⅰ番ということで、さしたる難点はないが、出題形式が以下固定化してくると問題である。空所補充も本問の段階ではよいのだが、以下の問題に頻出してくる傾向は安易のそしりを免れ得ないのではないか。

また、全体的にいえることだが、主題、構成の問題があってもよいのではないか。コンピュータ本位に考えすぎないことであろう。部分的問題で勝負しすぎないように。さらに設問の文体についても一考ありたい。

(2)　問題Ⅱについて

ア　問題文と設問について

Ⅰの密度の濃い客観的な論説の文章に比較すると文章にやや癖のある文体と言える。たとえば、A段落の「［ア］。私をとらえていたのは、……客観性ということであった。」は「［ア］。（なぜなら、そのころ）私をとらえていたのは、……客観性ということであった(からだ。)」となるべき文章表現を簡略化したものである。またF段落の［d］には「換言」の語を補うことになっているが「これをニュースというものを中心に換言すると……」と言う、「換言」の使用法は一般的とは言いがたく、筆者独自の文章スタイルと言うべきだろうと思う。

しかしながらⅠの正統な論説の文章と組み合わせることで適切な問題文と言うことができるだろう。

設問についてだが、設問形式がやや安易過ぎていることは、Ⅰ・Ⅱの場合を含めて言えることである。

文章完成方式、いわゆる穴埋めの設問が全部で大問のうち5問まで(問5も一種の穴埋め式)がそれである。このことは、問題文のよさを十分生かしきっていない憾みを生じる。穴埋め方式が質問の形式として適切なのは語いの力や文脈上、前後の関係を読みとる場合などであろうかと思う。

「この問題文からは、国語のこのような学力を試してみる」という観点を明確にさせて、それにそった設問を作ることが必要であろうと思う。Ⅰの問1とⅡの問2、Ⅰの問5とⅡの問6など、そういう必然性がないように思う。ただⅡの問1、6などその工夫のあとがみられる。Ⅱの問題文では段落相互の関係を厳密に問うものがあってもよいはずである。問5はそういう意味も含まれた設問だが、一種の穴埋め方式である点で限界があろう。

答案の処理法が先にあり、そのことから穴埋め方式を多数設定し、総花式にあれもこれも質問しているが結局浅い質問が並べられたといった感がある。

イ　各設問について

――設問形式についての一般的な問題点を別とすれば――

問1　全体を構成する部分を正しく読解したうえで、その読解した部分について、生徒がどう判断するかをためすもので、高校生活3年間で養ったものの見方、考え方をもある程度みることができ、適切な問題。

ただし［d］に入れる「換言」は、「これをニュースというものを中心に換言すると」という文脈での使用は、適切ではない。消去法で正解が出るというものである。

問2　前の問題文のところでも触れたように、この文章には一種の独特な個性がある。その例として先は［ア］に続く「私をとらえていたのは、……客観性ということである。」をとりあげて説明しておいたが、このような文の前に［ア］の質問をするのは、表現された文章をよく読んで考える問題としては、適切なものとは言えない。［イ］は素直な問題。

問3　現代の映像論の中で根元的な問題かもしれない。それを理解させるものとして、内容も含め設問も適切。

問4　読解の技術を問うようなもので、問題の深さがない。さらに問2と同じように［　　］の前後の文章をよく理解し、表現された文章をよく読んで考える問題としては適切なものでない。

［　　］欄のとり場所に問題がある。

問5　一種の穴埋め方式であるが、段落相互の関係を理解しているかをためすものとして、ありふれた出題方式だが、適当。

問6　出題の方式としては、読解と要約をかねた問題として、設問の仕方の工夫を認める。ただし、問題文に適当なものがないと、このような設問は作れない。

B段落から「第1の性格」を引き出すのには、やや難点があると思う。

(3)　問題Ⅲ（小説）について

問題文がよくない。頭が「お供えのように平らに丸く開いた」女の子のイメージが中心になる文章など疑問。夏目漱石なら無難であろう、という安易感がうかがわれる。高等学校を卒業する、あるいは卒業した18歳から20歳くらいの生徒の思想・心情に適切な、しかも高校における国語の学習の成果を問うための問題文としては、よくない。

設問も、高等学校の小説の指導とは、およそ乖離したものばかりで、「高等学校教育の正常な

発展に資する」などおこがましいといえる。

問1　すぐそばの「透明な青白い皮膚」から決定させるようであるが、正答の決め手が明確でない。「透明な」に重点を置くなら「水晶」「金剛石」でもよいのではないか。あまり比喩でもないし、言語感覚を問う、考えさせる設問でもなく、よくない。もっと離れたところに、明確な決め手があることが望ましい。

問2　まあよい。しかし③は消去しにくい。原文は③ではない、ということではよくない。この設問は、東京人が得をするのではないか。全国的規模のテストでは好ましくない。

問3　まあよい。しかし地方の生徒は少々不利ではないか。（傍線部が東京語で、語感が一般的ではあるまい。）

問4　愚問。決め手に欠けたパズル的設問の感。思考力・感受性・論理的な思考力を要求しない設問。異っているというから、では考えてみるか、ということになる。小説の読解・鑑賞の指導ではこうしたことは全く行わない、現場とは乖離した設問。

問5　愚問。後に出てくるものを聞くだけで、意味がない。問4と同様に、小説の読解・鑑賞指導とは無縁の設問。全国規模の「高等学校教育の正常な発展に資する」テストであったなら、小説の設問は、小説はこう読めばいいのかという、小説の読み方が啓発されるようであることが望ましい。

問6　①②でもよいし、⑤でも生活経験の違いによってはよいかもしれない。この種の作問は安易にしてはなるまい。

(4)　問題Ⅳ（古文）について

ア　結論から先に言えば、まずまず合格点のつけられる問題で、今回の5題のうちで、もっともできのよい問題と言えよう。

イ　問題文の選定は申し分ない。ただし、古典Ⅰ甲学習者の立場から言えば、内容がやや難しく、全体の文意が読み取りにくいのではないかと考えられる。もっとも、設問が比較的基礎的な部分を取り上げるという配慮がされているので救われている。

ウ　古典Ⅰ甲、Ⅰ乙という習得レベルにおいてかなり差のある、幅広い受験生に対応するためには、古文の問題もやや難しい問題と、平易な問題と、2題出題するという方法も考えられる。むろん、現代国語の問題の配点に対して、古典の配点のほうを多くするわけにはいかないから、配点には工夫が必要であろう。

エ　各問の設定のしかた、選択肢の作り方も概して良好である。ただ、意味・解釈を問うものが、3問とも比較的単純な部分であるから、1問くらいは、補助動詞（敬語）、助動詞を含む、やや長い部分を取り上げてよいのではないか。選択肢を作るのが多少面倒なだけで、採点が煩雑になるわけではないのだから。

オ　問7はともかくとして、設問がみなこまか過ぎるのではないか。文章全体の内容を把握した上で考えるような問いもあってよい。

各問について

問1　基本的な語彙力を確かめる問いとして適切である。ただ、選択肢の⑤はいささか苦しまぎれの感がある。無理に妙な選択肢を作るくらいなら、選択肢の数を減らしてもよい。6つでなく5つでもかまわない。

問2、**問3**特に問題はない。

問4　作中人物の心理・心情を問う問題らしいのは、これだけであるが、やや物足りない。道長の心情を問う設問ができるのではないか。例えば「なほさうざうしけれ」「もてはやしきこえさせたまひける」など。また、正解の③の「公信のような者」という言い方は意味がはっきりしない。もっともわざとぼかしてあるのかもしれないが。

問5　特に問題はない。

問6　係り結びに着目すれば至極簡単に誤答を消去できる。1つくらいはまぎらわしいものもあってよいが、設問の傾向としては妥当。

問7　よい設問であるが、選択肢の①はちょっと苦しまぎれ気味。

(5)　問題Ⅴ（漢文）について

古典Ⅰ甲をたてまえとしながらも、受験生の実情や作問技術上の面からⅠ乙との中間程度のものを妥当だとする方針であるから、今回の出題を難易度の面から見ると適度なものだと言うことができよう。

問題本文は太宗と李靖両者の問答であって、いたずらに複雑な内容構成のものでない点で歓迎すべきものである。しかし、各設問の組み合せの面からは、問うべき学力の角度が単調になっている感じはある。つまり、漢文もわが国語古典の一分野として学習しているものであるからには、問題文中の部分を用いて、あるいはその部分を発展させて、語句や表現の意味や用法についての理解や能力を問う設問もあって然るべきであろう。そのためには問題本文の選定段階におけるよりいっそうの配慮と努力が期待される。

設問のしかたについては、空所補充の形式、選択肢の数とその表現について若干の疑念が持たれる。特に前者については、Ⅰ～Ⅲの現代国語問題ほどの甚しさではないが、基本的には強いて言えば作問態度の安易さ、ないしは高校生の漢文学習の熟達度についての認識の不十分さがあるのではないかと疑われる。

次に、各小問についての所見を述べる。但し、本文選定を宜しとした上でのことである。

問1．は、直上にある司馬法の言の約言であるから、これを問うのは、ねらいも難易度も妥当である。しかし、形式上の些細なことではあるが、選択肢の言い回しで、②と⑥とにはいま1つ手を入れるのがよくはなかろうか。たとえば②は「攻と守とそれぞれにふさわしい一定の方法」、⑥は「攻にも守にも全員一致して当るという態度」の如くにである。そうすると①～⑥を通じて「一」が入るし、また「戦法」なる語が3つも出てくる偏りが減ぜられる。

問2．は「㆓――㆒」という反語形式の中に「㆒㆓――」という否定形が入って強い肯定の意となるという、漢文学習の基本的な句法の理解度を見ること、そして「講」の意味の理解を問うことの2点がねらいであると見られ、これは良問である。選択肢の表現とその配列も適切である。

問3．は、少なくも李靖の言を最後まで読み、さらには次の太宗の言の前半までを確認して正答が得られる設問である点で、ねらいは適切である。しかしながら、かなりの量の漢文を読み慣れた高校生でなければ、空所2個所が組みになって問われることに先ず当惑する者が少なからずいるのではないかと懸念される。李靖の言が攻と守、大と小、彼と己の如くに対になって展開されているものであるにしてもである。高校生の漢文読解能力は、返り点・送り仮名が十分に施してあるものを注意深く読むことによってはじめてその意味内容の理解が可能となる程度のものであることを問題作成に当る方に認識していただかなければならないと思う。

問4．は、「而」「為」をどう読むかがポイントとなる、訓読ないし書き下しの文の設問である。それは、漢文読解の基本的事項に属するものであると同時に、文章の前後の展開を踏まえた上で正答が得られるものである点で、適切な設問だと言い得る。但し、選択肢の⑥の「……君の道たり、……将の法たり」とは、本文に「㆑㆓君之道㆒」「㆑㆓将之法㆒」と返り点が施してあるからには、これが誤答であることは誰の目にも明らかであり、実質的には無意味な選択肢である。ぜひとも6個の選択肢を設けねばならぬとすれば「……となるの道」「……となるの法」とでもするが宜しかろうか。

しかし、そもそもは当てずっぽう、まぐれ当りの解答を除くためにといって選択肢を5個よりも6個にするのがよいとするところから無理が生じてくるのであろう。しかもその結果は、問題作成者の意図がより確実に達成されるよりもむしろ受験生の困惑度を助長するだけのものでしかないといった恐れがある。肝要なことは、選択肢の数を増すことよりも、個々の選択肢の精練と配分の如何にいっそうの意を用いることであろう。

問5．は、「彼……」は下文の「我……」と対になっており、また、その意味は「[illegible]」と同じく「彼について」「彼のことを」であることに思い至るかどうかがポイントとなる設問であり、李靖の言の末尾「夫……」を受けるものであることについての理解をも期待したものであろう。このように、前後の関係を正しくとらえた上で部分を正しく認識する力を問う設問は、ねらいとして宜しいのであるが、実質上目的を表わす語がふつう主語のある位置にきている形のものでそれを問うのは、第2次試験においてならともかくとして、Ⅰ甲とⅠ乙の中間程度を是とする共通1次試験においては必ずしも適切だとは言い難い。平常の学習段階ではしばしば出てくるものでない文型ゆえに避けるのが適当であろう。

問6．「[illegible]」の文型は、漢文学習の入門当初から頻出してくるものであるから、最も基礎的な知識や学習態度を問うものとして適切なものである。現場の一部には送りがなを施しておくべきだとの意見もあるが、この文型などはむしろ返り点のみの方が実態に即しているというべきであろう。

問7．は、文章の全体を理解した上で正答が得られるものである。このように文章の大要に通ずる設問は必ず置くのが望ましいのであり、且つまた、難易度の面からも程よく、そして選択肢もよく練られている良問である。尤も、問6、で誤答した者はここでも失敗するかもしれないが、それはやむをえないであろう。

エ　日本国語教育学会からの意見

1　全般について

(1)　各問題とも概して妥当である。ただし問題により、出題の多少の難易の差が見られる。Ⅱはもっとも易しくⅣがむずかしい。

(2)　ⅠとⅡとの出題のねらいのちがいがはっきりしない。

(3)　全体としては、この程度でよいという意見が多かった。

2．各問について

(1) ア　この文章は、「あるのである」「ないのである」の目だつ文章で必ずしも適切な文体とはいえない。

イ　問2は「しからば」というやや異質な語句が手がかりとなる。この語を辿って消去していけばすぐ正解ができてしまう。

ウ　筆者名を記さなかったのは何故か。

エ　文章の穴埋めが多すぎて、安易な問題作成の感がする。

(2) ア　空欄アが2行目から出てくるのは適切ではない。少くとも最初の段落には空欄を設けるべきではない。

イ　問1、問5のいずれも易しすぎないか。

ウ　問2の選択肢のうちdの正答だけが動詞形になっているのは適切でない。

(3) ア　この作品では文学的文章にふさわしい設問、たとえば問6の描写力の問題や語感、修辞、作品鑑賞力に関する出題があるべきである。文学をスポイルするという批判を受けるような問題が多い。

イ　問4、問5等は、この種の文章で問うべき（出題する必然性のある）問題とはいえない。

ウ　問1のようなありきたりの直喩を出題の対象とするのはうなづけない。

(4) ア　古文の出題としては、長さ、内容、表現とも適切である。

イ　問1、問2、問5のような意味や解釈を問う問題と、問3・問4・問7のように情景や場面、文脈を問う問題とがバランスを保っている。

ウ　一歩進めて本文の全体を四つの段落（場面）にわけさせるような問があってよい。

(5) ア　出題はおおむね妥当だが、こういう題材は如何なものだろう、との意見があった。

イ　問2の選択肢の中にあいまいなものがある。

ウ　問4の誤答の作り方に疑義があるという意見、同様に問6（問3にも）にも出題技術にもうひと工夫ほしいという意見があった。

オ　教科専門委員会問題作成部会報告書　（国語）

1　問題の構成と配点の基準

今回の共通第1次学力試験試行テストの問題作成にあたっては、昨年度の国大協による実施研究における、「現代国語」3問題、「古文」「漢文」各1題という比重を踏襲したが、その配点は総点200

点のうち、「現代国語」140点、「古文」「漢文」各30点とした（昨年度の実地研究においてはそれぞれ120点、40点、40点）。『高等学校学習指導要領（国語科）』によれば、「現代国語」・「古典Ⅰ甲」の標準単位はそれぞれ7単位・2単位とされているが、マークシート方式による限り「現代国語」の内容「A聞くこと・話すこと」「B読むこと」「C書くこと」の3領域のうち、ことにA・Cに関してはその学力の検定にはおのずから限界があり、それらは各大学による第2次試験に委ねるほかないであろう。従って上記のごとき配点を適当と考えたのである。

2　問題の内容と出題意図および解答結果について

問題Ⅰ　問題文は湯川秀樹「目と手と心」の全文である。すぐれた科学者によって書かれた、自然や科学に関する論説文として、論理構造も強固であり、また内容も濃密であるから、問題文として適切であると考えた。

問1　語句をもって空欄を補充するものであり、文脈に即した読解力を見る設問。解答の結果はほぼ期待どおりであった。

問2　組合わせになっている接続詞群をもって空欄を補充するものであり、これも文脈の展開に即した読解力を見る設問である。正答率はきわめて高かった。このような語の組合わせ方式による選択肢の設定は、選択肢のそれぞれに即した検討を経ずして容易に解答しうる場合もあり、その点今回の設問では選択肢の作り方にいささか安易な点が見られるとする批判もあった。

問3　漢字の書き取りに代るもので語彙の表記力を見る設問。e～jの6問のうち、ことにf・gは正答率がきわめて高かったが、iは多岐にわたって誤答が多く正答率はかなり低かった。その他はほぼ期待どおりの正答率であった。

問4・問5　問題文の論旨や論理の展開の要所をいかに把握しえているかを見る設問であるが、問4の正答率がやや低く、問5の正答率はほぼ期待どおりであった。

問6　文をもって空欄を補充するもので、これも文脈の展開をいかに把握しえているかを見る設問である。正答率はほぼ期待どおりであった。

問題Ⅱ　問題文は森恭三「事件の報道について」の第1節「ニュースにはいくつかの顔がある」の全文である。Ⅰが哲学的な科学論であるのに対し、これはやや随筆的な説明文を採用した。

問1　空欄を補充するものであるが、文脈に即した語彙の用法を問う設問。正答率はきわめて高かった。選択肢にサ変活用動詞と複合して活用語となりうる語とそうでない語を交じえたことは、この設問を多分に平易に過ぎるものとしたと思われる。

問2　文をもって空欄を補充するもので、問題文の論理の展開や構成をいかに読解しえているかを見る設問である。ア・イともに正答率がかなり低かったのは一つには問題文自体が整然と論理的に進展する体裁をとっていない点に由来するか。随筆的な性格の文章を問題文として選ぶ場合の設問の方法については工夫を要することが反省される。

問3・問4　ともに空欄を補充するもので、文脈に即した読解力を見る設問。平易に過ぎるかとの懸念もあったが、ともども正答率はほぼ期待どおりであった。

問5　問題文中から抜き出した一節のもとの位置を推定させる設問。正答率はきわめて低かった。これが解答のためには、問題文の各段落間の論理的・心理的な脈絡についての正確な読解が必要となるであろう。やや難問であったか。

問6　問題文の各段落の要点をいかに把握しえているかを見る設問であるが、問2の設問と内容的に相重なる点があり、適切を欠くとの批判は甘受すべきものである。この種の不注意は今後避けなければならない。ただし正答率は問2の場合に比してきわめて高かった。

問題Ⅲ　問題文は夏目漱石の小説『彼岸過迄』の一節を採用した。文学作品は高等学校の国語科の教材として重んじられているばかりでなく、一般社会人の読書生活においても大きな位置を占めるものであるだけに、出題にあたっても重視すべきであると考えた。

問1　文学作品における重要な要素である比喩的表現（ここでは直喩）についての設問であるが、多岐にわたる誤答が多く、正答率はきわめて低かった。二つの誤答（②⑤）の数がそれぞれ正答数を上まわっている。この設問については一部にはきびしい批判もあり、文学作品の読解上どれだけ大事であるのかとする疑問も寄せられた。比喩的表現が登場人物の心情や形姿の具象的表現の一翼を担うものであるならば、こうした細部に注意することも必要と考えるが、この設問自体の適否、および選択肢の作り方の適否については検討の余地があったことを反省させられる。

問2　空欄の会話のことばを補充するものであるが、正答率がかなり低く、一つの誤答（③）の数が、正答数を上まわったことは選択肢の作り方になお一工夫あるべきであったと反省される。

問3　登場人物の関係がよく理解されているかどうかを見る設問。文脈のなかで心情や動作の必然性を理解することが必要である。正答率はほぼ期待どおりであった。

問4　ある場面を構成する文を整序させる設問であり、これも前後の脈絡のなかで動作や心情の必然性・真実性を理解しえているかどうかを見ようとした。正答率はかなり高かったが、小説の読解・鑑賞の本筋からは離れた無理な設問であるとの批判も寄せられた。

問5　空欄を補充させる語句を問題文中の後出の語句のなかから選ばせるものであり、場面の推移

のある時点における登場人物の動作・状態を表すべくどの語句が表現上適切かを考えさせようとする設問。正答率は高かったが、この設問のねらいについてはきびしい批判も寄せられた。なお検討の余地のあったことを反省させられる。

問6　鑑賞力を見る設問で「あどけなさ」の語感に即して判断すれば解答は容易であろう。正答率はほぼ期待どおりであった。なおこの種の設問には正解を絶対唯一としがたい点のあることもやむをえないことであろう。正解に準ずる解答にも配点が考慮されてある。

問題Ⅳ　問題文として『大鏡』の一節を選んだが、「古典Ⅰ甲」の学習程度を見るのが眼目ゆえ設問の平易であることを心がけた。

問1　基本的な語彙の意味の理解を見ようとした。正答率はほぼ期待どおりであった。

問2　これも基本的語彙の意味の理解を見るとともに、登場人物の行為を文脈に即して把握しえているかどうかを見る設問である。多岐にわたる誤答が多く正答率はかなり低かった。

問3・問4　それぞれ文脈に即した読解力を見る設問。正答率はほぼ期待どおりであった。

問5　基本的語彙の意味の理解を見るものであり、文脈の正確な理解なくしては正解は得られない設問である。正答率はきわめて低かった。

問6　問題文の内容の読解力に絡めて文法の知識をも見る設問。正答率はきわめて低く二つの誤答（②⑤）の数がそれぞれ正答数を上まわった。選択肢の作り方にやや適切を欠く点のあったことが反省される。

問7　問題文全体の理解度を見るものである。正答率はほぼ期待どおりであったが、問4の設問と相重なる面があるという指摘があり、この種の不注意については反省すべきである。

問題Ⅴ　問題文は唐の太宗と李靖との対話を収録した『李衛公問対』によった。内容は有名な「彼を知り己を知らば、百戦して殆からず」（『孫子』）という考えを敷衍したもので、たんなる兵法・戦術に限らず広く人生・社会の問題にもかかわりあるものとして読むことができると思われる。問題文は「古典Ⅰ甲」の学習範囲としてはやや高度かとも思われるが、選択肢の作り方を工夫することによりできるだけ難しさを解消するよう努めた。

問1　「一」という語についての理解を見る設問。正答率はほぼ期待どおりであった。

問2　反語の理解および「講」という字の意味についての設問。正答率は低く、一つの誤答（③）が正答の数を上まわっている。基礎的な学力の不足が感じられる。

問3　二つの対（つい）をなす概念を設定し、以下それぞれを展開していくという、古典・中国語の典型的な形式についての知識を見る設問。後出の「夫（それ）」以下に着目すれば、解答は容易。

正答率はやや低かった。

問4　文意の理解と訓読の知識とを絡めて見る設問。正答率に低かった。

問5　指示語「彼」の理解を見る設問。正答率は低かった。

問6　漢文、訓読の基礎的な知識を見る説明。正答率はほぼ期待どおりであった。

問7　問題文全体の総括的把握を見る設問。正答率はきわめて低かった。一つの誤答（②）数が正答数を上まわっている。前提となる議論と結論とを正確に把握することが難しかったものと思われる。

3　まとめ—今後留意すべき問題点

「現代国語」はそれぞれ性格を異にする3種の問題文を用いた。この問題文選定の仕方については一般に賛成意見が多く今後も踏襲されるべきであろうと考えるが、合計140点という配点であるために、かなり多くの設問数が必要となる。そのために今回は設問のための設問を無理に作成したという嫌いがなきにしもあらずであったことが反省される。また空欄補充式の設問が多すぎるとの批判も寄せられているが、その点も今後十分に留意すべき点であろう。本テストの方式においては空欄を補充させる設問を避けることはできないにしても、問題文を一読した際に文脈の展開や要旨の把握を著しく阻害することのない程度にとどめる必要があるであろう。なお数多くの適切な設問を作成するためにはある程度長文の問題文が必要であるが、しかしながら限られた時間内での読解が無理な、あまりに長大な文章も問題文としては不適であろう。今後の工夫を要するところである。

小説の文章を問題文として選定するに際しては、作品の一部分を用いるために、作品全体の主題や骨骼、登場人物の性格やその人生の推移など作品の本質的な問題とは必ずしもかかわりを持たない場面やあるまとまりのある部分を採用することもあるのはやむをえないことであろう。また文学的表現の機微について読解力・鑑賞力を見る設問を作ることも必要であるが、しかしその反面小説読解の本質から逸脱するような設問となることは避けねばなるまい。これは問題文の選定が適切であるかどうかにかかわる問題であろう。

「古典（古文・漢文）」は「古典Ⅰ甲」の学習程度・範囲を考慮すればかなり平易な出題を心がけなければならないと考えるが、しかしながら全体的にみて、受験生の基礎的な学力の不足が感じられた。その点は昨年度の実地試験の報告書にもとくに指摘されていたことである。古文・漢文とも、やや難解と思われる設問の正答率が一様にきわめて低かったことにかんがみ、受験者数が格段に増加する、来年度の本テストでは、出題にあたって何程かの配慮が必要ではないだろうか。

さて今回の試行テストの試験問題については、昨年度まで行われてきた実地試験の成果を踏まえた前進が見られることを評価する意見とともに、不足・不備を指摘する多くの適切な批判的意見も寄せられた。ともども服膺して今後の出題にあたり大いに参考しなければならないと考える。

(2) 社　　会

ア 倫　理・社　会

(ア) 各大学の意見

「倫理・社会」の試験問題について、2国立大学から意見が提出された。

ア　苦心のあとがみられ、よい問題である。(1)

イ　問題文中の下線部の位置を指示する場合、倫理・社会にあっては数字、政治・経済にあっては記号で指示しているが、社会全般として統一的表示を行った方がよりベターであるように思われる。(1)

(イ) 共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（倫理・社会）

1　試験問題の構成と内容等について

(1)　試験問題の構成

ア　「現代と人間」（「現代社会と人間関係」及び「青年と人間形成」）並びに「人生観・世界観」（「思想の源流」、「現代と思想」及び「日本の思想」）の各分野にわたって出題され、全体的に概ねバランスがとれていて適当であると考える。

イ　なお、次の諸点については配慮されたい。

(ア)　「人生観・世界観」の内容のうち、「現代思想」をもっと多く（1つの主題として）取り上げること。

(イ)　「東洋思想」についても出題すること。

(ウ)　「日本の思想」について、鎌倉仏教や江戸時代の儒学、国学なども取り上げること。

(エ)　「現代と人間」に対する「人生観・世界観」の出題及び配点の比率は、34対66となっていて、概ね適当であると考える。高校現場の授業実態（時間配分等）からして、今後とも30対70の程度の割合で出題すること。

(2)　試験問題の内容

ア　全般的に難解なものはなく、概して素直な内容である。

イ　問題「Ⅰ」について

今後は、さらに、現代社会に生きる青年としての人間形成の課題、ないしは、その自覚に関する問題についても出題することが望まれる。

ウ　問題「Ⅱ」について

現代社会の特質についての妥当な問題であると考える。特に**問2**は論理的文章の読解力をためすものとして適切である。

なお、今後はさらに、現代社会における人間のあり方や人間尊重の現代的課題などについても出題されたい。

エ　問題「Ⅲ」について

(ア)　古代から近代までの思想について、ひと通り出題されているのはよい。

(イ)　思想家の著作の一節を取り上げるなど、いろいろな角度からの問いかけを試みている点がよい。

(ウ)　特に、**問2**、**問3**、**問4**の設問方式はよく、思想の意味内容をは握しているかどうかをためす点で生きた問題であると考える。

(エ)　次の諸点は細か過ぎて、不適当な出題であると考える。

○　19 ヒュームの思想、

○　**問1**の選択肢④プロティノス

○　**問5**のアウグスティヌスとトマス＝アクィナスの比較

○　**問6**の選択肢⑤エポケー

(オ)　**問3**は、「～なぜ懐疑論になるのか」と問うのでなく、「この言葉に表現される思想は、どのようなことを主張しようとしているか」と問う方が、ここでは望ましいと考える。

(カ)　**問4**の選択肢の「～無条件に善である」は、不要の語であり、「～義務の念から自主的に行為しようとする意志」とするのがよいと考える。けだし、問題文にある語句（善なる意志）と同じ語句が使われているため、単なる連想によって正解が得られやすいからである。

オ　問題「Ⅳ」について

代表的な先哲の思想内容について、基礎的・基本的なものの理解力をためす問題であり、素直でよい設問である。

カ　問題「Ⅴ」について

能や茶道の問題が文化史的に扱われており、倫・社の問題としては、全体を通じて最も不適当な問題であると考える。

なお、これらの一部に触れるのはよいが、主題として大きく取り上げることに問題があると思われる。

キ　問題「Ⅵ」について

明治期の思想史を扱った問題であるが、知識偏重の傾向が強い。とりわけ、西郷隆盛、海老名弾正、小崎弘道、楚囚之詩などは、一般に高校の倫・社では取り上げないものであり、不適当である。

2　試験問題の範囲と程度、設問数等について

(1)　試験問題の範囲と程度

ア　問題「Ⅲ」の 19 （ヒューム）の出題のように、どこかの教科書が扱っているからというのではなく、多くの教科書が共通して扱っている思想家や思想内容について、その核心的問題を深く問うことが望まれる。高校現場の倫・社指導をゆがめないためにも、むやみに人名や語句についての知識量をためすような出題は避けてほしい。

イ　上の観点から、次の諸点には問題があると思われる。

(ア)　問題「Ⅴ」は、倫・社の目標から逸脱して、むしろ文化史を扱った問題であり、日本史の選択者に有利な出題となっている。

(イ)　問題「Ⅵ」のうち、西郷隆盛の思想などは細か過ぎる。こうした出題は、学校現場や生徒をして日本思想史の知識中心の学習を促す傾向がある。

(2)　試験問題の設問数等

概ね適切であると考える。

3　試験問題の出題方法について

(1)　試験時間

概ね適当であると考える。

(2)　配　　点

概ね妥当であるが、例えば、問題「Ⅱ」については 17 （文章に標題をつける問題）などには大きな配点をしてもよいと考える。

(3) 問題文の表現

概ね適切であるが、なお、次の諸点について配慮されたい。

ア　問題「Ⅲ」のディルタイの学説の引用は仰々しく、一見むずかしそうに見せるのはよくない。

イ　記憶力中心のテストとならないためにも、一般に選択肢として掲げる言葉は単なる語句よりも文章体とすることが望ましい。

(4) 解答方法

例えば、思想家の思想内容などについて、**誤りを訂正させるような出題**も工夫できると思われる。

4　ま と め

マークシート方式で倫・社の出題をし、しかも一方で高校教育正常化の視点から難問・奇問を排しつつ、他方で選抜試験として多数の受験者に優劣の差をつけうるよう配慮された妥当な問題を毎年新たに作成することは至難のわざであると考える。その意味において、今回の試行テストの試験問題は、よくこれ程までに工夫されたものだとの高い評価の声も聞かれる。

しかしながら、国立大学の試験問題のあり方は、高校現場の教育のあり方にも決定的な影響を及ぼすものであるだけに、その内容や範囲及び程度等については格段の配慮が必要とされる。とりわけ、高校学習指導要領やこれにもとづいて書かれた教科書に即し、特に倫・社については記憶力よりも思考力や判断力に重点をおいた出題をすべきであると考える。

なお、共通第１次試験で倫・社を一試験科目として取り上げ、マークシート方式で出題される点に多少の抵抗もあるが、高校の教育現場で倫・社が軽視されないためにも、今後ともこれを共通１次試験の一科目として取り上げられるよう希望する。

(ウ)　全国高等学校倫理・社会研究会からの意見

1　倫理・社会試験問題についての所感

倫・社の科目としてのねらいが考慮されているとは思えない。

網羅的すぎる、細かな知識を要求し過ぎる。⟶教材を精選する現場の授業展開を妨害する。

○　実際の授業で扱わなかった項目⟶解答番号で列挙してみる。(その中、不適切な出題と思われるもの○印)　9．(用語を教えなかった)

⑲. ㉖. 28. 30. 32. ㉝. ㉞. ㉟. ㊱. ㊲. ㊳. ㊶. ㊷. ㊸.
㊹. 45. 46. ㊼. 48. 49. ㊿.

○　各　　論　(前記○印についての所感)

26～キリスト教はイエスだけではなぜいけないのか？

19～経験論はベーコンだけではなぜいけないのか？

33～38……倫・社のねらいとどうかかわるのか？

41～48……余りに網羅的。

50……漱石の作品名を知っていれば答えられるが、それがねらいか？

○　要　　望

○　倫・社の教科書全部をみて、共通に扱っている用語や事項に限って出題してもらいたい。——一、二の教科書だけで扱っているものは出題するな！

○　「考え方」を問う出題を。——余りに知識中心的。

○　「七つの考え方」に即した出題を。

2　倫理・社会試験問題についての感想

○　思想の四つの源流（原始仏教、ヘブライズム、ヘレニズム、古代中国の思想）のうち、原始仏教と古代中国の思想（例えば孔子、孟子の思想）が全く出題されていないことはおかしいのではないか。

何故ならば、日本人の思想の根底に流れている原始仏教と古代中国の思想（儒教など）は絶対に無視出来ないと思う。この二の思想を抜いて、日本の文化の伝統である能や茶道の問題を出題することは、いささか飛躍しているのではないか。

○　ⅠとⅡとの問題は、現代社会の特質や青年期の問題を扱っていて、穏当である。

○　ⅢとⅣとの問題は、ヘレニズムとヘブライズムとの二つの流れが近・現代のヨーロッパの思想の形成に大きな影響を及ぼしている点を問うている点で極めていい問題です。

○　Ⅴの問題は、日本文化の伝統を問うている点でいい問題ですが、客観性を問う点で、もっと面白くて、基本的な問題、例えば古代中国の思想（儒教、朱子学）が日本の江戸時代にどう受容され展開されたかを問う問題の方がもっといいのではないか。

○　Ⅳの問題は、西洋の近代思想と日本の伝統的思想との調和を問うている点でいい問題です。

(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（倫理・社会）

1 各問題の出題意図

倫理・社会の問題作成にさいしては、まず、倫理と社会の出題配分比を考慮し、高校教科書の編纂割合にしたがって、青年心理1問、社会1問、東西倫理思想関係4問を出題した。

出題の全体方針としては、共通第1次試験の主旨をふまえ、高校の学習範囲内で、基本的と思われる問題をとりあげ、青年心理、社会、倫理に関する重要な考え方、思想等についての正確な知識とともに生徒の理解力、判断力、思考力をもためすことを目的とした。各問題の部分的な点については、なお反省検討の余地もあるが、上述の全体方針、目的はほぼ達成できたように思われる。

次に各問題の意図を述べる。

問Ⅰは、青年期の特質についての問題である。青年期の発達過程において、青年文化が、どのような機能を果しているかを考えさせることによって、人生における青年期の意義や心理的特質についての理解度を見ようとしたものである。問題作成にあたっては、平素から自己の成長や生き方について考える生徒なら容易に解くことができるように配慮した。

問Ⅱは、(1)人間にとっての集団の意味、(2) 近代以前と以後の社会で、人間と集団のかわりにどのような変化があったのか、(3) さらに、今日の社会における集団の巨大化と人間、といった基本的な問題が把握できているかどうかを問うことにした。

語句を選択する形式なので、重要な用語や概念について、正確に理解しているかどうかも問題のポイントとなる。

問Ⅲは、西洋倫理思想のほぼ全域にわたって、基本的な知識を問い、あわせて理解力や思考力をもためす問題である。

個々の設問内容に比べて、やや大がかりな文章を前におき、時代を超えた世界観の類型化という思想史へのアプローチがあることを、ディルタイの世界観学を例として示してみた。もっとも、ディルタイの世界観学そのものについては、高校の授業では十分にふれることができないと思われるので、内容のあるやや長い文章を読みとおす作業だけを課するにとどめ、このことに関する直接的な設問はさけた。ただし、この文章の内容は、倫理・社会を学んだ生徒に対して、思想史と関わる際の応用の一例ともなると考えられ、その意味での啓蒙的な含みをももたせたつもりである。

問Ⅳは、西洋近代、現代の先哲の思想の中で、現代青年の倫理思想形成と深い関わりをもつと思われるもの5思想、すなわち、理性の力によって政治社会の改革を意図する18紀の啓蒙思想、プロ

テスタントの職業倫理、自然科学的知識の一基本的性格、自由と責任を強調する実存主義、自主的思考力を養う方法的懐疑の精神、の5思想を選んで述べ、それぞれの思想の理解力、および思想史についての正確な知識をためした。

問Ⅴは、倫理的精神が、文化、芸術、歴史の領域に深く滲透していることをふまえて、総合的、学際的ともいうべき視野にたち、能、茶道などの芸術、文化と倫理的精神の接点、ふれあいの理解度をためす問題である。

問Ⅵは、東洋思想の伝統を受けつぎつつ、新たに西洋思想の移植を迎えた明治期における伝統と近代化の関係をあつかい、個々の思想についての正確な知識を問うものである。

2 解答結果

（以下の数字は100点満点に換算した数字を示す）。最高点96点、最低0点、平均点49.72点を示している倫理・社会の成績分布から次の点が今後の問題点となる。

(1) **問Ⅰ**71点強、**問Ⅱ**62点弱、**問Ⅲ**40点、**問Ⅳ**38点強、**問Ⅴ**58点強、**問Ⅵ**38点強、の結果を見ると、問題別によって難易の差があること。(2) 全体的にみて、45点～52点までの6％を頂点に、最高点96点、最低点0点まで、ほぼ二等辺三角形の形をなして分布されている。平均点49.72点は全体的に他の科目に比べて、やや難しかったことが読みとれる。

次に各問の解答結果について述べる。

問Ⅰは平均点71.12点であり、やや易しかったといえる。しかし、この問題は記憶力や心理学的な知識力を見るのではなく、青年期の意義や生き方の基本的理解力を問う問題であるので、結果はおよそ予想された範囲内に落着いたとみなすことができる。小問ごとにみると、**問3**は常識的に判断できるため易しすぎたが、他の問はおおむね適切であつたと思われる。

問Ⅱは、平均点や標準偏差、さらに、この質問に対しての高校側の意見などを合わせて考えてみても、難易度に関しては適当であったと考えられる。

問Ⅲは、正解率40％である。それほどの難問とも思われないが、問題文の量が多すぎたせいか、正解率は他の問題に比べて低かった。

問(1)における正解率はルソーが最も高く、ヒュームが最低であった。両者の思想の重要さに甲乙はつけがたいのであるが、教科書においての両者の取りあつかいかたに軽重の差があるからには、出題にさいして注意を要することであろう。

問(2)は、聖書の中の四つの句文と功利主義の精神との対応についての問であるが、正解率の高い

ことをみると、妥当な問題であったようである。

問Ⅲは全体として、総合的、多角的な問題として善く評価されているので、今後の問題作成の一例として参考に価すると思われる。ただし、上記のヒューム、およびアウグスティヌス、トマス＝アクィナス、プロティノスなどの人名、エポケー（判断を中止する態度）の語句は、教科書における取あつかいを参照にして検討すべきものであると思われる。

問Ⅳは、基本的な思想と思想家を問う素直な問題と評価されるのに反して、正解率は最も低い点が問題となるであろう。選択肢が10という数、教科書における思想の重要さの比重のおき方なども問題であろうし、この点を問題作成にさいして考慮すべき点ともなるであろう。

問Ⅴは、問題としては、文化史に偏する、倫理の問題から逸脱している、などと批判されているが、出題意図で述べた文化と倫理のふれあいを問う総合的な面は受験生にとってさほどの難問でもないらしく、58点と他の問に比べて高かつた。なお、上述の批判は考慮されるべきであろう。

問Ⅵは、明治期における伝統と近代化の関係を問うものとして、問題の主旨には賛成の意見もあるが、人名、語句の出題に一考を要するものがあり、そのために、正解率が最低点となってあらわれたことは反省すべき点である。

3　出題範囲についての注意点

(1)　はじめに述べたように、青年心理、社会、倫理の配分比はほぼ妥当であると思われる。ただし、倫理については西洋の方は源流から現代にいたるまで、総合的かつ多様性を含んでいるが、東洋については、日本に関するものが2問であったのに比べて、インド・中国思想が皆無であったことは反省しなくてはならない。

(2)　日本史、世界史、政治・経済など社会科の他の領域と倫理・社会の密接な関係からいって、あまりにも形式的に分割しすぎて、各領域間のふれあいを一切禁ずることも不可能であるし、それかといって、各領域間の過度の重複、焦点のあいまいさも避けなくてはならない。この点に倫理・社会の問題作成のもっとも配慮すべき問題があると思われる。

4　問題についての反響、意見

(1)　倫理思想史に関して、思想内容、人名、語句の重要さの比重のおき方において、出題者と教科書の間に若干のずれが認められる問題もあつたが、教科書の現状からいって、教科書を基準にしてこのずれを無くすことが、当面の課題となるであろう。しかし、今後の課題としては、出題の

啓蒙的意図も考慮して、教科書編纂の方針に検討を要する点もあると思われる。

(2)　客観的で正確な知識を学ぶことは重要であり、この面をテストすることは、マークシート方式の上から比較的容易ではあるが、この面のテストが過度となつて、断片的知識の単なる暗記、つめこみ学習、当てずっぽうの結果をまねくことは好ましくない。倫理・社会の学習においては、総合的な理解力、判断力、思考力をも養うことも重要である。しかし、以上の両面を総合してテストする問題を作成することは、マークシート方式上、きわめて難しく、多大の工夫を要するもので、今後の重要な課題となるであろう。

イ　政　治・経　済

(ア)　各大学の意見

政治・経済の試験問題について、２国立大学から意見が提出された。

ア．苦心のあとがみられ、よい問題である。　(1)

イ．問題文中の下線部の位置を指示する場合、倫理・社会にあっては数字、政治・経済にあっては記号で指示しているが、社会全般として統一的表示を行った方がよりベターであるように思われる。　(1)

(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（政治・経済）

1　試験問題の構成と内容について

(1)　構　成

今回の試行テストは、全般的にみて、分野ごとに多少の違いがあるが、各分野を網羅して出題されており、これは共通第１次学力試験の主たる目的（高等学校における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を判定すること）を考慮して適切である。また、従来のピラミッドの頂上から少数の課題を選び、じっくり考えさせるテスト（日本型）からピラミッドの底辺から多数の課題をまんべんなく選び出題するテスト（アメリカ型）の傾向がうかがえることも、共通第１次学力試験の目的から考えて好ましいことと思う。ただし、「日本の政治」、「日本の経済と国民福祉」、「国際関係と国際政治」の各分野は内容全般にわたって出題されていない点を配慮されるべきではないだろうか。例えば、政治の分野では、「民主政治の基本原理」に関した問題が毎年必ず出題され、これに、「日本国憲法と民主政治」と「日本の政治の現状と課題」とが内容的に関連して出題されているが、「日本国憲法と民主政治」の領域の出題が少ない。経済の分野では、「国際経済の動向と日本経済」を中心として、「経済活動の進展と現代経済の動き」や「日本経済の現状と課題」が出題頻度の高い領域で、「国民生活の向上と福祉の実現」の領域の出題が少ない。今回の試行テストは、「日本の経済と国民福祉」の分野の中で、公害問題、労働関係、社会保障関係の出題は全くみられず、国際関係や国際経済の動向に関する比重が大きくなり、時事問題に関する設問の割合が増大したことに特徴がある。

このように、各分野内で出題される主題が限定されると共に、その内容を深く掘り下げて設問するという傾向がうかがえるが、共通第１次学力試験の目的からも、全分野、全領域にわたって出題するように配慮して欲しい。

(2)　内　容

高等学校学習指導要領に準拠し、高等学校教育の正常な発展の障害にならないよう十分留意して出題されており、全般的にみて適切な問題である。しかし、個々の問題について検討してみると、いろいろ問題点がある。その要点を問題ごとに指摘すると次の通りである。

問題Ⅰ　昭和50年に出題された基本的人権の問題を一部改変して出題されたもので、基本的人権の発展を歴史的な流れの中で体系的に理解しているかを問う基本的な問題で、共通第１次学力試験の目的からみて望ましい問題例といえよう。欲をいえば、実際的、事実的なことを問うような出題がもう少し考慮されても良いのではないか。例えば、公共の福祉という観点から、基本的人権をとらえることを試みる出題等はどうであろうか。

問題Ⅱ　議会制民主主義と政党政治の発展とわが国の現実の問題についての基礎的知識を判断する出題であるが、やや難問である。例えば、

ア　設問 13 ～ 15 等は、学習上触れる部分ではあっても、それほど詳しく「政治・経済」では学習していないのが現状である。

イ　設問 11 の〔E・バーク〕、設問 14 の〔名望家組織〕、設問 21 の〔議員政党〕等は、一部の教科書にのみ記述されている用語であって、高校生の理解にとって難しすぎる。

問題Ⅲ　昭和48年に出題された問題を一部改変して出題されたもので、コーリン・クラークの産業分類法をとおして、今日の産業構造の高度化と社会変化についての基本的事項を、観念的にならず、実証的に現象を理解しているかどうかを把握するために、生きた統計を読みとらせることによって試そうとしたもので、適切な問題である。しかも、新しい図表により、現代的観点からとらえさせることを要求している点については高く評価したい。しかし、設問を検討してみると、設問 27、設問 41 等のように、解答の際にいたずらに判定の基準に迷うことのないように、受験者の学習能力を的確で公平に判定できるよう生徒の理解力に適合したものを精選して出題するよう配慮して欲しい点がある。

問題Ⅳ　発展途上国の政治的・経済的諸問題を考える問題である。これは、時事問題に属するもので、国際的視野からものを見ることを要求している。しかも、二分野にまたがる設問で、相互の関連性を重視した総合的思考力と判断力を試す適切な問題である。しかし、設問を検討してみると、一部の教科書にのみ記述されている用語等が出題されていて、高校生の理解にとって難しすぎる点がある。例えば、

ア　設問 55 の社会的剰余は高校生になじまない用語であり、この説明文から〔さらに一部分しか生産の拡大にふり向けない〕を選択することは容易でない。

イ　「政治・経済」では、発展途上諸国の問題は学習するけれども、設問 61 の〔新国際通貨秩序をつくる作業〕への参加と援助の実質的拡大の要求決議までは詳しく学習していないのが現状である。

2　試験問題の出題範囲と程度、設問数等について

(1)　出題範囲

今回の試行テストは、前述したように全般的にみて、分野ごとに多少の違いがあるが、各分野を網羅して出題されており適切と思う。しかし、次のような点に配慮して欲しい。

ア　現行の高等学校学習指導要領では、「政治・経済」の標準単位は2単位であるため思い切って指導内容を精選しても時間不足のため、「国際関係と国際政治」の分野については、学習内容を深めた効果的な指導ができないのが現状である。

イ　現行の高等学校学習指導要領では、「政治・経済」の三分野の学習順序は規定されていなくても、大部分の学校では、学習指導要領で示された内容に従って指導をしているのが実状であるので、実施期日より考慮して、「国際関係と国際政治」の分野での深く掘り下げた設問は、出題しないように配慮するか、または、出題しないようにして欲しい。

(2)　程　　度

今回の試行テストは、高等学校学習指導要領に準拠したものであり、アンケート調査結果からみても、全般的に適切な問題である。しかし、次のような点について配慮して欲しい。

ア　平　均　点

今回の試行テストの社会科の平均点をみると、ほぼ50～60点ラインで集まっていて妥当である。しかし、今後も科目間の差を大きくしないために、問題作成の全過程を通じて、科目間の連絡、調整をはかることが不可欠である。横の連絡を密にとることができる場合

は、各問題間に難易をつけることが可能であるが、できない場合は、問題ごとに設問のなかで難易をつける必要がある。

イ　標準偏差値

共通第1次学力試験の目的を考えた場合、また、科目の特色を考えた場合も標準偏差値は必要以上に大きくしない方が良いが、しかし、今回の試行テストでは、社会科の他科目と比較した場合、11.63の最低でやや小さすぎるのではなかろうか。

ウ　成績とアンケート調査結果

今回の試行テストでは、「政治・経済」の成績上位者は、社会科の他科目と比較した場合最低である。すなわち、70点以上は、最高の「地理A」で27%もあるのに、「政治・経済」では5%しかいない。また、アンケート調査結果「易しい」と答えた者が19%もあるのに、成績70点以上は5%しかなく、成績とアンケート調査結果を比較した場合、社会の科目の中でその差が一番大きい。

(3)　設　問　数

今回の試行テストは、4問題で実施された。その内容から分類すると、問題Ⅰが設問10、問題Ⅱが設問14、問題Ⅲが設問19、問題Ⅳが設問24で、合計67である。この設問数は、社会科の中で一番多く、科目間で調整が必要である。基準はテスト時間（60分）を考慮した場合、各問題の難易度を勘案して60以下が妥当と思う。

3　試験問題の出題方法（試験時間、配点、問題文の表現、解答方法）等について

(1)　試験時間

ア　今回の試行テストにおいては、政治的分野で2題、経済的分野で1題、国際関係と国際政治の分野で1題、計4題が出題された。解答時間60分に対して設問67は、前述したようにやや多いという感じもあるが、それぞれの問題を検討してみると、この程度のものであれば所定の時間内で全問題が解けると思う。

イ　アンケートの結果から見ても解答時間60分は適切であり、4題（設問60）が理想の出題数と思う。

(2)　配　　点

ア　問題Ⅰは、〔設問10〕で配点25点、問題Ⅱは、〔設問14〕で配点25点、問題Ⅲは、〔設問19〕で配点25、問題Ⅳは、〔設問24〕で配点25となっている。

「倫理・社会」、「日本史」が〔設問1〕に対して、2点の配点であり、「世界史」が〔設問1〕に対して問題Ⅰ、Ⅱが各々2点、問題Ⅲ、Ⅳが1.5の配点で行なわれているようにみえる。

「政治・経済」については、問題Ⅰでは〔設問1〕に対して1.5の配点であるようにみえるが、問題Ⅱ、Ⅲ、Ⅳについては、設問数から考えて配点基準がはっきりしないという問題がある。

イ　配点というのは、〔設問1〕に対して〔2点〕または〔1.5〕という基準で行なうのが妥当と思われる。

ウ　受験生が自己採点をしやすいように、こまかい採点基準を示されるように配慮されることが必要である。

エ　受験生が自分の位置を知るためには、教科別と総合点の得点分布表を公表されることが必要である。

(3)　問題文の表現

「政治・経済」の問題文には、長文のものがある。その中に多角的で内容を深く掘り下げて設問するという特徴がある。受験生は、問題を通して本文の意図、内容を読みとり、正確に答えることが要求される。問題文の表現について検討してみた結果、この程度のものであれば、適当と思われるが、以下問題点を指摘してみると次のようである。

ア　受験生のアンケート結果から見ると、他教科よりわかりやすいと答えたものが少ない。従って文章表現については十分に配慮して欲しい。

イ　問題ⅣのBの中には、受験生には不慣れな〔十全〕という用語が使用されているが適切な用語を用いることが必要である。

(4)　解答方法

ア　解答の記入については、表面に1科目を記入し、裏面に他教科を記入する方法がとられているが、1科目1枚にするとか、科目明記をするとかして記入上、誤りの起きないよう配慮が必要である。

イ　問題Ⅲ、問題Ⅳには、グループ採点がなされている。その上設問 26 ～設問 32 には、二者択一が採用されている。選択肢としては不適切と思う。

ウ　設問 1 でみられるように、文章の前後から考えて、〔誤っているものを一つ選べ〕という設問方法は、不適切と思う。十分な配慮が必要である。

(ウ　教科専門委員会問題作成部会報告書（政治・経済）

1　問題の出題意図ならびに出題姿勢

在来のわが国の大学入試の出題をみると、いま受験生の学力構造なり高校の教科内容を富士山構造に喩えると、その三千米以上の頂上に近い高嶺の峻しい部分について、少数の精選された課題を厳選し、じっくり考えさせたうえで回答を求めるといったタイプのものが多かった。「山の高さを調べれば、裾野の広さも推られる」という考え方がそこにはある。これに対し、米国などの同ケースの出題では、逆に富士山構造の裾野に当たる部分から、多数の平凡な問題を万遍なく沢山えらんで答えさせようとしている。それは「裾野の広さを調べれば、そのうえに高い山を築くことができるかどうかが判る」との考え方にもとづいている。

したがって伝統的な日本型入試では、試験問題の構成は、少数の、長文な、難しい、総合的な出題となるのに対して、米国型では、多数の、短文の、易しい、部分ごとの出題がなされる。

両者は一長一短だが、伝統的な日本型出題では、ひとたび使用した問題は、良い内容のものでも同趣旨のものは再度使えないとか、「総合のための範囲を高校教育課程内から外れることのないように」と出題者が神経を使うため問題作成がきわめて困難で限りがあるとか、の難点を伴う。これに対して米国型の入試では、基礎的な問題を広い範囲で多面的に出すので、マークシート方式には取りわけ馴染みやすいばかりか、以上のような心配は概ね避けられる。さらに或る種の問題が特定の受験生にだけ有利不利に働らく危険なども少くなる。(例えば、農業問題を訊ねるとすると、都市部の受験生に不利となる、などの危惧が少くなる。) また身障受験者などにも、複雑な日本型の出題だと、指示や照合ルールが徒らに複雑化するため、技術上の不利を伴うことなどが生ずる。

さて共通1次試験のように、受験生の各科目についての達成度を主として見る試験では、どちらかと言えば伝統的な日本型出題よりも、米国型のほうがよいように思われるし、かつマークシート方式もそれによく適っていると考えられるが、ただそのような出題形式や意義は、わが国の大学受験者の全体のあいだで、現状なお十分に理解されておらず、かつ馴染んでもいない。本部会としては、将来、出題を徐々に上述の日本型から米国型へと移行したほうがよいのではないかと考えているが、何事も急激な変化は、受験界を不安や混乱におとしいれることをも考慮し、若干時

間をかけて移行の方向を探るべきであるとの考え方に立って今回の出題を取りあえず行った。以上が本部会の今回での出題姿勢である。(次年度以降、共通1次試験が連年施行されるようになるに伴い、上述の移行の適否は、明年以降の本部会で慎重に検討されるべきものであるが、ただ「社会」各教科なかでもわが「政・経」科目については、他の諸教科の場合とちがって、これを2次試験に課す国立大学の数が減少してゆくことが今後予想され、もしそうなるとすれば、「政・経」科目に関しては、本共通1次試験が、2次試験の機能(とくに選抜の機能)をも兼ねるべきことが、国立大学側において期待をされることになる可能性が高まるなど、状況は将来へむけてなお流動的で予想しがたいものがある。)以上の出題意図と姿勢ならびに見通しを持ちつつ、本部会は今回の出題選定を行った次第である。

ただ本年度試行テストでは、本部会がすでに（国大協における科目別研究専門委員会いらい）過去4年間にわたって実験的に作成した20題余りの問題のうち、昭和51年度の“問Ⅰ”と、昭和48年度の“問・標3”の問題とを、それぞれ今回テスト問題の“問Ⅰ”、“問Ⅲ”へ、それぞれ改訂の形で再活用することにした。つまり過去の問題を再登場させたのである。これは、昨年度までの作業がいずれも「実験」をその趣旨としていたのに対し、今年度はもはや「実験」の段階を終えて、本試験の試行（つまり本番のリハーサル）であることに鑑み、「実験」時代に模索したもののうち、形式、内容ともに本試験に使用して適当と思われる二題を、あえてこのさい再登用することで、過去の実験用全問題のうちのどの水準内容のものを、本部会が標準的なものと現状で判断しているかを、関係者に理解いただくことを、意図したものであった。

2　出題形式と解答評価

問題の出題形式については、上述の諸点とも関連して、将来なお工夫の余地が少くないが、今回は、これまでの国大協時代いらい、工夫を積んできた出題形式のうち、適切妥当と思われるものの幾つかを、ほぼ踏襲採用した。この点について、取りわけコメントを加えることは、このさいない。

ただし各問題ごとの解答評価（すなわち配点の考え方）について、次に若干の説明を加えておきたい。今回の出題は、大問がⅠ～Ⅳの四つから成っているが、いずれも均等に25点配点になっている。ところが例えば、今回の大問Ⅳなどは、解答番号欄の枠数が明らかに合計24個なため、受験者側からは「24個の欄に対して25点の配点とは、いったいどういうわけなのか」という類の質問が寄せられている。無理もない疑問ではあるが、本部会としては決して1個の番号欄ごとに

1点ずつを相等しいウエイトで配点するといった形式的なやり方を採用しているわけではない。番号欄のうち本質的基本的と思われるものには大きいウエイトの配点をするとか、やや難しいものには若干ウエイトを軽くするとか、さらに複数の番号欄をグループ化して配点する（例えば、2つの互いに関連しあった番号欄を合併して評点し、2つとも合えば3点、1つだけなら1点などのような配点をする。また2カ所で互いに矛盾した解答をした答案は、矛盾にそれなりの首尾一貫性があれば1点だけ配点する。など）とか、のような可成りキメの細かい配点ルールを考慮している。ただし今回の試行テストでは、作業全体がなお未習熟のため理想通りにはやれなかったが、来年度の本番以降の試験では、この点を一歩進めて上述の理想へ近づけることが本部会の仕事になると考える。

受験者の一部からは「各番号欄ごとの配点方法を細部まで公表するよう」との意見が出ている。この点に関し本部会は直接ここで意見を表明する立場にはない。ただ本部会として受験関係者各位（とくに高校教師各位）へは、このさい「各番号欄ごとの配点ウエイトや配点ルールが公表されていないまでも、もし高校教師各位の側で“この問題に関しては、こんな配点をすべきだ”というルールを銘々のお手許で十分よく練って考えて戴くとすれば、それは本部会が実際に行った配点のルールとそれほど大きく相異したものにはならないであろう」ということを申し上げておきたい。今回の場合、大問ⅠからⅣまでに対して、すべて同じウエイトの25点配点がしてあるということは、各大問が全て同じ重要度の問題として問われている趣旨を示すものと理解していただきたいのである。

3　出題意図と解答結果

今回の四つの問題の出題意図については、取りわけ附言を要しないであろう。各問題を一読されることで、関係者は本部会の出題意図をそれぞれ間違いなく読んで戴けると思う。とくに今回の四問は、いずれも高校における本科目のメイン・テーマのうちから、今日的視点にもとづいて選ばれたものばかりである。

ただ次のような問題がある。それはまず高校で現に使用されている「政・経」の教科書は、いずれも編集時点から可成りの年月を経ているため、統計資料等が古いとか、また問題意識なども必しも十分に今日的でないなどのうらみがあることに関する。（例えば、具体的に言うと、昭和40年代の前半に盛り上った公害問題などは詳細に取上げられているが、そののち全人類ならびにわが国民の関心を強く集めるようになってきた人口問題、資源問題、海洋問題、エネルギー問題

などは、どの教科書にもまだ含まれていない。）この種のギャップは、教科書の執筆から配布までに相当程度の時日を要することから、ある程度は止むをえないが、そのギャップは放置さるべきものではなく、高校教師各位が教育の現場で補っていただくことが望ましい。今回の出題意図には、教師各位のそのような現場努力を勧奨する本部会の意図が含まれている。国際的視野をふまえた問題に力を注いでいるのも、同じ趣旨によるものであるが、この点については、次の4でも触れる。

今回の試行テストの解答結果については、その点数分布から言って、「政・経」科目の場合は、予想された概ね理想に近いかたちを呈しており、本部会はその結果に一応満足している。「いま少し点数分布の標準偏差を大きくすべきだ」との意見もないではないが、偏差を単に機械的に拡大するためだけならば、問題中に、もう少し難しいものと、易しいものとを若干ずつ混ぜ込みさえすればよいので可能ではあるが、教育効果や教育現場への影響を考えて、そうすることが果してよいことなのかどうか、なお疑問がなくはない。そもそも「数学」や「物理」などの科目については、学問の性格上、受験生の達成度そのものに関して、0点と100点というふうに開きがありうるのに対し、「政・経」のような科目は、もともと国民常識を問うようなところがあるので、受験生の達成度そのものが“実態として”平均していると考えられる。（同じ「社会」教科のなかでさえ「歴史」や「地理」にくらべて、「政・経」や「倫・社」はそのような傾向があるとしても、むしろ当然である。）そういった実態のほうを無視して、点数分布の幅を各教科各科目ごとに無理に機械的に斉一化させるような試験問題を出すことは、可能ではあっても、他方においてさまざまな悪影響を生む（例えば、教育現場で不必要に詳しいことまで暗記させることをやるなど）のではないかと危惧するものであるが、これらの点に関しては、なお関係者各位の意見を広くあおぎたい。

また同じ「社会」五科目のうちでも、「日本史」や「世界史」に較べて、「倫・社」や「政・経」は、高校における授業充当時間数が異り、かつそれに伴って受験生の学習負担も科目ごとに公平を欠くことが生じてくる。この点についても本部会は深い関心を払って問題を作成しているが、そういった学習負担の公平、不公平さを、どう秤量したらよいかについても、関係者各位の意見をいただきたいものである。

4　出題範囲についての注意

「政・経」科目の内容は、文部省の指導要領では「日本の政治」「日本の経済と国民福祉」「国際

関係と国際政治」の三つの柱に分れ、高校教科書類もまた概ね、この三分野を、この順序で取扱っている。しかしこの順序は、あくまで記述上の便宜であり、「歴史」科目が上代、中世、近世、…の順で叙述教授されるとか、「数学」科目が1次方程式を終えて2次方程式へ進むのとかとは、まったく訳が違う。日本国内のことを先きに教え、あとで国際に及ぶのも一つの教授法だし、逆に国際や世界のことを説明してその枠で日本を扱うのも一つの教授法である。政治と経済との順もまた然り。しかし、いずれにせよ、上述の各分野はいずれも相互に有機的に関連しあっていることから、授業の場では、事あるごとに相互に分野を関連させあう教授工夫が望まれるのである。具体的にいうなら「日本の政治」を理解するには「国際関係」の枠や比較政治機構についての或る程度の認識は不可欠であり、また今日の資源問題についての理解については「国際政治」状況と「日本の経済」動向との視野関連を無視するわけにはいけない、というがごとくである。

取りわけ昨今は、わが国の「国内の政治・経済」の問題を扱うに当たっても、これをつねに国際世界とか人類全体とかいった次元、視野のなかに据えて考えることの必要が痛感され、しかも実はこの点こそが、これまでのわが国民全体につねにしばしば欠けた視点であったことに思いを致すならば、上述の指導要領の三つの柱を、ばらばらでなく、互いに有機的に関連づけて教授することの必要性は、このさい極めて大きく、いくら強調されてもよいものがあると見做されるのである。「日本の国民福祉」を考えるにしても、それだけに眼を向けて、現に世界の大部分をおおっている貧困に背をむけていることは、経済大国である日本の立場としては許されないものがあるであろう。

このように「国際」の柱は取りわけ今日的に重要であるにもかかわらず、他方高校教育の現場では、在来の法、経済学部の出身者の教師は多いが、国際関係論はもちろん、国際法、国際政治、国際経済などを専攻した教師は極めて少いことや、また大部分の教科書が、たまたま「国際」を巻末に置いていることのため、「国際」の視野や理解は、授業現場では時間不足などの言いわけのもとに、在来とかく等閑に扱われることになり勝ちである。（本部会が機会あるごとに徴したところでも、「国際」を苦手とする高校教師各位の声をしばしば聞く。序でに記しておくが、統計数字などに即して具体的に物事を眺める習慣を教えてゆくことも苦手な教師諸氏が多く、それらのことが学生の勉強姿勢にも反映している。）このような諸点を最も憂慮する本部会としては、国大協での実験段階いらい、国際的視野をふまえて考えるべき問題（国際に直接関する問題、という意味では必ずしもない）や、統計数字などの具体的データに即して物事を判断する問題を常に加え、学習や理解の仕方を望ましい方向へ誘導することを求めて現在に至ってきた次第である。

以上の説明で理解願えるように、共通１次における本科目の出題に当たって、本部会は、文部省の指導要領において示された三領域のすべてを、個々ばらばらなものとしてだけでなく、相互に密接に有機的に横断的に統合させたかたちで、これを出題範囲と見なし、受験生諸君の本科目への理解度や達成度を見てゆきたいと考えている。なお日刊新聞の「政・経」記事などについても、高校生の常識範囲において関心をよせて、「政・経」の時局的な常識は有していることを前提としている。また本試験は、毎年１月はじめの時点で実施されることから、その点を何らかの形で考慮に入れた出題を行うことについては、本部会はむろん十分に留意している。また、言うまでもないことだが、受験生が小学校、中学校の過程で学習したことの内容は、「社会」科の内容だけでなく、全て必要な予備知識と見なしている。例えば、「算数」で学習した統計やグラフの扱い方、「地理」で学習した地図の見方などは、その具体例である。

5　正解例について

入試センターから公式発表される、いわゆる“正解例”について、関係者の誤解を避ける意味で一言しておく。“正解例”とは、あくまで「当該番号欄についての満点を与えうる選択枝の一例」の意味である。したがって「学問上、厳密に言えば正しくない答であるが、高校生水準の選択としては妥当なもの」、「通説ではないが、有力な異説として受けいれられうるもの」、「近似の答ではあるが(真の正解なみに)満点を与えることにしてあるもの」もまたしばしば“正解例”と呼ばれる。

公表された“正解例”以外の選択枝を選んだ者にも当該番号欄についての満点（あるいは部分点）を与えることがあるが、逆に“正解例”の選択枝を選んだら必ず当該番号欄について満点が与えられうるというわけではない。（なぜなら、上の２で説明したように、複数の番号欄をグループ化して一括評点する場合があるからである。）

したがって例えば、本回試行テストの「政・経」科目の或る番号欄の場合などでは、例えば①と答えた者も、②と答えた者も高校レベルの答えとしては“正解”許容扱いをしている。ある新聞紙上、高校の一教師の方が「①と②との辯別は、われわれ教師にも難しい」と述べ、高校生には無理な難問だと評言しておられたが、本部会としては、教師に辯別できないものを受験者に辯別させるつもりは初めからなく、ただ①を③以下と辯別してくれさえすればよいので、近似解としての②は①なみに正解扱いをするという配点を予めしていたので、評言のような危惧は存在しなかったのである。総じて「５つの選択枝を挙げて、そのうちから最も適切なものを１つ選べ」

などという出題形式の場合、受験生はとかく「正解は１つしかないであろう；それ以外のものにマークしたら点を貰えないだろう」と考えがちであるが、出題者側としては５つの選択枝のうち２つを“正解”に充てていることもありうる（最も適切と思われるものが、観点や立場によって①とも②ともなりうるようなとき）し、また１つの正解のほかに準正解（若干の配点をする解）を認めることもありうるのである。逆に、あまりに非常識な選択枝を選んだ者には、一定のルールのもとに減点法を適用するみちも、共通１次では許されていることを付言しておきたい。

6　試験問題についての反響意見について（とくに共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書への、本部会としての所見）

今回の共通１次試験のうち、本科目の問題についての関係者その他から寄せられた意見については、可能なかぎり集めて目を通したが、概して良い印象を表明して下さっている。本部会自身、なお決して満足しているわけではないので、あらゆる層のさまざまな立場からの評言に今後とも十分に耳をかたむけて行きたい。これまで本部会へ寄せられた各種の意見等に対しては、本報告のなかでも、それぞれ何らかの形で直接、間接お答えしておいた積りである。なお、とくに高校側委員各位による報告書（以下、高校報告という）を、本部会は拝領している。よく検討されたうえで作成された貴重な意見であり、指摘をうけた点は今後、来年度以降の部会作業において十分に研究されるものと信ずる。高校報告の内容に対する本年度本部会の返答の一部は、すでに上節までのなかで或る程度まで述べられているが、なおそこで言及できなかった点の幾つかについて、以下簡単に触れておきたい。

１の(1)の「科目内の各分野について偏らない出題をせよ」との意見に対し。本部会としては趣旨に同感で、或る特定の分野、領域に偏しないよう、とくに或る特定の分野を無視したりすることのないよう配慮すべきだと考える。ただ範囲である各分野間には自ら重要度に軽重があり、また特定分野に偏らない出題とは言っても、或る年度に出題された領域やテーマが次年度や次次年度には出題されそうもないとの印象を受験生に与えることは、俗にいう“山をかける”ことを奨励するので好しくない。これを要するに、ある年度の出題範囲は、それ以前の年度の出題とは“統計的に独立に”選ばれ、その場合、範囲内の重要な部門はそうでない部門に較べて相対的に大きな確率をもって出題されることを了解ありたい。さらに出題範囲を偏らないようにすることは、大問を今回のように４題とせず、これを５題あるいは８題のようにふやしてゆくことが一つの解決法であるが、それは上節いらい述べてきた「在来日本型から米国型への移行」

という課題と通ずる問題として、本部会が来年度以降に継承して考えるべき問題である。

1の(2)の「個別問題ごとの問題点」についての具体的な意見に対し。本部会としては、それぞれ貴重な意見として反芻したい。とくに、今回の問題Ⅱについては、高校報告以外からも同様な指摘があったことを申しそえる。ただ一般論的に言うと「一部の教科書にしか記述されていないものは出題に適しない」ということになると、出題者側は大へん自由度をそがれることになり、どの教科書にも必ず出ているか、逆に出ていない話題や人名、術語などでないかぎり公平の点から出題できない、ということになってしまう。共通1次では、受験者が教科書による正規の授業を忠実に受け理解に達していれば、楽に合格点圏に達する問題を出そうとしているのであって、授業をうけていれば100点をとれる問題を出そうとしているわけではないのだから、ある特定の設定のどれかが、たまたま特定の教科書で学んだ受験生に対して有利（または不利）に現に働くようなことが生じたにしても、大局上の問題はないように考えている。特定の教科書に出いる、出ていないで、神経質にならないようにして欲しい。或る高校の教師の方は、全教科書に共通に出ているものをチェックしてリストアップし、それだけを授業材料に採りあげることが“能率がよい”ともらしておられたが、余りに能率にとらわれ過ぎた不自然な考え方であるように思う。

2の(1)、(2)、(3)の意見に対し。これらについては既に上節のなかで殆んど本部会側の見解を示しておいたが、将来なお相互に検討や議論の余地を残したい。「政・経」科目と「歴史」科目などとの受験者にとっての選択上の公平をどう考慮すべきかなどについても高校報告に具体的意見を期待したかった。なお「設問数ないし番号欄を60以下」云々については、各問の難易度に軽重があるので、形式的に比較するのは当をえていないと思う。将来、米国型の性格の試験に移行するとすれば、設問数は当然増加の方向へむかう。設問数を減らすべしという考え方は、在来日本型の試験にこだわった考え方を主張することに、現実的には、通ずるものとなる。

なお言わでものことであるが、マークシート式の設問では、問い方によっては番号欄を少く見せることも、多く見せることも、技術的には至って簡単に可能である。例えば「5つの選択枝のうち、正しいものを1つ選べ」という問に対しては、番号欄を1行だけ使って

① ② ③ ④ ⑤ } ……正しい枝にマークさせるやり方と答えさせることもできるし、

番号欄を5行ぶん使って

① ②
❶ ②
① ②
① ②
① ② } …正しい枝には①にマークを、正しくない枝には②にマークをさせるやり方

と答えさせることもできる。したがって、幾つ以下にマークを制限するか、しないかというような議論は、全く形式的な議論でナンセンスであることが判っていただけると思う。

3の(1)、(2)、(3)、(4)の意見に対し。これらについても、本部会の意見、判断に関して表明しうるものは、上節でほとんど述べた。(3)で指摘を受けた「問題文の表現を平易に」という点については、今後できるだけ工夫したい。ただひとつ理解してほしいのは、「歴史」や「地理」のような科目では、問題文の内容が主として「事実の記述」であるのに対し、「政・経」の場合にはそれが主として「論理の展開」である場合が多いため、どうしても受験生のアンケート結果では、「政・経」の文章は他教科、他科目よりも難しい、という結果になる。また問題前文中の文章中に解答のための鍵をひそませる文章表現の場合（本年度の“問Ⅲ”などは、前文をよく読むと、そこに解答のためのヒントがふくまれている）とか、数多くの選択枝文章に対して共通な文脈を保つための文章表現の場合とか、にあっては、どうしても文章が複雑な言いまわしになり勝ちである。出題者としては、そういった与えられた条件のもとで、出来るだけ平明な表現を工夫することに努めたいと思う次第である。

最後に。今回の高校報告をふくめて、高校教師各位の、本部会の出題内容や姿勢についての反応を総体的にみると、（共通1次試験そのものについての疑問意見や反対意見は別として）、本回試行テストの内容その他については、おおむね是なりとの支持を戴いているものの、「政・経」出題の今後のあるべき方向や、その背景たる高校における「政・経」授業のあるべき活性化の方向については、どちらかといえば保守的で、教師諸氏も学生諸君も、何かと安易に就こうとする態度、考え方が見られるのは、いささか残念である。本部会が考えようとしている今後の方向そのものについての前向き的な批判や積極的な代替案を出して戴けるならば、大へん有難いのであるが、旧守、安易に対応して行こうとされるとすれば誠に残念なことで、本部会のそういった印象が誤解であれば幸いである。

ウ 日 本 史

(ア) 各大学の意見

日本史の試験問題について、1国立大学から意見が提出された。

苦心のあとがみられ、よい問題である。(1)

(イ) 共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（日本史）

1(1) 高等学校における日本史教育は、文部省告示による「学習指導要領」にもとずいて行われているのであり、それによって定められた標準単位数はわずかに3単位である。学校によっては増加単位が与えられるが、それも1単位程度である。その上、共通1次試験が1月中旬に施行されるので、3年生3学期の授業は事実上カットされる。教科書の中にはかなり詳しい記述をしているものもあるが、それは従来の試験問題に対処しなければならない理由からであって、実際には授業においてそのすべてを消化するのは困難である。したがって共通1次試験の設問は、このような高校の現状にふさわしく、基本的かつ歴史的意味のあるものでなくてはならず、生徒にとって難解であったり枝葉末節的であったりするものは避けられるべきであり、今回の入試改善のねらいも当然この点にあったはずである。こうした前提に立って以下、52年度の共通1次試験試行テスト問題を検討し意見をのべたい。

(2) 全般的にみて、各時代各分野からバランスのよくとれた出題であり、出題の方法も純客観という枠内にあってかなり工夫されており、大体においてよかったと思う。ただ一部にやや平板的にすぎたところも感じられた。「学習指導要領」の趣旨をいかして、「日本の文化を時代的背景や歴史の流れと関連させながら総合的に考察させる」ような問題も入れたら、問題そのものにも厚みが出たのではなかったかと思われる。

(3) つぎに、近代史（原則的には終戦までということだが）が範囲に入れられたことにより、高校での学習計画は従来にもましてスピードアップしなければならなくなると思われる。たしかにこの時代を除外することは、歴史教育の目的や意義からみて問題があるのは勿論であるが、高校の授業の進度と関連して出題範囲をどう限定するか、研究課題にしていただきたい。

2(1) 「基本的事項であるか、歴史的意味のあるものであるか、歴史的思考力をみるものであるか、」よりの検討。

(ア) ⅠのC、G、ⅡのAの問3、ⅢのBの問5、問6、ⅣのBの（イ群）、Fの（イ群）はよい問題であったと思う。

(イ) ⅢのAの問1もよい問題ではあるが、②と③の判定は生徒にはや、高度であろう。

(ウ) ⅠのEの③は細かすぎる上に「基本的事項」でも「歴史的意味」のあるものとも思われない。

(エ) ⅠのHの①は「歴史的に意味のあるもの」であっても、や、細かすぎると思われる。

(オ) Ⅲの問3の⑤は程度が高すぎると思う。

(2) 「文章表現が適切であるか、」よりの検討。

客観テストであるため、正誤選択の形式をとらざるを得ない。したがって、受験生は文意は勿論、一字一句まで細かな神経を使って判断していくと思われるので、「文章表現」には細心の注意を払う必要がある。意味が多様にとれる文章や語句はもちろんのこと、範ちゅうの不明確なもの、抽象的なものは避けるべきである。

(ア) ⅠのAの③の「本州の北部」の範囲が不明確である。

(イ) ⅠのJの②の「武器や艦船が多かった」を「もっとも多かった」とすべきであろう。

(ウ) ⅡのDの問10は設問の解釈の仕方によっては、②、③、④のいずれかの解答がでることが考えられる。

(エ) ⅢのCの問7の③は「山鹿素行」「熊沢蕃山」の例もあるので、文章表現に工夫が必要であろう。

(3) 「史料問題が適切であったか」よりの検討。

史料問題は、問題に変化を与え、また「考えさせるもの」として、マークシート方式のテストにあっては活用したいものである。したがって、この程度の分量の出題は適切であろう。2の(1)の(ア)の中でも述べたように、よい問題が多かった。ただ史料問題を出す意味は、第一に史料の内容を正しく把握できているか、どうか、を判定するためにあると思われる。したがって、史料を読んでも読まなくても解答できるような設問は史料問題としての意味がないであろう。また、史料は生徒にとってかなり難解なものが多く、授業において史料解読をする時間的余裕もほとんどないので、出題する場合には十分に吟味し、時には現代語訳を用いるなどの工夫が必要であろう。

(ア) ⅢのBの問題は史料に密着したよい問題であったと思う。

(イ) ⅢのAの問2、問3、および、ⅢのCの問8、問9は史料の内容の理解とは直接関係がないものと思う。

(4) 「その他」について。

(ア) 正誤・選択問題の誤文は、何を判定するための誤文かをよく検討して作成すべきだと思う。例えば、ⅡのDの問10は一条兼良の著書が2つも含まれ、ⅣのBの（ア群）は無理して5つの語句を並べたという感が強く、ⅣのFの（イ群）の④では「50日あまりで原敬内閣が倒れた」というのも、あえて、原敬内閣とする必要もないであろう。

(イ) 人名、書名、事項名などは日本史学習上もっとも基本的なもので、それらを出題するのは当然であるが、あまり平板すぎないように工夫する必要があろう。ⅡとⅣはやゝその傾向が感じられる。

3 (1) 試験時間は適当であろう。

(2) 配点は各問の難度等によって多少の差をつけてもよいと思われる。

(3) 問題数は多少減らしても、じっくり考えさせる問題の割合を多くした方がよいと思う。

(4) 社会科各科目間の平均点を単純にそろえるのは考えものであるが、選択科目による不公平がないよう、十分配慮してほしい。

4 そ の 他

(1) 1次試験について

(ア) 理、社は各1科目の選択としてほしい、試験期日が従来より早いので、理、社、2科目ずつの選択は受験生にとっては大きな負担である。

(イ) 各問の配点まで公表してほしい。

(2) 2次試験について

2次試験の科目が大学によって、不統一であるのは問題である。原則として文系学部は、国、社、英、のうち、最高3科目、理系学部は、数、理のうち、最高3科目に揃えるべきであると思う。

(3) そ の 他

国立大学の一期制は問題が多い。これによって東大を頂点とする各大学の位置づけは、従来よりも判然としてくる可能性が大きく、また、経済的に豊かでない家庭の生徒にとって、国立大学を受験する機会が一回しかなくなるのは気の毒である。

従来のように一期、二期制にして、各大学の入れ替えを行なえば、弊害は少なくなると思う。

(ウ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（日本史）

1 問題作成の方針

本年度は、いろいろの事情から、これまでの実地研究で出された問題の中から4問を選び、これを補訂して60分、100点満点の問題を作成することにした。その際、良問ということに重点をおいて選ぶよりは、内容・形式ともに偏らないことを眼目に、もとになる4問を選んだ。

各問の出題意図は、すでにそれぞれの年度の報告書で述べられているとおりだが、改めて一言すれば次のとおりである。もとより共通1次試験が、高校における学習の達成度を評価することを主眼とする基礎的な学力試験であることにかんがみ、高校における日本史の学習内容を逸脱しないことを基本にしたことはことわるまでもない。

(1) 問題Ⅰは、昭和51年度の問題をもとにして、かなり大きく改めたもので、前近代の各時代の基本的な事項についての理解をたずねた問題である。たんに歴史的な名辞や年代の正誤を問うことは避け、短文ないし文節の正誤の判断を求める方針をとった。

(2) 問題Ⅱは、昭和50年度に出題したものをもとにしたが、問題文と設問の関連を深くするため、A・Bの問題文を書き改め、問1～6を変更した。奈良・鎌倉・室町・江戸の各時代の文化について、基礎的な理解ができているかどうかをたずねた問題である。たんに歴史的事実についての知識を問うだけでなく、各時代の文化の大勢を背景に、正しい歴史的理解をもっているかどうかを見るため、短文の選択肢によって正誤の判断を求める形式を多く採用した。また、学問・宗教・文学・美術など、できるだけ多方面にわたって出題した。

(3) 問題Ⅲは、昭和49年度の出題をもとにした史料問題で、封建社会の基本的な歴史事項についてたずねたものである。たんに記憶の程度を問うことに陥ることなく、正しい歴史的理解ができているかどうかをみようとした。Aの史料は、受験生になじみのあるものではないが、問われていることは、基本的な事柄である。

(4) 問題Ⅳは、昭和50年度の問題をもとに、これに若干の変改を加えるとともに、新たに大正・昭和の問題を加えて、30点の問題に作りかえたものである。近代史の基本的な諸問題について、歴史的な理解と判断を求めた問題である。A～Gの各問とも、〔ア群〕の完成法の問題では基礎的な事実についての理解を問い、〔イ群〕においては因果関係についての判断を求めている。各問とも〔ア群〕が比較的易しく、〔イ群〕でやや程度の高いところをねらった。

2　出題形式について

これまでに出された実地研究の問題をもとにして作成する方針をとったので、とりたてて新機軸を出すことを意図しなかった。これまで報告書でも指摘されているように、マークシート方式による多肢選択の解答では記述式の解答を求める場合のように、歴史に対する系統的・総合的な判断を求めるには限界があり、また出題形式にいたずらに新規さを加えたところで、受験生の学力を評価するうえで、さほど違いがないとも考えられる。しかしそうした限界、制約の中でも、なお工夫の余地がある。問題Ⅰで、短文ないし文節の正誤の判断を求めたのも、その工夫の一つであり、マークシート方式の限界、制約を克服する努力は今後も続けられる必要がある。そのため、いちじるしく煩瑣にわたらない範囲内で、出題形式がある程度複雑化することもやむを得ないと考えられる。

3　解答結果について

平均点53.20点はまずまずの成績であり、標準偏差14.46もほぼ妥当なところであろう（本番のときには、今回と全く同じ程度の問題で、平均点が60点を上まわることが予想される）。問題別にみても、Ⅰは配点20点で平均10.85点（偏差3.65）、Ⅱは配点30点で平均15.39点（偏差5.81）、Ⅲは配点20点で平均9.87点（偏差4.07）、Ⅳは配点30点で平均16.91（偏差5.32）という結果で、全般的にみて問題はほぼ適切だったものと考えられる。

ⅠのH…8の正当率は、日本史の成績の上位の者も、下位の者もほぼ同じという結果が出ている。これは、理解が不十分で正確な判断のつかなかったものが多かったことを示すものであろう。比較的易しい問題のつもりだったが、①を誤りとしたものが 36% もあったのは意外であった。江戸時代の年貢が、米納を原則として一部金納だったことは、高校であまり教えられていないということだが、このことに学習が及ばなければ、近世封建社会の特質を理解することが困難になるのではなかろうか。

また、Ⅲの問7…33の問題は、日本史の成績の上位にあるものの正当率が、下位にあるものより低いという結果が出た。②をマークしたのは、寛政異学の禁の内容についての理解の不十分さによるものだが、③をマークしたのは、むしろよくできる受験生が考え過ぎて間違ったという感じがしないでもない。両者についてかなり誤答の出ることは予想したとおりだが、③の内容が受験生には難しすぎたかもしれない。しかし、江戸幕府の思想統制策ないし教化政策の基本にふれたものであって、高校における日本史の学習では、この位まで到達することが望ましい。

その他特長的なことを二三あげると、全受験者の正解率の最高は、ⅣA—36の89.12%、以下ⅠG—7 85.86%、ⅣE—44 84.88%、ⅣB—38 84.16%、ⅣF46—76.33%の順となっている。逆に正解率の低い方では、ⅣF—47 19.89%、ⅢC7 33 24.30%、ⅡB5 5 25.04%、ⅣG—49 32.81%、ⅢA3 28 29 35.72%となっている。正解率の高いのは、ⅠGの太閤検地の正誤問題を例外として、他はⅣのア群が占めている。ⅠGの内容は中学程度で解答でき比較的易しいが、日本史の基本にかかわる問題がよく学習されていることを示し、好ましい傾向である。Ⅳのア群が比較的易しい問題であることは上述のとおりであるが、同時に単純な歴史的名辞を完成法の枠の中に反射的にあてはめる問題には受験生は習熟していることを示すものであろう。そうした結果、一歩つっこんだ理解を求めるⅣのイ群となると、たちまち弱点をあらわす様である。例えばⅣF—46の米騒動の最初の発生地を富山県と正しく解答した者が76.33%に達するのに対し、今一歩つっこんで全国水平社の結成と関係づけたものはわずか19.89%にすぎず、シベリア出兵をその結果の事象とみる者は39.34%に達している。この結果は、出題が適切であったかどうか、大いに反省を迫られるものであり、また試行テスト実施時の学習進度と多少関係するかもしれないが、同時に近現代史の学習のあり方にも問題を投げかえすことができるのではなかろうか。ⅢA3の不成績は、内容が高度すぎるとの批判が高校側から寄せられているが、同時に、短文群から二つの誤りを発見することが、一層の難問であったことをも示しているのではなかろうか。ⅡB5の不成績は、Bの文章に示される「この時代」を深く理解せず、単純に反応した結果であろう。

4　出題範囲について

歴史の教育が現代に及ばなければ、歴史教育は少なからずその意義を減殺することになるであろう。したがって、現代史の学習もすましているという前提のもとで出題するのが理想である。しかし、高校3年の課程を終了する以前の試験であるため、学習の進度を考慮しないわけにはいかず、今回の試行テストにおいては、出題範囲を第2次世界大戦終結までとし、戦後については「中学校における履修程度の出題を行うことがあります」とした。しかし現代史の重要性にかんがみ、高校において、教育過程の編成を再考されるなど工夫を加えられることを要望したいし、入試センターにおいても、テスト実施時期をさらに考慮するなど、高校程度の現代史を出題範囲に含めるよう一層の努力を行わねばならないと思われる。

5　問題についての反響意見をめぐって

一般に受験雑誌などでは、出題傾向といった対策的な議論が多く、とくに考慮しなければならないような意見は聞かれない。教科書の範囲から出題されていて、高校で着実な学習に努力するならば十分解答できるはずである、というのがおおかたの意見で、比較的好意的な反響を得ていると思われる。また、試行テスト実施直後の各大学からの意見にも、日本史に関してふれられたものはなかった。

問題についての高校側の意見を組織的に聴取できる措置がとられたことは、適切であった。今回の問題に対する協議報告書にも、傾聴すべき意見が盛られている。以下、これをめぐって若干の見解を示しておくことにしたい。

(1)　出題にあたって教科書が重要な手がかりであることはことわるまでもないことだが、日本史の場合、指導要領による標準履修単位数の減少にもかかわらず、教科書の内容は従来どおりどころか却って増大している状態で、増加単位を設けたところで、教科書の内容を消化するに足る十分な学習時間がない実状だという。たんに教科書に出ているということだけで安易に出題しては、高校生に過重な負担を強いることになるわけで、教科書を出題の手がかりにするにあたっては、その点にいっそう慎重でなければならないと思われる。

(2)　問題の難易に応じて配点に差をつけてはという意見があったが、易しい問題というのは、誰もがわかっていなければならない基本的な事柄にかかわるものが多く、それがわからなければ大きく減点すべきだから、配点はむしろ多くしておく必要がある、といった見解もあり得る。したがって、難しい問題だから配点を多く、易しい問題だから配点を少なく、ということで、果して適切であるかどうか、必ずしも簡単にはいえないことと思われる。

(3)　問題ⅡとⅣに平板な傾向を感じるということだが、基本的事項の理解について問う場合は、そのような印象を与えるのは避け難いのではないか。Ⅳについていえば、〔ア群〕の方が、完成法の形で基本的事項についての理解を問うものであるのに対し、〔イ群〕の方は、因果関係について考えさせる問題であって、やや高度の判断を求めている。ア・イの両方が組合わさって問題Ⅳが成り立っているわけで、アの方だけをとりあげて平板とするのは当を得たものとはいい難い。こうしたことは、問題の難易についてもいえる。易しいものと難しいものを適切に組み合わせることに出題者は苦心しているわけで、小問一つ、または選択肢の一つをとりあげて、それだけで難易を論ずることのないように希望しておきたい。正誤の問題などでは、他の選択肢との関連のうえでわかるであろうという判断にたって出題することも、場

合によってはあり得ると思う。

(4)　細かいところまで出題意図がわかったうえでのことではないので、時として出題の意図と批判の観点が食いちがっているところもないではない。たとえば、ⅠのEの③以仁王の挙兵の場所まで記すのは細かすぎるという批判をうけているが、場所をあえて示さなくともこの選択肢は誤りであるものの、その誤りにいわば念を入れ、問題をやさしくしたつもりであった。ⅠE[5]の正解率は全体で50.76％で、受験生に特に混乱があったとも思われない。むしろⅠEを誤りなしとした者が、日本史の成績上位者でも25～29％あることは、以仁王の挙兵やその全旨の意義の理解の不十分さを示すものとして重視すべきであろう。また、ⅣのFの〔イ群〕—④で、原内閣にはふれずもがなということだが、寺内内閣と原内閣の区別がはっきりしていなかったり、米騒動—原内閣と機械的に暗記していて原内閣が成立したのか倒れたのかはっきりつかんでいない受験生が意外に多い実状から、原内閣を入れた方がもっともらしくなり、問題に対する理解の程度がより的確に判断できると考えられたのである。こうしたことは、今後ともおこり得ることであり、高校の先生方と討議する機会の設けられることが望ましい。

6　そ　の　他

(1)　数年ならずして問題の種が尽きるのでないか、という意見がある。毎年毎年、全くちがったことを問題にしなければならないとすれば、たしかに種ぎれのおそれはある。しかし、毎年新しい問題でなければならないというようなわけのものでもなかろう。すでに出題されたものであっても、形式をかえたり、組合せをかえてみたりすれば、通用するであろう。全く新しい問題を作らねば、と勢いこむ必要はあるまい。それに、学習のポイントになる基本的な事項については、それが大じな事柄であればあるほど、くりかえし出題されて然るべきものと思われる。

(2)　さきにもふれたように、共通1次試験の問題についても高校側の意見を聴取し得る体制のできたことは、歓迎すべきことである。しかし、出題者としては、高校の先生方の意見だけでなく、受験生のナマの声も聞きたいと思う。せめて、高校からの試験問題協議報告書は、受験生の意見を十分に盛りこんだものであってほしいと考える。

(3)　すでに昭和51年3月「入試改善調査報告書」の日本史研究専門委員会の報告がふれているように、受験生が真剣にとりくめばとりくむほど成績が向上し、選抜の目的を達成するため

には問題を難しくしていかねばならない、という相互エスカレーションの生ずるおそれがある。こうした点からも、共通１次試験をあくまでも選抜試験としていくか、あるいは資格試験的な性格のものに変えていくか、早晩その選択を迫られることになるのでなかろうか。

エ　世　界　史

(ア)　各大学の意見

世界史の試験問題について、１国立大学、１公立大学計２大学から意見が提出された。

① 各問の難易度で配点を決めるのであればよいが、本問題で難易度が同程度と思われる内容の問題で配点が異っているものがあるので、難易度を統一する必要がある。(1)

② 付図の海洋部分は、線又は点よりもアミで表示した方が、陸地部との対照がより調和的に表現されるように思われる。(1)

(イ)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（世界史）

国立大学入試改善として、これまで実地研究のすすめられてきた共通第１次学力試験（以下共通１次という）が、いよいよ昭和54年度入学志願者を対象として実施することに踏みきられたが、その成否について教育関係者はもとよりのこと、社会各層からも強い関心がよせられていることは周知のところである。大学入試センターでは共通１次の実施にむかって綿密かつ周到な研究を重ねられるとともに、昨年12月末に試行テストを全国的規模で実施して、万全を期せられてきたことに深い敬意を表するものである。しかしながら、共通１次の実施にあたっては、詳密な検討を加えるとともに、早急に解決しなければならない問題が残存することも事実である。特に世界史の試行テストについて、本年２月の分科会で大阪大学の植村部会長を中心に改善を要する諸点について協議したのであるが、３月には高校側委員によって、次の４項目にわたって検討を重ねて、次のような結論に達したのでここに報告する。

1　試験問題の構成と内容

今回の試行テストは４個の大問で構成され、選択肢が354、マーク個所が60であった。これらの数値を昭和50年度および和年51年度のそれと比較すると下の表となる。

年　度	頁　数	大　問　数	選択肢数	マーク数	１マーク平均肢数
50	15	4	432	71	6．1
51	13	5	298	62	4．8
52	15	4	354	60	5．9

表に見られるように、これまでの試行テストの成果が活かされ、52年度の各数値は、内容とともに精選されてきたことがうかがわれ、1時間の量としては妥当なところへ落着いてきたと言える。また頁数については、受験者の立場に立って読み易いように活字、行間のゆとり等無理のないようにレイアウトされていて、15頁も決して多くないものである。

次に試行テストの内容についてみるならば、

Ⅰ――西アジア地域におけるトルコ民族の活躍について全時代にわたった出題

Ⅱ――中国を中心にして、一部インド、インドシナを含め全時代にわたった出題

Ⅲ――地中海周辺およびヨーロッパにおける主要都市とその歴史的事蹟について、古代から近代初期にわたった出題

Ⅳ――イギリス、アメリカおよびロシアを中心に欧米諸国の19世紀の諸問題を掘り下げた出題

以上のように、おおむねそれぞれの視点や意図のもとに各分野をほゞ網羅し、しかも作問の形式についても工夫され、若干の問題点をのぞいては史実相互の有機的連関のもとに、歴史的理解力、思考力、判断力等を総合的に見る上で、大体において適正かつ妥当なものである。問題点をあげるならば、東洋史関係では中国史が大部分をしめインド史の出題が少なかったことで、この事は配点の上にもあらわれ、西洋史関係に60点、東洋史関係に40点となっていた。またⅢの問2について選択肢は数を減じて、少し長い文にした方がよいのではないかという意見もあった。次に、ⅡのA～Mの問題を、政治・経済・社会・文化等内容別に分類してみると、政治――5、社会――1、文化――7となる。大学専門部会の昭和50年度の検討結果の報告にも経済史のような性格のものは出題しにくいとあるように、社会経済史関係の出題はマークシート形式にはなじまないことも理解できるが、その差が開いたきらいがある。

2　試験問題の範囲と程度、設問数等

(1)　範　囲

試験問題の範囲については、これまでの試行テストの場合にも、その実施時期によって出題範囲の下限が設定されていたようである（昭和50年10月初旬のテストでは19世紀中ごろが範囲の下限であった）。今回のテストでは1930年代が下限となっている。昭和54年度の共通1次は1月13日、14日実施と決定されたことから、範囲はさらに押し下げられることと考えられるが、そうなった場合でも第2次世界大戦を下限とするのが妥当ではないかというのが、

共通した意見であった。というのは第2次世界大戦後を範囲にいれるとすると、その下限の設定が困難となり、また戦後史における歴史的諸事項の中には、今日なお歴史的評価の定まらないものがあって、高校の教師・生徒に不安を増すことになるからである。さらに不安を除去するために、何らかのかたちで公表されることが望まれる。このほか、高校の方としては、農業科、工業科および商業科などの職業コースからの受験生にとっては大きな負担がかかっているという問題があることを附記する。

(2)　程　度

試験問題の程度については、これまでに大学入試センター等から言明されているように、共通1次は「高等学校の段階における一般的かつ基礎的な学習の達成度を判定する」ことを目的として行なわれるもので、難問・奇問は避けるということに、われわれも全く同感である。これまでの試行テストの平均点をみると、50年度――50.77点、51年度――52.13点、52年度――51.50点であり、出題者側のねらいとする60点程度には及ばないが、本番となれば、多少点数が上昇することが予想されるので、程度としてはこの辺りに基準をおいて出題することが妥当であろう。

(3)　設　問　数

今回のテストでは52問（マーク数は60個）であり、1時間の量としては妥当であろうという意見であるが、各設問の内容を検討すると、ⅡのA～Mの設問は文中の選択肢から誤りを発見する形式で、2回以上読みかえす必要がおこり、設問数に比してかなり時間を要するのではないかという意見が出された。昭和51年度の大学専門部会の検討結果に「意味のない選択肢を無理に設定したことを示し、受験生にケアレスミスをさそう原因になるとさえ考えられる」とあるように、選択肢の設定には高校生の歴史的思考力・理解力を超えた内容のものを避けなければならないという意見も出された。参考までに例を示すとすれば、――Ⅰの問7の設問は、ケマル＝アタテュルクの近代化政策に関する問題で、5個の選択肢の中から実施されなかった政策⑤土地改革にマークすることが正答となるのであるが、現行の教科書では近代化政策として主要なもの2、3をあげるにとどめ、詳細な説明にまでは言及していないので、高校生段階の学力では難解で、勘に頼ることになるのではないか。

われわれ高校側委員の検討において、もっとも多く意見が出されたのは歴史的事項の取扱いに関する事であった。多少、瑣末な事項にわたるきらいがあるかも知れないが、この項で例示する。現在高校では約15種の世界史教科書が使用されているが、名称（人名・地名等）

の称呼の統一が非常に困難であることから、1つの名称について2、3の称呼が使われている実情である。ケマル＝アタテュルクの場合、ケマル＝パシヤ、ムスタファ＝ケマルが使われている。また訓民正音の場合もハングル、諺文が使われている。従ってそのような名称には少なくとも2つの称呼が併記されることが望ましい。IIのA⑤に南京が出題されているが、多くの教科書では、金陵（南京）と記述されており、この問題が誤りを摘出するものであるだけに、特別な配慮が望まれるのではないか。また、モンゴルとモンゴリアとが不統一に使用されているとの指摘もあった。教科書の記述と異なる事例として、白蓮教の乱（教科書では白蓮教徒の乱）、白話文運動（白話運動）が指摘された。教科書の記述が絶対に正しいとは云えないかも知れないが、現行の教科書で慣用的に使われている場合それと異なる事例は受験生が迷うおそれがある。次に高校生の学力では難解なものと指摘された例をあげると、IIのDで、1919年①中国革命同盟会を中国国民党と改めてと出題されているが、ここまで詳しく記述した教科書は1種あるが、受験生で中国革命同盟会を誤りとしてマークできた者は少なかったのではないか。IIのIの④雲崗の石窟は、雲崗と龍門の石窟寺院の築造期間を知らなければできない問題である。IIIの問2の選択肢は都市の歴史的事蹟を記述したものであるが、「b③国土回復運動の出発点であった」「e②ノルマン人がここから西方に遠征した」等受験生には難解なものである。この他難解なものとして指摘されたものに、Iの問5の③1408年、IVのC問3の③ゲルツエンがあった。

3　試験問題の出題方法（試験時間、配点、問題文の表現解答方法等）

(1)　試験時間

試験時間については、設問数と密接な関係のある問題で、前述したとおり今回の試行テストはほぼ妥当と考えられる。

(2)　配　点

配点については、1の内容の項で触れたところであるが、今回の試行テストでは1マーク1点乃至2点の配点になるものと考えられ妥当な部分点である。なお、西洋史関係に60点、東洋史関係に40点という大問の配点については意見のわかれたところである。

(3)　問題文の表現

問題文の表現については、細部にわたって配慮がなされていた結果、特別な指摘はなかったが、受験生が迷ったり、誤解したりするおそれのないように平易で明快な文章表現に今後

とも配慮されることを望みたい。検討の段階で出された意見を次にあげてみるならば——（IIの説明文）「ただし誤りがある場合、各文章にその個所は1か所だけである」を「ただし誤りがある場合、その個所は各文章に1か所だけである」とした方がわかり易くなる。また（IVのBの問4に関する本文）は「南部と北部との地域的対立が深まり、南北戦争の激動を経験した。」とあるが、「南部と北部との地域的対立が深まり、」とする方が明快ではないだろうか、前者の場合「南北戦争の激動を経験した。」にキイポイントが移って⑤をマークするおそれが生ずる。（III）の問題は地図が出題されているが、地図中の都市の地点、海陸の区別等鮮明で非常に良いという意見が出された。次に、レイアウトに関係する事であるが、I，IIIのように問題文と設問文とが背中合わせ（表裏2頁にわかれ）に印刷されていると、受験生は1問毎に頁をくらなければならず、このことに手間どることが予想されるので、不便のないよう配慮されることが望まれる。またIVのA、B、Cの各問題で、問題文と設問文との行間をひろくあけて見易くなっているが、問題文が実線でかこんであるとさらによくなるのではないかという意見が出された。

(4)　解答方法

解答方法についてとくに指摘された問題点はなかった。また解答用紙については、マーク個所が細かく数多く並んでいるので、読み違いのおこらないよう印刷されなければならないが、今回の用紙は紙質、印刷の鮮明度とも良好であった。今回の試行テストでは、設問に対する正答は1個というマークシート形式であったが、受験生の歴史的事項の正しい理解および歴史的思考力等を判定する方法として、原因・経過・結果（意義）等、あるいは関連の深い歴史的事項を組み合わせて2個以上をマークさせる出題が工夫されないかという意見が出された。また正答（マーク個所）がある番号に片寄ることのないようその配列に留意されたいという意見も出された。

この項の終りに、出題についてわれわれ高校側委員の検討の段階で出された意見を述べてみるならば、マークシート形式は多肢選択の客観テストであるため歴史的事項の断片的記憶にはしるおそれがあるが、今回の試行テストではIの問4、Iの問6、IVのC問1等はそのおそれを排除する良問であるとの意見が出された。またマークシート形式は解答記入欄にマークするという作業のくりかえしで単調になるおそれがあるが、今回の試行テストはIとIVのよく似た思考形式の問題の間に、IIは誤りを摘出する問題、IIIは地図を見る問題というように異なった形式のものを挿入して単調になるのを防ぐ配慮がなされていたといえよう。

4　そ　の　他

高校の世界史教育においてはその専門家を養成することが目的ではない。従って共通第１次学力試験も正常な高校教育を逸脱したり、歪曲するものであってはならない。すでに述べてきたことであるが、問題作成にあたっては教科書に則して、基礎的・基本的な中庸・適正を得た出題がなされるよう要望したい。以下共通１次の実施に関して要望事項を記して報告を結ぶ。

(1)　受験生への共通１次の成績通知については、学校序列をつけるという弊害を避けるためこれをしないということになっているが、受験生が志望大学を決定するには正確な資料にもとづいてなされるべきで、この点の検討を願いたい。現行のままで成績通知がなされない場合は、正解例の公表にあたって大問および小問ごとの配点と正答の許容範囲等、受験生が得点を正確に知り得るよう考慮されたい。

(2)　今回の試行テストにおける社会科６科目の平均点および度数分布に開き（例、平均点、高――61.60点、低――48.51点）がみとめられるが、科目選択による不公平のおこらないよう方策がとられるよう要望する。

(3)　共通１次と第２次試験との成績判定については、各大学において合理的に総合して行うものとされているが、このことについては高校関係者、受験生等に少なからぬ不安を生んでいる。成績判定については適当な機関によって統一基準が設定されるよう要望する。

(4)　志望大学の併願については、現在第２志望まで認められているが、経済的理由によって国公立大学しか入学を希望できない受験生もあることと思われるので、第３志望まで併願できるよう善処されたい。

(5)　共通１次の試験場設置については、先般の国立１期校の入学試験において東北・北海道地区が豪雪の影響を受けたように、各都道府県を同じ情況の想定のもとに設置することはできない。また県によっては試験場となる国公立大学の少ないところもあり、従ってその設置については、受験生の心理的・経済的負担等を考慮の上、分散的設置の措置をとられるように要望する。

(ウ)　教科専門委員会問題作成部会報告書（世界史）

はじめに

共通１次試験の昭和54年度における実施が本決まりとなったので、その前年に行なわれる試行テストが世間の注目を浴びるようになることは、早くから予想されていた。従って、問題作成に当たる側も、任務の容易ならざるを自覚し、かなりの緊張を強いられていたのである。ところが、スタートが遅れたうえに諸般の悪条件が重なって、実際には意外なほどの短時間で作業を進めねばならなかった。それまでに試みられた実地研究テストの問題とその結果とを十分に参酌し検討する余裕にも恵まれなかったほどである。それにもかかわらず、試験終了後各方面から概して良好との批評をいただき、受験生の得点もまずまず穏当な線に落ち着くことができた。我々にとっては、望外の喜びと言わねばならない。

1　各問題の出題意図

第Ⅰ問は、トルコ系諸民族の活躍について基本的事項の理解を問うた。ただし、理解ばかりでなく、受験生が基礎的知識をいかに活用できるかということも出題する側としては是非とも知りたいところであって、そのために特に工夫されたのが、問４、問６および問７である。

第Ⅱ問は、アジア史に関して時間的にも空間的にもきわめて広範囲にわたる出題であるが、意図するところはやはり、基本的な事柄について正確な把握がなされているか否かをためすにある。同時に、文章を精密に読む能力、類似の事項を識別し判別する能力といったものも、本問によって判定し得るであろう。

第Ⅲ問は、地図を用いての出題であるが、そのねらいは無論、グラナダ・ヴェネチア・アレクサンドリア……のごとき重要な地名について、その所在が正しく頭のなかに入っているか否かを見るにあった。換言すれば、学習の際に地図が常に参照されていたかどうかを知りたかったのである。問題の後半、すなわち問２は、オリエント史の一部をも含む西欧史全般にわたって、主として文化史に含まれる事象が、それに関係のある土地と正しく結びついてとらえられているか否かを問うている。

第Ⅳ問は、19世紀のイギリス・アメリカ・ロシアを主として、この時代の諸問題がどの程度まで深く理解されているか、また多角的にとらえられているか、を尋ねている。短文を選択肢として掲げた諸問では、理解度の深浅とともに、受験生の思考力・判断力を見ることがねらいとされた。

2　出題形式について

大問4題から成り、高校側委員の報告中に明らかなとおり、1マークについての平均選択肢数は5.9で、過去のテストに比較すると、50年度よりは減、51年度よりは増となっている。おおむね5という線が守られたわけであるが、地名・国名・人名などを選択肢として列挙した場合、偶然性の排除を考慮して、その数を増加した。なお今回は同一解答記入欄に2つマークする形式をとっていない。

本年のテストでは、設問の導入をする文章が比較的長文である。各文の内容は、高校で習得した知識を整理し、体系化し、さらにはそれを補充できるようなものであることを願った。試験場で何かを教えられるということもあってよいのではないか、と思ったからである。

各大問ごとに見てゆくと、第Ⅰ問は、文章中の下線を施した部分について設問を掲げ、解答を求めている。そのうち、問4については高校側委員から好評を得た。選択肢は、各問に共通して5個である。問7の「実施されなかったもの一つ選べ」という問い方には、問題があるかも知れない。

第Ⅱ問の出題形式はやや新奇なものである。AからMまでの各文において、文章中の下線を施した5つの部分がいずれも選択肢となり、そのうちから誤りのものを指摘させるという問いかたを試みた。しかし、この形式においては、下線の施しかたに十分な考慮が必要であり、下線部相互間の関係についても受験生の立場から再三再四考えなおしてみなければならないように思われた。

第Ⅲ問では、経線・緯線なしの地図を出題に用いたが、これについては一般の批判を仰ぎたい。解答への手引きとして図上に河川を入れることが考えられたが、この程度の大きさの地図ではかえって煩雑さを増す恐れがあり、また必ずしも正確さを期しがたいという心配もあったので、故意に省略した。問7を少しむずかしくする方法として、いわゆる「から」の地名を選択肢中に含めることに思い至るが、この場合には選択肢10個という制約があって、それが不可能であった。問2に関しては、高校側委員の指摘にあるとおり、選択肢に当たる短文を少し長くして選択肢そのものの数を減らすほうが、受験生の能力をより適確に判定できることになるかも知れない。

第Ⅳ問は、第Ⅰ問に類似した出題形式をとっている。すなわち、A・B・Cの前文を示し、各文の下線部についていくつかの設問を並べたわけである。それらのうち、Aの問1、Bの問2、問3および問4、Cの問1（二）と問4とでは、5個の短文が選択肢になっているが、各

問の問いかけが、単なる「正しいもの」ではなく、「正しいと考えられるもの」を選べとなっている点に注意されたい。Aの問3と問4、Bの問1では、それぞれの小問について共通した選択肢が8～10個あげられている。このようにまとめてしまうのではなくて、3～4個ずつに区分して各小問ごとにつけるほうがよいとの意見も聞かれるが、我々としては、受験生の識別力・判断力を知るうえに、むしろこのほうが望ましいと考えた。

3　出題意図と解答結果

本科目の受験者数は24,170人で、その平均点は51.31点であった。入試センターの目標とした60点に達しなかったわけであり、また我々の予測よりもやや低目であった。

大問別に見れば、第Ⅰ問と第Ⅳ問とがほぼ妥当な出来ばえを示し、第Ⅲ問は予想よりもはるかによく（満点30に対して平均点が19.71）、第Ⅱ問は予想よりもかなり悪かった。(満点26に対して平均点が8.00）第Ⅰ問は、トルコ系諸民族の活躍という東洋史と西洋史との間隙をつく出題であったにもかかわらず、平均点が満点のなかばを越えていた。第Ⅳ問は、19世紀の歴史を徹底して理解していないと容易に答えられないような設問を若干含んでいたので結果が心配されたが、平均点はやはり満点のなかば以上であった。難易とりまぜての問題配列が適切であった、と言われよう。第Ⅲ問の結果を見ると、満点が1667人（全体の6.89%)、24点以上を得たものが10,601人（43.86%）にも達していて、受験生が地図に親しんでいることを示す数字が得られた。だが、選択肢という手がかりがなかった場合にも、同じような結果が得られただろうか。また問2については、選択肢の無造作であることがかえって正解を容易にした、と言えるかも知れない。これに反して、第Ⅱ問では、20点以上の得点者がわずかに187人(0.77%)、得点0が623人（2.57%)、6点以下が10,584人(43.79%)という有様で、結果はきわめて低調であった。アジア史（とくに中国史）に関しては、教科書に出てくるような基礎的事実でも正確に把握されてないことが明らかにされたが、出題した側としても出題形式に無理がなかったかどうか、よく反省してみなければならない。ともかくも、全体的に見れば、第Ⅱ問の不できを第Ⅲ問がカヴァーしたことになるのである。

4　出題範囲についての注意点

大学入試センターの方針が、世界史の出題範囲については、その下限を明示しないことになったので、当然現代史の部分も出題の対象にのぼることとなった。ただし、高校側委員が述べ

られたとおり、戦後史においては今日なお評価の定まらぬものが多々あるので、取り扱いに細心の注意を要することは無論である。

また問題作成に当たっては、『学習指導要領』のなかに示された学習範囲を逸脱しないことを第1と心得、各種の教科書で記述されているところを比較検討して出題の指針とした。しかし、教科書中の説明にもしばしば正確さを欠くもの、あるいは舌足らずのところが見いだされて、高校の授業ではそこのところがいかに処理されているのか、最後まで疑問が残った。また政治・社会・経済・文化の各領域を万遍なくカヴァーできるような出題をと心がけたのであるが、その意図は十分に果たされなかった。

5　問題についての反響意見

「受験生に対するアンケート調査」によると、52年度は51年度よりも好ましい結果を示している（ただし、受験生の総数が3.4倍ほどふくれあがったという事実を考慮外においての話である）。すなわち、「問題の難易」については「普通」と答えたものが54.8%で、前年より6.6%増、「難しい」と答えたものが31.7%で、11.5%の減を示している。「問題の文章」については、「わかりやすい」が25.3%で、11%の増、「普通」が63.2%で、5.6%減、「わかりにくい」が11.5%で、5.4%減となっている。「解答時間」については、「普通」が61.3%で、0.3%増、「短い」が8%で、1.9%減となっていて、出題者側は時間の不足を危惧していたのであるが、アンケートにそれが現われなかった。

高校側委員の見解としても、問題は概して適正かつ妥当とされており、また問題の量もほぼ60分内に消化できる範囲と判断されている。配点に関しては、西洋史関係60、東洋史関係40という割りふりを手直ししてもよいのではないかという意見が出された。問題文の表現についてもおおむね良好とされたが、若干の個所について一層平明で分かりやすい書きかたを示唆された。

なお、出所はたしかでないけれども、前年度の実地研究テストの問題には整いすぎて面白くない観があったのに反し、本年度の試行テストにはやや大胆な試みが見られるが他面疎漏の点が目だつ、との評を耳にしている。

オ　地　　理

(ア)　各大学の意見

地理の試験問題について、3国立大学から意見が提出された。

①　「地理」の設問は83ページ、84ページの2ページに分かれているが、同じ見開きのページにしてほしい。(1)

②　出題程度に関しては、まず、妥協といえようが、問題によっては選択肢が多いものの正解を求める上では簡単すぎるもの、逆に表を読み解答を出す上では、時間を要するものなどがある。総合すれば時間配分ができているのかもしれないが、出題内容の難易に少々ムラがある。また、受験生に特定地域の現象の数字の記憶を要求している問題もあり、もう少し出題を改善してよいと思われる箇所がある。(1)

③　付図の海洋部分は、線又は点よりもアミで表示した方が、陸地帯との対照がより調和的に表現されるように思われる。(1)

(イ)　共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書　（地理）

1　試験問題の構成と内容等について

(1)　全般を通じて高等学校における学習内容にそった出題であり、教育現場で本来の地理的教育を展開しても受験生に不利をきたすことがない問題が多く出題され、さらによく検討され練られた内容が多かったことは望ましいことであるが、一部の考慮されたい点については後述する。

(2)　大問題において地理A・Bともに5問題であり、うち共通問題が2問題設置されており、また問題用紙の頁数では、共通問題が6頁、地理Aのみが9頁、地理Bのみが7頁となっている点、いずれも妥当であると考えられる。

(3)　図及び表を用いた出題が多くみられた点については望ましいことと思われる。ただ統計数値を使用する場合、高等学校第1学年次において履修した受験生は古い統計数値により学習し、第3学年次において履修した場合には新しい統計数値を利用する場合が多いので、最近の2～3年で数値や順位が大きく変動するものについては慎重に取り扱っていただきたい。なお図・表をもとに考えさせる問題が出題できれば、さらによかったのではないかと感じる。しかしこのことはニュースのなかの地理的事項を出題しないでもらいたいということではなく、むしろ新しい地理的事項は歓迎する事柄である。

(4) 可能なかぎり特定の分野にかたよらず、高等学校での地理学習の全分野にわたる出題がなされるように配慮されたい。

たとえば地理Aにおいては、生活と地理（地理的知識の発達・地図）、大地形、村落・都市、水産業、商業交通貿易、国土の開発と保全、国家群、地理Bでは、生活圏の拡大（地図を含む）、地域区分、東・西南アジア、ソ連、サハラ以南のアフリカ、北アメリカ、オセアニアなどに関しての出題が殆んどなく、特に地理Bにおいて、東南アジア、ラテンアメリカという性格のよく似た地域が大幅に出題されたことは、よい傾向ではないと思われる。やはり途上国・先進国・東側諸国のバランスを考慮した出題をしていただきたい。また地域区分は地理Bにおける主要な学習の一つであることも配慮していただきたい。一方地理Aにおいても、自然・生産・その他のバランスを配慮した出題をされることを望みたい。

(5) 現在高等学校の教科書は、地理Aは8社9冊、地理Bは9社10冊、地図帳は3社5冊が発行されているが、教科書によって有利・不利とならないように各社の教科書を十分に検討されて、最大公約数的な出題をしていただきたい。たとえば地理B㈢においては、教科書による有利・不利が若干あったのではないかと懸念される。

(6) 高等学校における地理学習の到達度をみるために、同一問題のなかでさらに難易の幅をもたせる配慮をされることを望みたい。

また重要な事項についての出題を望みたい。たとえば地理A㈣において簡単な計算をさせる出題は結構であり、千葉県の人口増加数も人口増加地域の出題として望ましいが、福井県の人口増加数の出題は、千葉県ほどの意味はもたないのではないかと思われる。

従来とかく出題された単なる数字や順位、又は特殊の用語により断片的な知識を求める問題より、最も重要な事柄を大きく把握しているか否かをみるような出題を望みたい。

(7) 選択肢については、十分な検討がなされているが、さらに一考していただきたいところも見受けられた。たとえば地理A㈤におけるリンカーン・コリデールなどについてである。選択肢のすべてを理解して、その中より正しいものを選ぶ学習がなされており、共通第1次学力試験及び第2次学力試験の問題が、その後の高等学校の教育及び学習に大きな影響を与えることを考えるとき、現場においては今後この内容まで学習するところも決して少なくないと思われるから、選択肢についても十分な配慮をお願いしたい。

2 試験問題の範囲と程度、設問数等について

(1) 設問数は地理Aにおいて45問、地理Bにおいて47問となっており、この点においては妥当で、アンケートの結果どうり受験生は時間内において、ひととおり解答をすることができたと思う。

マークシート方式による解答であるから、記入間違いが出やすいので、設問にも工夫が必要になると思われる。たとえば設問の言いまわしの簡略化をはかることであるとか、選択肢に工夫するとかという問題がおこるが、十分な配慮をお願いしたい。

(2) 共通問題 1

自然環境と人間生活を総合的に把握する問題として適切である。また設問においても難易の幅が見られ、この点でもよいと思う。

たとえばC問1・問2は学習した知識をもとに理解度をためす問題として望ましいと思われる。この設問に関しては、誤答率が高いが、これは出題には関係がなく受験生の判断誤りだと思われる。またB問1も選択肢に工夫がこらされていてよい問題である。D問3の「イグルー」については、枝葉末節的な傾向がみられたのではなかろうかと思われる。

また選択肢は、①－5、②－6、③－6、④－5、⑤－6、⑥－5、⑦⑧－9、⑨－8、⑩－8となっているので、整理をしてなるべく数を統一した方がよいのではなかろうか。たとえば⑨の「あざらし」・「牛」、⑩の「かまくら」・「竪穴式住居」などは一考を要するのではないだろうか。

(3) 共通問題 2

この問題も人間生活と自然環境を総合的に把握する問題として適切である。位置関係が十分に理解されていない受験生もみられるので、その点からもよい問題であると思う。

気候区分がある程度理解されている生徒には、やゝ平面的な出題であったとも考えられ、地図上に高原都市を一ついれるのも一方法ではないかと思う。

問2 aは誤答率が高かったが、受験生の熟慮不足と考えられ、短い文章の中に落し穴もみられ、よい設問であると思う。問2 cも誤答は受験生の熟慮不足で、よい設問と思うが前半の「小麦のほかに……」の文章と、後半の「企業的放牧による……」の文章が逆であったなら正答率はどのように変化していたであろうか。

「燕麦」は、「燕」が当用漢字にないと思うので、「えん麦」として出題された方が望ましいのではなかろうか。

(4) 地理A 3

単発的な設問でなく多くの中から選ぶ設問で、二つ選ばせる点がよく、苦心作であると思う。ただ受験生にとっては複雑な解答方法と思われ、そのために誤答がでるとすると、地理的理解度をはかるものとしては不十分となり、また解答技術が問題となるように思われるので、単純明確な解答方法がないか、検討をお願いしたい。

(5) 地理A 4

全般的に眺めると、既習の知識を総合すれば判断ができ、茨城・静岡・新潟と農業生産量及び工業出荷額において特色ある県を出題されたことは、苦労のあとがみられると思う。

たゞし高等学校の現状は、これらの統計数値については殆んどふれておらず、特に日本の工業については県別の統計ではなく、工業地域別に取り扱っており、どんなに工夫してもこのような統計を取り扱う時間的な余裕が生み出せない現状であることを考慮していただきたい。

統計年度については、未発表のものもあろうが、できる限り統一するように努めていただきたい。表中の人口増加率において、単位が記入されていないのは何か意図があったのであろうか。もしなければ単位をつけた方がよかったのではなかろうか。

問2において、単位が異なっているが、できる限り単位は統一していただきたい。米をtであらわすと、やさしくなるのであれば、農産物を変更するのも一方法ではないかと思う。問5・問6は、同じような考え方計算方法で、重複している感じもあるのではなかろうか。

日本についての出題は、受験生の所在地による有利、不利があらわれやすいので、出題内容に十分留意していたゞきたい。

(6) 地理A 5

世界史との関連もみられよい問題であると思う。特に問5はよいが、一つだけ選ぶのであったならば正答率はさらに高かったと思われる。

下線部の番号と、問の番号が対応していることを最初に示してはどうであろうか。

問1・問6においては、中国で羊の飼育数が多いということや、オーストラリアで羊毛の生産量が多いということは、大切なことであるが、それが世界の第3位であり、また30%を占めているということも、同程度の重要性をもっているのであろうか。暗記中心の統計問題であると、うけとられやすいので、設問形式を一考された方がよかったのではなかろうか。

また選択肢については、前述のごとく高等学校では神経を使って指導をする場合が多いので十分なる配慮をお願いしたい。

(7) 地理B 3

よく練られた問題で、全般を通じて難解ではないと思われる。

但し解答方法で、すべて正解を⑤とする点は、受験生にとってむつかしかったと思う。

国の選び方には一考を要するところがあるのではなかろうか。文部省の指導要領によれば「最初から世界を細分した取り扱いは避けるとともに主要な地域や国については、それを含む広域圏の一環もしくは中核として取り扱うこと」と記され、さらに「常に日本と比較、関連させて考察する態度を養うこと」と指示されており、高等学校では、国家単位では主要な国々と、日本と関係の深い国々しか学習する時間がなく、特にボリビアは教科書によっては記載されていないものもみられる。また歴史・宗教・言語・民族などのなかには、取り扱っていない国家もあるので、出題にあたっては各教科書による検討をお願いしたい。

(8) 地理B 4

全般的に無理のない問題である。地図による出題であったが、指導要領の地理Bの目標には「地図を有効適切に利用し、地図による表現力を身につけさせ……」と書かれており、今後受験生に地図に慣れさせる点からも、よい問題であると思う。

正答率が低いのは、組み合せのためで、この程度の問題は必要であると思う。

たゞ問1にあるサバナ性灌木林の用語については、記載されていない教科書が多く、学習されていない高等学校が大半であろうと思われる。

(9) 地理B 5

地図や表を使用した出題、O～Tは表だけではなく図中にも示された点、及び日本との関係の深い東南アジアを取り上げられたことは大いに評価できる。

統計数値の単位については、前述のごとく統一していたゞきたい。

問2においては、品目を間違えると必然的に解答が間違うので、設問形式に一考を要するのではないだろうか。このことは問3においても同様のことがいえると思う。もし（ハ38）が間違っていて（43）が模範解答と同じ場合には採点はどうなるのであろうか。品目名については単に統計表の数字の上からのみ判断させるのではなく、他に地理的事象などのヒントがあればよかったのではなかろうか。

「ホ」の品目については、タイの数値がはいっているので迷ったのではないだろうか。世界的にみてもさして多くなく、また今日わが国の輸入鉄鉱中に占める割合も多くなく、これらの国からの主要輸出品でもない鉄鉱より、他にもっと適当な産物はなかったであろうか。

Bについては、暗記中心の設問と考えられやすいので、設問形式を一考していただいてはどうであろうか。また配点は4点であっても、12問中4問とはやゝ多いのではなかろうか。

この問題では、日本との関係をおりこんでいただきたかったと思う。

3　試験問題の出題方法（試験時間・配点・問題文の表現・解答方法）等について

(1) 試験時間

アンケートにも示されているが、60分が妥当であると思う。

(2) 配　　点

問題文にも明示されており、地理A・Bにわたり問題数をそろえ、2つで正解答となるものについては4点の配点など、詳細に検討されており適切であると思う。

(3) 問題文の表現

全般的に語尾も統一されており整っている。

前述のごとく統計数値の出題にあたっては、単位を統一するようにしていただきたい。

図については、大陸の輪郭など、なるべく正確に出題されることを希望する。

(4) 問題文の配置

問題を作成する場合、その配置に考慮をお願いしたい。

共通問題Ⅱは、ヨーロッパ・アフリカの地図と気候グラフの設問は、次ページをめくらなくてはならず、地理AⅢでは、問題B～Eまでが解答の番号表を前ページをめくって求めなければならず、地理BⅣでは、ラテンアメリカの地図の問題は、大部分が次ページにまたがっていてみにくく、とくに問1は語群までが2ページにまたがっているので、受験生としては、はんさで余分の神経を消費し、地理の実力以外での間違いが生じやすいので、問題の作成ならびに校正の段階において十分な留意をお願いしたい。

(5) 解答方法

コンピューターを使用するため無理と思われるが、解答用紙からできるだけ必要でないものを除くこと（解答番号が120まである）と、解答する欄を大きくする方法はないであろうか。

4　その他について

(1) 社会科の中で、科目により平均点が異なるが、素点のまゝ合否判定の資料にならないように配慮されたい。

(2) 第1次共通学力試験日が、一日でも遅くなることを強く希望したい。1月中旬に実施されると、高等学校としては中途半端となり第3学年3学期の学習ができない恐れがあり、特に3学年で履修する科目については非常なしわ寄せとなるからである。

(3) 第2次学力試験については、同一の学部又は学科については、実施教科・科目を共通にするように努められたい。また専門科目と欠くべからざる科目の出題とするように、科目数の減少についても配慮されたい。

(4) 共通第1次学力試験以後、受験する大学に申し込むこととなるが、大学・学部により倍率に非常な差が生ずることが予想され（10月は、2校を申し込みその後大幅な変更が認められるから）国立大学を受験する機会は一度だけとなるため、第2次学力試験までの間に若干の調整期間を設けられないかを検討していただきたい。

(ウ)　全国地理教育研究会からの意見

1　試験問題全体について

(1) 全体として著しく無理・難解と思われるものはなく出題の苦心がうかがえる。地理Aと地理Bとで5問中2問を共通問題にしたのもよいし、出題の範囲もいちおう幅広く、一部に偏っているとはいえないのもよいことである。

(2) 地理A・地理Bの問題内容は、高校の教育課程に盛られている地理的内容についておおよそ網羅されている。出題の範囲のバランスなどを考慮した結果がうかがえる。しかし、これは出題されている事項が網羅的にピックアップされているという意味であってこの出題がそのままに高等学校の教育の正常な発展に寄与するとは言えない。なぜなら一つ一つの問題は吟味されているが相互の関連や総合的な立場から考え出された問題がきわめて少ないためである。

(3) 出題数は五題であるが、その中の設問数は従来の大学入試問題に比べきわめて多くかなりのスピードで解くことが要求される。地理Aは45、地理Bは47の設問がありほぼ1問1分間で解くことになる。また選択肢も多く、最低5個、最高10個でその平均は地理Aで7、地理Bで7.8である。また選択肢の並べ方に工夫を要するところもある。最初から不要とすぐわかる選択肢も多い。Iの［10］の6以降の選択肢はひどすぎる。誤りのものはなんでも選択肢に入れてよいというわけではない。

(4) 解答の方法がマークシート方式であるため出題形式も固定されがちであるが、どうも反射的に解答を要求するものが多い。もっと思考力を判断する出題を工夫し取り入れていく必要がある。

(5) IIや地理BのIVは見開き左右にする配慮がぜひ必要だ。

2 「地理A」と「地理B」の共通問題について

(1) Iはやさしすぎるという批評があると思うが、これでけっこう差がついているはずである。2・3などの選択肢はよく吟味されている。

(2) IのDの選択肢（問1）は単に用語のみである。もっと人間の生き方や生活のパターンを取り上げてはどうか。

(3) IIのヨーロッパ、アフリカの地図にニジェール川が記入されていると、都市(6)の位置が明確になる。また都市の位置もより正確に(3)は少し左下寄り、(8)は少し内陸寄りにした方がよい。

(4) 今回の試行試験では地形図の読図問題がなかったが、読図問題はあってもよい。ただし読図に支障のないよう印刷には十分気をつけてもらいたい。

3 「地理A」の問題について

(1) IIIの選択肢の短文の練り方にいっそうの工夫が必要。A、D、Eは比較的よいが、B、Cにはすぐわかる極端な書き方のものが目立ちすぎる。選んだ二つの文の記号の組合せから解答番号をさがすというひねり方に工夫があるだけのような気がする。

(2) IVの問題は、一番よく工夫がなされている。全国統一テストに特定の府県名をあげたら出身地によって不公平になるという批判を恐れず妥当なデータを選びよく工夫されている。

(3) 指導要領にある統計その他の資料を活用する能力を観るのに適当な問題である。

(4) 問5と問6は計算をさせるという意図なのか。人口増加率を正しく理解しているかどうかはわかるが、実際計算すると時間がかかる。むしろ、人口増加の推移を折れ線グラフなどで示し、将来人口の予測をさせるなどの出題にしてはどうか。

(5) IIの問題は、問題文が長く読むのに時間がかかる。しかも、あとの問いはみな前文を読んでも読まなくても解答に関係のないような問題である。また（問6）のパーセントを求める問題は、現場では統計の年(度)に留意というのが指導の常識である。基礎的な統計数値は記憶させるべきであろうが、こういった単純な出し方でよいのだろうか。

（問7）の選択肢も一考する必要がある。リンカーンやレグホンを入れるのはどうなのか。

4 「地理B」の問題について

(1) IIIの選択文の長さは、全く同一にならないにしてもほぼ同じ長さにする必要がある。遇然かも知れないが誤りのあるもの4つのうち21・22・23は一番長い文がいずれも誤っている。

(2) IVは選択肢を組合せによって10ずつあげ、まったく電算機を使用するための問題としかいいようがない。

(3) Vの地図には縮尺が入っていて大変よい。出題者によって差が出ないようにしてもらいたい。(ハ)の米の生産量のところで輸出国の上位2位を問うこと、P、Qとイ・ロ・ハの生産量の多いことの中から「へ」を問うのに（問2）の島の名をあげたことなどの配慮はよいことである。

(4) このVの問題は基礎と応用がうまく組合せられて適当な問題になっている。

(5) 地理Aの平均点（61.60点）にくらべ、地理Bは（48.51点）と大変大きな差があらわれたが、これも受験生にとっては不安な材料である。同一とはいかないにしても、ほぼ同じ平均点になるような配慮が必要である。

(6) 共通第1次学力試験が2～3年で中止になるという、かっての進学適性検査の二の舞いを演じることなく、現場の声を取り入れ尊重される新入学制度を確立してもらいたい。

(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（地理）

1 各問題の出題意図

地理Aの5問（I～V）および地理Bの5問（I～V）のうち、IとIIとは、地理A・Bに共通なので、これらを〔共I〕〔共II〕と呼び、それ以外は〔AIII〕〔AIV〕〔AV〕および〔BIII〕〔BIV〕〔BV〕と呼ぶことにする。

〔共I〕……世界の高緯度地域について、総合的な理解度を見ようとしたものであり、地形、気候、植生という自然条件のほかに、そこでの人間生活や、鉄鉱石積出しのための不凍港について問うた。

〔共II〕……ヨーロッパおよびアフリカの6地点の月別平均気温と降水量とを、地図とグラフによって読みとらせようとしたものである。世界の気候区の概要とそれぞれの基本的特色が理解できていれば解答できる問題であり、地図やグラフを用いての学習の達成度を見ようとしたものである。なお、問題後半は、4地点について、その付近の産業の特色を問うた。

〔AIII〕……世界の発展途上地域の人口増加、世界の茶生産のモンスーンアジアへの集中、地中海沿岸での樹木作物栽培の発展、熱帯の林業の未発展、日本の臨海工業地域の発達、という五つ

の事実につき、その要因を、それぞれ五つの文から二つを選ばせる形で答えさせた。もし要因について的確に理解していれば、五つの文を読みくらべることにより、おのずから正答が導き出せる筈である。

〔AⅣ〕……日本の七つの都道府県について、面積・人口・農業・工業などに関する統計を掲げ、それについて設問した 統計数値そのものを記憶しておくような必要は毛頭ない。ただ各itemの性格や各都道府県の特色をおよそ理解しておれば、容易に解ける問題であり、統計数値というものの考察を、どの程度習得できているかを見ようとした。

〔AⅤ〕……世界の羊毛工業と牧羊業について述べてある16行の文を読ませ、下線部について設問した。高等学校の地理教科書にも出てくるような難易度の文であり、そのような文中での用語や地域名について、的確かつ具体的に理解しているかどうかを見ようとした。

〔BⅢ〕……ポーランド、オーストリア、エチオピア、ボリビア、スリランカ（旧セイロン）の5か国について、それぞれに関して述べた四つの文を掲げ、そのなかから、誤りのあるものを選び出させるという形で、上記5か国についての理解度を見ようとした。

〔BⅥ〕……ラテンアメリカの地図を掲げ、各地域の植生、高山都市、鉱産資源、主要島嶼、人種について設問し、これらの事項の意義ならびに分布やそれぞれの名称などが、的確に理解できているかどうかを見ようとした。

〔BⅤ〕……東南アジアの地図を掲げ、フィリピン、インドネシア、マレーシア、カンボジア、タイ、ビルマの6か国について、農産物・鉱産物の生産統計や、輸出品目、宗教などについて問い、これら諸国の性格が正しく理解できているかどうかを見ようとした。

2　出題形式について

(1) 地理の学習にあたっては、地図・グラフ・統計表の活用ということが重視されるべきである。本年度においても、正味8問のうち4問において、地図・グラフ・統計表を掲げ、それらを用いて設問することにより、学習過程でのそれらへの習熟の程度を見ようとした。

(2) マークシートで解答させる方式では、例えば選択肢を五つ与えて、そのうち一つを選ばせるならば、全く任意に選んでも20%の確率で正答が得られることとなる。この「まぐれ当たり」の可能性を、できる限り小さくすることが望ましいわけであるが、本年度の〔AⅢ〕においては、a～eの五つの選択肢から、該当するものを二つ選ばせ、その組み合わせで解答させた（組み合わせの種類は10）。そうすることにより、「まぐれ当たり」の可能性を小さくしたのである。

(3) 選択肢の数をふやすことには限度がある。本年度の〔BⅢ〕の場合、各設問での選択肢は四つずつであり、そのなかから誤りのあるものを選ばせたわけであるが、もし単純に一つだけを選ばせると、25%の確率で「まぐれ当たり」が生ずることになる。そこで、それを避けるためには、誤りのあるものを一つだけとせず、二つまたは三つが誤りであるようなケースも設けて、組み合わせによって答えさせる方法があるが、そうすると、組み合わせの数が過多となる。そこで「誤りのあるものは一つか、またはすべてが正しい」ということにし、すべてが正しいという選択肢を加えた。それにより選択肢数は4から5にふえただけであったが、すべて正しいという場合も想定させることにより、問題としては格段にむつかしくなった。

(4) 地理の学習においては、地名というものが不可欠であり、地名を覚えるということは、ある程度止むを得ないことなのであるが、しかし小さな都市名まで暗記を強いることは、決して望ましいことではない。本年度の〔共II〕においては、その点を考慮し、ヨーロッパ・アフリカの8都市を地図上に示し、1から8までの番号で示した。そして、例えば3はエッセン、7はキサンガニであるが、これらの都市名を知らなくても、解答に差し支えないようにした。この〔共II〕は気候に関するものであり、a～fの六つの気候グラフがどの都市のものであるか、都市名を羅列したなかから選択してもよかったわけであるが、問題の性質上、都市名をおぼえていることよりもむしろ、地図上の位置からその気候の特性を判定させるほうが適切であると考えたのである。

(5) 上記と同様の趣旨から、〔BⅤ〕においては、フィリピン、インドネシア、マレーシア、カンボジア、タイ、ビルマの6か国を、国名は全く掲げずに、地図上にO、P、Q、R、S、Tとして示した。この問題の場合には、国名を知らなくても解答できるわけであるが、それよりむしろ、最近の受験生のなかには、国名を知っていても、それがどこにある国か、地図上でおさえることのできないものが少なくないように思えるので、その点をチェックし、そして国名だけの丸暗記ではいけないということを、出題を通じて示したかったのである。

3　解答結果の検討

大問別に平均得点をみると、最も高かったのは〔AⅢ〕であり、逆に最も低かったのは〔BⅢ〕であった。〔AⅢ〕については、上記2．b）に述べたように、五つの選択肢から二つを選ばせて、その組み合わせによって答えさせたのであるが、二つとも正しく選択した場合だけでなく、二つのうち一つだけでも正しく選んだ場合には、満点の半分を与えるという採点方法をとったために、結果的にやさしくなりすぎたきらいがあった。もし、二つとも正しく選択した場合だけに配点す

る方法をとったならば、平均得点は低下し、おそらくほかの大問なみになったと思われる。すなわち、問題の形式・内容は同一でも、採点方法を変更すれば、得点が大きく変化することになり得るわけである。

一方、〔BIII〕についてみると、上記2．c）に述べたように、四つの選択肢のうち「誤りのあるものは一つか、またはすべてが正しい」としたために、受験生に迷いを誘発し、結果的にたいへんむつかしくなったようである。また内容的にみても、出題した5か国が、高等学校の地理Bの教科書内容からみると、それほど重視されておらず、教科書での記述が比較的簡略な国であることも、平均得点の低かった原因であったと思われる。

さらに、個々の設問別にみると、正答率のかなり低かったものが、いくつか見受けられる。そのような結果を生じた原因について考えてみると、次の通りである。

(1) 〔共I〕の 5 6 ……最暖月10℃ということの意味がわかっていない。気温というもののもっている具体的意義について、認識が浅いように思われる。

(2) 〔共II〕の 18 ……文章後半の「企業的放牧による牧羊業」という叙述が見落されている。文章の前半だけを読んで、早合点した受験生がきわめて多かったようである。

(3) 〔AIV〕の 27 ……表中の数字の単位が、tの場合と1000tの場合の両方のあることが見落されている。数値の単位に対する配慮に欠けた受験生が多いようである。

(4) 〔AV〕の 36 ……中国が広大な乾燥地帯を含んでいることについて、認識が浅いようである。

(5) 〔BIII〕の 22 ……宗教（この場合プロテスタントかカトリックか）は地域社会の性格にとってきわめて重要なことなのであるが、その認識が不足しているようである。

4．出題範囲および問題への反響意見

連絡協議会の席上、高等学校の3人の先生がたから、率直な意見が述べられたが、そのうちとくに傾聴すべきと考えられたのは、次の諸点であった。

(1) 選択肢のなかに、ほとんど無意味に近いものが見受けられる。強いて選択肢の数を多くしなくてもよい。

(2) 〔AIII〕のように、誤っていることを判定させる文には、明確な誤りが含まれていることが必要である。時と場合によっては、正しいと言い得るかも知れないような文は、避けるべきである。

(3) 地理Aの場合、高等学校の地理Aでは、日本のことを扱う時間がきわめて少ないので、その点

を顧慮してほしい（ただし、中学校では、日本についてかなり学習している筈であり、したがって大学入試において、日本のことを出題してはいけないという考え方は、必ずしも妥当ではないと考えられる）。

(4) 地理Aの場合、教科書のなかで扱われている全分野から出題してほしい。

(5) 地理Bの場合、なるべく世界各地から出題してほしい。

以上のほかにも、傾聴すべき点が多くあったが、それらについては、別途に報告されるので、ここでは省略する。

(3) 数　　学

(ア) 各大学の意見

数学の試験問題について、24国立大学、2公立大学、計26大学から意見が提出された。

1 「解答記入上の注意」について

(1) 数学の「解答記入上の注意」が複雑すぎるので、簡略化してほしい。 (6)

(2) 「注意」3(2)の複号の答え方について、解答記入欄に「＋」、「－」の他に「±」の欄を作って、ダブルマーク（同一行に2以上のマークを許すこと）を避けた方がよい。「注意」4、(例4)について、この例のように欄不足と答えさせることを要求するのはよくない。誰しも解答欄は正解が十分記入できるよう準備されているものと判断するであろうから、受験者は自分の解答を誤りと判断して悩む可能性がある。「注意」4、(例2)に関して、根号(√‾)、小数の記録ができるよう解答記入欄の工夫が望まれる。 (1)

(3) 解答の記入方法が難解なため解答記入例などをもっと使用し、わかりやすくしてほしい。(1)

(4) 数学の解答の記入方法は、他の教科に比して極めて複雑なので、この教科だけでも「解答記入上の注意」を解答開始前に読ませてはどうか。 (3)

(5) 解答記入法、たとえば[ア]/[イウ]で½の場合、$1/{}_{*2}$と書くか、$5/{}_{10}$と書くか受験生として紛わしい。記入例でも記したらどうか。 (1)

ア　1の(iii)と2の(i)および3に記された＊と解答用紙に記された＊とは同じ「書体」にした方がよい。

イ　2(i)の「欄が不足すれば……付加する』とあるが、もしそれが正答の場合はどうしてそれを読みとるのか疑問である。

(6) 数学の解答記入上の注意について、＊印の説明が不十分であり、例題も不適切であると思われるものがあった。 (3)

2 問題の一般的内容等について

(1) 数学全般の意見について

ア　数学Ⅰについて

㋐ 問題Ⅰは易し過ぎて高校生の問題としては適当でない。 (1)

㋑ 問題Ⅱは問題の意味を捕捉するのが困難である。 (1)

㋒ 他は概ね妥当と思われる。 (1)

イ　数学一般について

概ね妥当と思われる。 (1)

ウ　全体について

㋐ 問題が縦で解答が横というのは不都合、どちらも縦に統一すべきである。 (1)

㋑ 程度は適当であるが、内容と設問が拙劣であり、もっと工夫がほしい。 (1)

㋒ 「数学Ⅰ」と「数学一般」はたとえ共通の問題があるにしても別に印刷した方がよい。 (1)

㋓ 数学の問題の解答形式はわかりにくく、かつ数学的とはいえない表現方法の形式で解答させている。 (1)

(2) 共通問題Ⅰについて

9が9＊＊か＊＊9か009か「通常書く順」という説明だけでは不明確である。むしろ、3つの欄を用意した以上、3桁の数が正答となるような問題にすべきである。 (1)

(3) 共通問題Ⅱについて

ア　共通問題Ⅱについて、設問の意味がわかりにくい。「(i)(推論)で述べていることが（結論）とは無関係に判断して」の「判断して」という言葉はいらない。また、(iii)の中の「ほぼ十分」「非常に不十分」という言葉は不適当である。 (2)

イ　主観が入ると思われる問題を除いてほしい。例えば、数学P．10共通問題7、8等は望ましくない例だと考える。 (1)

(4) 数学Ⅰ問題Ⅳについて

(ii)は、強いて「ひらめき」を要求したのではないとすれば、当りはずれのある問題で、したがって良問とはいえない。 (1)

(5) 数学Ⅰ問題Ⅴについて

ア　問題Ⅴ(i)$\frac{\boxed{エ}}{\boxed{オカ}}$は、記入の仕方がわからない。 (1)

イ　Ⅴの「3冊のうち所用のものを引き抜いて」というのは「1冊だけ引抜く」のかどうかわからない。 (1)

(6) 数学一般問題Ⅵ～Ⅷについて（選択問題）

ア　Ⅵについて

(iii)とⅤは重複している。強いて出題するとすれば順序を逆転した方が良い。

(iv)は他から独立しているが、出題意図は不明である。(1)

イ　Ⅶについて

行列の積の定義と、2点を通る直線の方程式の公式そのものの問題であって、数学的内容に乏しい。(1)

ウ　Ⅷについて

良問であると思う。(1)

3　そ　の　他

高校教育の達成度を見る目的であれば本問題は割合よい問題である。

あらかじめ届け出ていないのに数学一般を受験した者が約50名いた。(一部高校において、受験生に対する指導ミスがあったようであるが、その他、問題冊子に誤解され易い点もあるのではないか。)(1)

(イ)　共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（数学）

1　試験問題の構成と内容について

(1)　数学Ⅰと数学一般の共通問題を多くすることは無理である。今回の試行テストにおいては共通問題が5題中3題もあるが、数学Ⅰと数学一般の共通分野は、数学Ⅰあるいは数学一般の1割程度にすぎない。この範囲から5題中2題以上の共通問題を出すことは無理である。数学Ⅰ、数学一般の選択者の学力比較という目的かも知れないが、これほど共通範囲の少い科目において、それは不可能である。

(2)　数学一般の出題内容は、選択単元の関係もあるのでまず妥当と思われるが、数学Ⅰに関しては、論理・集合・確率への偏りが極端すぎるように思われる。今回の試行テストは、過去の試行テストに出題されなかった分野で、問題形式もこれまでになかったものを意識的に取り入れたというのであれば止む得ないが、受験生にとって、ただ一回しかないテストが、このように偏った出題であれば、思わぬ番狂わせも生じるであろうし、生徒の共通1次試験に対する認識にも悪影響をもたらすであろう。

写像・関数（2次関数・3角関数・指数・対数関数など）・図形と方程式・ベクトルなどを含めた広い範囲の内容を出題して欲しい。

2　試験問題の範囲と程度・設問数等について

(1)　中学校の範囲からの出題は極力避けるべきである。高等学校の数学を学習することによって中学校の内容は当然深められるはずであるから、中学校の内容を出題してもよいことにはなろうが、試験の範囲が数学Ⅰまたは数学一般となっている以上、それが中心になるべきである。今回の試行テストのように、中学生の学力で約7割が解きうるということになれば、高校卒業生に対する試験問題としては決して妥当であるとはいえない。高校でまじめに数学を学習して、その知識・学力を身につけている生徒と、中学校卒業程度の学力しかない生徒との差が現れないようでは、かえって高校教育の正常化を阻害する結果になる虞れがある。仮に中学校の内容から出題するにしても、高校で学習した数学がその解法に役立つものでなければならず、たとえ止むを得ず出題する場合も高々1題であって欲しい。

(2)　共通第1次試験は、従来の大学入試にあったような徒らに技巧を用いさせる難問・奇問を排除し、入試によって高校教育が歪められるのを避けることが一つの大きな目的であろう。共通第1次試験の結果の利用方法が、大学によってまちまちであるため、この試験の性格が曖昧なものになっているのは遺憾であるが、とりあえずここでは学習到達度テストと思考力テストの両方の性格を持たせたものでなければなるまい。

技巧的な問題、範囲を逸脱した問題を避けようとした結果が今回の試行テストのような出題となったのであれば、それは行過ぎであろう。数学Ⅰにせよ数学一般にせよ、範囲はかなり広く、重要な事項も多い。その基本が身についているかどうかを調べる意味では、同じ問題が何年間も連続で出題されてもよく、またその方が望ましいとも言えよう。昨年度の専門委員会の報告の中に「出題の類型化、固定化をまねき、将来出題材料の涸渇による難問の出題や受験対策的高校教育の弊害をまねくおそれのある……」とあるが、学習到達度テストの場合は類型化、固定化は当然であろうし、思考力テストの場合、出題材料の涸渇や出題の類型化をいうのは研究不足ではなかろうか、難問・奇問でない良問はいくらでも作りうると思う。現在の高校教育が入試によって歪められているのは単に難問・奇問が出題されるからではなく、基礎的な問題、例えば簡単な定理の証明や、易しいが数学的には重要である問題が姿を消しつつあることにも起因していると思える。

3　試験問題の出題方法、その他

(1)　試験時間について

試験時間は120分は必要である。これによって、できるだけ多くの分野から出題が可能となると共に、問題の程度に一段と傾斜を付け得ることとなる。更に、じっくりと思考する能力を見ることもできるであろう。

(2) 問題文の表現について

問題文の表現には細心の注意が必要である。例えば、問題Ⅱについて、出題の意図は十分に評価すべきものであるが、問題文の表現については甚だ不適切であると言わざるを得ない。特に「ほぼ十分」「非常に不十分」などは数学の表現としては無いものと言っても過言ではあるまい。

また、表現の曖昧さのために2通り以上の解が考えられるような問題は、たとえ採点の際に十分考慮されるとしても、受験生に与える心理的負担や時間のロスを考えれば、当然忌避されるべきものであろう。

なお、問題Ⅱ・イの（推論）について、最初に $y=x-2$ のような誤りをもってくることは、「推論の誤り」でなく「単なる書き誤り」でないかと誤解する受験生も多いと考えられるので、この形の設問に対しては不適切であろう。もし、このような主旨の問題を作るとすれば、むしろ「同値でない式の変形」などをとり入れる方がより妥当であると考えられる。

(3) 解答の記入方法について

表現法をできるだけわかり易くし、その方法を統一して（年ごとに変えるのでなく）事前に受験生に知らせておくべきである。できれば「解答記入上の注意」を受験票と同時配布し、試験の際にも同じものを再配布して欲しい。

表現法については例えば

「9は　9＊＊　としないで　009とする」

「0は　$\frac{0}{1*}$　としないで　$\frac{0}{01}$　とする」

「−2は　−2＊　としないで　−02とする」

などの方がより常識的な表現方法であり妥当と思われる。

(4) 採点法について

採点には、偶然性が入らぬよう、しかも適当に部分点が与えられるよう十分な工夫がなされなければならない。特に部分点については、1問あたりの配点が大きいことからも絶対に必要である。

(5) 出題の形式について

問題Ⅱを除いて、選択肢形式を避けて数値記入形式を採用したことは誠に結構である。

なお、困難な面があることは理解できるが、思考過程を重視し、ちょっとしたケアレスミスが致命的になるようなことがなるべく避けられるような問題を出題して欲しいものである。

(6) 問題用紙について

問題の冊子は、数学Ⅰと数学一般とを別々にする方が良い。

これによって、数学Ⅰで受験した生徒の中の1029名（41084名中の2.5％）が無効となったような事態の大部分が回避されるのではないかと思われる。

(7) 成績の公表について

成績の発表は、平均点・最高点・最低点の他に、最小限度標準偏差を加えて公表して欲しい。更に、大問の配点のみでなく、可能な限り小問の配点も公表して欲しい。

(ウ) 日本数学教育学会からの意見

高等学校における必修の内容についての学習到達度を判定するという共通第1次試験実施の目的及び大学入試が高等学校の現場に与える影響等の観点から、試行テストについての意見はつぎの通りである。

(i) 高等学校数学科学習指導要領に準拠した用語、記号、表現を用いてほしい。

例　x の3次式　　連立1次不等式　　4角形

(ii) 特定領域に片寄ることなく、各領域に万遍なくかつ基本的なオーソドックスな問題を出題されたい。

例. 今回の試行テストでは、関数の領域から出題されていない。

小問形式での出題も考慮出来るし、推論の問題(Ⅱ)は苦心されたことは分るが、その苦心の割には評価出来兼ねる問題だろう。

(iii) 題意がはっきり読みとれる設問の文章表現、あまりまごつかない解答形式を十分配慮されたい。

例. それらの正否ないしは十分性を……

ほぼ十分であるが、少し足りない点が……

非常に不十分……

受験した高校生385名を対象とした本学会の調査によると、「設問の文章が分かりにくい」と答えたもの309名、「解答の形式にまごついた」と答えたもの346名であった。

(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（数学）

当部会においては、国大協における数学研究専門委員会が指摘した難点を考慮し、過去のものとは大幅に異なる方式を試みた。そのことに起因する批判については、それを検討し、今後の改善に資したいと考える。

1 出題の意図

(1) 数学Ⅰと数学一般との関係について

数学一般の選択が許されるものは、数学一般が履修科目であった者に限るという制限の可否は当委員会の論ずることではないが、このような制限の存在するという事実は、「数学一般の出題は数学Ⅰより易しくしてもよい」ということを示唆しているのかも知れない、と感ずる。しかし、同じ試験における選択科目である以上、指導要領に示されたそれらの履修内容から見た意味で平等であるべきであり、そのように努力した。しかしながら、受験者が異なるのであるから、平均点や、標準偏差の比較だけでは平等であったかどうかの判定は全然できない。そこで試験の結果から反省すべき材料を得るためには2題または3題の共通問題を両者の共通履修範囲から出題して得点状況の比較をすべきであろうと考え、結局、共通問題を3題出題したが、数学一般選択者が僅かであったため、所期の資料は得られなかった。

(2) 全般的意図

(i) 知識よりも、理解をなるべく判定するような問題を出すこと。

(ii) 国大協の実地研究における「実験」がまだ不足していると感じられるような面についての実験を、なるべく多くしてみること。

の2点を特に心がけた。

(3) 各問題について

〔Ⅰ〕は、組合せの基本の理解を問うものである。

〔Ⅱ〕は、マークシート方式では、証明問題が出題できず、また、計算問題でも思考過程の採点ができないので、多少なりともこの方面を補う出題の一形式として試みたものである。

〔Ⅲ〕は、簡単な幾何学図形に関する理解を験すものである。

（以上3問は、数学Ⅰ、数学一般共通）

〔Ⅳ〕は、極めて簡単な、数式演算である。

〔Ⅴ〕は、確率の基本的考え方についての理解を験すものである。

（以上2問は、数学Ⅰ）

〔Ⅵ〕は、微分係数、平均変化率についての理解を問うものである。

〔Ⅶ〕は、行列についての計算力を験すものである。

〔Ⅷ〕は、線形計画の基礎となっている連立一次不等式についての計算力を験すものである。

（以上3問は、数学一般、ただし、ⅦⅧは両者のうち一問選択）

2 解答形式について

数学の試験を行なうのに、マークシート方式を採用することは適当ではない、ということは明白であるが、採用せざるを得ない以上、その制度のもとで、なるべく良い方式を考える努力が必要である。この点について、国大協の数学研究委員会もいろいろと模索し、次のような方式をとった。

(i) 解答の候補の数を多くする。

(ii) その多数の候補の配列は、一見してわかるように工夫する。

この方式の欠点は

(iii) 数学Ⅰと数学一般とに、別々の解答用紙を必要とする。

(iv) 出題側にとって、解答候補の選び方がむつかしい。

(v) 問題セット毎に、別々の解答用紙を必要とする。

これらのうち特に(iii)は、試験実施上、大きい難点であった。そこで、今回はこれらの欠点を除くために、解答は、通常の多肢選択による解答を求める場合を除いて、数値、単項式、または、符号で答えるという限定を置き、各解答部分に、幾つかの解答欄を与え、「得られた答を通常書く順序で順次マークして行き、欄の過不足は＊印で処理する」という記入方式を採用した。これによって、国大協の委員会の採用した方式の特徴(i)、(ii)は失なわれずに、欠点(iii)～(v)を解消させた。

3 出題意図と解答結果

(1) 部分集合の数を数えるという問題になじみがなかったのか、成績はあまり良くなかった。3つの解答部分全部に正しい答を得たものは18％に満たなかった。なお、欄が余まるような解答欄を与えた場合の反応の実験をこの問題で行なってみたが、例えば、第1の解答部分の答が9であることがわかった受験者のうち、正しい答え方（9＊＊）以外で答えたものは9％

に満たず、第3の解答部分の答が96とわかった受験者のうち、正しい答え方（96＊）以外で答えたものは、7％に満たなかった。ことことは、マークシート記入の訓練を受けて来ていない高校生にとっては、この新方式は、素直に受け入れられたものと解される。

(2) 多肢選択方式であったため、点数の分布は、大変よかった。また、答案自身をみても、出題でねらった点はうまく反映されていた。従って、問い方については反省すべき点はあるが、こういう種類の問題を出したことはよかったと考える。

(3) 成績はほぼ予想通りであり、むつかしさも標準的と思っている。

(4) 「数学が全然できない」といえる人と、「そうでもない人」とを区別する問題のつもりで出題したものであるが、0点が5％を越えた。従って、この程度の易しい問題も出題する意味が大いにあると考える。

(5) 標準的むづかしさの問題と思っていたが、成績は予想より良く、過半数の受験者が50％以上の得点を得た。

なお、数学一般は、受験者数が僅少であったため、論評を差し控えたい。

4 出題範囲について

数学Ⅰには、いろいろの話題が含まれている。100分の試験で、全ての話題にわたった出題には無理がある。従って、各問題セットでは出題の偏りがあるもの止むを得ないが、何年かの間を通覧すれば、どの話題も出題されるよう、今後の出題者が配慮する必要があろう。数学一般についても同様であろう。

なお、小学校、中学校における数学の履修内容は数学Ⅰ、数学一般の共通の基礎知識であるから、例えば、中学校の数学の範囲で解ける問題も出題候補に考慮すべきであると考える。

なお、試験時間を長くすれば、出題の偏りを少なくすることが容易になるので、試験時間を120分とすることを希望する。

5 出題についての反響

(1) 受験生に対するアンケートで、問題文が難解というのが多かったのは、問題Ⅱが新しい試みであって、理解に困難を感じたものと解する。今後、この種類の問題を出題する場合には、問い方には更に工夫をして、もっとよい形式を見出したい。（問題Ⅱについては、一般からもいろいろの批評があった。出題意図は評価されていたが、問い方に対する批判がいろいろあった。）

(2) 問題Ⅳは、易しすぎるとの非難が聞かれたが4で述べたように、出題の意義はあったと判断している。

(3) 出題範囲について、(i)論理、集合、確率への偏りがきつい、(ii)中学校の数学の範囲で相当多くが解ける出題は、望ましくない、などの意見が寄せられているが、今回の出題において、「最後の実験」という意味でのいろいろな企画ゆえに、特に強く現われた面に対する批判であると考えられる。本番は当然これとは異なる筈であるが、4で述べたように、各問題セットを見れば多少の偏りがあるという状態は許容されるべきであると考えている。

(4) 解答記入法についてのいろいろな批判があるが、その多くは「大人の感覚」による批判であるように感じられる。例えば、「(9＊＊)は(009)で答えさせよ」というのは、現今の事務経験者にとっては自然であるが、高校生は特別な訓練は受けていないのであるから、(9＊＊)でも(009)でも、決められれば容易に従うということが、今回の実験で、はっきりしたと考える。また、例えば、2欄与えられた部分の答がaである時、(009)にならうとなれば、(0 a)になり、数学的には大変まずい。他方、(＊＊9)、(＊ a)の形に統一する考えもあり得るが、これは、2欄に166…を記入する時に別のプリンシプルを導入しなくてはいけなくなる。また、＊を使うのを止めよ、という主張もあるが、問題の性質上どうしても必要な場合があるので、稀にしか使わないにしても、プリンシプルとしては、統一したものを決めておく必要があるのである。このような点を考慮し、「基本的ルールは、なるべく簡単である方がよい」という理由により（9＊＊）型の解答記入法を決めたのである。

(4) 理　　科

ア　物　　理

(ア) 各大学の意見

物理の試験問題について、5国立大学からの意見が提出された。

① おおむね妥当である。(1)

② 1つの問題で設問を減らし、いろいろの分野からの出題がある方がよい。(1)

③ 「物理」は易しすぎるのではないか。(1)

④ 問題は非常によいと思う。(2)

(イ) 共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（物理）

1　試験問題の構成と内容等

(1) 物理Ⅰの内容は大略次の4つの分野に分けることができる。

1．運動と力（速度と加速度、運動の法則）

2．エネルギー（力学的エネルギー、熱と仕事）

3．波　　動（波動、音）

4．電界と電子（電界、電子と原子）

問題Ⅰは主として第1の分野から出題され、問題Ⅱは第3の分野、問題Ⅲは第4の分野から出題されている。ただ、第2の分野からは、問題Ⅰの問6で運動エネルギーを、問7で仕事を出題しているだけで、第2の分野の比重が大変軽いのが目立った。物理の各分野から片よりなく広く出題されることが望ましい。

(2) 各問とも、物理Ⅰに含まれる基本的な概念や法則の理解を問う問題であるが、問題Ⅲ、Aの問1のように、公式をそのまま答えればよい問題はあまり望ましくない。知識を具体的な場面に応用したり、思考力を見る問題を中心に出題してもらいたい。

大学入学試験問題は高校の教育に大きな影響を及ぼしている。共通第1次試験は高校に於ける学習の達成の程度を評価するものであるから、その問題は高校に於ける学習の目標となるものでなければならない。高校に於ける望ましい学習を助長するような試験問題を要望する。

(3) 今回の試行テストでは、実験に関する問題が出題されなかった。高校では、実験を通じて物理の理解を深めるために生徒実験にかなりの時間をさいているので、大問のうちの1問は実験を題材にした問題にするのが望ましい。

(4) 問題中の物理量の値は、単なる仮定の値ではなく、自然に則した値にすべきである。例えば、問題Ⅲ、Bの3.0×10^{-15}クーロンの電荷は何を考えてこの値にしたのか。電子やイオンの電荷、或いは摩擦電気など自然な、身近にある電荷の例を用いる方がよい。

(5) 問題Ⅲ、Bの問1～問3は似た内容の問である。問1又は問3のいずれかを省いて、その代りに、この図について別の設問をもうけた方がよい。例えば、D点における電界の強さや、電荷にはたらくクーロン力の大きさなどいろいろとあろう。

2　試験問題の範囲と程度、設問数等

(1) 問題の範囲は物理Ⅰの範囲から逸脱しないようよく考えられている。しかし、物理Ⅰと物理Ⅱは便宜的な区分であって、物理現象にこのような劃然とした境界があるわけではない。したがって、物理Ⅰの範囲を出ないよう厳密に考えると題材が制限され、場合によっては不自然な問題になってしまう。若し物理Ⅰの範囲をこえるおそれのある題材をとり上げる場合には説明を丁寧に加えて、物理Ⅰの知識で十分理解しうるよう工夫する必要がある。

(2) 問題の程度は大体よいが、正答率80～100％の易しい問題が多く、一方正答率20～40％のや、難しい問題がほとんどなかった。いろいろな難易の段階の問題を交えて出題し、難易の程度に片よりがないのが望ましい。尚、正答率90％以上の問もあったが、選抜試験の問題としては疑問がある。検討をお願いしたい。

(3) 設問数は、大問を分野別にする場合は4問、各分野を混えて3問の程度が適当と考える。小問については、今回は21問あったが、この程度の問題ならば、アンケートからもうかがえるように、かなり時間に余裕が認められるので、小問数は25ぐらいまで増しても無理がないと考えられる。

3　試験問題の出題方法

(1) 時　間

物理の試験時間は60分が適当である。

(2) 配　点

大問の配点だけ示して、小問の配点が示されなかったのは如何なる理由か、理解に苦しむ。

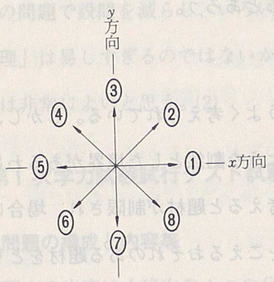
受験生には個人の成績を知らせず、自己採点をさせて、第２次試験の志望大学を決めさせるのであるから、小問の配点を示すことは欠くべからざる条件である。是非、小問の配点を明示されたい。

(3) 問題文の表現

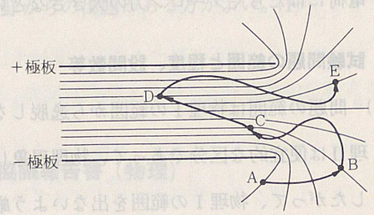
イ．単位の表現は親切でよい。例、問題Ⅰ**問５**、N（ニュートン）**問６**、J（ジュール）

ロ．問題Ⅰ**問５**の図２はx軸、y軸の長さが短く、切れ目があって分りにくい。次の図のようにx方向、y方向とかけば分りよくなる。

問題Ⅰ　図２



問題Ⅲ　B図



ハ．問題Ⅲ、Bの図は電荷の＋－の符号の位置は誤解をまねきやすい。図をもう少し大きくし、平行板の部分を広く、平行板外の等電位線の範囲を少くし、＋極板、－極板を記入するとよい。

ニ．解答群の並べ方は統一すべきだ。小さい数値から大きい数値へ、数直線の順序に並べることにきめておくと分りやすい。大部分の**問**では、この順序になっているが、問題Ⅰの**問７**と問題Ⅲの**問１～問３**では正の数値が先、負の数値が後になっており、問題Ⅱの**問３**では大きい数値から小さい数値の順に並べてある。上記のように統一することにより、解答群から選ぶときの「うっかりミス」を少くすることができよう。

4　そ　の　他

(1) 試験問題の誤りについて

理科では化学Ⅰと基礎理科に問題の訂正がついており、他の科目にも誤りがあったと聞いている。問題のミスは絶対に出さないよう強く要請する。ミスをチェックするシステムを確立していただきたい。

(2) 得点の分布の公表について

共通第１次試験の各科目別及び合計点の分布を公表してもらいたい。この件は高校長協会からも要望されているが、この機会に重ねてお願いする。第２次試験受験のチャンスは１度だけであるから、受験生に出来るかぎりの情報を与え、慎重に第２次志望大学を決定させたい。少くとも各科目別、及び合計点の分布が必要である。

(3) 予備選抜（足切り）について

第２次試験の出願者に対し、かなり多くの大学が予備選抜を行うことになっているが、これは、一発勝負の幣をなくそうという大学入試の改善の精神に反するばかりでなく、たった一度の受験のチャンスさえ奪うことになる。昭和54年度は新制度で行う第１回の大学入試であるから、未知の要素も多く、受験生、父母の不安は大変なものである。そこで、次のような配慮をお願いしたい。

第２次試験の出願は１校に限らず２校まで認めること。現在でも併願が認められている。こうすれば、１校に足切りされても、もう１校受験可能であるし、国立大学の試験日は同じであるから実受験者数は現在の予定と変らず、第２次試験に不都合を生じない。

(ウ) 日本理化学協会からの意見

1　問題の程度

３題とも理工科志望者に対しては適当であり、文科系志望者にはやや難かしいと思う。

選択者の志望学部別の集計が示されてないのではっきりはいえないが、文科系の受験者で物理を選択するのは、その１割位ではないかと思われるので問題の程度としては適当であると思われる。

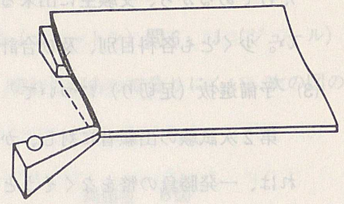
2　出題方法

（テストの目的は違うがアメリカで行われているＡＰ物理コースの試験問題例を参考にしていただきたい。）

(1) １題の小問題を減らしても全体の問題数を多くし、なるべく範囲が全分野に及ぶようにした方が生徒の実力がよくわかり、当り外れがなくなると思う。例えば今回のテストでは運動量や熱に関する分野がかけていた。

(2) 選択肢は数字の解答を選ばせるとは限らず、文章表現の中から正しいもの或いは誤ったものを選ばせる方法も検討してほしい。

(3) 問題の導入に生徒が授業で教師実験や生徒実験を通して接している現象から入るような表現のあることが望ましい。例えば1番では図のようになめらかな平板を少し傾け、その隅に向って斜めに入射するように一定の高さから球をころがしたところ、右のようなグラフが得られた‥‥というようにする。このように実験に親しんでいる生徒にいくらかでもプラスになるような表現をとる方が高校教育の正常な発展に資するという目的に沿うであろう。



3 問題の内容

3題とも大変よい問題であると思う。数値計算の面倒なものが入ってないこともよい。細かいことになるが気のついた点を述べると、

(1番) ① 1次元の問題から入る方がよい。

② 速度のx成分は( )でもしてx方向の分速度という表現も加えた方がよい。(成分という言葉を使わない教科書もある)

③ **問4, 5, 7** の選択肢に0を入れた方がよい。

④ **問4** の選択肢に1.96 (=mg) を入れた方がよい。

⑤ **問8** に放物線‥‥が広いを入れた方がよい。⑥楕円‥‥はのぞいてもよいのではないか。

(2番) ① **問5** はやや難かしいので **問4** と **問5** の間に問題を補った方がよい。例えば「右向きの速度が最大の点はどれか」とか「右向きに動いているのは何所から何所までか」など。

② 図2の$\frac{1}{1000}$ sは〔$\frac{1}{1000}$ s〕とした方がよい。

(3番) ① A**問3** とB**問1. 2. 3** は同様な内容 (W= qV) なので4題とも出来るか1題も出来ないかということにはならないか。

② Bの選択肢に3.0を入れなかったのは何故か。

(エ) 日本物理教育学会からの意見

1 試行テストにおける物理Ⅰの問題は適当か

共通第1次学力試験は多人数を対象として行われる統一テストであるから、そういう制限の下で良い問題を考えるのは大変難しいと思う。今回の試行テストは全般的に問題は適当ではないか。物理の基礎をみる無理のない問題で物理の基礎概念が本当に理解されているかどうかを良くついている。

2 物理Ⅰの基礎的事項とは何か

物理Ⅰでとり上げているのは力とエネルギー、波動、熱エネルギー、電界のエネルギー、電子、放射線である。今回の試行テストにおいては、力とエネルギー、波動、電界のエネルギーがとり上げられている。その中の基礎的事項としては放物運動を等速運動と鉛直投上げ運動の合成としてとり上げ波動では横波と縦波の関係をとらえ電界ではコンデンサーの等電位線と電気力線の関係を考えさせている。いずれも適当な問題で現場の教師にとってもこれを見たとき物理の基礎的概念とは何かについて考えさせるものを含んでいる。

3 共通第1次学力試験と実験との関連について

試行テストの運動の問題は放物運動のストロボ写真を撮影して水平方向は等速度で鉛直方向は等加速度であることを分析すればよく理解できる問題である。波動の場合も気柱の共鳴管の中にマイクを入れて、動かせば気体の圧力変化から縦波及び共鳴現象が良く理解される。

また、電器の実験はテスターとカーボン紙でこの測定をしている生徒なら良くできる問題で、こうした基礎的概念の理解には実験をすることがかなり有効であることがわかる。

4 共通第1次学力試験と教師の役割

共通第1次学力試験では高校生が普通に勉強していれば、できるような問題を行うのであるから教師は特別な準備をすることなく、物理の基礎的事項をしっかりおさえて教え、実験などを大いにとり入れて物理の楽しさを生徒に体験させることが大切だと思う。また、教師は共通第1次学力試験が行れるたびにその問題を真剣に分析し、高校で教えている狙いを大学の出題の意図とがずれないように常にフィードバックしていくことも大切である。

(オ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（物理）

1 出 題 の 意 図

物理Ⅰにおける基本的な概念や法則の知識、理解およびそれらの実現象への適用についての能力を問うことを方針とする。もとより物理Ⅰにおけるすべての分野から広く出題することは望ましいことである。しかし、試験時間60分の間において、必要かつ充分な情報をそなえた問題文を受験生が読み理解する時間、思考、計算をなす時間、及び解答用紙に記入するのに要する時間を考えると、問題量は自ずと制限をうける。解答に要する時間が短かい問題を数多く出題することにより、広く各分野にわたることは出来るが、ともすれば単に知識のみを問うことになり、本来の目的にそわないおそれがある。従って本年度も従来とほぼ同じ様な問題量をとることにした。問題の量及び難易度は、平均点が60点程度になることが期待出来る程度とするが、各設問がそれぞれ60%の期待正解率を持つ様にするのではなく、難易度に変化を持たせる従来の方針を踏襲することにした。従って基本的な法則、公式をそのまま答える様な設問も少数もうけることにする。基本的な方針として、入試問題のややもすれば持つおそれのある反教育的な一面がないことに特に注意した。

2 出 題 の 形 式

従来行なわれていた物理Ⅰにおける基礎的な主題について、色々な面からの設問をもうけて問うとの方法によった。問題の文章を限られた時間内に正解に理解する様、なるべく図を使うことにした。数値を問う設問の場合は、計算の単純な誤りはチェックできる様な解答群を設けた。解答群の配置は、受験生の時間のロスが少なくなる様にすると共に、所謂推測による効果が少なくなる様に意図した。また問題文を読んで理解し、得られた解答を解答用紙に記入するのに要する時間をなるべく短かく出来る様に、原則として一つの問題は見開き2ページに収めることにした。

3 出題の意図と解答結果

問題Ⅰは、斜め滑動面上での放物運動実験で実現される様な、等加速度平面運動を対象として、力学における種々の基礎事項について問うものである。設問1～4の結果はほぼ予想の通りであった。設問5においては、力の向きを速度の向きにした解答が可成りあった。設問7の

結果はⅠの中で最も悪く、しかも正解の符号のみの間違えを含めても最も悪かった。これはある程度予想したことであったが、その程度をかなり超えるものであった。設問8は実験をしたことがあればやさしい設問であるが、7の次に正解率が低かった。

問題Ⅱは、縦波の場合に一般に使われている変位の図示をとって、その理解について問う内容である。設問1～3は従来慣れていると思われる設問であるが、設問2が3より正解率が低いことはやや予想外であった。設問4,5は真に理解していることを要求しており、難易度の高い問いであるが、特に問5は全設問中最低の正解率であった。

問題Ⅲは、電界についての基礎的な事項を問うものであるが、設問3を除いて、予想より少し高い正解率であった。特にBは出題に際しての工夫が不充分であったと反省させられる高い正解率であった。

4 本年度の問題についての反響意見

連絡協議会試験問題部会、日本理化学協会からよせられた意見、ご批判に感謝する。全般的に見て、難易度が少し低かったとの印象は否めないと思われる。

イ　化　　学

(ア)　各大学の意見

化学の試験問題について、4国立大学、1公立大学、計5大学から意見が提出された。

① 有機化学は水準が低い。 (1)

② 出題は、難易、出題範囲きわめてよくできている。いわゆる難問、珍問、奇問に属するものはなく、かつ、化学Ⅰ全般をカバーしており、よい試験問題といえる。 (2)

③ 問題の日本語が未熟で、受験生がポイントをつかみにくかったのではないかと思われるところが非常に多い。 (1)

④ 全国的な試験であるので、問題の内容もさることながら、なにを聞いているのか、どのように答えればよいのかが受験生にすぐわかるような問いかけをしてほしい。 (1)

(イ)　共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（化学）

昭和52年度標記試行テスト（化学Ⅰ）の問題は、内容、程度、出題方法等について検討・協議した結果、高校における化学Ⅰの学習の達成の程度を評価する問題として、全体的に見ればおおむね妥当と評価された。しかし、全国共通テストとして大きな影響力をもつことから、高校側からの要望として以下の諸点を指摘して今後の問題作成等の参考に供したい。

1　試験問題の構成と内容等について

(1) 「酸化還元」にやや比重がかかり過ぎたのではないかとの指摘がある。

試行テスト問題Ⅳの内容のすべてを酸化還元に関するものだけであると速断はできないが、Ⅲの**問2**電気分解の計算の問題とあわせ考えると、酸化還元の分野の比重がかなり高かったといえる。ⅣについてはH^+やe^-の係数、酸化数などの設問に重複があり、また「酸化も還元も受けない元素は［47］種類」の設問も、結局は反応式の元素の数を数えさせるだけであまり意味がない。これらを整理すれば設問の数も少なくなり、配点を減らすことができて、他の基礎的・基本的事項の出題もできたのではないか。

化学Ⅰの学習事項のできるだけ広い範囲をカバーして、偏りのない出題をされるように、さらに一層の配慮をお願いする。

(2) 「実験をしておかないと解答が出せないような出題を」との方針には基本的には賛成である。しかし、高校での実験の実態を理解した出題でなければ、実験を経験したためにかえって不利になることがないとはいえない。そのために高校側の実験に関する事項のペーパースタディを強化するだけになるおそれもなしとしない。

試行テスト問題Ⅰの**問3**についても、水酸化ナトリウム（固体）の溶解熱、中和熱を測る高校程度の実験では（ヘスの法則の実験として広く行われている）、薬包紙やろ紙にのせて水酸化ナトリウムを秤量しても実用上何ら差支えないばかりでなく、この程度の風袋引きならできる直示上皿てんびん（高校にもかなり普及している）を使用させる場合には、むしろ実際的でさえある。

高校の化学教育（特に化学Ⅰ）は化学者の養成を目的とするものでないことは言うまでもない。したがって、その実験も型にはまった操作に必ずしもとらわれない場合も少くないことを了解していただきたい。

2　試験問題の範囲と程度等について

(1) テストである以上、指導要領化学Ⅰの(1)～(4)の内容全体に平均にわたるよう配慮してほしい。今回の場合については、溶液の比重と濃度との関係、沸点・触点の変化、コロイド溶液関係などが不足していたように思われる。

(2) 有機化学の内容をまとまりのある形で出題してほしいとの意見もある。しかし、炭素化合物の取扱いの程度が教科書によって大きく違いすぎる現状では、この試行テスト問題のような取上げ方も止むを得まい。しかし、

Ⅱの**問2**［15］ゼラチン水溶液の電導性の有無（ゼラチンはコロイドとして出てくる程度である。）

〃　［17］氷酢酸（酢酸は確かになじみの深い化合物ではあるが）

Ⅱの**問3**［23］酢酸エチルの酸による加水分解

以上の事項は通常の教科書の程度を越えており、化学Ⅰの有機化合物の取扱いをますますエスカレートさせることにもなり、指導要領の趣旨からも好ましくない。

(3) 素材に用いる物質例およびその用い方については、全ての教科書に平等であるようにしていただきたい。

(4) 問題の程度、設問数、時間についてはおおむね妥当であろうと思われる。

3　試験問題の出題方法、問題文の表現方法等について

(1)　Ⅱの問4の［26］は「はじめの化学平衡が右辺へも左辺へも移動しない」の問題提示文が意味が十分理解できにくいこともあって難解である。出題のねらいとしてはユニークでル・シャトリエの原理の機械的適用に終らせてしまいがちな化学平衡の移動の理解についての重要な指摘を含んだせっかくの問題であったのだから、問題提示文にもう一言の親切さが望まれた。

(2)　Ⅳの出題形式は［35］～［51］の空欄番号が前後し、選択解答群も3つに分かれていて繁雑に過ぎる。幸いにして問題が易しかつたので心配する程の混乱はなかったようである。普通ならば「［ア］～［オ］は解答群Ⅰから、［A］～［E］は解答群Ⅱから……選べ」とでもするところであるが、これは解答用紙の様式を理科全科目で統一したことによる問題点である。

また、この問題のうち「酸化も還元も受けない元素は［47］種類ある」の設問は、反応式の元素の種類を5と数え、そのうちCrとSの酸化数は問題文にも変化するとあるから2を減して3と答えたものが多かったと推測されるが、ここで改めて反応式の酸化数を調べた者は、H_2SO_4のSの酸化数が変化していないことから、3種類と答えるか4種類とすべきかに迷ったであろう。このような混乱のおそれのない問題文をお願いしたい。

(3)　計算問題について、いたずらに細かな計算を要するものは困る。思考の流れがきちんと試せればよいのだから、用いる数値は簡単なものでもよいと思う。もっとも「カン」で偶然あたることなどは好ましくないので、選択肢ではなく、自ら答の数値を記入させる方法などを用いれば筆答に大きく近づくのではないかと判断する。

4　その他について

(1)　解答用紙の理科5科目の様式統一については再検討をお願いしたい。

解答用紙の様式の統一は、経費面及び試験監督者からの強い要望によるものとのことであるが、受験生に対しては極めて不親切な方式である。大問ごとの区切りもなく、解答番号も解答記入欄にもただ数字だけが羅列されている。このような解答用紙に［39］の答の数値は6だから、そのマーク⑤を選んで指定欄を間違えずにマークしなければならない作業のわずらわしさを考えていただきたい。また、この様式の統一はマークシート方式による出題内容の制約を出来るだけ小さくしたいとするこれまでの出題形式の研究開発の成果を、再び制約

するのではないかの懸念もある。したがって、

①　科目ごとの解答用紙を復活していただきたい。51年度以前の解答用紙ならば、選択肢の符号にも配慮があり、解管用紙のスペースも十分で、これならば受験生にとってさほどの負担ではなかった。「解答欄を間違っていることに気づいた時にはすでにおそかった」などの受験生の嘆きは少なくなろう。そこで次のような試案を提示したい。まず、出願の時点で5科目中からの選択を登録させる。次いで受験生を選択科目群ごとに集め受験番号をつける。例えば基礎理科選択群・物理と化学の選択群・化学と生物の選択群といったように、番号をつけるまでの手数が少々大変だとは思うが、経費、配布、回収といったような手数は殆んど増加しないではなかろうか。

②　諸般の事情から様式を統一せざるを得ないのであれば、その様式を更に工夫改善していただきたい。例えば試行テスト数学のように、

(ア)　Ⅰ、Ⅱ……の大問ごとに解答欄を区切る。

(イ)　解答番号は番号とはしないで、(ア)(イ)(ウ)……等の記号に、選択肢は答の数値をマークさせることもあろうから①②③……とする。

(2)　「受験生は共通第1次試験の成績を公表された正解例と配点により自己判断して、第2次試験を受験する志望大学を決定する」とされているが、今年のような大問ごとの配点の公表だけで、減点法についても、小問の配点についても全く触れていない状態では、成績の自己判断は極めて困難である。大問の配点、小問ごとの配点および減点法などの採点基準について詳細なものを公表していただきたい。

(3)　各科目、各教科ごとの連絡を十分にし、教科間のバランスをとって欲しい。今回のものについては、各科目間の平均があまりにもアンバランスであり、これでは特定の科目を選択したもの、例えば物・化選択者と生・地選択者との間には相当なひらきが出てくることになる。科目選択の段階で不利にならぬよう同じ程度の平均点になるようにして欲しい。

(4)　「何年かたてば問題がなくなる。」というが、それはそれでよいと思う。「高校生が化学については、これだけを理解していればよい」というスタンダードをこのテストを通じて確立出来ればよい。市販の予想問題や模擬テストなどに見られる先走りを徹底的に修正させる動機として働きかけていってもらいたい。

付　記　「モル」について

SIでは「モルという単位が用いられる際には、単位粒子が明確に規定されていなければならない」（SI基本単位の定義の付記）としている。また、高等学校学習指導要領解説（文部省）も「モルは分子のみならず原子やイオンなど広く粒子一般について扱い」としてSIに準拠する趣旨が示されている。これからすれば、Ⅰの問5③「実在気体1 mol」「理想気体1 mol」、Ⅱの問1「酸素3 mol」などの表記はいかがなものであろうか。SIのモルが定着していない現状では、止むを得ない表記ともいえるが、全面的に影響の大きいこのテストがなお従来の表記を続けることは、SIのモルの定着を遅らせることになるのではないか。「1 molの分子を含む実在気体（または理想気体）」「酸素O_2 3 mol」などの表記はなじみにくいであろうか。

これにこだわるのは単位系はSIに統一されたいとの趣旨からではない。初めて化学を学ぶ生徒の化学量の理解を困難にしていることの理由の一つとして、モル概念の定義上・指導上の不十分さ――原子・分子論が一貫した理論として根底にないこと――が一部に指摘されて久しい。それがようやくにしてSIにより基本単位としてすっきりした定義に統一されたにもかかわらず、教科書その他教育現場にはその理解が完全には浸透しかねている。「できれば共通第1次試験を通して、高校教育のあり方を正すところまでもっていきたい」とされる化学専門委員会のこの問題についてのご理解・ご検討をお願いしたい。

(ウ) 日本理化学協会からの意見

1 全般について

(1) 一般的にみて、出題法もバラエティに富み、良く工夫された結果が得点の度数分布を良くしていると思われる。

(2) ただし、出題範囲から検討すると、物質の反応（化学平衡、酸、塩基、酸化、還元、電気化学など）が多く、高校で授業時数の比較的多い物質の構造や溶液に関する出題がみられなかった。

(3) 実験の問題も高校の現場で実施している程度の出題が好ましい。

(4) マークシート方式については、模試などによって特別なテクニックを身につけた生徒だけが有利にならないような配慮がほしい。

2 各問題について

Ⅰ―問3

正解の**ビーカー**について、高校現場では、薬包紙やろ紙などを用いているので、誤解しやすい。

Ⅰ―問5

最もよく表しているとあるが、③の表現などあいまいさを感じる。化学Ⅰでの実在気体は簡単にしか取扱っていない。

Ⅱ―問4

25 気圧の変化で平衡移動したと考えた生徒をチエック出来ない。温度変化だけにした方がよくないだろうか。

26 正解が間違いように思われる。(さらにHIを加えて……) 全解を0または1にしたとき、どのような得点になるのか。出題法に一考を望みたい。

Ⅳ マークシート方式のため学力とは別の労力がかかりすぎる。

(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（化学）

1 まえがき

今年度は、国立大学入試改善調査研究としての最終回の作業であり、来年度から行われる共通第1次学力試験問題作成の予行演習ともいうべき意味をもっていた。大学入試センターからは、問題の難易度、出題・解答の形式などすべての点において、来年度から実施することになった共通第1次試験と同一にしてほしいとの要請があったが、マークシートの形式が従来とは違って理科全科目共通になったこと、またこの新しい形式のマークシートを使ってどの程度変化に富んだ作題が可能かを研究する必要があったこと、同じような内容の問題を出題形式を変えることによって正答分布にどのような影響があるかを調べたかったこと、その他調査研究としてまだ残された問題がいろいろあったので、予行演習というには程遠い感があった。しかし、以上のような問題点は、今年度1回の試行ではっきりした結論がでる性質のものではなく、今後回を重ねるなかで、創意工夫をこらしながら研究していくべき課題であろうと考えられる。以下、今年度の問題作成とその結果の概要を報告し、今後より適切な共通第1次学力試験問題作成のための資料としたい。

2 出題範囲と難易度

高等学校学習指導要領理科編「化学Ⅰ」が出題範囲になっていることはいうまでもない。そし

て、高等学校の授業内容を理解していれば、受験のための特別な勉強をしなくても、国立大学の合格圏内の成績が得られるような程度の問題を作成するというのが、問題作成の際の目標である。すなわち、“高等学校における学習達成度を試験する”という表現になっているわけである。しかし、指導要領に基づいて編集され、文部省の検定に合格して実際に使われている化学Ⅰの教科書は、現在15種類もあり、内容や程度にかなりの違いがみられる。委員会では、これら15種類の化学Ⅰ教科書を全部取り揃え、十分比較調査して、ある特定の教科書で学んだ受験生が有利にならないように、あるいは不利にならないように留意した。いいかえると、ほとんど大部分の教科書に書いてある事項について問題を作成した。ここで、“ほとんど大部分”と書いたのは、仮にある一つの教科書に書いてない事項を問題文の中に使うときは、その教科書を使った受験生が不利にならないように、それ相応の配慮をするということである。また機械的に“15種類の教科書の共通部分からのみ出題する”ということにすると、かえって教育的に好ましくない受験対策をあおることにもなりかけないと考えるからである。要するに、共通１次試験に対して不必要な不安や特別な対策は無用であり、また、無用になるような問題作成に努めるべきであろう。

問題の内容については、化学Ⅰの内容をなるべく広くカバーするように努力したが、必ずしも毎年すべての項目を出題する必要はないと思っている。解答時間と問題量の制限があると同時に、来年度からは本試験の他に追試験その他数セットの問題を作成しなければならない。毎年同じ項目に片寄った出題になることは避けるべきであるが、数年間を通して全体をカバーするようにしたほうが、問題内容の固定化を防ぎ、教育上かえって好ましい結果になるように思われる。

3　各問題の出題意図と解答結果

化学受験者数は31,827名で、全受験生の79.64％が化学を選択受験したことになる（この率は、昨年度の約80％と同じである)。平均点は52.53点（100点満点、標準偏差20.41）で、得点度数分布は58～60点付近に山をもつ非対称分布になっているが、非対称度は約－0.27で、それほど大きくない。すなわち、得点分布から判断すれば、問題点は少なく、大すじにおいて目標を達したように思える。

以下、各問について出題意図と解答結果を検討してみよう。正答率は、全答案または得点数上位 1/5 までの答案について（この場合はカッコに入れて示した)、おおよその傾向を示した。

Ⅰ　いずれも選択枝のうちから一つを選んでマークさせる形式の問題。

問１　当量を正しく理解しているかどうかを試す問題であるが、同時にイオン化傾向、化学反応、気体の体積も関係してくる計算問題。ある量の金属を酸に溶かしたとき、どれくらいの気体（水素）が発生するかというような計算は、実験でもしばしば必要になってくる。正答率は60％以上（90％以上）で、よくできていた。

問２　pHに関するごく基礎的な計算で、pHの意味を理解していれば容易に答えられる。正答率は約75％（98％）で、**問１**と同様満足すべき結果であった。

問３　化学実験をする場合、ひとつひとつの操作の意味をどこまで考えながら実験しているかを調べる目的で出題した。水酸化ナトリウムをはかりとるとき、たとえばアルミニウム箔にのせてはかったら、どういう不都合なことがあるか（以下同様）を、それぞれ検討してほしかった。また、メスシリンダーは液体の体積を（それほど正確を要しないとき）はかるのに使うのであって、この中で物質を溶かしたり、気体の体積をはかったりする目的には使わないなど、実験器具にはそれぞれ使用目的があることを理解しているかどうかを知りたかった。実験は、盲目的に教科書や教師の指示に従って行うのではなく、いちいちその意味を生徒自身が考えながら実験する習慣をつけさせようとするのが、出題の意図である。正答率は約20％（約30％）と、意外に低かった。問題文を、「水酸化ナトリウムの水溶液をつくるため、上ざらてんびんで…」のように、実験目的をさらに詳しく述べれば、正答率はもっと上がったかも知れない。

実験に関する問題作成は、昨年度の報告書にも述べられているように困難な点がいろいろあるが、よい問題をつくるように今後一層の努力が望まれる。

問４　やはり実験に関する問題であるが、正答率40％以上（75％以上）で、まずまずの結果であった。しかしこれも、生徒が実験を通して体得した知識なのか、単なるペーパースタディーによる知識なのか判断がむずかしい。

問５　理想気体は、その状態方程式から考えて、どんな状態のもとにおいても液化や固化は起こらないはずであるが、そのことを正しく認識しているかどうかを問う問題。正答率は約20％（40％以上)。「実在気体は、標準状態からはずれた状態では、理想気体の状態方程式に合わなくなる」という意味の選択枝④にマークした答案が意外に多かった。これと紛らわしい表現を読んだことを想い出してマークしたものと思われるが、おぼろ気な記憶を頼りにして解答しないで、ひとつひとつ理由を考えて判断する科学

的態度を養うことが必要であると思われる。

Ⅱ　選択肢ひとつひとつについて正誤を解答させる形式の問題。Ⅰのような形式に比べて、偶然正答の確率が低く、1問中で複数個の選択肢を選ばせることができる。しかし受験生にとっては、Ⅰのような形式より解答に時間がかかり、負担が大きい。

問1　原子・イオン・分子など物質を構成する粒子の構造についての問題であるが、正答率は約60％であった。

問2　分子性物質、塩類、金属がそれぞれ電気を導くかどうかという性質を、物質の構造や状態と関連づけて理解しているかどうかを試験する目的で出題したもの。単純な問題でやさし過ぎると思ったが、正答率は40％を下回った。その理由については、さらに検討が必要であろう。

問3　ある物質の性質と、その物質が関係するいろいろな現象とが適確に結びつけられるかどうかを試す問題。正答率（50％以上）

強酸であれば、1 mol/ℓ 水溶液のpHはほとんど0であり、弱酸の場合は0より大きいほど弱い酸ということになる。酢酸水溶液のpHが約4であるというのは2.4の誤植であるが、答案を調査検討した結果、この誤植が解答に大きな影響を与えたとは考えられないという結論に達した。たとえば、21を選んだ者は全受験生の約30％であり、その中で同時に22も選んだ者は約18％であった。幸い問題の本質ならびに解答結果に影響がなかったとはいえ、このような誤植は今後十分注意する必要があるであろう。

問4　化学平衡を正しく理解しているかどうか、また、融通のきく柔軟な考え方ができるかどうかを試験する目的の問題。条件を変化させると、平衡はどちらの方向に移動するかという問い方が一般的であるが、ここでは、はじめの平衡状態と最後の平衡状態を比較させて移動方向を考えさせる方式をとった。正答率は極めて低かった。このように、設問方式をちょっと変えると、本当に理解しているかどうかがよく判定できる。たとえば、26は、400 ℃、1 atmの平衡混合物と、同じ400 ℃、1 atmの平衡混合物を合わせて、全体を400 ℃、1 atmにした場合と同じであることに気付かせ、混合物中の各成分物質の割合は変化していないことを結論させようとしている。問題の内容をよく考えて判断すれば、決して難かしい問題ではない。学習達成度というのは、教科書に書いてある字句を理解している程度ということではなく、内容的な考察力を問題にしている場合もあることはいうまでもない。

Ⅲ　いずれも基礎的な反応を扱った計算問題。

問1　化学反応式が正しく書けるかどうか。ボイルの法則、分圧の法則が理解されているかどうかを問う計算問題。正答率は極めて高い。

問2　電気分解とファラデーの法則を内容とした標準的な計算問題で、正答率はやはり極めて高い。

計算問題の答は、与えられた選択肢の中から選ばせるような形式にしないで、昨年度のように数値をマークさせたほうがよいという意見もあるが、これには一長一短があり、どちらかに決める必要はない。

Ⅳ　酸化・還元反応に関連して、化学反応式をつくる能力、電子の授受や酸化数の変化と酸化還元との関係の理解度を試す問題。

従来の試行テストの化学の問題では、大問Ⅰ、Ⅱ、…はたいていの場合、出題形式ないし解答形式の違いによって分けてあり、それぞれの大問の中でいろいろな項目が小問の形で取り上げられていて、全体として化学Ⅰの内容のなるべく広い範囲をカバーするように配慮されている場合が多い。このような分類のしかたは、他の科目（たとえば物理）とは著しく異っている点である。化学でも、内容別に大問を構成することが可能かどうかを検討する必要があった。Ⅳは、このような目的のもとに、酸化還元というテーマを取り上げて、そのなかでなるべくいろいろなことをテストしようとして作題したものである。問題文の中の解答記入番号の順序が入り乱れていて、三つの解答群と対応させるのにかなり煩しさが伴ったと考えられる。この点は、今後さらに研究する必要があろう。選択肢の選び方が複雑であったにもかかわらず、正答率は極めてよく、35～51の平均正答率は71％（96％）に達した。

ウ 生　　物

(ア) 各大学の意見

生物の試験問題について、4国立大学から意見が提出された。

① 全般的にやや易しい。知識偏重の傾向を助長するおそれがあるので考える問題を加味することが望ましい。また、難易度については無難であろう。(2)

② コンピューターにかけるため止むを得ないことであろうが、解答する場合の要領（記号の使い方、記入の場所方法など）が複雑すぎる。(1)

③ 問題番号Ⅲの系球体の図は雑で正確にされたい。(1)

(イ) 共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（生物）

1 構成と内容について

(1) 問題Ⅰについて

ア 世代交代といえば、何といっても植物にその例が圧倒的に多く、動物の世代交代は、例外的な例しかないのだから、本文冒頭の“世代交代という現象は動物にも植物にもその例が多く知られている”とあるのは、表現が不適当である。

イ [3]（または[4]）の正解が「両性」の他に「有性」も可となっているが、「有性」は本問の解答としては誤りである。その理由としては、1つには、「両性生殖」も「単為生殖」もいずれも「有性生殖」であるということであり、他の1つには、本文5～6行目の“…カンテツにみられるような「幼生生殖」と「両性生殖」とを……”の記述とも、その表現法が一致しなくなってしまうことである。いずれにしても、全国の規模で行なわれる共通1次テストに2通りの解答があることは好ましくないし、まして誤りがあっては一大事である。

ウ 本文8～14行目に、シダの世代交代の説明がなされているが、その内容が、「胞子体→胞子のう―（減数分裂）→胞子―（発芽）→配偶体」までとなっていて、後に続く筈の「配偶子のう→配偶子―（受精）→胞子体」の部分が省略されている。このため、この問題文を読んだとき、まとまりのない不完全な文章になってしまっている。世代交代はあくまでもサイクルになっているのだから、少くとも1つのサイクルを完成させる内容にまとめたい。

エ 動物の、ワムシ・アリマキ・ミジンコの単為生殖や、カンテツの幼生生殖（これについては最近のテレビではまた新たな問題が生じたようだ）等はもちろん、ミズクラゲの生活史についても記述の無い教科書が多いし、“世代交代”についての基礎的・代表的な内容でもないと思われる。

オ 本文全体を読み通した場合、問題全体を貫く重点事項が不明確である。

カ 上述(1)～(5)に述べたような理由から、この問題では、動物の例には全く触れないか、もし触れるならば、最後にミズクラゲの例を1つだけつけたす形でよいのではないか。その代り、植物については、少くとも生活史全体のサイクルの内容とし、更に、その生活史のもつ意義を考えさせる内容にしたらどうだろうか。

キ 問2の選択肢中の「原糸体」は高校では、基礎事項としてはとりあつかってはいない。少くとも現在では、古めかしい出題内容といえる。

(2) 問題Ⅱについて

ア 細胞分裂のサイクルが→静止期→前期→中期→後期→終期→であることは高校生もよく知っている。しかし、「分裂期」の語については、上期サイクル中「静止期以外のすべてを含んだ時期」のことであるとは知らない高校生が多いと思われる。この問題の出題意図から見て、「分裂期」の範囲を指示してやるべきだったと思う。

また、中間期の終り（または分裂期の始まり）が、グラフのdであってcではないことの知識を高校生に厳密に要求するのは、程度が高過ぎるのではないか。高校では、ＤＮＡの増殖は、「中間期の間に行われる」ということしか教えていない。

イ ＤＮＡの増殖を問うなら、その前にＤＮＡそのものの重要性（遺伝子の本体・核酸）に関する出題が欲しい。

ウ 生物Ⅰにおける細胞分裂は、染色体の行動を中心として説明されており、ＤＮＡ量の変化・自己複製に関する内容は生物Ⅱに入れている教科書が多い。

エ 問2の、染色体観察の適期については、最近の教科書では説明していないものが多い。「中期」で最も重要なことは、「染色体の形や数が調べやすい時期である」ということよりも、「染色体が赤道面上に配列し、両極からの紡錘糸が動原体に付着する時期である」ことにあるのだから、それらのことに関する出題にした方がよかったのではないか。

オ 問4では、問1の細胞分裂期のＤＮＡ量の変化を示すぐらふについての問題から、一転して、発生初期、細胞の成長を伴わない卵割期の各細胞容積の変化を問う問題にされた点、大

いに工夫のあとが伺える。ただ、この問題では「等全割」には当てはまるが、「不等割」や「部分割」にはそのままでは当てはまらない。すべての型の卵割に共通していえることは、「細胞容積が$\frac{1}{2}$、$\frac{1}{4}$、$\frac{1}{8}$‥‥」となることではなく「分裂後、細胞の成長を伴わない細胞分裂である」ということである。

カ　問4では、多くの紙面を使いながら、たった1問というのは、出題に工夫が足りないのではないか。例えば、のう胚期の陥入部分の成長を伴う細胞分裂についても出題してみたらよかったのではないか。

(3)　問題Ⅲについて

ア　問1の[28]で、余り重要な働きのない「集合管」を問うているが、その代りに、細尿管のまわりに「毛細血管」を図示し、それを問う方が意義があるのではないか。

また、腎臓は、老廃物排出の他に、体液の組成の調節（恒常性の維持）の働きについて極めて重要な器官である。従って、単に部分の名称を問うだけではなく、それらの働きの方に重点を置いた設問も欲しかった。

イ　問2の問題文中の「タンパク質がろ過される」というのは、高校の教科書では誤りである。少くとも高校の教科書では「血球とタンパク質以外の成分」がろ過されるとなっている。

ウ　問3の問題文中の「‥‥ただし、表の濃縮率の最も高い成分をもとに計算し‥‥」という条件が、受験生にとっては条件というよりヒントになって、あとは理解をしていなくとも、ただクレアチニンの濃縮率75だけをもとに算術計算をすればよいということで、重みの無い問題になっている。表も、クレアチニン以外の成分表はせっかく載せた意味が殆ど無くなっている。例えば次のような設問にしたらどうだろうか。すなわち、「‥‥血管からろ過された血しょうの量は、**少くとも**どのくらいであったと考えられるか、ただし、**表の濃縮率を参考にして**計算し、その答えを‥‥」としたらどうだろうか。

(4)　問題Ⅳについて

ア　探究の過程を問う新しい傾向の良問で、共通1次試験の性格を明らかにするものとして歓迎する。ただ、この種の探究的・考察力を試す問題の場合、受験者により1度でも見た事のある受験生がいれば、共通1次試験としての意義が無くなるので、素材の選択については特に慎重に当って頂きたい。この点についても今回の問題は良かった。

イ　問題では、「ジベレリンがアミラーゼの生成をひきおこすこと」を証明すればよいのだが、受験生の中には、「胚でジベレリンがつくられること」をも同時に証明しなくてはいけないと

考えた者が多かったのではないかと思われる。この点について、その必要はないことがはっきりわかるようなただし書きか何かをつけた方がよかったのではないか。

2　試験問題の範囲と程度について

(1)　1でも触れたが、「両性生殖」「幼生生殖」「ミズクラゲ・カンテツ・ワムシ・アリマキ・ミジンコの生活史」等の内容については、最近の教科書では教科書により取り扱いの程度が大きく異ってきているのではないか。

(2)　全問を通して見た場合、いろいろな分野からの出題が工夫されていて良い。ただ、生物Ⅰの全範囲について必死で学習してきた受験生のことを思うと、運・不運を少くするために、内容のまとまった大問4問の他に、その他の範囲から、小問の雑問を集めたような大問を1つ（全体の$\frac{1}{5}$ぐらい）出題してもよいのではないか。

(3)　問題の程度としては全体的に妥当と思われる。

3　出題方法（試験時間、配点、問題文の表現、解答方法）等について

(1)　試験時間についてはⅣの考察のためにある程度時間がかかると思われるが、その他は殆ど時間はかからないと思われ、全体的にはやゝ余り気味ではなかったかと思う。

(2)　配点については、発表されていないので不明。しかし、このような所見を述べるに当っては、配点や、正答率、誤答例等まで示して頂ければ、更にいろいろと分析できるのではないかと思う。

(3)　問題Ⅰについて

ア　同じ表現にした方が、読む方にとっては頭の整理がし易いのに、わざわざ異った表現をとった感じのする箇所がいくつかある。

(ア)　本文5行目と6行目の「‥‥繰り返す」の「繰り返す」の語は元来、同じ事を何回も行なう場合に用いる語である。ところがここでは、生殖法の異る2つの世代を‥‥というのだから、本文3行目の「‥‥とが、交互に現れる‥‥」と同じように「‥‥とを交互に繰り返す‥‥」とするか、前の表現と全く同じにして「‥‥とが、交互に現れる‥‥」としてもよい。いずれにしても「交互に」を入れるのが正確。

(イ)　本文10行目の「[10]世代」は、本文8行目の「[5]生殖をする世代」に対する部分なのでこれと同じように「[10]生殖をする世代」とすべきである。ひょっとしたら受験生をまごつかせる意図もあって意識的に表現を変えられたのかも知れないが、科学に関す

る文章表現の方法としては好ましくない。上記のように統一することにより、2～5行目にある[1]、[2]、[3]、[4]に関する表現とも同一になりすっきりしたものになる。

(ウ) 本文15行目の「我々の目に触れるものは」は8行目のシダにおける「我々の目に触れる」ものとは表現を変えた方がよい。シダの場合は、実際に我々が「よく見かけるもの」であるのに対し、ミズクラゲの場合は、ポリプ型、エフィラ、クラゲ型いずれもシダのようには「よく見かけるもの」ではない。従ってミズクラゲの場合は、「‥‥配偶子の時だけであり、それ以外の時はすべて‥‥」とした方がよい。

(4) 問題Ⅱについて

問1の採点が、[16]―[17]、[18]―[19]と別々に採点するようになっているが、この問題の内容からすれば[16]―[17]―[18]―[19]とすべきではないか。または、出題そのものを、分裂期または中間期のいずれか1つについてだけにした方がよい。

(5) 問題Ⅲについて

ア 本文1行目の腎臓の「腎」の字は、当用漢字外なのでルビをつけた方がよいのではないか。

イ **問6**の「‥‥尿素が生成される主な成分‥‥」というのは極めてまずい表現である。

ウ **問6**の選択肢中の「ホルモン」は、ホルモンの種類によってはタンパク質をその主成分とするものが多くあることから不適当である。

(6) 問題Ⅳについて

ア この問題は全体として、事実→仮説→検証実験→結論の流れに沿った内容なのだから、問題の文章表現にしてもやはりこの流れに反しない表現にしたい。このような理由で、問1、問2の問題文をそれぞれ次のように修正したい。

問1「上の仮説が**正しいことを証明するため**に‥‥」

↓

「上の仮説が**正しいかどうかを確かめるため**に‥‥」

問2「前述の仮説が正しいとして‥‥予想される結果を選べ」

↓

「どのような結果が出たら前述の仮説が正しかったといえるか」

イ **問1**本文2行目の「‥‥乾燥種子を用い、実験材料を‥‥」という表現では、「乾燥種子」と「実験材料」とは関係の無い別物のように読みとれる。それらが同一物であると気付くのは選択肢を見た時である。これらが同一物であることを、選択肢を見て判断させるのは問題

としては極めてまずい。そこで本文の表現を「‥‥乾燥種子を用い、それを実験材料として‥‥」のように変えるべきではないか。

ウ **問2**の[40]の正解が[40]―([34]―[36]―[38])というのは理解できるが、[41]の正解が[41]―([34]―[35]―[36]―[37]―[38]―[39])というのは理解できない。この場合、[41]―([35]―[37]―[39])で充分だと思う。

4 その他について

全般的に見て、過去2回の問題と比較した場合、その内容、構成、分量、形式共に飛躍的に、共通1次試験の問題としてふさわしいものになっている。

いずれにしても、共通1次試験は高校教育の正常化を重要な目的の1つとしており、しかも全国という規模で行なわれるものである。従って問題内容の如何は即高校教育の内容や、指導法に重大な影響を及ぼすことになるだろう。今まではたとえ各大学単位で出題された問題に批判されるような出題があっても大したことは無かったが、今後はそうはいかないのである。そのような意味においても、特に次のようなことを要望します。

(1) 指導要領にいう範囲・内容・目標・程度等から逸脱しないこと。

(2) 全国の使用教科書のすべてについて充分検討し、教科書の種類により大きな利・不利が生じないように留意すること。

(3) 問題数が少な過ぎたり、範囲が片寄ったり、1問当りの配点が大き過ぎたりすると、その時の運・不運が及落に直接影響することになりかねない。従って、可能な限り、問題数は小刻みに多く、範囲は広く、1問当りの配点は小さくする等して、その科目についてのその受験生の真の実力が試される問題にして欲しい。

(4) 高校現場では、授業時数の不足から、教授内容の精選に努めている。従って、共通1次の問題内容もやはりこれと歩調を揃えるために、素材の精選に努めて頂きたい。

(5) 理科（および社会）において、選択科目間の不平等が生じないように充分配慮して欲しい。（問題作成時のみならず、採点後の処理についても）

(6) 理科においては、基礎的な実験・観察を学習しておいた方が有利になるような内容を適宜出題するのが望ましいのではないかと思う。

(7) 探求的内容のものを今年のように作成して欲しい。

(8) 本来の検査目的以外の事に受験生が神経を使わなくてもよいように大いに出題形式、表現

法を吟味し、特に試行テストでは少からず見られた誤り等は絶対に無いようにして欲しい。

また、解答用紙はできるなら是非科目毎に準備して頂きたい。練習もせずに受験に臨む受験生も全国では相当いるのではないだろうか。

追　記

以上、いろいろと3人で気付いた事を細かい事まで、しかも思いつくままに未整理のまゝ書かせて頂きました。中には筋違いの意見も混っている事と存じます。また、どうしても、良い点は特に指摘するのがむつかしい為か、批判めいた内容ばかりになってしまい、申し訳けございません。私共3人も気持だけは、問題作成委員の先生方と同じく、少しでも良い問題にしたいという願いを強く持っております。この点をお汲み取りくださって、失礼な意見等御容赦ください。

最後に、第1回の共通1次試験の御成功を心よりお祈り致します。

(ウ)　日本生物教育学会からの意見

1　全般的な点

(1)　量的・質的にまあまあ限界で、これ以上の量・程度は絶対に避けてもらいたい。

(2)　出題の範囲が狭いようである。全部の問題で「生物Ⅰ」全般が網羅されているようであってほしい。今回の問題には、物質交代、調節と統一、遺伝などの問題がないが、光合成、呼吸の問題にしても、「生物Ⅰ」として重要と考えられている部分については、毎年出題されても少しも支障はない。さもないと昨年出題されたから今年は出題されないだろうといった山かけ勉強がおこるおそれがある。

(3)　用語にもっと注意してほしい。各社の教科書をよく調べて、どの教科書にでも出ている用語を用いた出題をしてほしい。たとえそれが直接解答に関係しない用語であっても、初見の用語に直面した受験生にはハンディが加わるはずである。ましてやその用語が直接解答に関係する場合には、その用語の出ている教科書を使った受験生はひじょうに有利になる。中間期・集合管、オルニチン回路などはこの例である。

共通1次の問題に出た用語であるからと、それまで用いていなかった用語を教科書に追加するようなことでもおこれば、いたずらに高校生物での記憶事項が増加するという結果になりかねない。

(4)　小問数46は多すぎる。化学Ⅰは小問数が51あるが、二者択一の問が多数あるので、実質的には「生物Ⅰ」の小問数が最も多い。このことが、「生物Ⅰ」の平均点を低いものとしたかもしれない。46小問を60分間でやるには、読む時間、マークをぬりつぶす時間も含めて、1小間1分20秒くらいになり、これではじっくり考えるひまもない。小問数を減らして、考えて解答する問題をもっと多くしてほしい。

(5)　問題形式がいろいろあることはよいが、問いかけかた、解答させかたが問題ごとにかなり違うので、解答のしかたを理解するのに時間がとられてしまう。この時間は「生物Ⅰ」のテストとしては本来関係のないことで、もっと発問のパターンを整えて解答しやすくしてやる必要がある。

また、Aでもよいし、Bでもよいというような正解が複数の問題では、解答は一通りとは限らぬ旨注釈してほしい。受験生は原則的に正解は1個と考えているので、注釈がないと徒らに迷わせることとなる。

(6)　共通1次テストでは、マークシート方式はやむを得ないものかもしれないが、あのマークをはみ出さぬようにぬりつぶすのは、かなり神経をつかうことである。「よい例」にあるように枠ぴったりにぬりつぶさなければいけないのか、ごく僅かでもはみ出してはいけないのかは受験生にとっては大変に神経をつかう作業になる。さらに改良してほしい。

(7)　発問の意味がわかりにくい問題がある。文章をもっと推敲してわかりやすいきき方にしてほしい。

(8)　記憶中心で、参考書による勉強で解けるような問題ばかりで、実物についての観察・実験をしていなくても解ける問題ばかりである。このような傾向の出題が続けられると、講義室の生物教育、黒板実験ばかりが強調されて、実物をもとにした本来の生物教育が損なわれる心配がある。実験・観察をした者が有利になるような出題が切に望まれる。

2　各問題について

(1)　問題文が3節あって、各節ごとに小問があるので、文節ごとに小問をおく方が時間の節約になる。

解答が1つでない場合は、その旨注釈がほしい。自信があればそのような迷いは出るはずがないというのは受験者心理上酷な要求である。

ワムシ・ミズクラゲ・カンテツの生活史は、どの教科書にでも出ているというわけにはいかない。

世代交代と核相交代が一致するとかしないとかの内容は、植物についてはよいが、動物の場合はミズクラゲにしても一致するとかしないとかいう問題とは次元の異なる問題のようである。最後の1行のような表現は適切ではないのではないか。

カンテツの生活史は最近単為生殖と幼生生殖の繰返しという説が報道された。最近の報道に注意していた生徒が迷うような材料は扱わないでほしい。

(2) ＤＮＡ量の増減と細胞分裂各期との関係が問われているが、この内容の取扱いは教科書によってまちまちで、相当ハンディの生じる問題であろう。核分裂の期の区分は、連続的変化のどこに線をひくか容易ではない。教科書によっても時期区分は全く同一であるとはいいきれない。したがって使用した教科書によってかなり差が出そうである。（**問3**の発問数は、指示がわかりにくく、どう答えたらよいか理解するのに時間がかかる。）

(3) 腎臓および排出については、教科書による扱いがさまざまで、そのためのハンディが気になる。集合管・オルニチン回路の語は教科書によっては出ていない。

図が不親切な感じがする。腎臓全体の断面図とこの図を併示すれば余程理解に便であろう。

問1や**5**では、正解そのものを理解していなくても、他の選択肢を消去していくと、正解に辿りつける。そのような形の出題は賢明ではない。

問2の文ではタンパク質は1度ろ過されてから再吸収されるようなことであるが、ボーマンのうでろ過されるのはアミノ酸である。タンパク質を用いたのは親切そうで、むしろ無用の混乱を生じさせた。

問3は表を読みとらせる問題のようであるが、実は単純な計算問題に終っている。

(4) 思考力をみる上で苦心のあとが見られる良問である。

問1の文章は1度読んだだけでは何をどう答えたらよいかわからない文章で、煩雑である。

配点がどのようになされたか不明であるが、**問1**で34、36、38のようにセットで答える場合は、うっかり34を誤記すると、36、38も道づれで減点されるとなると、問題のウエイトが大きくなる。

問2も**問1**をうけて答える形の問いであるから、問1が失敗すると問2が道連になって失敗する。このような出題形式はよくないものとされている。

この問題の前文、仮説の中に、「胚でつくられたジベレリンが糊粉層中でアミラーゼの生成をひきおこす」との文章がある。この証明のためにと**問1**があるが、**胚でつくられた**が単にジベレリンの修飾と考えて、ゾベレリンがアミラーゼの生成をひきおこすかどうかの確認実験とと

るか、**胚でつくられたジベレリン**がアミラーゼの生成をひきおこすかどうかと考えて、ジベレリンが胚でつくられたものかどうかも確認しようとする場合とでは、実験法がちがってくる。正解ではこの両方の解釈をふまえていないように思われるが、そのようなあいまいな表現の問題は困る。文章の推敲をお願いした所以である。

(エ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（生物）

1 問題の出題意図

出題に当っては大体昨年までの基本方針を踏襲した。学習の到達度を評価するのが共通1次テストの目的であるから、基本的な生物学の概念が正しく理解されているかどうかを見ることとした。また「生物Ⅰ」の3つの基本項目である「物質交代とエネルギー交代」、「恒常性と調節」、「生命の連続性」から、なるべく万遍なく出題するよう努めた。「生物Ⅰ」の平均点が50年度38.39点（100点満点）、51年度43.96点であったことから、今回は60点の平均に近づけるよう考慮をはらった。（結果は47.76点）。

(1) 問 題 Ⅰ

生命の連続性としての生殖に関する問題である。教科書によくでている動物及び植物の生活史と世代交代について、有性世代・無性世代及び単相・複相が正しく理解されているかどうか、を知ろうとした。

(2) 問 題 Ⅱ

細胞分裂の正しい理解をためす問題である。問1ではＤＮＡの複製が細胞周期のどの時期に行われているのかを問い、問2では教科書からの知識がどのように応用できるかを見ようとした。問3は植物と動物での細胞分裂の相違についての知識を問い、また問4では教科書で細胞の項目にでてくる分裂と発生の項目にでてくる卵割とを関連づけて理解し、卵割は分裂後に生長のない細胞分裂であることを理解しているかどうかを問うたものである。

(3) 問 題 Ⅲ

腎臓の構造と機能に関する基本的な事柄を正しく理解しているか、また同時にこの事柄に関係する物質交代を有機的に捕え完全に理解しているかどうかを問うたものである。

(4) 問 題 Ⅳ

この問題では、他の問題Ⅰ～Ⅲにおけるより以上に、「生物」の学習に於て重要な「探求の過程」を問うことに重点を置いた。どのような受験生でも、生物現象に対する論理的な解析

力があれば答えられるよう配慮し、また題材も受験生の経験による差がないよう新しいものを用いた。問1では実験結果から誘導した仮説を証明するための実験系を組み立てる能力、対照実験の正しい把握を知ろうとし、また問2では与えられたデータから実験結果を推論する能力を知ろうとした。一方問3は発芽という現象のエネルギー交代の面での基本的な理解を問うたものである。

2．出題意図と解答結果

上記のように、本年度は平均点を60点に近づけるよう配慮したのであるが、結果は、50・51年度よりは高かったが47.76点に止まり、「物理(67.94点)」・「化学(52.56点)」よりも大分下廻った。「生物Ⅰ」の受験生は16,702名、理科の中での「生物Ⅰ」の選択率は約42%で、昨年の46%よりもやゝ少なかった。各問題ごとの平均得点などは下記の如くであった。

問題	配点	最高	平均	最低	標準偏差
Ⅰ	25	25	13.66	0	6.98
Ⅱ	25	25	10.93	0	6.78
Ⅲ	25	25	13.09	0	6.25
Ⅳ	25	25	10.02	0	6.24
(全体)	100	100	47.71	0	20.66

この表をみると、問題ⅠとⅢの点数が比較的高く、ⅡとⅣの点数がそれにくらべて低いことが分る。これは昨年も指適されたことであるが、正しい理解と思考力を要する問題が一般に得点が低いように思われる。

(1) 問 題 Ⅰ

1―2、3―4、5―10、6―7―8、11―13、14―15は何れもそれぞれ共に正解の場合にのみ採点することとした。それらは組合せで理解されていなければ無意味であると判断したためである。問1は余り成績はよくなかった。動物の世代交代についての正しい理解が不十分のように思えた。しかしシダについての問2になると、問1より得点は高くなっているのは、どの教科書や参考書にもよく説明されている故であろうか。また問3の減数分裂と核相の変化については易しい内容であったこともあり成績は割合よあった。

(2) 問 題 Ⅱ

16―17、18―19は組合せで採点した。問題Ⅱは一般に余りできはよくな

かった。問1については、細胞周期が分裂期と中間期の交互の繰り返しであるということをよく理解していない受験生が多かったのは意外であった。18―19の正解者は10%に過ぎなかった。問2も正解者は半分以下で、実験とか実習とかに知識の応用が余りできない、という印象をうける。問3は減点法を採ったにも抱らず、比較的成績はよかった。問4も単純な内容の問題であったためか成績は悪くなかった。

(3) 問 題 Ⅲ

平均得点は問題Ⅰとほゞ同じで、かなり高かった。前半の問に対する正解率は予想したより高かったが、後半の問になるに従って正解率は期待していたより低く、器官の働きとそれに関係した物質交代を有機的には理解していないように思えた。

(4) 問 題 Ⅳ

問題Ⅳはその内容からして、種々の組合せ採点を採用した。すなわち、問1では34―36―38、35―37―39の組合せで採点、問2では40は(34―36―38)と、41は(34―35―36―37―38―39)と組合せで採点、また問3では43―44を組合せで採点した。これらのうち問1と問2とは何れも成績がきわめて悪かった。これは問題の文章の不十分なことによる誤解も多少あったかも知れないが、むしろ現在の高校で行われている生物教育の欠点がここに現れているのではないかと思われる。こうした探究の過程についての教育が重視され、ば、もっと正答率は高くなったものと考えられる。問3については、問1と問2の得点が低いであろうことをある程度予想して全体の平均点を少し上げるために、問題をやゝ易しくしたので、正答率も高かった。

3 出題範囲について

出題については十数種の主な現行教科書に記述されている内容の範囲とし、選択肢の語群も大多数の教科書に載っているものを用いるよう配慮した。

4 本年度の問題についての反響意見

本報告の原稿作成の現時点で、「連絡協議会試験問題部会高校側委員3名(生物)」及び「日本生物教育学会」よりの意見書が入試センターへ寄せられている。前者の方がいくらか詳しいようであるが、しかし何れも多くの有益な意見がもられており、出題側として今後これらの意見

に対しては十分に耳を傾けねばならないと思う。

全体としての問題の分量（一定時間〔現在では1時間（2科目選択で2時間）〕に対する）及び問題の内容などについては、細かい点は別としてお、むね適当という意見であるが、分量はとも角として内容については、上にも述べたように単純に記憶によって得た知識を試すのではなく探究的内容のものを多く出題しようとすれば、現在では得点が著しく低下する恐れがある。また、この探求的内容の問題を作成しようとすると、その問題の文章がや、長文になることが考えられ、また思考のための時間も必要となり、それらの結果として分量の割に時間が少いというようなことを招くことも予想される。これらのバランスをどうするかは、今回の出題に当っても大いに論議のあった所であるが、今後も更に検討せねばならぬ重要な点であろうと思う。実物についての実験・観察に関する出題を望まれる意見も出されているが、これについても慎重な配慮と検討が必要と思う。

また問題Ⅲの問2の文中に不適格な個所があり、また問6の文章の表現も不適当ではないか、との指適があったが、これらの点については今後出題者側ももっと慎重に対処せねばならぬことを反省している。

5 その他

採点はコンピューターによって処理されるが、過去数回の試行テストによって、どのような出題が可能かは大体明らかになっている。しかし本年度からはコンピューターの機種が本番用の新しい型のものに変り、その結果全体としては今迄のものより遥かに高性能である由であるが、一方で出題について今迄にはなかった特別の配慮も必要となったように思われた。まぐれ当りの正解を出来る限り避けるためには、勢い採点の方法をよりこみ入ったものにせざるを得ないこともあるが、しかしこのような方法は必ずしも今度の新機種にはなじまない点もあるように思えた。このことも今後もっとよく検討する必要のある大きな問題と思われる。

エ 地　　学

(ア) 各大学の意見

地学の試験問題について、1国立大学から意見が提出された。

①. 地学Ⅰは素直な問題であるが、もう少し幅のある問題が望ましい。

(イ) 共通1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（地学）

1 試験問題の構成と内容

(1) 全般的な配慮として、鉱物・岩石、地質・地史、天文及び地球物理と気象・海洋の4部門に大別され、一応、地学Ⅰの全分野から万遍なく出題されている。

(2) 問題Ⅰ～Ⅳのすべてを通じて、地学教育の基本的概念（時間・空間・進化及び自然現象相互の関係を総合的にとらえる）や基礎的原理に関する理解度・思考能力を問うものが出題され、知識の偏重や学習指導要領からいちぢるしく逸脱したり、地学教育の本質から離れたと思われる内容の出題はなかった。しかし更に加えるならば、進化という面で、地球、太陽系、宇宙を通して見るような内容も検討してほしいものである。

(3) 本年度の特色として、説明文による設問に対して設問中に図を用いたり、又実験室内外での観察結果にもとずく判断や思考過程、実習過程を大切にする問題が多かった。

(4) 一応大部分の教科書に記述されている内容の範囲で出題されているが、この点を過度に押し進めて行くと適切な出題を困難にすると思うので、出題者にある程度の幅をもたせねばならないが、唯1～2の教科書にしか記述されていない内容についての出題は避けてほしい。

2 試験問題の範囲と程度、設問数等

全般的に見て問題の難易の程度は、ほぼ適当であるが受験生にとっては総合的に、浅くとも広く学習する態度が大切と思う。

(1) 地球の公転、惑星の視運動、恒星の物理性（星の明るさ）、およびＨＲ図と恒星の距離等についての出題である。つまり天文の分野で天体の位置、運動、物理性について万遍なく基礎的理解力、推察能力をみる意図らしい。

問1 選択肢②、⑥は教科書によって扱わないものがあり未学習者が多い。

問3 見かけの等級を求めるよい問題であるが、従来あまりこの形式の出題がなかったのでやや難問である。

問4　分光視差に関する問題で総合力を確かめるに極めて適当な問である。HR図中の星々の群についてその平均的な位置を曲線で示してあることも親切で混乱をなくした。

絶対等級、光度比、距離などの関係を適確にとらえているかどうか内容的に多くのものを含んでいる。

(2)　地かく変動（地震）、気象（フエーン現象）、海洋（海水中の塩類）等についての出題である。大部分の教科書に共通して取扱われている単元の理解度を見る問題である。

A　特に地震波のエネルギー量とマグニチュードの関係については、教科書によって触れてないものが多く授業の基本的、一般的な内容と大きく離れている。数量的な関係で答えを求めるのは果して適当であったかどうか、今後の検討を要する。

B　選択肢の表現方法にやや難点があり、どちらともとれる選択肢があることは問題があろう。

C　海水やその循環では地域性としての条件があり、現場での扱いに大きな差が出る単元であるから出題については十分な考慮が必要であろう。また、解答とは直接関係ないが電気伝導度の測定（電磁誘導塩分計）の記述は少し専門的でもっと単純化した表現がほしい。

(3)　絶対年代の測定、地層とクリノメーターの測定の応用、生物の進化（地史）等について出題されている。基礎的理解度とその応用的思考を見る意図である。

問1　正確な知識と正しい考え方、とらえ方を見る問題で適切である。

問2　今回の問題中で一番難解なものであったと思われる。応用面が強調され、ねらいは実によく、面白い問であるが、

㋐　現場で地学の野外実習がなかなか実施されにくい現状から見て、構造を立体的につかまえる練習がなく、見かけの走向や傾斜の扱いにまったくなれていない。

㋑　走向、傾斜を見かけの値から正しい数量として求めるための計算が要求されているがほとんど授業時には扱われていないのが現実である。

などの諸条件が重なり極めてむずかしくなっている。

問3　生物の進化についての出題である。選択肢中の示準化石名は高校地学の知識としては無理のないものと思われる。

(4)　火成岩中の斜長石の組成の特徴、変成作用と変成岩に関する出題である。火成岩、変成岩の生成について、造岩鉱物の晶出順序や再結晶作用について基本的事項の理解度をみた問題である。

A　教科書に説明されている事がらについて、鉱物・岩石の標本を観察しながら正しい理解がなされているかを問われているが、An、Ab、Orの三つを端成分とする固溶体や結晶分化作用を理解しないと問題が解決しない。ただ、受験生にとって三角ダイヤグラムの形や固溶体の化学式等についてどう理解するか難点がのこる。

B　基本的事項の理解度を問われる問題で、鉱物・岩石名を単に暗記するのではなく、標本を観察しながら正しく理解しているかを問うている。ただ、選択肢⑨の脈岩は岩脈としたほうがよいのでは、なお、A、B共、問題中にある鉱物・岩石名は出題範囲としては無理のないものである。また、自然現象相互の変化を総合的に理解させるには最適の問題である。

3　試験問題の出題方法

(1)　時間・設問数については適当である。

(2)　配点　について、大問については適切であるが、小問については、2～4点の平等配点にしてほしい。

(3)　出題形成について、過去4回の試行テストの積上げで、今回の出題形式は、わかり易い設問形式になり、内容も洗練され、マークシートの記入の方法もよく改良されたと思う。

(4)　選択肢数の適正化について、選択肢の数、その組合せなどに研究のあとがみられるが、領域が限られ解答が与えられている中で、解答法については複雑にならないように配慮されたい。尚選択肢数は①～⑥位までが適当と思う。又選択肢の中味をもう少し高校現場にあわせて吟味してほしい。程度の高い内容と表現があった。（例えば　I—問1　II—B　IV—A　等である。）

(5)　出題形式の限界について、今回は公転軌道とH・R図が図示されたが、逆に図示させる解答・グラフ・図表等を要求する解答は困難と思うが、今後その方面の研究を期待する。つまり地学現象では再起性のない事物・現象が多いことから統計的な資料・記録を活用する面を取り入れてほしい。

4　そ　の　他　（出題担当者への要望）

昭和53年度からの共通入試は、多くの受験生は勿論親や教師も不安感をもっている。しかしそのことは将来への入試改善のためにも、総合部会を始め多くの会合で段々解決されてゆくと思う。従って各教科部会でも出題の内容はよりよいものに向上させたい。

特に高校の地学は発足以来やっと20年程経過した新しい教科である。受験者数も他教科に比べて少ないと思う。しかし昭和53年の共通入試から各高校毎についてみると、地学の受験者は急増する。高校の地学教育の振興のためにも全国視野にたった適切な標準問題を出題されんことを要望する。

(ウ) 日本地学教育学会からの意見

1 全般的な事項について

(1) 「地学Ⅰ」の範囲を逸脱し、「地学II」まで履修が必要となる問題がある。

(2) 「地学」のなにを聞きたいのか。問題が多肢にわたり焦点がボケてしまっていないだろうか。もっと段階的に学習到達度を試すような問題を考慮して欲しい。

(3) 問題の内容面・形式面でもっと易しくできないか。あまり必要と思われない文章が入ったりして、難かしくしている感がある。

(4) 記問形式が単一的である。知識偏重で記憶力のみを試すようである。もっと思考力をみる問題が欲しい。

(5) 選択肢に対する配慮がかけている。1問に対する選択肢の数が不統一である。一見選択肢の数が多いようにみえるが、明らかに間違いのものを、ただ数を増すために入れたと考えられるものや、選択肢が多くても、問題別に正答を求めるとき、その中の少数に限定されてくるものなどが多い。

(6) 正答の中に、間違いがあるのではないか。

(7) 正答に対する配点が不明である。Ⅰ～Ⅳまで、各25点の配点であるが、小問の数がまちまちであるため、正答に対する配点がはっきりしない。受験生が成績を採点することが出来ないのではないか。

(8) 試験時間を2科目120分でなく、1科目60分にできないだろうか。2科目120分では、1科目に多くの時間を費いやして、他の科目の解答時間が不足してしまわないか、そのために、科目毎の合計点、平均点に問題が起らないだろうか。

2 各問について

(1) Ⅰ

問1について

○ 「地学Ⅰ」では、歳差は扱わない。地学Ⅰの範囲を逸脱している。

問2について

○ あけの明星の位置がわかれば、よいの明星の位置も決まるので、両方を問う必要があるのだろうか。

○ 「留」は教科書によってでていないものがある。また、図の上で位置が⑥だけではないといえる。

○ 地球を通る横の点線は、何のために引いたか。

問3について

○ **問4**と同じ傾向の問題といえる。そして正答を一度に求めるには、やや難かしい。むしろ**問4**と一緒にして、段階的に問うのがよくないだろうか。

(2) ⅡA・**問2**について

○ 全く記憶力を試すもので、不適当と考える。

ⅡBについて

○ 正答が間違っていないだろうか。この選択肢だけから選ぶとすれば、むしろ③の方が適当とれる。

ⅡC・**問1**について

○ 地学的な問題でない。細かいことにこだわっていないだろうか。

○ 一般に、地学の教科書では、イオンの形で示されているものが多い。

(3) Ⅲ

問1について

○ 何を聞きたいのか、意図がわからない。選択肢についてももう少し配慮が欲しい。

問2について

○ 初めの意向の定義は、必要あるのか。また問題文から受験生が、題意を読み取りにくいのではないか。

○ この問題は、計算問題ととられ易い。計算問題とすれば、幾何学的な問題で、地学的でない。「地学Ⅰ」でこうした計算問題は殆んどやられていない。

例えば、18に対する選択肢に38°という数字がある。このような細かい数字を要求するということが問題である。ここまで計算する必要があるのではないかと、受験生は考えてしまう。よけいな負担をかける必要はないのではないか。この場合、むしろ45°より大きいとか、小さいくらいの表現を使ってもよいのではないだろうか。

(4) Ⅳ・Aについて

○ 前文が、必要なのかどうか。特に、この前文中「端成分」「Or端」という言葉は、「地学

Ⅰ」では殆んど使用しない。受験生が理解できるだろうか。もっと高校生向けの表現が必要であろう。

○　前文で、長石に関する説明があって、第1問の24では、前文に関係ない岩石を問う、こうした問題の形式では、何のための前文か理解にくるしむ。

○　この問題は、火成岩と長石の問題であることは、受験生に容易にわかると思う。それなのに選択肢に、石炭岩やチャートが入っているのは、何のためか。選択肢の数を増すにしても、もう少し配慮が欲しい。

(5)　Ⅳ・Bについて

○　問題文中、「……に相当する語……」とあるが、「……にもっとも適する語……」とした方がよくないだろうか。

例えば、広域変成岩の中にキン青石が見られるものもあるし、白いホルンフェイスも沢山あるのではないだろうか。

(エ)　教科専門委員会問題作成部会報告書（地学）

1　各問題の出題意図

地学の全域にわたるよう、天文、地球物理、地質、鉱物、岩石の分野から出題されるように配慮した。問題Ⅰ～Ⅳを通じ、単なる知識を問うのではなく、基本的な原理、概念に対する正確な理解力、自然現象に対する観察力および思考能力を問うことに重点を置いた。各問題別には次のとおりである。

(問題　Ⅰ)　天文の問題を大別すると、太陽系における天体の運動現象に関するものと、太陽系の外の恒星界の物理現象に関するものとになる。問題Ⅰの4問のうち、第1、2問は前者に、第3、4問は後者に属する。さらに問題を説明問題と計算問題とに分ければ、第1、2問は前者、第3、4問は後者に属する。このようなバランスを特に意識して出題したわけではないが、結果的には妥当なものとなった。

以下各問について出題意図を略述する：

問1．地球の公転運動の理解を問う問題である。地球は自転運動もしているので、どちらかに関連する現象のうちから公転運動に関連する現象を2つ選ばせる形式となっている。したがって、自転運動に関する現象がわかっていても正解を得るわけだが、それならそれでよいとした。

問2．内惑星として金星を、外惑星として木星をとって、それらの公転運動に対する理解を問う問題であるが、それを、同じく太陽を公転する地球から見る形をとっているので、少々〝ひねった〟形となっている。ただし、問題がむずかしくないよう（つまり正解が求めやすいよう）な配慮は十分に払われている。

問3．星の等級（と明るさとの関係）の理解を問う計算問題である。5等級差が100倍の明るさに相当する、という両者の関係の原点を問うている。

問4．これも星の等級と明るさに関係する計算問題であるが、HR図、主系列の理解、グラフ読取、星の距離と明るさの関係の理解をも併せて問う総合問題である。計算量は前問とほとんど同じである。計算に時間をとられないよう配慮した。

(問題　Ⅱ)　地球物理に関する出題である、その中で、かたよることのないように、地震、気象、海洋から出題した、知識を問う問題については、基礎的と思われるものに重点をおいた。一見、知識を聞いているかのように見えても、問題をよく読めば正解を得ることのできる思考力を問うている問題（ⅡC問3）もある。

(問題　Ⅲ)　おもに地質・地史に関する設問である。単に高校の地学Ⅰ教科書に記述されている内容の知識を断片的に問うことよりも、中学の教科書にも出ている程度の基本的な原理に関する正しい理解とその論理的思考による応用能力を（できれば創造性をも）テストすることを主眼として出題した。

(問題　Ⅳ)　鉱物、岩石に関する設問である。Aでは造岩鉱物の長石について火成岩との関連を問い、Bでは変成岩の一般的な性質を扱った問題である。Aでは鉱物についての理解度を、Bでは岩石についての観察力をテストすることを主眼とした。

2　出題意図と解答結果

全般的にみて、平易すぎないかと考えていたが、予想に反して、理科の他教科に比べても、非常に悪かった。その理由としては、本年度大学受験に際し、地学の選択など考えていない者が、試行テストで、たまたま理科2科目のうちに、いくらか常識的に答えられそうな科目として地学を選んだ場合も含まれていることではないかと推定している。その一例では、選択肢にないような番号を解答し、当てずっぽで答えたと思われる者がみられることである。

問題Ⅰ、Ⅱと、問題Ⅲ、Ⅳとの間では多少性格が違うせいか、一方がよいと他方が悪いという傾向があらわれがちであるが、地学のように範囲の広い科目では、万遍なく勉強しておく必要性があろう。

問題別に解答結果をみると、一番よいのは問題IIであって、約半数の正答が得られている。これに次いで成績順に、問題I、問題III、問題IVとなっており、一番悪い問題IVでは、正答が約4分の1となっている。

以下各問題についての解答結果をみると次のとおりである。

(問題 I) 4問を通じての平均点は予想したより低い。また4問の(受験生にとっての)難易を正解率から判断すると、**問1**は容易；**問2**は4問全体としたら容易だが、木星の留は難；**問3**はやや難；問4は難のようである。**問3**は容易なはずなのに意外であった。**問3**ができないようでは**問4**にも答えられないであろう。

(問題 II) 正答率の極めて高い問題と、正答率の低い問題が混在していたことは、今後の出題においては考慮すべきであろう、IIA**問1**はやさし過ぎ、IIA**問2**は難しかったようだ、IIC問1、2は、高校教科書に取り上げられていないこともあり、や、正答率が低いが、仮に教科書に書かれていなかったとしても、地学の初歩ともいうべき常識事項である。次年度以降の本テストにおいては試行テストの場合よりも受験生の準備がよくなることが予想されるので、この程度の出題でも、本テストでは満足すべき正答率が得られる可能性もある。

(問題III) **問1**. 放射性同位体による年代測定に関する設問で、半減期という放射性同位体の重要な概念と^{40}K(または^{14}C)の性質を理解していれば容易に答えられるはずである。解答分布をみると、半減期の長い同位体が比較的古い時代の岩石の年代測定に有効であるとした解答者は多かったが、いまや社会的にも常識となっているはずの、^{14}Cがごく新しい時代(数万年前までの)の試料にしか適用できないことは必ずしも周知されていないようで、むしろ意外であった。(16は正答率約 1/4)

問2. 層理面の走向・傾斜に関する理解の程度を応用的問題によってテストするのがねらいで、用語を知らなくても問題の意味がわかるように説明を与えておいたが、正解者は多くなかった。(正答率は17 18とも約1/6)批評にあるようにこの設問は計算問題(あるいは幾何の問題)と受取られる向きがあるが、きわめて単純な地質構造の理解に必要な立体感覚があれば解ける問題で、特別の知識や計算を要しない。実際に地層を見たことがあれば、実感をともなって理解できるであろうし、略図を画くことができれば容易に正解に到達できることを期待した。

ただし、18の選択肢がいかにも計算を必要とするように見えて、受験者の多くが思考を放棄したとすれば、選択肢の与え方に反省すべき点があることは認める。

問3. 主要な示準化石となる古生物の変遷に関する設問で、生存期間と分類群の両方からヒントが得られ、その組合せによって解答できるように配慮した。この問題は19～23を通じて正解者が多かった。(正答率は約半数)

以上の3問を通じて言えることは、例えば問3のような知識を問う設問に対しては正解者が多いが、問1、問2のようにきわめて基本的な原理であっても、これを正確に理解し応用する能力は一般に高くないと判断される。今回の設問の当否は別として、高校生の学力が単に教科書・参考書から得る知識にあまりにも偏っていて、実感のともなわないものになっていることが感じられる。問3についてもこのような分類群の名称を記憶しているだけで、実際に実物を観察した高校生は少ないのではないだろうか。地学教育は他の科目以上に、個々の知識の他に実習や体験を通じての自然現象に関する興味と理解が重要である。机上の勉強に明け暮れているよりも、自然にとけこんで自主的に自然界の現象・実態を理解しようとする者のほうが良い成績をおさめられるような問題(作成には困難がともなうが)がいくつかあってもよいと思うのは当事者だけではあるまい。地学の内容はきわめて多岐にわたり、200ページ程度の教科書では網羅されないが高校生が日常生活を通じて習得されているべき事柄がきわめて多い。大部分の問題は教科書に記述されている範囲で作成されるべきであろうが、きわめて基本的な原理や概念をわかりやすい文章で問うのであれば、必ずしもこれにこだわる必要はないと考えられる。

(**問題** IV) A、Bを通じて、鉱物、岩石を総合して取り扱っているが、最も基本的であるべき、鉱物と岩石との区別からしてできていない者が見受けられた。例えば、Aの28では、「……長石はどれか」と長石の種類を問うているので、①～④以外の答えはあり得ないのに、岩石名である⑤以下を答えた者が6割近くもいる。また、Bの32で黒っぽい接触変成岩を問うているのに、①～④の鉱物で答えている者が約3分の1近くもある。鉱物にしても岩石にしても、中学の段階から出てきているものが多いのであるが、その段階での正確な理解が不足しているように思う。

それでも、33の白色の接触変成岩では、結晶質石灰岩(大理石)を半数以上が正解している。このことは、比較的身辺で見なれているような岩石についての理解が進んでいるあらわれであろう。したがって、鉱物や岩石についても、実物につき充分観察する必要性の大きい点を痛感させられる。

3　問題についての反響意見

試行テストの問題についての反響意見につき、内容に関係あるおもな点をあげてみよう。

(1)　万遍なく出題され、基本的原理、概念の理解を求めた出題意図は評価されている。

(2)　一部の教科書には記述されていない述語の使用につき意見が出されているが、記述のない場合は、問題中で説明を入れるように努めた。しかし、そのため、一方では不必要な文章が多いとされている。当然記述されるべき事項の落ちている教科書を扱うには適当な配慮がほしい。

(3)　問題の難易については、ほぼ適当という意見があるが、解答結果は悪い部類に入るので、今後の地学教育の面で検討を要しよう。

(4)　選択肢について、数が多いようにみえても、明らかに間違いのものを入れるのはよくないういう意見があったが、既述のように、専門の先生方にはとても理解できない、鉱物と岩石の区別もできていない受験生が相当数ある点は、互に反省すべき材料だと考える。

(5)　ⅡBについて、正答が違っていないかの指摘があったが、文章の表現の工夫については、今後十分注意する必要を感じている。

オ　基礎理科

(ア)　各大学の意見

基礎理科の試験問題について、2国立大学から意見が提出された。

①　問題番号ⅡB問2□12□（p55）の正解は8と思うが、エチレンはいわゆるオレフィン臭があり（たとえば、化学大辞典参照）無色無臭とはいえないのではないか。（1）

②　問題番号Ⅴ問3（p60）の選択問題で正しくないものを選べという形式は、国立大学入試に対して文部省側発表において正しいものを選べという問題が妥当とされているので注意を要する。（1）

(イ)　共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（基礎理科）

1　試験問題の構成と内容等

(1)　基礎理科のとりあげられているもっとも基礎的な概念、事項、原理、法則について全般的に理解をみるよう工夫がみられる。

(2)　基礎理科の主旨にもとづき自然の総合的理解力を評価するために従来の物化生地のわくをはなれた融合問題を少くとも1題は加えてほしい。

(3)　従来、基礎理科の出題基本方針である探究学習の重視、科学の方法の習得にかんした設問も工夫されたい。

(4)　選択肢の数が不統一であり、かつ無意味な選択肢が多すぎる嫌いがある。

2　範囲と程度、設問数

(1)　物質の反応（ⅡB）についてはやや問題があるが、他は全般的に基礎理科の範囲として逸脱したものではなく適切である。

(2)　設問数は他の理科の科目にくらべてやや少なく、この点、考慮されたい。

(3)　程度として他の理科の諸問題に匹敵する出題内容であってほしい。

3　試験問題の出題方法等

(1)　問　題　Ⅰ

①　**問 1**

光の波についての、基本的なものの理解およびその計算力をみるのに適当である。

②　**問 2**

光の速さの知識を適用して、地学分野における計算処理能力をしるための良問である。

③　**問 3**

中学理科の教科内容に関する設問であるが、単に定性的でなく、定量的な設問が欲しい。

④　**問 4**

日常の現象をとらえて、光の波動性についての知識をみるための設問であるが、選択肢に科学的に無意味なものがみられる。

(2)　問題　Ⅱ

物質の構成と反応に関する最も基本的な化学結合をとらえての設問である。イオン結合、金属結合、共有結合の3つと、分子間に働く引力とは異なった概念ではなかろうか。

①　**問 1**

上記の理由により、ナフタレンの結晶は、共有結合と分子間に働く引力による結合の2通りの解答が考えられる。

②　**問 2**

問題文 a ～ d のすべてに「一般に」という表現を入れた方がよい。特に c は「結合力が弱く」という表現のみが分子間に働く引力による固体の性質で、「ベンゼンのような有機溶媒にとける」とか、「その溶液は電気を導かない」は有機化合物一般に通ずる性質である。

③　Bについて

反応式と物質の性質、用途、反応の種類を見る設問であるが、問題形式についていえば、上にあげられた反応式と解答数が同数のため、解答が一つ判らなくても、正答となる可能性がある。問 2 のエチレンは無臭ではない。共立出版：化学大辞典……オレフィン臭。岩波書店：理化学辞典……かすかに甘い臭のある気体。

(3)　問題　Ⅲ

天体に関する基本的用語、落下運動に関する基本的知識の理解およびその計算処理能力をみようとするだけでなく観測データを処理する能力をみようとした適切な問題である。なお、問 3 と問 4 は関連があり、他の設問と趣きを異にし工夫がみられる。

(4)　問題　Ⅳ

生物の呼吸現象について最も基本的な知識を要求する平易な設問である。

Aについて

選択肢のなかに不適切なものがある。例えば、**問 1** では加熱、**問 2** では (1)～(4) と比して (5)～(8)ではいかにも無理につけ加えた感がする。

Bについて

呼吸の速さを測定する実験とかかげながら、それに関する設問が一つもない。問 1 では図における空気の提示位置がもう少し上の方が望ましい。問 2 については従来の生物Ⅰの分野では、殆んど取扱われることのなかった領域で、基礎理科ならではの感がする設問である。

(5)　問題　Ⅴ

問 1、**問 2** ともに生命の連続性についてのなかの生殖と遺伝に関する基本的理解をみようとする適切な設問である。なお、**問 1** における問題文において植物と動物との関連性の意味づけが明確でない。**問 3** については、正しくないものとして正答例(3)は、生物の進化の真の理解がなくても科学的に誤りとして判断される嫌いがある。

4　そ　の　他

現在、基礎理科の履修校及び受験者数は少ないが、近かい将来、改訂される予定の理科Ⅰの先導的役割を果たすものと考えられるので出題内容、方法についてその重要性を十分認識されたい。

(ウ)　教科専門委員会問題作成部会報告書（基礎理科）

本部会は、昨年度の研究専門委員会委員の半数 6 名に新委員 6 名を加え、物理・化学・生物領域各 2 名、地学領域 4 名、上記の境界領域 2 名、計12名の委員構成で、まず前年度までの委員会の調査研究結果および各方面の意見を総合的に検討し、それらの評価をふまえるとともに上級委員会の決定に従って、本年度の問題作成作業を行った。以下、試行テストの問題作成および解答結果等について報告する。

1　各問題の出題意図

(1)　基本方針

出題の目標は、高等学校学習指導要領に即して、一般的かつ基礎的な学習達成度を判定することである。この目標を具現するため、本部会は次のような基本方針のもとに問題作成を行った。

(ア)　指導要領中の教育内容全般にわたるよう素材を求めるとともに、教育目標にかなった問題内容とするよう、とくに自然事象または実験事象を総合的に解析し理解する能力や知識の深さのみをみるよりも、教科書にない素材を用いて応用力・科学的思考力等の大学教育に耐えうる資質を判定できるよう配慮した。

(イ)　基礎理科履修校全校に不公平にならないよう、出来る限り現在出版されている教科書(4種類)に共通する事項を用いて解答できるような設問内容となるよう留意した。

(ウ)　指導要領中の内容配分に応じた問題構成とした。

(エ)　客観テストの弊害を可能な限り少なくするため、選択肢の種類や内容に注意するとともに、数を増加する等、正答の偶然性の排除と記述式テストに近づけよう配慮した。

(オ)　問題内容に関してとくに(1)を重視したため、1小問の平均解答時間を5分とし、昨年度の実地研究試験問題よりも問題数を大幅にへらした。

(カ)　平均得点率60%を想定し、得点率に応じて中＞高＞低の小問数構成とした。ただし、他の理科4科目の問題内容と同レベルになるよう配慮した。

(キ)　高校の理科教育の指導に資することができるよう、現在の各専門分野の知識水準にてらして各問題を詳細に検討したのち、他の理科4部会の助言をえる等、問題内容を吟味した。

(ク)　採点基準については、指導要領中の教育内容区分および問題内容、解答時間に応じて各小問の配点に比重をおき、18小問は各小問5点、11小問は各小問10点とした。

(2)　各問題の出題意図

(ア)　問題　Ⅰ

光の性質に関する総合問題で、基礎学力ならびに計算力、科学的思考力を評価する物理と地学の融合問題である。

(イ)　問題　Ⅱ

物質の構成と反応に関する問題である。Aは、固体をつくっている結合力を物質の性質と関連させて理解しているかどうか、基礎学力の深さを評価する問題である。Bは、学習

の過程でとりあげられる化学反応の反応式を考え、それらを実験を通して正しく理解しているかどうか、基礎学力と応用力を評価する。

(ウ)　問題　Ⅲ

太陽系の惑星に関する総合問題で、惑星上で行った観測や実験のデータを与えて、太陽系に関する基礎学力の深さ、応用力、科学的思考力、計算力を評価する。地学と物理の融合問題である。

(エ)　問題　Ⅳ

生物の呼吸に関する基本的な問題である。Aは、細胞の生命活動とエネルギーとの関係を正しく理解しているかどうか、知識の正確さを評価する生物と化学の融合問題である。Bは、生物の呼吸の速さを測定する実験を通して、実験処理力、科学的思考力、計算力を評価する生物と化学の融合問題である。

(オ)　問題　Ⅴ

生命の連続性と生物進化のしくみに関する問題で、観察・実験のデータや文章の選択肢を与えて、理解力と科学的思考力とを評価する生物と地学の融合問題である。

2　出題形式についての今回の試み

前回までは、数値表示・学術用語表示・順序に配列等の選択肢を与えない設問を小問で約30%を配したが、今回は選択肢の内容を吟味するにとどめ、全問に選択肢を置いた。また、前回までの選択肢の選択率に関する調査結果に基づき、今回は選択肢数を4～9とした。今回の選択肢の種類は、学術用語、語句、文、数値、数式、化学反応式、図（学術用語の配列）の7種類である。

3　出題意図と解答結果

受験者数は63名で、高校数は23校である。成績は、得点率(%; 100点満点換算値を表わす。)で、平均35.99（一昨年度22.8、昨年度34.42)、最高67.5（一昨年度33、昨年度65)、最低17.5（一昨年度14、昨年度15)、標準偏差12.21（一昨年度10、昨年度11）であり、いずれも昨年度をやや上回った結果となっている。得点度数分布曲線は図1に示したが、左傾型の低得点部寄りに頂点をもつ非対称型分布を示す。また、極度の高位得点者や低位得点者がいない点は、前年度までと同じである。なお、基礎理科非履修校の受験者1名の得点率は77.5%で、この受験

者の全科目合計得点率は64.8%、各科目の得点率は46.0～70%であるが、一昨年度の非履修校の調査結果とてらし合せれば、今回の結果は想定得点率60%をはるかに下回るものといえ、設問内容の妥当性を示唆しているといえよう。このことは、さらに基礎理科受験者の基礎理科と他の科目との成績の相関調査（表1および図2）によって裏づけられる。

図1　受験者（63名）の得点（100点満点換算値）の度数分布曲線

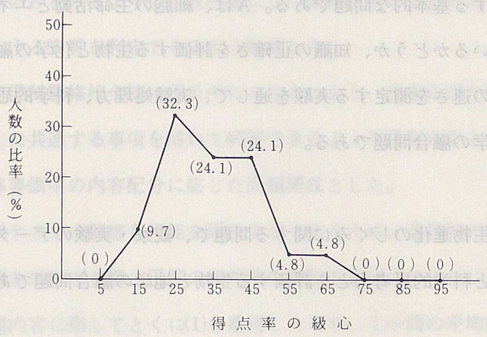
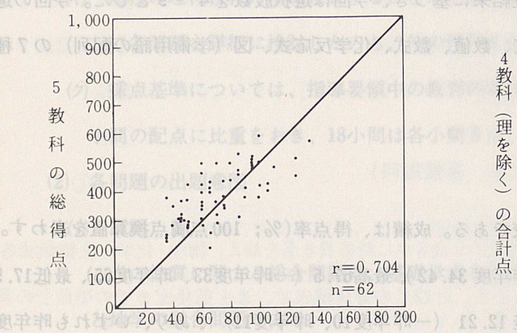


図2　表1の相関図



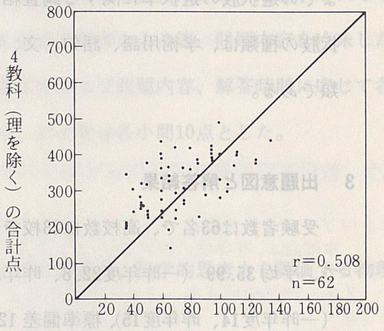


表1　昭和52年度共通第1次試験試行テストにおける基礎理科選択者の基礎理科と他の教科・科目との成績の相関調査

教科・科目名		配点（満点）	受験者数（n）	平均点	標準偏差	最高点	最低点	基礎理科(x)と他の教科・科目(y)との相関				
								相関係数	回帰直線（y＝a＋bx）		t検定	
								（r）	a値	b値	t値	相関の有無
◎理科	基理	200	62	71.69	24.41	135	35					
	全体	200	39,673	108.36		200	0					
◎国語	基理	200	62	93.87	23.31	148	42	0.283(*)	74.53	0.27	2.281	(＊)（有：信頼度95%）
	全体	200	39,673	112.17		188	11					
◎数学	基理	200	62	59.65	35.08	152	6	0.556***	2.40	0.80	5.176	(＊＊＊)（有：信頼度99.9%）
	全体	200	39,673	109.78		200	0					
数学一般	基理	200	19	92.00	36.14	152	57	0.565*	9.23	0.98	2.822	(＊)（有：信頼度95%）
	全体	200	29	88.55		169	26					
数学Ⅰ	基理	200	43	45.35	24.59	101	6	0.437(**)	17.30	0.42	3.108	(＊＊)（有：信頼度99%）
	全体	200	38,615	112.72		200	0					
◎外国語	基理	200	62	84.79	22.35	137	34	0.252*	66.60	0.25	2.016	(＊)（有：信頼度95%）
	全体	200	39,673	120.06		196	0					
英語A	基理	200	20	65.70	18.62	113	34	0.192(−)	54.30	0.19	0.829	(−)（無：信頼度95%＞）
	全体	200	525	70.00		159	11					
英語B	基理	200	42	93.88	21.84	137	54	0.067(−)	89.41	0.06	0.422	(−)（無：信頼度95%＞）
	全体	200	39,114	120.78		196	2					
◎社会	基理	200	62	79.31	21.64	133	37	0.327(**)	58.50	0.29	2.683	(＊＊)（有：信頼度99%）
	全体	200	39,673	105.30		192	0					
倫・理	基理	100	22	40.55	9.99	68	28	0.430(*)	27.59	0.18	2.131	(＊)（有：信頼度95%）
	全体	100	6,443	50.11		96	0					
政・経	基理	100	17	48.35	12.76	70	29	0.356*	35.49	0.19	1.475	(−)（無：信頼度95%＞）
	全体	100	15,361	51.82		95	0					
日本史	基理	100	44	36.77	10.86	64	20	0.266(−)	28.72	0.12	1.787	(−)（無：信頼度95%＞）
	全体	100	25,953	53.20		98	0					
世界史	基理	100	23	36.22	15.19	65	15	0.269(−)	24.83	0.16	1.281	(−)（無：信頼度95%＞）
	全体	100	20,103	51.50		96	0					
地理A	基理	100	6	47.33	15.21	64	28	−0.002(−)	48.31	−0.01	0.043	(−)（無：信頼度95%＞）
	全体	100	6,866	61.60		98	0					
地理B	基理	100	12	39.00	11.82	58	17	0.313(−)	21.90	0.23	1.043	(−)（無：信頼度95%＞）
	全体	100	4,526	48.51		100	0					
◎全教科	基理	1000	62	389.31	90.52	588	207	0.704***	202.04	2.61	7.687	(＊＊＊)（有：信頼度99.9%）
	全体	1000	39,673	555.69		927	30					
◎4教科（除基理）	基理	800	62	317.61	74.16	488	142	0.508***	206.97	1.54	4.568	(＊＊＊)（有：信頼度99.9%）

表2は基礎理科問題の難易度を分析したものであるが、平均点は Ⅱ・A、Ⅴ を除き、Ⅰ、Ⅱ・B、Ⅲ、Ⅳはいずれも得点率50%を大きく下回る結果となっている。実験処理や分析力・総合力等実験に関する科学的思考力を評価した問題は低得点率を示しているわけで、高校教育における基礎理科教育の問題点の一つであろう。設問数の面からみると、出題の予想は小問の得点率 中＞高＞低 であったが、結果は 中（55.2%）＞低(38.0%）＞高（6.9%）であった。また、小問の実際の得点率の比率は中（67.19%）＞低（22.30%）＞高（8.52%）で、設問数と同様の傾向を示した。表1の相関調査等の結果を勘案すれば、実験者の質に問題があるとも考えられる。

次に、ＧＰ分析による各小問の問題の妥当性を調査した結果を表3に示した。問題として妥当であるが10小問、34.5%で、作題上の問題点となるが、これは基礎理科が物化生地の総合学習であり、理科Ⅱの領域も教科内容として含まれ、かつ基礎理科の成績が最高と最低の幅が著しくせまく、また最高が低く最低が高い等に原因があるのかも知れない。

表2　昭和52年度共通第1次試験試行テストにおける基礎理科の問題の難易度の分析

各問題の平均(最高－最低)：Ⅰ(40点)　13.43(40－0)　　ⅡA(30点)　16.64(30－5)　　ⅡB(40点)　11.64(35－0)
(200点満点)　　Ⅲ(40点)　11.40(40－0)　　Ⅳ(25点)　7.65(25－0)　　Ⅴ(25点)　12.50(25－0)

各設問の正答率			(難) ← 問題の難易度 → (易)												計
			0～10%		10～30%		30～50%		50～70%		70～90%		90～100%		
設問数 (%)			1 (3.5)		10 (34.5)		12 (41.4)		4 (13.8)		2 (6.9)		0 (0.0)		29 (100.1)
問題番号・記号	(単位)		設問番号	正答率	設問番号	正答率	設問番号	正答率	設問番号	正答率	設問番号	正答率	設問番号	正答率	得点率% (比率%)
	Ⅰ				1 4	20.31% 17.18	2	43.75%	3	53.12%					6.72 (18.34)
	Ⅱ	A					1・a 1・b 2・c	43.75 37.50 46.87	2・b	50.00	2・a 2・d	70.31% 84.37			8.32 (22.71)
		B			2 3 4 5 7	29.68 28.12 25.00 21.86 14.06	1 6 8	39.09 34.37 40.62							5.82 (15.88)
	Ⅲ		4	6.25%	1	25.00	2 3	46.87 35.93							5.70 (15.56)
	Ⅳ	A			1	29.68	2	48.43							3.83
		B			2	20.31	1	34.37							(10.45)
	Ⅴ						1	34.37	2 3	56.25 51.56					6.25 (17.06)
得点率% (比率%)			0.31 (0.85)		7.86 (21.45)		15.32 (41.81)		9.30 (25.38)		3.12 (8.52)		0 (0.00)		36.64 (100.00)

4　出題範囲についての注意点

基礎理科の教育内容には他の理科4科目のⅡの内容も相当程度含まれているが、指導要領の教育目標を具現する意味で教科目内容全般にわたって出題すべきものである。また、Ⅰ・1・(1)の出題上の基本方針を尊重することが教育目標の実践や大学入試の目的に連がるとする観点から、どの教科書にもない出題素材を選ぶべきものと考える。ただし、すべての教科書に共通する学習事項にしぼって出題する措置や出題内容に応じて中学校における学習内容を加える措置は今後も必要であろう。

表3　昭和52年度共通第1次試験試行テストにおける基礎理科
各設問のＧＰ分析による問題の妥当性の調査

問題番号・記号			G P 分析 上位20%群 正答者数	上位20%群 誤答・無答者数	下位20%群 正答者数	下位20%群 誤答・無答者数	調査人数	x^2	問題の妥当性の判定	正答率(%)
Ⅰ	問1		3	8	1	11	23	0.418	妥当でない（危険率5%以上）	20.31
	問2		8	3	1	11	23	7.471	妥当である（危険率1%で）	43.75
	問3		7	4	3	9	23	2.091	妥当でない（危険率5%以上）	53.12
	問4		3	8	2	10	23	0.012	妥当でない（危険率5%以上）	17.18
Ⅱ A	問1	a	10	1	2	10	23	9.877	妥当である（危険率1%で）	43.75
		b	9	2	0	12	23	12.878	妥当である（危険率1%で）	37.50
	問2	a	11	0	6	6	23	5.074	妥当である（危険率5%で）	70.31
		b	10	1	2	10	23	9.877	妥当である（危険率1%で）	50.00
		c	10	1	1	11	23	12.548	妥当である（危険率1%で）	46.87
		d	11	0	6	6	23	5.074	妥当である（危険率5%で）	84.37
Ⅱ B	問1		11	0	2	10	23	13.004	妥当である（危険率1%で）	39.09
	問2		7	4	2	10	23	3.527	妥当でない（危険率5%以上）	29.68
	問3		4	7	0	12	23	3.054	妥当でない（危険率5%以上）	28.12
	問4		7	4	3	9	23	2.091	妥当でない（危険率5%以上）	25.00
	問5		4	7	1	11	23	1.259	妥当でない（危険率5%以上）	17.18
	問6		7	4	1	11	23	5.492	妥当である（危険率5%で）	34.37
	問7		4	7	1	11	23	1.259	妥当でない（危険率5%以上）	14.06
	問8		8	3	3	9	23	3.510	妥当でない（危険率5%以上）	40.62
Ⅲ	問1		8	3	3	9	23	3.510	妥当でない（危険率5%以上）	25.00
	問2		6	5	3	9	23	1.734	妥当でない（危険率5%以上）	46.87
	問3		6	5	0	12	23	6.253	妥当である（危険率5%で）	35.93
	問4		1	10	0	12	23	0.002	妥当でない（危険率5%以上）	6.25
Ⅳ A	問1		5	6	1	11	23	2.402	妥当でない（危険率5%以上）	29.68
	問2		8	3	4	8	23	2.165	妥当でない（危険率5%以上）	48.43
Ⅳ B	問1		6	5	2	10	23	2.152	妥当でない（危険率5%以上）	34.37
	問2		3	8	2	10	23	0.012	妥当でない（危険率5%以上）	20.31
Ⅴ	問1		4	7	7	5	23	0.404	妥当でない（危険率5%以上）	34.37
	問2		3	8	7	5	23	1.166	妥当でない（危険率5%以上）	56.25
	問3		10	1	4	8	23	5.753	妥当である（危険率5%で）	51.56

5　本年度の問題についての反響意見

(1)　一部国公立大学

問題の内容が平易すぎる、試験時間を90分にせよ（以上理科全般に対する意見）、Ⅴ・問3で「正しくないものを選べ」の設問形式は文部省の指導に反している、Ⅱ・B・問2の設問内容が一部妥当性を欠くと考えられる等の意見があった。

(2)　一部高校（試行テスト試験問題協議会基礎理科部会報告）

(ア)　試験問題の構成と内容等

学習指導要領に即した出題であるが、融合化に乏しく、また探求学習等の理科教育目標に合った問題を多くする、選択肢の数を統一する等考慮されたい。

(イ)　範囲と程度、設問数

一部を除き全体として適当であるが、設問数を他の理科4科目並みに増加するとともに程度も他の理科4科目と同レベルを維持してほしい。

(ウ)　試験問題の出題方法

各設問についておおむね妥当であるが、問題文の表現、選択肢の設定等に今少しの工夫がほしい。

(エ)　その他

基礎理科は近く理科Ⅰに移行すると考えられるので、科目としての重要性を認識して出題してほしい。

(3)　受験者（試行テストアンケート調査結果）

基礎理科は他の理科4科目に比して、問題の難易では難しいが32.2%で最も多く、解答時間も長いが72.3%で最も多かったが、問題の文章は普通が多く57.3%であった。

6　そ　の　他

本部会として、理科5科目間の出題の基本方針の統一化を実現するようとくに要望したい。科目間で平均点の不揃いの場合における単なる調整措置は多くの問題を残すことにもなり、また調整措置そのものは、基本方針の統一がなり、出題面に反映された場合には第2義的なものであるからである。

(5)　外　国　語

ア　英　　語

(ア)　各大学からの意見

英語の試験問題について9国立大学から意見が提出された。

1　一般的問題の内容について

(1)　英語に無理な設問が二、三見受けられた。また、現在の形式では受験生の読書力が低下するおそれがあるので、出題の工夫によって改善することが望ましい。（1）

(2)　全体としては、英語力をこれらの問題だけでは測定することは不可能である。（1）

(3)　全般的によい問題であった。しかし、1次試験の性格からいうともう少し量を減らしてもよいように感じた。（1）

(4)　扱われている素材があまりにも低次元で、しかも実用一本やりのため、大学の入試問題にふさわしくない。（高級な素材の使用を要望する）　（1）

(5)　解答の無作為適中率を下げるためにも、問題における選択 No. 数を増やしてはどうか。（1）

2　英語Bについて（英語Aとの共通問題も含む。）

(1)　全体について

英語BⅠ～Ⅶがやや易しすぎるきらいがあり、量が多すぎる。　（1）

(2)　各設問について

Ⅰについて　（1）

4つの選択肢の間に不統一がある。例えば、(10) high、middle、mildの形容詞に heat の名詞はおかしい。

人工的な問題と自然なものとが混っている。例えば、(25) otherwise。

(5) Kindness は quality?

Ⅱについて　（3）

英語BのⅡの問3として示されている選択肢は、いずれも不適切と考えられる。

①・③・④は、綴りに誤りがあるから、正答とはなりえない。②は問題文を改めなければ barber's とするのが正しく、barber shop という英語の用法は、慣用のものとしては

存在しないと考えられる。Webster's Third New International Dictionary (1968) にはbarbershopという単語が〈床屋〉の意として掲載され、barberは〈理髪師〉に対して用いる語となっている。

The Randam House Dictionary of the English Language (1973) も、barber＝理髪師、barbershop＝床屋（理髪店）である。

従って、［　　］にうめる語は、barber's でなければ問題文として［　　］の次にあるshopの語をけずり、選択肢をbarbershopに改めなくてはならぬと考える。

問題文が米国語の形式をとるなら、選択肢はbarbershop、英国語ならbarber'sを選択肢とするのが常識と考えられる。

間違ったspellingを問題にだすのは、妥当か否か？ spellingを1次試験でだすのは、無理ではないか？

A（B）Ⅱのように、誤った単語をみせることは、教育上さけられていることである。

Ⅲについて　（2）

問題文、苦労して作ったわりに不適切なものが多く、要求が選択と正しいspellingと二つにわたるのは、はたして問題としてどうか？

また、問7は、Shall I give you a liftというBritishしか知らない人間には困るのでは？

Ⅲの「虫くい」的問題も妥当とはいえない。

Ⅳ～Ⅶについて　（1）

Ⅳ　わりとよい問題。ただし、問3(1)はlightではなく、not heavyの方がbetter？

問4 deep fogでも可。

Ⅴ　問2、問4、不適切。　問5、問題文にstrangerがあるのは、混乱招く。

Ⅵ　わりとよい問題。

Ⅶ　英語力より反射神経をみるのによい問題で余りよくない。

Ⅷについて　（2）

nonsenseな問題。とにかく問題数が多すぎる。

Ⅷの標題をつける一節、もう少し長いものにして問題数を少なくするのが望ましい。

Ⅸについて　（1）

よい問題。

(イ)　共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（英語）

本英語部会は2回にわたって検討委員会をもちましたが、その協議結果を次のとおり報告します。

1　試験問題の構成と内容等について

(1)　基礎力問題、語句、表現力問題、対話文、読解問題等多方面にわたって出題されており、構成、内容ともおおむね妥当といえる。

(2)　しかし、学習指導要領に示されている四領域のうち、「聞く・話す」分野が出題されておらず、バランスを欠いている。

(3)　もし、この「聞く・話す」分野に関する聞きとりテストが実施不可能であれば、次善の策としてそれにかわりうる問題を工夫し出題していくべきである。

2　試験問題の範囲と程度、設問数等について

(1)　難語もみられず、使用頻度の高い構文ばかりであり、範囲、程度とも適切であった。

(2)　設問数も、「英語A」「英語B」ともに妥当であった。

(3)　ただ、次の点については検討し改めていくべきものと考えられている。

(ア)　19の場合のように、正答が2つあると思われる問題はさけていくべきである。

(イ)　例えば42のrideに対するliftのように、英米で表現が異るものが答となるものについては、作題に際して考慮していくべきである。

(ウ)　「英語B」Ⅱの問6に、humourという英国式のつづり字に対して、Ⅳの問4にcolorsという米国式のつづり字がみられる。つづり字については、英米どちらかに統一していくべきではなかろうか。

(エ)　52の正解である選択肢④の文における前置詞inは、生徒にはめずらしい用法であり（学習辞典によっては記載していないものもある）、より頻度の高いforとした方がよいのではないか。

(オ)　「英語B」の63の場合、正答となるべき選択肢が問題文の内容を十分に表わす標題とはなっておらず、正答としては不十分なものであった。

(4) 「英語A」について

(ア) 共通第1次試験における「英語A」をどう位置づけていくべきものか明確でないので問題そのもののねらいもはっきりしていない。明確な位置づけが必要であると思われる。

(イ) 指導要領にもられている「英語A」本来のねらいからすれば、その目標にそった「英語A」独自の問題をもっと多く出題し、「英語B」と共通な問題を少くしていくべきである。

(ウ) 「英語A」の履修単位数など、生徒の実態にてらしてみると、例えば 3 、 22 のように、程度が少し高すぎたと思われる問題がみられた。生徒の力に即した程度にしていくべきものと考えられる。

3 問題の出題方法（試験時間、配点、問題文の表現、解答方法）等について

(1) 時間……時間100分に対して設問数76, 78がその限界であると思われる。これ以上設問数をふやすことのないよう望まれる。

(2) 配点……問題ごとの配点は、おおむね妥当である。ただ、「英語B」のⅨの場合、設問数9に対して配点32とあるが、この配点が不明であり、生徒にとって自己採点が不可能である。

(3) 問題文……主旨は理解できるが、日本語として不自然なものがあった。工夫を要する点である。

(4) 解答方法……解答用紙の記載について（後述）

4 そ の 他

希望意見として、次の点があげられる。

(1) ミス・プリントや、解答例の訂正など絶対にないよう努めること。

(2) 活字の組み方に一部不統一がみられた。校正を吟味すること。

（例） P.38、Ⅶの指示文「…一つ選べ。（配点10）」とP.39Ⅷの指示文「…一つ選べ。（配点28）」

(3) 特別な学部、学科志望の生徒をのぞいて、第2次テストで「英語」を出題科目として課す必要がなくなるよう、第1次テストの問題をさらに充実し信頼性の高いものにしていくこと。

(4) 口語表現の重視は望ましいことではあるが、あまり特別な場面でしか使用しないような表現や語句はできるだけさけること。標準的なものにとどめること。

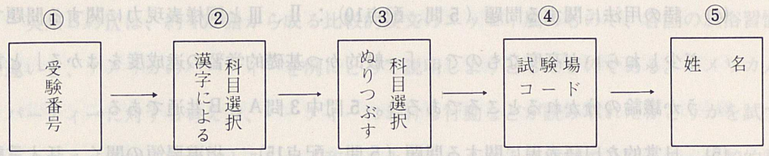
(5) ことわざについても、slangなどと同様に、その文化的背景を必要とするようなものがあるので、その出題に際しては十分注意すること。

(6) 「聞く、話す」面の能力をみる問題が出せないのであれば、せめてproductionの能力のひとつであるwritingに関するものを工夫し、できるだけ全領域にわたって能力をはかるよう努めること。

(7) 問題作成にあたっては、できるだけ受験する生徒が以前に目にふれたことのない材料を使用し、不公平にならないよう努めること。

(8) 「無効」の原因を徹底的に求明し、無効が絶対にでないようあらゆる手段を構ずること。

(ア) 解答用紙の様式の改善案



(a) 記入欄を5つとする（「科目選択」欄を2つに独立させる）

(b) 記入していく順番を→印と番号で示す。

(c) 記入に際して、監督者はひとつひとつ指示し、記入もれのないよう、記入誤りのないように努める。

(イ) 監督にあたるものは、答案回収後記入もれの点検をすること。

(ウ) 教科専門委員会問題作成部会報告書（英語）

1 各問題の出題意図

本年度問題作成に当っては、従来からの基本方針、すなわち、①志願者の高等学校段階における一般的かつ基礎的な学習の達成の程度を評価することを目的とする、②高等学校学習指導要領に準拠する、③高等学校教育の正常な発展の障害とならないよう十分配慮して作成する、などを再確認した。しかし形式的には従来のものを踏襲したものもあるが、若干の修正、変更を試みた。また、平均得点率は60%を目標にした。

以下、各問題について、それぞれの出題意図を示す。

(1) 基礎的な語い、語法、文法に関する問題（28問、配点56）：英語Aにも英語Bにも共通するごく基礎的な語い、語法、文法に関する知識や理解度を見ようとした。これらは、4

技能すべてに共通するものと考えられる。全問英語A、B共通である。

(2) つづりに関する問題（7問、配点14）：つづりの能力を再認形式で問うことには疑問を感ずるが、正しいつづりに注意を払うような英語教育が行われることが必要であるという考慮から出題することにした。もちろん書く技能に特に関係のある分野である。全問英語A、B共通である。

(3) 単語の再生に関する問題（10問、配点20）：客観テストによって表現力を見ることは、極めて困難であるが、その限界のなかで試みた唯一の再生問題である。受験者は、意図された単語を文脈から思い出さねばならぬ。不完全なつづり字はそれを確認するためのものである。10問中8問がA、B共通である。

(4) 語の用法に関する問題（5問、配点10）：Ⅱ、Ⅲと同様表現力に関する問題である。ただ少しねらいが高度なもので、「一般的かつ基礎的学習の達成度をはかる」と言えるかどうか議論の分かれるところであろう。5問中3問A、B共通である。

(5) 日常的な口語表現に関する問題（5問、配点15）：指導要領の聞く、話す言語活動について示されたごく日常的な会話表現が、どの程度習得されているかを問う問題である。もちろん再認形式では妥当性に問題があろう。全問A、B共通である。

(6) 構文力に関する問題（5問、配点15）：5つの語または語群を並べ換えて文を組み立てさせる、いわゆる整序問題で、過去の実地研究で出題されている形式である。もちろん表現力を見ようとするものである。5問中4問がA、B共通である。

以上、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵはすべて表現力に関係した問題で、従来の実地研究テストのこの分野を強化したものである。

(7) 文章構成能力に関する問題（2問、配点10）：Ⅵが単語を並べ換えて短文を組み立てる能力を見ようとしたのに対し、これはいわゆる文順の問題で、幾つかの文と文を結びつけて一つの論理的にまとまりのある文章、もしくは対話を組み立てさせる表現力の問題である。しかし、これはまた、指導要領の読むことの言語活動について、「文と文との意味上の関係をつかむこと」とあることを試すことにもなり、その意味では、読解に関する問題であるとも言える。2問中1問がA、B共通。

(8) 〔Ⅸ〕〔Ⅹ〕（英語A）、〔Ⅷ〕〔Ⅸ〕（英語B）読解力に関する問題（AⅧ、4問、配点20；AⅨ、6問、配点24；AⅩ、4問、配点16；BⅧ7問、配点28；BⅨ、9問、配点32）；英語A、Bともに Ⅷは、一つのパラグラフから成るあるまとまりのある英文を読ませて、

その内容にふさわしい標題を見つけて答えさせるものである。細かい細部に注意させるよりも、パラグラフ全体の大意をつかませるのがねらいである。指導要領に示す、「数個の文から成るパラグラフを読み、その大意をつかむ」言語活動をはかるものである。各パラグラフは4個から8個までの文から成り、短いもので60語、長いもので100語である。英語Aでは4問、英語Bでは7問あり、うち3問の共通のものである。

英語AのⅨは、非常に平易な語、約300から成るストーリーの一部を空白にして、その部分を与えられた選択肢から選んで埋めさせる空所補充問題である。空白部は6か所あり、選択肢は同数の6である。語句、構文は極めて平易で、英語Aの材料としてはふさわしいものであるが、ストーリーがアレゴリーであることに気づくかどうかも問われている。

英語BのⅨは、約400語から成る比較的長文のエッセイ風のもので、各国の風俗習慣の違いを、アメリカのパーティーを例にとって説明しようとしたものである。アメリカ人のパーティーに対する考え方、パーティーにおける行動などが読み取れたかどうかを試すものである。設問は英文によるもの、和文によるものを交えて全部で9問ある。比較的詳細な部分について聞いているが、結局は、アメリカ人のパーティーに対する基本的な考え方が理解されたかどうかがポイントになっている。

英語AのⅩは、過去の試行テストで継続して出題された読解問題の形式を踏襲したものである。三つのパラグラフから成る説明文を読ませ、その内容が理解できたかどうかを、本文の内容に合うように、与えられた書き出しを完成させることによって試そうとするものである。設問は全部で4問ある。総語数135、文の数9、1文の平均語数15で、英語Aには適当な「読み易さ」である。

2 出題形式についての今回の試み

今回の出題に当って特に考慮した点は、従来行われていた聴解力テストに代わる問題をどうするかであった。過去四年間の実地研究においては、聴解力テストを共通1次テストに入れるための方法を研究してきた。これは研究委員全員の願いであり、現場の英語教師の願いであった。しかし今回は、センターからの指示で、聴解力テストを含めないことになった。出題委員としては、はなはだ不本意ではあったが、これに従わざるを得なかった。そこで、これに代わっていかにして聞く力をはかる問題を作成するかを長時間かけて討論した。しかし、結局、聴解力テストは音声をじかに聞かせることによるよりほかに方法はあり得ないという結論に達し、

将来聴解力テストが採り入れられるような状況ができることを期待し、それまでは、各大学が独自に行うことになっている２次試験の中で、極力採り上げられることを待つことにした。

ただ一つ、「聞き、話す」学習を行っている者が、共通１次試験を受けるに当たって不利になるようなことがあってはならず、そのためには問題の量をやや多くし、多読的要素を入れてみてはどうかということになった。本来、１次試験は、コンピューター利用による客観テストということになっており、偶然性を避けるために、ある程度問題量を多くすることになっている。それ以上に問題量を多くすることについては批判もあるところであるが、委員会としては、日ごろ「聞く、話す」言語活動をしている者は、言葉を直観的に理解する能力を発達させ、そのために書かれたものを読んだ場合でも、理解する速度が、そうでない者に比べて速いのではなかろうかと考え、問題に速読的要因を含ませることにした。もちろん仮説的な試みであり、この点に関して関係者からの意見を期待したい。（注　センターが聴解力テストを中止した主な理由は、テスト実施のための同一条件を保つことが不可能であるということであった。これは、昭和51年度の実地研究を実施した48大学の試験実施委員会からの実施報告の結果を基にした結論であるということである。）

3　出題意図と解答結果

(1)　科目別成績分布

英語Ａと英語Ｂの成績は次のようであった。

科　目	満　点	最高点	最低点	標準偏差	平均点	受験者数
英語Ａ	200	159	11	22.52	70.12	525
英語Ｂ	200	196	2	27.23	120.51	41,480

英語Ｂについては、平均点が120.51点で、目標とした平均得点率60%ずばりであった。分布も比較的正規分布を示しており、まず妥当な問題であったと言える。ただ英語Ａについては、平均点70.12は目標をかなり下回っている。問題が英語Ａの学習者にとって難しかったと言える。しかし最高点が159点であることから、受験者に偏りがあったのではないかという疑いもある。そこで参考のため、全教科を受験した英語Ａの受験生525名について、全教科の成績を調べてみた。結果は次の通りである。（教科の数字は平均点を示す。）

受　験　者	国　語	数　学	外国語	社　会	理　科	全教科合計
英語Ａ受験者（525名）	83	57	70	76	61	348
全体（39,673名）	112	110	120	105	108	556

このデーターから見る限り、英語Ａの受験生は、英語だけでなく、どの教科もかなり低い得点しかあげていない。ということは、彼等がもし英語Ｂを学んで英語Ｂを受験したとしても、今回の成績と同じ位の成績しかとれなかったのではなかろうかという疑いが持てる。ともあれ、英語Ａについては、問題についてはもちろん、受験生についてももっと研究する必要があるようである。

(2)　各大問ごとの考察

各大問ごとの得点は下記のようであった。

英語Ａ（受験者数525人）

問題番号	満　点	最高点	最低点	標準偏差	平均点	平均点の百分率（%）
Ⅰ（1～14）	28	22	0	3.91	9.96	35.6
Ⅰ（15～28）	28	22	0	3.87	8.76	31.3
Ⅱ	14	14	0	2.84	6.20	44.3
Ⅲ	20	16	0	3.19	6.60	33.0
Ⅳ	10	8	0	2.00	3.14	31.4
Ⅴ	15	15	0	3.94	6.13	40.9
Ⅵ	15	15	0	4.11	8.06	53.7
Ⅶ	10	10	0	3.54	4.81	48.1
Ⅷ	20	20	0	4.91	5.93	29.7
Ⅸ	24	24	0	6.46	6.19	25.8
Ⅹ	16	16	0	3.90	4.30	26.9

英語Ｂ（受験者41,480人）

問題番号	満　点	最高点	最低点	標準偏差	平均点	平均点の百分率（%）
Ⅰ（1～14）	28	28	0	4.81	17.79	63.5
Ⅰ（15～28）	28	28	0	4.73	15.37	54.9
Ⅱ	14	14	0	2.89	9.96	71.1
Ⅲ	20	20	0	3.59	9.87	49.4
Ⅳ	10	10	0	1.97	2.73	27.3
Ⅴ	15	15	0	3.38	11.45	76.3
Ⅵ	15	15	0	3.21	12.25	81.7
Ⅶ	10	10	0	3.03	7.55	75.5
Ⅷ	28	28	0	6.88	15.51	55.4
Ⅸ	32	32	0	7.43	17.97	56.2

百分率で見る限りでは、英語A、英語Bともに、Ⅵが最も成績がよく、Aでは、Ⅶ、Ⅱ、Ⅴ、Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅷ、Ⅹ、Ⅸの順に、またBでは、Ⅴ、Ⅶ、Ⅱ、Ⅰ、Ⅸ、Ⅷ、Ⅲ、Ⅳの順になっている。整序の問題が一番易しく、一番難かしかったのは、英語Aでは読解の問題、英語Bでは語の用法の問題となっている。

整序問題は、昨年度の実地研究においては一番得点の低かったものであるが、本年はそれを単純化したために易しくなりすぎたようである。整序する単語や句の数を増やすか、選択肢を増やすなどして問題のレベルアップをする必要があろう。口語表現およびスペルの得点が良いのは問題の性格上やむをえないのではなかろうか。表現を再認の形式でテストすることの結果であると思われる。文順の問題の成績が良いのは予想外であった。もう少し内容について程度を上げてもよいのではないか。語の用法の問題が悪いのは予想されたところである。難易度をもう少し考える必要があろう。その他の、語い、語法、文法の基礎問題、単語の再生問題、読解問題については、英語Bに関する限り、だいたい妥当な問題であったと言うことができる。

(3) 各小問について

個々の小問について詳細に述べることはできないが、全受験生を5つの能力別のグループに分けて各小問の弁別力を見た限りでは、特に問題になるようなものはなかった。

英語Bについて、特に易しかったもの、特に難しかったものを、その解答番号で示すと次のようになる。平均得点率がそれぞれ90%以上のもの、20%以下のものである。

易しかったもの――1、11、32、36、53、58、60、61

難しかったもの――8、46、48、50

また平均点、誤答の分布などから見て、極めて適切であったと思われる問題は、英語Bについて言えば、9、18、20、24、25、27、54、62、64、67、68、72、73、75であった。

4 本年度の問題についての反響意見

試行テスト直後の新聞評に関する限り、全体的に好評のようであった。「問題の程度も適当だ。出題形式にも改良が認められる」(毎日)「問題は難しすぎも、やさしすぎもしない。よく考えられた良いものがそろっている」(東京)「基礎的な問題がほとんどで、全体的にみて、良問と言えるのではないか」(読売) その反面、ヒアリングテストがなくなったことについて、「聞く、話すの後退」「正常な英語教育にとって残念」とする声があった。

受験生のアンケート調査結果では、問題の難易について、普通とする者が、英語B受験者について昨年よりも増え、難しいとする者が10%も減っている。それに対して、解答時間が短いとする者が昨年より10%近く増えているのが目立つ。問題の内容が少し易しくなったのに対し分量が増えたことを示している。英語Aについては、問題が難しいとする者が34.9%で、英語Bよりも多く、英語Aの者にとっては、英語Bの者よりも問題が難しかったと感じられていることを示す。反面、解答時間が短いとする者が、英語Bの受験者よりも10%近く少ないことは理解に苦しむ。問題文の文章もわかりやすいと答えた者が昨年より増え、わかりにくいと答えた者が10%以上減っていることは、問題文が改良されたことを示すものと思う。

5 その他

昨年の報告書のこの欄に、「特に、聞きとりのテストは是非実施されるよう要望したい」と書かれている。それが本年から実施されないことになったことはまことに皮肉なことである。それに代るべき方法が考えられないだけに、是非復活することを重ねて強く希望する。教育の正常化のための共通1次試験が、英語教育の正常な発展を阻害するようなことがあってはならない。センター側の再考を願うと同時に、関係者の間で議論をおこしてほしいものである。

イ　ドイツ語

(ア)　各大学の意見

ドイツ語の試験問題について、1国立大学から意見が提出された。

①　概ねよいと思われるが指示の明確さに工夫がほしい。41年頃の能研テストの指示の方がはっきりしていたように思う。

②　総点に占める発音（Ⅰの10点）の比率が小さすぎると思われる。

③　本問題は一応受験者の基本的能力を総合的に検査できるものと思われる。

(イ)　共通第1次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（ドイツ語）

1　はじめに

私達がここで試験問題に検討を加えるとき、「国立大学入試改善調査研究報告書」（52年3月）に述べられている「大学入学者の選抜は、高等学校教育と大学教育とを関連づける重要な教育業務であるので……高等学校以下の教育の正常な発展を阻害することなく、むしろこれを助長するよう十分配慮する」の主旨に基づいている。

受験者がドイツ語を学習する年限は、おおむね2～3年である。この期間内に文法の基礎を把握し、約3000語の語いを修得し、相応の読解力を身につけることが期待されている。しかし、現状は高等学校用の教科書が不足していること、問題集など学習の補助教材等も少なく、学習環境が総じて英語にくらべて劣っていることにより受験者の理解度は必ずしも十分とは言えない。

2　検討内容（出題順に検討を加える）

(1)　発音に関する問題（Ⅰ）

ア　問題の分量及び配点は適当である。

イ　[2]の④vielleichtは他の語（-i-）とくらべて-ie-はわざとらしい。

ウ　発音を問題にする場合は、強勢のある母音と、ない母音とを区別すべきではなかろうか。

例. [2]のTinte, Musikとvielleicht, Lehrerin

(2)　初級文法に関する問題（Ⅱ）

ア　分量、配点、難易度は適当である。

イ　形容詞の格変化語尾、接続法、話法の助動詞を問う問題がやや不足しているように思われる。

ウ　[14]の選択肢に、ohneの代りにnachかanを加えるべきではないか。

エ　[17] sich freneに伴なう前置詞として、④の代りにüberを加えてはどうか。

(3)　作文に代り得る問題（Ⅲ）

ア　ドイツ語の文を理解する力と、ドイツ語で文を再構成する力とを同時に見る問題として全体としてよくできている。

イ　配点に問題があるように思われる。各問に2ケ所のチェックポイントがあって、別々に得点を与えるようになっているので正答が得られた場合、1問で6点になる。これを2ケ所とも正しい場合にのみ得点3～4点を与えるか、または、チェックポイントを1ケ所にし、得点3～4点を与える方がよいと思われる。

ウ　(ロ)を考慮して問題数を10問程度に増して得点合計を30～40点にするのがよい。

エ　問接説話、比較級・最高級による言い換え等も出題したらどうであろうか。

(4)　会話の問題（Ⅳ）

ア　身近かなテーマであり、基礎的な言語材料が用いられているのでおおむね良い。

イ　[45] Können Sie Englisch sprecken? に対する正答① Nein, ich habe kein Interesse dafür. は、特殊な状況のもとでの会話ではなかろうか。

ウ　上の問題に対する誤答例中②の文は問題を含んでいる。すなわちNeinとそれに続くdenn Englisch sprechen ist leichter als Dentsch sprechen. の内容がちぐはぐで、それ自体が文としておかしい。誤答であるにしても納得のいく文であることが望ましい。かりにleichtの意味を問う問題とすれば、問題としては成立するが、次元が低すぎる。

(5)　長文理解の問題（Ⅴ・Ⅵ）

ア　自然科学の部門と物語り風の内容との組み合わせでバランスがとれている。

イ　分量、配点ともに適当である。

ウ　Ⅴの設問には問4の年号の正しい読み方、問5の代名詞の問題等、好ましい問題が含まれている。

エ　Ⅴの問題文には、高校生にとってなじみの薄い語が多く含まれている。

例. Koks, Treibrtoffe, Brennstoffe, Braunkohle, Rohenergie, Kohlenbergban
など

オ　Ⅵの設問中㊺、㊼に問題があると思われる。㊺は高校生にはむずかしい。㊼は問題にするだけの値(ねだい)がない

3　むすび

問題全体を通じて高校生のレベルに合った良い問題である。高等学校におけるドイツ語担当者が見て、困惑を覚える質の問題がなかった点で評価できる。高校におけるドイツ語教育は適当な教材の不足、授業時数の不足等を初めとして、極めて不十分な状況である。このことは、大学入試に出題されるドイツ語の内容、程度が、高校でのドイツ語教育に直接的に影響を及ぼすことを意味している。この点から見ても今回の試行テストは高校のドイツ語水準に合ったものであったと思われる。ドイツ語がフランス語と並んで第2外国語として望ましい発展をするためには、高校と大学を結ぶ接点としての大学入試問題に重大な意味と責任があることを明記しておくことにする。

(ウ)　教科専門委員会問題作成部会報告書（ドイツ語）

1　各問題の出題意図

共通第1次試験の趣旨にそうて、志願者の高等学校段階での基礎的な学習の達成程度を基準にした学力評価を行うことを目的に、高等学校指導要項にもとづき、かつ高等学校教育の正常な発展のさまたげとならないようにと心がけて作成することにつとめた。ただし高等学校におけるドイツ語教育は、英語の場合とことなり、ほぼ40校前後が、週2回ていど、たいてい2年にわたり教えているにすぎない。そこで語いをかなり限定し、文法も基本的なものに限り、平均得点率を60％に近づけようとしたほかは、読み・書き・聞き・話す運用力をためすことなど、ほぼ指導要項にそうようにした。

以下各問題について、それぞれの出題意図を示す。ドイツ語を学ぶには、まず発音の要点がマスターされていること、初歩文法が各品詞にわたり確実に把握されていることが要求される。この点を主としてⅠ、Ⅱでためしてみる。また作文や会話も、書き、聞き、話す能力として重視されるので、それらについてⅢ、Ⅳでためしてみることとする。これらに比べ、Ⅴ、Ⅵは、読解力に重点をおいて、言語運用の総合的な能力を見ようとする。

すなわちⅠでは、ドイツ語を正しく発音するのにもっとも基本的となること、例えば、アクセント（強弱）、母音の長短、二重母音、子音sやchなどの理解がためされる。Ⅱでは名詞的諸品詞の性・数・格変化、前置詞の格支配、動詞の諸変化、不変化詞、zu不定詞、副文、接続法などから出題される。

Ⅲももちろん文法の理解なしには答えられない問題であるが、同じ文をいいかえてみて、与えられた語を並べつつ作文し、文を完成することをねらう。ドイツ文の要素の配語上の問題、第二位置に定動詞（定形）がくるとか、文末に重要なものがきて枠構造をなすとかいうことの理解がためされる。Ⅳでは会話を考えるが、そのさい日常的にもっとも基礎的な、慣用的なものの運用に限って尋ねてみる。

言語運用能力をためすⅤ、Ⅵでは、一つを論述的なもの、一つを物語的なものとした。Ⅴでは近代的な科学用語が多くならざるをえない。設問では、適切な訳の把握力をみることを重点にし、語いの理解や数詞の読み方はどうかなど広範囲に及んでいる。Ⅳでは、細部の訳を厳密に問うことによって、全体の筋をよくとらえているかどうかを見ようとした。

2　出題形式について

ドイツ語の理解はこのような客観的テストの形式でかなり厳密に測定されるであろうと信じられる。しかしⅠの形式だけでは聴解力テストは不可能であろうし、Ⅴ、Ⅵの形式だけでは長文読解力を十分にうかがいえない。書く能力、話す能力をみる問題についても類似の限界が指摘されようが、それらについては今後の検討にゆだねられよう。

4肢、5肢の選択肢による形式は、ある意味ではこれまで以上に精細にドイツ語の理解を問いつめているが、逆にむりに選択肢を作って易しくしすぎはしないか、末梢的なことにこだわりすぎて正常な読解力を養う学習をさまたげないかなどと心配されるかもしれないが、そういう面にも少しは配慮したものでありたいと念願している。それにも進歩の余地があろうと思われるからである。なお全体の問題数は72となった。

3　出題意図と、その解答結果について

試行テストでは受験生が10名にすぎなかったが、解答結果の分析をかなり困難にしている。10名の得点はかなり高く、平均点は135点、最高196点、最低57点であった。これらの受験生がどういうドイツ語教育を受けたかについてデーターがない以上、これをもって一般をおしはかることはむつかしい。わたしたちの推測では、これらの受験生はかなり自信のある人や、特別

の学習を積んだ者に片寄っているのではないかと思われる。本試験で多数の受験生をえて始めて解答結果について正確に語ることができよう。

Ⅰの発音は、予想に反してむつかしく、半数が50%以下の正解であった。Ⅱの基礎文法も4割が40%以下だった。これに比し、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵは、2割の人が40%以下の正答率であった。とくにⅤ、Ⅵはむつかしすぎる、と考えていただけに、予想外の好結果であった。

4　出題範囲について

各問題の出題意図のところで範囲にもふれたが、もう一度各問題に即して説明してみたい。

Ⅰ　発音について。ドイツ語の綴字と発音の間にはかなりの規則的な相関関係があり、そのおよそを理解すれば、ほぼ正しく発音することができる。それゆえに基礎的な発音を与えて、その相関関係の理解をためす。なおアクセントの位置がきわめて重要であるので、その指定を範囲とする。

Ⅱ　文法について。中学校からドイツ語を学習している者もいるであろうが、多くは高等学校入学後学び始めていることを考慮して、基本的な文法事項を理解しているかどうかに重点をおき、初級文法の重要項目すべてを出題範囲とした。このことは以下の諸問題にもつらぬかれている。

Ⅲ　作文形式について。客観テストであるので、従来の形式による作文は課しがたいが、それに代るものとして、文完成の方法などを用い、語順（定動詞の正置、倒置、後置）を中心に問うこととした。

Ⅳ　会話形式について。高度な会話の微妙なニュアンスをそのまま出題することは、高等学校のドイツ語教育の現状では無理と思われるので、基本的な問いかけに対して、正しく応対できるかどうかに重点がおかれた。

ⅤとⅥの長文問題について。すでにのべた通り、Ⅴは論述形式のものを正しく理解しているかいないかをテストした。内容は自然科学により、種々の観点からの問題を加えて、言語運用の総合的な文の理解を問うこととした。Ⅵでは、物語的文章を例に、日本語訳の選択を求めた。

5　問題についての反響、意見について

まず、諸大学と共通第1次学力試験等連絡協議会・試験問題部会から貴重な意見をいただいたことに深く感謝するとともに、次回からはもっと広く、多くの意見を仰ぎたいと考える。

高等学校におけるドイツ語教育は、英語と比較して、例えば授業時間数もきわめて不足し、専任教員をおいているところもきわめて少いので、そのことを出題にあたって配慮せざるをえなかった。全般に、受験生のレベルにあった適切な問題であるとの評価をうけ、「本問題は受験者の基本的能力を総合的に検査できるものと思われる」とみなされた。また連絡協議会も、高校生のレベルにあった良い問題である」「高等学校におけるドイツ語担当者がみて、困惑を覚える質の問題がなかった点で評価できる」とのべておられる。

以下具体的に重要と思われる反響を列記し、今後の指標としたい：

(1)　発音について。共通第1次試験では聴解力のテストが事実上不可能であるので、発音の問題の比率をいくらか高めてはどうか。

(2)　文法について。初等文法の基本的事項が平均的に出題されているのはよいが、ドイツ語特有の格変化をもっととりあげよ。

(3)　作文形式について。語順をテストする点で適切な形式だが、その他さまざまな出題可能性を探れ。

(4)　会話について。学習指導要項の「聞き、話し、読み、書く」の「話し」の項を、本テストにおいてこのような形で初めて用いた点が注目された。その身近かなテーマ、基本的言語材料は良い。

(5)と(6)の長文問題について。論文形式と物語形式の組合せは適切である。しかし語いについてはもっと厳密にしぼり、基本単語を限定せよ。

6　終　り　に

ドイツ語問題作成部会としては以上の成果と批判をかみしめて、客観テストという条件下に、どのようにして受験生の基礎的で総合的な学習達成程度を基準にした正しい学力評価ができるかに最大の注意を払いたいと考える。

高等学校における外国語教育が英語のみとなってしまうことは、一国の文化の発展にとって必ずしも好ましいことではない。しかし英語以外の外国語教育の現状を思うとき、むしろそれらを第二外国語として、英語と組合せて出題する方が好ましいという声もあり、これらの問題を含めて、日本の外国語教育を再検討せよとの声も高い。この事はドイツ語問題作成部会の直接の課題ではないが、あえてひとことふれておきたいと思う。

ウ　フランス語

(ア)　共通第１次学力試験試行テスト試験問題協議報告書（フランス語）

1　問題の形式は妥当であったと思われる。

2　idiomatique な要素の多い liaison や、発音の[ɛ̃]/[œ̃]の区別をさせる問題が出題されなかったのは適切であったと思われる。

3　大学入試問題のフランス語は、基本単語5,000語以内のvocabulaireでとの文部省からの目安があるようである。

共通第１次テストが高校での学習内容の基礎的なものを問うものであれば、vocabulaire も基本単語を更にしぼった基礎単語に限ることが妥当なように思われる。

もちろん、基本単語、基礎単語の基準は難しいことでしょうが、一応の目安として、下記の辞書を参考にすることができるであろう。

○　基本単語：G.MATORÉ, Dictionnaire du vocabulaire essentiel, Larousse.　(5,000語)

○　基礎単語：G.GOUGENHEIM, Dictionnaire fondamental, Didier.　(3,000語)

参考までにプレテストのフランス語問題を調べてみると、○上記のいずれの辞書にもない語句：20

accessible, admissible, avec mesure, bûche, bûcher, chandelier, chandelle, claquer, comme il faut, convenablement, définivement, égaré, en sursaut, faire remblant de＋inf, feindre de＋inf, raisonné, servir à＋inf, trempé, une fois pour toutes.

○　Dictionnaire fondamental (3,000語) になくて Dictionnaire du vocabulaire essentiel (5,000語) にある語句：6

allusion, approprié, capacité, collègue, profondément, vertical.

なお、基礎的でないと思われる語句というより表現というべきものに

《Elle ne s'est pas fait prier pour chanter.》

以上のことから共通第１次学力試験のフランス語の vocabulaire を基礎単語に限るとすれば、上記の26の語句はそのわくを越えることになる。

4　日本に於いては、フランス語を第１外国語として教えている高校は例外的なだけに、フランス語の問題作成に当っては３年間の学習をベースに考え、全国各地の高校で第二外国語として

フランス語を学習している生徒にも受験ができる程度と考えるが、日本に於ける仏語学習の普及の面からも大切だと思われる。

(イ)　教科専門委員会問題作成部会報告書（フランス語）

本年度は、昭和52年６月６日に、第１回の部会を開催してから、試行テスト用問題作成が完了した７月23日まで４回、延べ12日の部会が開かれた。

フランス語部会にとって、共通第１次試験の問題作成という事業は、実地研究の試行という段階がなく、はじめてのことであったので、最初は模索の状態からはじまったが、各教官が各自の大学における経験を出し合い、また高校におけるフランス語教育の実体をしらべ、過去の入学試験問題を参考にしつつ、問題の作成をおこなった。

1　各問題の出題意図と解答結果

(1)　総点200点に対して、最高191点が２人、最低45点が１人であった。また平均点が124.11であったということは、はじめ60%パーセントの正答率を目標において出題した意図が妥当であったことを示しているように見えるが、受験者の数が９名（このうち他の理由で失格になったものが１名あった。）という小人数では、この平均点ならびに標準偏差の55.77という値は、残念ながらあまり多くの意味を持たない。

次に各問の平均点をパーセントにして掲げておく。

Ⅰ　59.6　　Ⅱ　64.4　　Ⅲ　57.4　　Ⅳ　42.2　　Ⅴ　74.4

Ⅵ　83.3　　Ⅶ　62.2　　Ⅷ　62.2　　Ⅸ　61.9

(2)　各問ごとの考察

〔Ⅰ〕　発音と文法の基礎的知識を問う設問（５問、19点）：平均11.33、偏差7.51、最高19（４名）、最低０（１名）。おおむね妥当な問題だと思われ、およそ半数が正解を得ている。発音の問題では、発音記号を用いずに、しかも単語の羅列にならないような問題を作成したところに苦心があった。

〔Ⅱ〕　初歩的語いを問う設問（５問、10点）：平均6.44、偏差2.95、最高10（２名）、最低２（２名）。もっとも平易な問題で、いずれも知っていなければならない単語のみである。発音や綴りが類似しているが異なるものを混入し、正確な知識を要求しているものである。

〔Ⅲ〕　単語の意味をフランス語によって把握する能力を問う設問（６問、24点）：平均13.77、偏差8.87、最高24（３名）、最低０（１名）。仏仏辞典をひく練習の有無を問う初歩的な設問である。

〔Ⅳ〕 言い廻しを通して文意の把握を問う設問（5問、25点）：平均10.55、偏差9.26、最高25（2名）、最低0（3名）。全設問のうちでもっとも平均点が低かったことは(1)の表が示すとおりであり、点の開きが最高と最低に集中した。

〔Ⅴ〕 長文の穴うめ。(10問、30点)：平均22.33、偏差7.23、最高30（3名）、最低12(2名)。長文の読解力を問う設問の1つとして、文章の中に、代名詞、前置詞、接続詞、動詞、などを入れて正確な文にする能力を問う問題であるが、点数のバラツキが少く、このような訓練には習熟していることがうかがわれた。

〔Ⅵ〕 簡単な叙景文の全体的読解力を問う設問（4問、12点）：平均10.00、偏差3.16、最高12（6名）、最低3（1名）。もっとも簡単な問題であったせいか、半数が満点であった。

〔Ⅶ〕 長文の把握力とそ中の短文の正確な読解力を問う設問（5問、25点）：平均 15.55、偏差8.96、最高25（2名）、最低0（1名）。満点こそ少なかったが、かなりよい成績を得た者と0点に近い者と、明白に2つの群に分けられた。このことは前述の〔Ⅳ〕の場合と同じである。

〔Ⅷ〕 作文の能力を問う設問（5問、20点）：平均12.44、偏差4.79、最高20(1名)、最低4（1名)。日常よく用いられる会話文をフランス文にする操作を通じて、初歩的な文法の能力を問う問題である。平均点は〔Ⅶ〕と同点であるが、点数のバラツキは、前問にくらべて少ない。

〔Ⅸ〕 日常会話の習熟を問う設問（7問、35点）：平均21.66、偏差11.30、最高35（2名）、最低5（2名)。点数の開きは、最高と最低の間に、ほぼ等間隔に開いていた。

2 今後の問題点

前述のように、本年は、はじめての試みであり、委員は鋭意努力して、受験生の基礎的能力を見るにふさわしい、しかも格調高い問題を作成しようとした。平易な基礎的知識があればできると思われた〔Ⅰ〕が案外平均点が低かったり、〔Ⅳ〕のように言い廻しの正確な把握に力の不足を感じたが、一方〔Ⅴ〕のような穴うめの問題では平均点が高かった。また〔Ⅶ〕の読解力を要求する問題にも学力の不足が感じられた。

次年度においても、これらの結果をふまえて、受験生の能力をあらゆる面から万遍なく見得る問題を作る方針である。

Ⅳ 共通第1次学力試験試行テストの成績結果について

1 科目別平均点一覧

試行テストの科目別平均点、最高点、最低点を昭和53年1月20日に報道関係者を通じて公表した。これらに標準偏差を加えた結果は下表のとおりである。

共通第1次学力試験試行テスト科目別平均点等一覧

教科名	科目名	受験者数	平均点	標準偏差	最高点	最低点
全教科	(1000点満点)	39,673 人	555.69 点	124.17 点	927 点	30 点
国語 (200点満点)	国語	39,673	112.17	24.04	188	11
社会 (各科目共100点満点2科目選択)	(社会)	39,673	105.30	25.40	192	0
	倫理社会	6,443	50.11	12.49	96	0
	政治経済	15,361	51.82	11.49	95	0
	日本史	25,953	53.20	14.46	98	0
	世界史	20,103	51.50	17.20	96	0
	地理A	6,866	61.60	14.70	98	0
	地理B	4,526	48.51	15.52	100	0
	無効	94	0	0	0	0
数学 (各科目共200点満点1科目選択)	(数学)	39,673	109.78	47.99	200	0
	数学Ⅰ	38,615	112.72	45.11	200	0
	数学一般	29	88.55	36.95	169	26
	無効	1,029	0	0	0	0
理科 (基礎理科は200点満点1科目選択、他の科目は100点満点2科目選択)	(理科)	39,673	108.36	38.64	200	0
	物理Ⅰ	22,563	67.94	22.96	100	0
	化学Ⅰ	31,507	52.56	20.40	96	0
	生物Ⅰ	16,702	47.76	20.64	100	0
	地学Ⅰ	8,245	37.27	12.45	98	0
	基礎理科	63	73.01	26.19	155	35
	無効	103	0	0	0	0
外国語 (各科目共200点満点1科目選択)	(外国語)	39,673	120.06	27.84	196	0
	英語B	39,114	120.78	27.15	196	2
	独語	10	135.00	46.90	196	57
	仏語	8	125.25	59.04	191	45
	英語A	525	70.00	22.52	159	11
	無効	16	0	0	0	0

(注) (1) 5教科全てを受験した者を対象とした。
(2) 科目名欄の「無効」は、科目選択欄に記入しなかった場合又は科目の選択を誤った場合であり、いずれの場合も0点とした。

なお、科目別平均点、最高点、最低点の公表は、正解例によって自己採点した受験者が、全受験者中の相対的な位置を知るための便宜を与えるために行ったものであるが、これらのみでは不十分であるという意見があるので標準偏差、得点分布等の資料の公表が要望されている。一方、共通第1次学力試験の実施期日の繰り下げにより、採点等の処理期間が短縮されることもあって、これに対応するにはかなりの困難を伴うものと考えられるが、なおこのことについては今後も十分検討する必要があるものと考えられる。

また、無効となった答案は数学で1,029枚、理科103枚、社会94枚、外国語16枚あり、いずれの場合も零点とした。

数学の場合は、「数学一般」を選択できる者は、高等学校において当該科目を履修した者で、受験票で選択することを許されている者に限るが、許可されていない者が「数学一般」を選択した例が多い。「数学一般」を選択できる者については、受験者心得と問題冊子の表紙に注意が記載されているのであるが、このように選択をあやまった受験が多かったことは普通科高等学校出身者にとって、「数学Ⅰ」と「数学一般」の科目の区別が明らかでないこと、「数学Ⅰ」と「数学一般」に共通問題が出題され、その共通問題が各科目ごとに分けて印刷されていなかったこと等に原因があるものと考えられる。このことから、この選択については、受験者心得及び受験票等により詳細に指示するとともに、「数学Ⅰ」及び「数学一般」は科目ごとに分けて印刷する等の改善が必要である。

数学、理科、社会、外国語において無効となったものは、科目選択欄の未記入、また、2科目選択の理科、社会の科目選択欄（解答用紙は両面あり、1科目片面使用）について解答用紙の両面に同一の選択の表示等をしたためである。

これらについては、問題冊子の表紙の注意、解答用紙の注意、監督者による試験開始前、開始直後、終了10分前の口頭注意、合計5回の注意が行われているのであるが、それにもかかわらず生じたものである。このことについては、受験者心得等にさらによく注意を喚起することを図る必要がある。

2　教科別成績分布図

表1　総得点成績分布図

満　　点	1000	平　均　点	555.69
最　高　点	927	標　準　偏　差	124.17
最　低　点	30	受　験　者　数	39,673

点　数	人　数	比率(%)	
0 - 20	0	0.00	
21 - 40	1	0.00	
41 - 60	0	0.00	
61 - 80	1	0.00	
81 - 100	1	0.00	
101 - 120	2	0.01	
121 - 140	0	0.00	
141 - 160	2	0.01	
161 - 180	9	0.02	
181 - 200	17	0.04	
201 - 220	26	0.07	
221 - 240	65	0.16	
241 - 260	134	0.34	*
261 - 280	208	0.52	**
281 - 300	330	0.83	**
301 - 320	427	1.08	***
321 - 340	536	1.36	****
341 - 360	723	1.82	*****
361 - 380	923	2.33	*******
381 - 400	1109	2.80	********
401 - 420	1332	3.36	**********
421 - 440	1582	3.99	************
441 - 460	1740	4.39	************
461 - 480	1960	4.94	**************
481 - 500	2054	5.18	**************
501 - 520	2265	5.70	****************
521 - 540	2353	5.93	*****************
541 - 560	2386	6.01	*****************
561 - 580	2395	6.04	*****************
581 - 600	2338	5.89	*****************
601 - 620	2231	5.62	****************
621 - 640	2082	5.25	***************
641 - 660	2004	5.05	**************
661 - 680	1820	4.59	*************
681 - 700	1518	3.83	**********
701 - 720	1248	3.15	*********
721 - 740	1110	2.80	********
741 - 760	904	2.28	*******
761 - 780	609	1.54	*****
781 - 800	506	1.28	****
801 - 820	353	0.89	***
821 - 840	195	0.49	*
841 - 860	114	0.29	*
861 - 880	48	0.12	
881 - 900	8	0.02	
901 - 920	2	0.01	
921 - 940	2	0.01	
941 - 960	0	0.00	
961 - 980	0	0.00	
981 -1000	0	0.00	

表2　教科別成績分布図

教科名	国　語

満　点	200	平均点	112.17
最高点	188	標準偏差	24.04
最低点	11	受験者数	39,673

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	0	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	1	0.00	
13 - 16	3	0.01	
17 - 20	1	0.00	
21 - 24	3	0.01	
25 - 28	6	0.02	
29 - 32	7	0.02	
33 - 36	15	0.04	
37 - 40	20	0.05	
41 - 44	34	0.09	
45 - 48	46	0.12	
49 - 52	111	0.28	*
53 - 56	153	0.39	*
57 - 60	225	0.57	**
61 - 64	380	0.96	***
65 - 68	450	1.13	***
69 - 72	666	1.68	*****
73 - 76	772	1.95	******
77 - 80	1016	2.56	********
81 - 84	1279	3.22	**********
85 - 88	1497	3.77	**********
89 - 92	1685	4.25	************
93 - 96	1982	5.00	**************
97 - 100	2162	5.45	*****************
101 - 104	2348	5.92	*******************
105 - 108	2410	6.07	*******************
109 - 112	2494	6.29	********************
113 - 116	2487	6.27	*******************
117 - 120	2409	6.07	*******************
121 - 124	2423	6.11	*******************
125 - 128	2298	5.79	******************
129 - 132	2011	5.07	****************
133 - 136	1845	4.65	**************
137 - 140	1537	3.87	**********
141 - 144	1335	3.37	**********
145 - 148	1054	2.66	********
149 - 152	845	2.13	******
153 - 156	587	1.48	****
157 - 160	444	1.12	***
161 - 164	278	0.70	**
165 - 168	161	0.41	*
169 - 172	107	0.27	*
173 - 176	44	0.11	
177 - 180	26	0.07	
181 - 184	13	0.03	
185 - 188	3	0.01	
189 - 192	0	0.00	
193 - 196	0	0.00	
197 - 200	0	0.00	

表3　教科別成績分布図

教科名	社　会

満　点	200	平均点	105.30
最高点	192	標準偏差	25.40
最低点	0	受験者数	39,673

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	13	0.03	
5 - 8	1	0.00	
9 - 12	3	0.01	
13 - 16	2	0.01	
17 - 20	2	0.01	
21 - 24	0	0.00	
25 - 28	7	0.02	
29 - 32	15	0.04	
33 - 36	18	0.05	
37 - 40	52	0.13	
41 - 44	73	0.18	*
45 - 48	119	0.30	*
49 - 52	252	0.64	**
53 - 56	351	0.88	***
57 - 60	481	1.21	****
61 - 64	638	1.61	*****
65 - 68	837	2.11	******
69 - 72	1096	2.76	********
73 - 76	1309	3.30	**********
77 - 80	1563	3.94	************
81 - 84	1741	4.39	************
85 - 88	1903	4.80	**************
89 - 92	2075	5.23	****************
93 - 96	2217	5.59	*****************
97 - 100	2475	6.24	********************
101 - 104	2404	6.06	******************
105 - 108	2401	6.05	******************
109 - 112	2341	5.90	******************
113 - 116	2247	5.66	*****************
117 - 120	2118	5.34	****************
121 - 124	1900	4.79	**************
125 - 128	1711	4.31	*************
129 - 132	1458	3.68	**********
133 - 136	1255	3.16	*********
137 - 140	1055	2.66	********
141 - 144	917	2.31	*******
145 - 148	715	1.80	*****
149 - 152	555	1.40	****
153 - 156	441	1.11	***
157 - 160	336	0.85	***
161 - 164	248	0.63	**
165 - 168	150	0.38	*
169 - 172	83	0.21	*
173 - 176	47	0.12	
177 - 180	26	0.07	
181 - 184	15	0.04	
185 - 188	4	0.01	
189 - 192	3	0.01	
193 - 196	0	0.00	
197 - 200	0	0.00	

表4　教科別成績分布図

教科名	数　学

満　点	200	平均点	109.78
最高点	200	標準偏差	47.99
最低点	0	受験者数	39,673

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	1059	2.67	********
5 - 8	45	0.11	
9 - 12	100	0.25	*
13 - 16	135	0.34	*
17 - 20	181	0.46	*
21 - 24	245	0.62	**
25 - 28	319	0.80	**
29 - 32	393	0.99	***
33 - 36	427	1.08	***
37 - 40	480	1.21	****
41 - 44	589	1.48	****
45 - 48	615	1.55	*****
49 - 52	654	1.65	*****
53 - 56	692	1.74	*****
57 - 60	780	1.97	******
61 - 64	761	1.92	******
65 - 68	825	2.08	******
69 - 72	886	2.23	*******
73 - 76	957	2.41	*******
77 - 80	1029	2.59	********
81 - 84	1022	2.58	********
85 - 88	1023	2.58	********
89 - 92	1067	2.69	********
93 - 96	1062	2.68	********
97 - 100	1113	2.81	********
101 - 104	1127	2.84	*********
105 - 108	1116	2.81	********
109 - 112	1215	3.06	*********
113 - 116	1204	3.03	*********
117 - 120	1198	3.02	*********
121 - 124	1134	2.86	*********
125 - 128	1200	3.02	*********
129 - 132	1117	2.82	********
133 - 136	1104	2.78	********
137 - 140	1129	2.85	*********
141 - 144	1042	2.63	********
145 - 148	1072	2.70	********
149 - 152	1086	2.74	********
153 - 156	957	2.41	*******
157 - 160	989	2.49	*******
161 - 164	860	2.17	*******
165 - 168	860	2.17	*******
169 - 172	825	2.08	******
173 - 176	729	1.84	******
177 - 180	696	1.75	*****
181 - 184	553	1.39	****
185 - 188	594	1.50	****
189 - 192	505	1.27	****
193 - 196	459	1.16	***
197 - 200	443	1.12	***

表5　教科別成績分布図

教科名	理　科

満　点	200	平均点	108.36
最高点	200	標準偏差	38.64
最低点	0	受験者数	39,673

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	29	0.07	
5 - 8	7	0.02	
9 - 12	9	0.02	
13 - 16	31	0.08	
17 - 20	38	0.10	
21 - 24	68	0.17	*
25 - 28	119	0.30	*
29 - 32	171	0.43	*
33 - 36	270	0.68	**
37 - 40	357	0.90	***
41 - 44	441	1.11	***
45 - 48	607	1.53	*****
49 - 52	700	1.76	*****
53 - 56	769	1.94	******
57 - 60	895	2.26	*******
61 - 64	1008	2.54	********
65 - 68	1063	2.68	********
69 - 72	1211	3.05	*********
73 - 76	1376	3.47	**********
77 - 80	1335	3.37	**********
81 - 84	1415	3.57	**********
85 - 88	1491	3.76	**********
89 - 92	1502	3.79	**********
93 - 96	1470	3.71	**********
97 - 100	1499	3.78	**********
101 - 104	1395	3.52	**********
105 - 108	1359	3.43	**********
109 - 112	1355	3.42	**********
113 - 116	1417	3.57	**********
117 - 120	1239	3.12	*********
121 - 124	1132	2.85	*********
125 - 128	1151	2.90	*********
129 - 132	1044	2.63	********
133 - 136	1091	2.75	********
137 - 140	1067	2.69	********
141 - 144	1043	2.63	********
145 - 148	943	2.38	*******
149 - 152	1021	2.57	********
153 - 156	986	2.49	*******
157 - 160	978	2.47	*******
161 - 164	976	2.46	*******
165 - 168	910	2.29	*******
169 - 172	828	2.09	******
173 - 176	668	1.68	*****
177 - 180	555	1.40	****
181 - 184	350	0.88	***
185 - 188	192	0.48	*
189 - 192	68	0.17	*
193 - 196	21	0.05	
197 - 200	3	0.01	

表6　教科別成績分布図

教科名	外国語

満点	200	平均点	120.06
最高点	196	標準偏差	27.84
最低点	0	受験者数	39,673

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	17	0.04	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	2	0.01	
13 - 16	0	0.00	
17 - 20	3	0.01	
21 - 24	4	0.01	
25 - 28	1	0.00	
29 - 32	15	0.04	
33 - 36	16	0.04	
37 - 40	36	0.09	
41 - 44	59	0.15	
45 - 48	104	0.26	*
49 - 52	156	0.39	*
53 - 56	219	0.55	**
57 - 60	226	0.57	**
61 - 64	335	0.84	***
65 - 68	402	1.01	***
69 - 72	512	1.29	****
73 - 76	632	1.59	*****
77 - 80	760	1.92	******
81 - 84	906	2.28	*******
85 - 88	1054	2.66	********
89 - 92	1201	3.03	********
93 - 96	1357	3.42	*********
97 - 100	1491	3.76	**********
101 - 104	1725	4.35	**********
105 - 108	1748	4.41	**********
109 - 112	1973	4.97	**********
113 - 116	2089	5.27	**********
117 - 120	2110	5.32	**********
121 - 124	2212	5.58	**********
125 - 128	2255	5.68	**********
129 - 132	2145	5.41	**********
133 - 136	2138	5.39	**********
137 - 140	1982	5.00	**********
141 - 144	1856	4.68	**********
145 - 148	1684	4.24	**********
149 - 152	1431	3.61	**********
153 - 156	1278	3.22	*********
157 - 160	1017	2.56	********
161 - 164	783	1.97	******
165 - 168	622	1.57	*****
169 - 172	446	1.12	***
173 - 176	293	0.74	**
177 - 180	186	0.47	*
181 - 184	111	0.28	*
185 - 188	49	0.12	
189 - 192	25	0.06	
193 - 196	7	0.02	
197 - 200	0	0.00	

3　科目別成績分布図

表1　科目別成績分布図

教科名	国語

満点	200	平均点	112.17
最高点	188	標準偏差	24.04
最低点	11	受験者数	39,673

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	0	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	1	0.00	
13 - 16	3	0.01	
17 - 20	1	0.00	
21 - 24	3	0.01	
25 - 28	6	0.01	
29 - 32	7	0.02	
33 - 36	15	0.04	
37 - 40	20	0.05	
41 - 44	34	0.08	
45 - 48	46	0.11	
49 - 52	111	0.28	*
53 - 56	153	0.38	*
57 - 60	225	0.57	**
61 - 64	380	0.96	***
65 - 68	450	1.13	***
69 - 72	666	1.68	*****
73 - 76	772	1.94	******
77 - 80	1016	2.56	********
81 - 84	1279	3.22	**********
85 - 88	1497	3.77	**********
89 - 92	1685	4.25	**********
93 - 96	1982	4.99	**********
97 - 100	2162	5.45	**********
101 - 104	2348	5.92	**********
105 - 108	2410	6.07	**********
109 - 112	2494	6.29	**********
113 - 116	2487	6.27	**********
117 - 120	2409	6.07	**********
121 - 124	2423	6.11	**********
125 - 128	2298	5.79	**********
129 - 132	2011	5.07	**********
133 - 136	1845	4.65	**********
137 - 140	1537	3.87	**********
141 - 144	1335	3.36	**********
145 - 148	1054	2.66	********
149 - 152	845	2.13	******
153 - 156	587	1.48	****
157 - 160	444	1.12	***
161 - 164	278	0.70	**
165 - 168	161	0.40	*
169 - 172	107	0.27	*
173 - 176	44	0.11	
177 - 180	26	0.06	
181 - 184	13	0.03	
185 - 188	3	0.01	
189 - 192	0	0.00	
193 - 196	0	0.00	
197 - 200	0	0.00	

表2　科目別成績分布図

科目名	倫理・社会

満点	100	平均点	50.11
最高点	96	標準偏差	12.49
最低点	0	受験者数	6,443

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	1	0.01	
3 - 4	0	0.00	
5 - 6	4	0.06	
7 - 8	2	0.03	
9 - 10	3	0.05	
11 - 12	4	0.06	
13 - 14	5	0.08	
15 - 16	9	0.14	
17 - 18	5	0.08	
19 - 20	20	0.31	*
21 - 22	25	0.39	*
23 - 24	34	0.53	**
25 - 26	56	0.87	***
27 - 28	79	1.23	****
29 - 30	96	1.49	****
31 - 32	162	2.51	********
33 - 34	192	2.98	*********
35 - 36	218	3.38	**********
37 - 38	288	4.47	**************
39 - 40	316	4.90	***************
41 - 42	373	5.79	*****************
43 - 44	361	5.60	*****************
45 - 46	395	6.13	******************
47 - 48	430	6.67	********************
49 - 50	413	6.41	*******************
51 - 52	404	6.27	*******************
53 - 54	376	5.83	*****************
55 - 56	336	5.21	****************
57 - 58	317	4.92	***************
59 - 60	281	4.36	**************
61 - 62	238	3.69	************
63 - 64	223	3.46	***********
65 - 66	163	2.53	********
67 - 68	150	2.33	*******
69 - 70	133	2.06	******
71 - 72	94	1.46	****
73 - 74	61	0.95	***
75 - 76	50	0.78	**
77 - 78	37	0.57	**
79 - 80	45	0.70	**
81 - 82	18	0.28	*
83 - 84	8	0.12	
85 - 86	6	0.09	
87 - 88	6	0.09	
89 - 90	4	0.06	
91 - 92	1	0.01	
93 - 94	0	0.00	
95 - 96	1	0.01	
97 - 98	0	0.00	
99 - 100	0	0.00	

表3　科目別成績分布図

科目名	政治・経済

満点	100	平均点	51.82
最高点	95	標準偏差	11.49
最低点	0	受験者数	15,361

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	7	0.04	
3 - 4	0	0.00	
5 - 6	0	0.00	
7 - 8	1	0.01	
9 - 10	1	0.01	
11 - 12	4	0.03	
13 - 14	4	0.03	
15 - 16	10	0.06	
17 - 18	10	0.06	
19 - 20	23	0.15	
21 - 22	32	0.21	*
23 - 24	34	0.22	*
25 - 26	55	0.36	*
27 - 28	91	0.59	**
29 - 30	139	0.90	***
31 - 32	238	1.55	*****
33 - 34	290	1.89	******
35 - 36	419	2.73	********
37 - 38	471	3.07	*********
39 - 40	640	4.17	************
41 - 42	724	4.71	**************
43 - 44	842	5.48	****************
45 - 46	980	6.38	*******************
47 - 48	984	6.40	*******************
49 - 50	1103	7.18	**********************
51 - 52	1040	6.77	********************
53 - 54	1069	6.96	**********************
55 - 56	1017	6.62	********************
57 - 58	873	5.68	*****************
59 - 60	796	5.18	****************
61 - 62	727	4.73	**************
63 - 64	605	3.94	************
65 - 66	517	3.36	**********
67 - 68	436	2.84	*********
69 - 70	346	2.25	*******
71 - 72	247	1.61	*****
73 - 74	204	1.33	****
75 - 76	120	0.78	**
77 - 78	106	0.69	**
79 - 80	63	0.41	*
81 - 82	37	0.24	*
83 - 84	26	0.17	*
85 - 86	18	0.12	
87 - 88	3	0.02	
89 - 90	6	0.04	
91 - 92	2	0.01	
93 - 94	0	0.00	
95 - 96	1	0.01	
97 - 98	0	0.00	
99 - 100	0	0.00	

表4　科目別成績分布図

科目名	日本史

満点	100	平均点	53.20
最高点	98	標準偏差	14.46
最低点	0	受験者数	25,953

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	6	0.02	
3 - 4	0	0.00	
5 - 6	3	0.01	
7 - 8	5	0.02	
9 - 10	6	0.02	
11 - 12	4	0.01	
13 - 14	8	0.03	
15 - 16	22	0.08	
17 - 18	32	0.12	
19 - 20	41	0.16	
21 - 22	80	0.31	*
23 - 24	131	0.50	**
25 - 26	219	0.84	***
27 - 28	354	1.36	****
29 - 30	443	1.71	*****
31 - 32	597	2.30	*******
33 - 34	752	2.90	*********
35 - 36	848	3.27	**********
37 - 38	971	3.74	**********
39 - 40	1134	4.37	**********
41 - 42	1159	4.46	**********
43 - 44	1259	4.85	**********
45 - 46	1291	4.97	**********
47 - 48	1290	4.97	**********
49 - 50	1341	5.17	**********
51 - 52	1222	4.71	**********
53 - 54	1285	4.95	**********
55 - 56	1264	4.87	**********
57 - 58	1251	4.82	**********
59 - 60	1116	4.30	**********
61 - 62	1055	4.06	**********
63 - 64	1009	3.89	**********
65 - 66	886	3.41	**********
67 - 68	913	3.52	**********
69 - 70	752	2.90	*********
71 - 72	653	2.52	********
73 - 74	576	2.22	*******
75 - 76	482	1.86	******
77 - 78	407	1.57	*****
79 - 80	321	1.24	****
81 - 82	257	0.99	***
83 - 84	204	0.79	**
85 - 86	142	0.55	**
87 - 88	82	0.31	*
89 - 90	35	0.13	
91 - 92	32	0.12	
93 - 94	6	0.02	
95 - 96	5	0.02	
97 - 98	2	0.01	
99 - 100	0	0.00	

表5　科目別成績分布図

科目名	世界史

満点	100	平均点	51.50
最高点	96	標準偏差	17.20
最低点	0	受験者数	20,103

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	10	0.05	
3 - 4	3	0.01	
5 - 6	5	0.02	
7 - 8	21	0.10	
9 - 10	38	0.19	*
11 - 12	51	0.25	*
13 - 14	86	0.43	*
15 - 16	142	0.71	**
17 - 18	188	0.93	***
19 - 20	248	1.23	****
21 - 22	314	1.56	*****
23 - 24	346	1.72	*****
25 - 26	399	1.98	******
27 - 28	412	2.05	******
29 - 30	497	2.47	*******
31 - 32	506	2.52	********
33 - 34	500	2.49	*******
35 - 36	558	2.77	********
37 - 38	569	2.83	********
39 - 40	619	3.08	*********
41 - 42	673	3.35	**********
43 - 44	703	3.50	**********
45 - 46	700	3.48	**********
47 - 48	810	4.03	**********
49 - 50	784	3.90	**********
51 - 52	788	3.92	**********
53 - 54	824	4.10	**********
55 - 56	847	4.21	**********
57 - 58	867	4.31	**********
59 - 60	821	4.08	**********
61 - 62	834	4.15	**********
63 - 64	821	4.08	**********
65 - 66	775	3.85	**********
67 - 68	778	3.87	**********
69 - 70	690	3.43	**********
71 - 72	636	3.16	*********
73 - 74	559	2.78	********
75 - 76	441	2.19	*******
77 - 78	352	1.75	*****
79 - 80	288	1.43	****
81 - 82	215	1.07	***
83 - 84	163	0.81	**
85 - 86	103	0.51	**
87 - 88	53	0.26	*
89 - 90	36	0.18	*
91 - 92	17	0.08	
93 - 94	12	0.06	
95 - 96	1	0.00	
97 - 98	0	0.00	
99 - 100	0	0.00	

表6　科目別成績分布図

科目名	地理A

満点	100	平均点	61.60
最高点	98	標準偏差	14.70
最低点	0	受験者数	6,866

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	1	0.01	
3 - 4	0	0.00	
5 - 6	0	0.00	
7 - 8	0	0.00	
9 - 10	0	0.00	
11 - 12	3	0.04	
13 - 14	0	0.00	
15 - 16	1	0.01	
17 - 18	2	0.03	
19 - 20	6	0.09	
21 - 22	8	0.12	
23 - 24	8	0.12	
25 - 26	19	0.28	*
27 - 28	25	0.36	*
29 - 30	40	0.58	**
31 - 32	36	0.52	**
33 - 34	80	1.16	***
35 - 36	80	1.16	***
37 - 38	105	1.53	*****
39 - 40	164	2.39	*******
41 - 42	162	2.36	*******
43 - 44	205	2.98	*********
45 - 46	237	3.45	**********
47 - 48	225	3.28	**********
49 - 50	314	4.57	**************
51 - 52	315	4.59	**************
53 - 54	324	4.72	**************
55 - 56	304	4.43	*************
57 - 58	336	4.89	***************
59 - 60	331	4.82	**************
61 - 62	352	5.13	***************
63 - 64	300	4.37	*************
65 - 66	339	4.94	***************
67 - 68	304	4.43	*************
69 - 70	294	4.28	*************
71 - 72	282	4.11	************
73 - 74	283	4.12	************
75 - 76	256	3.73	***********
77 - 78	228	3.32	**********
79 - 80	197	2.87	*********
81 - 82	179	2.61	********
83 - 84	144	2.10	******
85 - 86	128	1.86	******
87 - 88	89	1.30	****
89 - 90	72	1.05	***
91 - 92	47	0.68	**
93 - 94	24	0.35	*
95 - 96	12	0.17	*
97 - 98	5	0.07	
99 - 100	0	0.00	

表7　科目別成績分布図

科目名	地理B

満点	100	平均点	48.51
最高点	100	標準偏差	15.52
最低点	0	受験者数	4,526

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	2	0.04	
3 - 4	1	0.02	
5 - 6	0	0.00	
7 - 8	2	0.04	
9 - 10	0	0.00	
11 - 12	2	0.04	
13 - 14	6	0.13	
15 - 16	8	0.18	*
17 - 18	13	0.29	*
19 - 20	29	0.64	**
21 - 22	36	0.79	**
23 - 24	56	1.24	****
25 - 26	87	1.92	******
27 - 28	103	2.27	*******
29 - 30	149	3.29	**********
31 - 32	156	3.45	**********
33 - 34	187	4.13	************
35 - 36	241	5.32	*****************
37 - 38	212	4.68	***************
39 - 40	236	5.21	*****************
41 - 42	250	5.52	******************
43 - 44	247	5.46	******************
45 - 46	244	5.39	*****************
47 - 48	223	4.93	****************
49 - 50	210	4.64	***************
51 - 52	180	3.98	************
53 - 54	180	3.98	************
55 - 56	170	3.76	***********
57 - 58	168	3.71	***********
59 - 60	121	2.67	********
61 - 62	132	2.92	*********
63 - 64	129	2.85	*********
65 - 66	126	2.78	********
67 - 68	91	2.01	******
69 - 70	98	2.16	******
71 - 72	72	1.59	*****
73 - 74	52	1.15	***
75 - 76	68	1.50	*****
77 - 78	56	1.24	****
79 - 80	41	0.90	***
81 - 82	35	0.77	**
83 - 84	23	0.51	**
85 - 86	19	0.42	*
87 - 88	23	0.51	**
89 - 90	14	0.31	*
91 - 92	13	0.29	*
93 - 94	7	0.15	
95 - 96	4	0.09	
97 - 98	2	0.04	
99 - 100	2	0.04	

表8　科目別成績分布図

科目名	数学Ⅰ

満点	200	平均点	112.72
最高点	200	標準偏差	45.11
最低点	0	受験者数	38,615

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	30	0.08	
5 - 8	45	0.12	
9 - 12	100	0.26	*
13 - 16	135	0.35	*
17 - 20	181	0.47	*
21 - 24	245	0.63	**
25 - 28	317	0.82	**
29 - 32	393	1.02	***
33 - 36	427	1.10	***
37 - 40	480	1.24	****
41 - 44	588	1.52	*****
45 - 48	615	1.59	*****
49 - 52	653	1.69	*****
53 - 56	691	1.79	*****
57 - 60	779	2.02	******
61 - 64	761	1.97	******
65 - 68	823	2.13	******
69 - 72	883	2.29	*******
73 - 76	956	2.47	*******
77 - 80	1028	2.66	********
81 - 84	1019	2.64	********
85 - 88	1022	2.65	********
89 - 92	1065	2.76	********
93 - 96	1060	2.74	********
97 - 100	1113	2.88	*********
101 - 104	1127	2.92	*********
105 - 108	1116	2.89	*********
109 - 112	1215	3.15	*********
113 - 116	1203	3.11	*********
117 - 120	1198	3.10	*********
121 - 124	1132	2.93	*********
125 - 128	1200	3.11	*********
129 - 132	1117	2.89	*********
133 - 136	1104	2.86	*********
137 - 140	1129	2.92	*********
141 - 144	1041	2.69	********
145 - 148	1071	2.77	********
149 - 152	1084	2.81	********
153 - 156	957	2.48	*******
157 - 160	989	2.56	********
161 - 164	860	2.23	*******
165 - 168	860	2.23	*******
169 - 172	824	2.13	******
173 - 176	729	1.89	******
177 - 180	696	1.80	*****
181 - 184	553	1.43	****
185 - 188	594	1.54	*****
189 - 192	505	1.31	****
193 - 196	459	1.19	****
197 - 200	443	1.15	***

表9　科目別成績分布図

科目名	数学一般

満点	200	平均点	88.55
最高点	169	標準偏差	36.95
最低点	26	受験者数	29

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	0	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	0	0.00	
13 - 16	0	0.00	
17 - 20	0	0.00	
21 - 24	0	0.00	
25 - 28	2	6.90	**********
29 - 32	0	0.00	
33 - 36	0	0.00	
37 - 40	0	0.00	
41 - 44	1	3.45	**********
45 - 48	0	0.00	
49 - 52	1	3.45	**********
53 - 56	1	3.45	**********
57 - 60	1	3.45	**********
61 - 64	0	0.00	
65 - 68	2	6.90	**********
69 - 72	3	10.34	**********
73 - 76	1	3.45	**********
77 - 80	1	3.45	**********
81 - 84	3	10.34	**********
85 - 88	1	3.45	**********
89 - 92	2	6.90	**********
93 - 96	2	6.90	**********
97 - 100	0	0.00	
101 - 104	0	0.00	
105 - 108	0	0.00	
109 - 112	0	0.00	
113 - 116	1	3.45	**********
117 - 120	0	0.00	
121 - 124	2	6.90	**********
125 - 128	0	0.00	
129 - 132	0	0.00	
133 - 136	0	0.00	
137 - 140	0	0.00	
141 - 144	1	3.45	**********
145 - 148	1	3.45	**********
149 - 152	2	6.90	**********
153 - 156	0	0.00	
157 - 160	0	0.00	
161 - 164	0	0.00	
165 - 168	0	0.00	
169 - 172	1	3.45	**********
173 - 176	0	0.00	
177 - 180	0	0.00	
181 - 184	0	0.00	
185 - 188	0	0.00	
189 - 192	0	0.00	
193 - 196	0	0.00	
197 - 200	0	0.00	

表10　科目別成績分布図

科目名	物理Ⅰ

満点	100	平均点	67.94
最高点	100	標準偏差	22.96
最低点	0	受験者数	22,563

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	26	0.11	
3 - 4	21	0.09	
5 - 6	100	0.44	*
7 - 8	35	0.15	
9 - 10	96	0.42	*
11 - 12	81	0.36	*
13 - 14	74	0.33	*
15 - 16	157	0.69	**
17 - 18	83	0.37	*
19 - 20	179	0.79	**
21 - 22	188	0.83	**
23 - 24	183	0.81	**
25 - 26	235	1.04	***
27 - 28	205	0.91	***
29 - 30	231	1.02	***
31 - 32	285	1.26	****
33 - 34	242	1.07	***
35 - 36	339	1.50	*****
37 - 38	262	1.16	***
39 - 40	324	1.43	****
41 - 42	372	1.65	*****
43 - 44	316	1.40	****
45 - 46	457	2.02	******
47 - 48	342	1.51	*****
49 - 50	364	1.61	*****
51 - 52	572	2.53	********
53 - 54	310	1.37	****
55 - 56	572	2.53	********
57 - 58	404	1.79	*****
59 - 60	439	1.94	******
61 - 62	661	2.93	**********
63 - 64	332	1.47	****
65 - 66	745	3.30	**********
67 - 68	445	1.97	******
69 - 70	653	2.89	*********
71 - 72	705	3.12	*********
73 - 74	365	1.62	*****
75 - 76	1150	5.10	***************
77 - 78	353	1.56	*****
79 - 80	1276	5.65	*****************
81 - 82	623	2.76	********
83 - 84	245	1.08	***
85 - 86	2204	9.77	******************************
87 - 88	205	0.91	***
89 - 90	2398	10.63	**********************************
91 - 92	187	0.83	**
93 - 94	15	0.07	
95 - 96	1752	7.76	************************
97 - 98	22	0.10	
99 - 100	733	3.25	**********

表11　科目別成績分布図

科目名	化学Ⅰ

満点	100	平均点	52.56
最高点	96	標準偏差	20.40
最低点	0	受験者数	31,507

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	48	0.15	
3 - 4	54	0.17	*
5 - 6	76	0.24	*
7 - 8	106	0.34	*
9 - 10	169	0.54	**
11 - 12	186	0.59	**
13 - 14	261	0.83	**
15 - 16	328	1.04	***
17 - 18	384	1.22	****
19 - 20	467	1.48	****
21 - 22	556	1.76	*****
23 - 24	631	2.00	******
25 - 26	638	2.02	******
27 - 28	738	2.34	*******
29 - 30	720	2.28	*******
31 - 32	752	2.39	*******
33 - 34	790	2.51	********
35 - 36	808	2.56	********
37 - 38	832	2.64	********
39 - 40	885	2.81	********
41 - 42	921	2.92	*********
43 - 44	928	2.94	*********
45 - 46	944	3.00	*********
47 - 48	983	3.12	*********
49 - 50	969	3.07	*********
51 - 52	971	3.08	*********
53 - 54	940	2.98	*********
55 - 56	1053	3.34	**********
57 - 58	1037	3.29	**********
59 - 60	1029	3.26	**********
61 - 62	1003	3.18	**********
63 - 64	1043	3.31	**********
65 - 66	1065	3.38	**********
67 - 68	972	3.08	*********
69 - 70	1008	3.20	**********
71 - 72	987	3.13	*********
73 - 74	945	3.00	*********
75 - 76	964	3.06	*********
77 - 78	909	2.88	*********
79 - 80	921	2.92	*********
81 - 82	684	2.17	*******
83 - 84	642	2.04	******
85 - 86	443	1.41	****
87 - 88	369	1.17	****
89 - 90	175	0.55	**
91 - 92	118	0.37	*
93 - 94	34	0.11	
95 - 96	21	0.07	
97 - 98	0	0.00	
99 - 100	0	0.00	

表12　科目別成績分布図

科目名	生物 I

満点	100	平均点	47.76
最高点	100	標準偏差	20.64
最低点	0	受験者数	16,702

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	23	0.14	
3 - 4	23	0.14	
5 - 6	47	0.28	*
7 - 8	59	0.35	*
9 - 10	117	0.70	**
11 - 12	141	0.84	***
13 - 14	225	1.35	****
15 - 16	313	1.87	******
17 - 18	343	2.05	******
19 - 20	401	2.40	*******
21 - 22	404	2.42	*******
23 - 24	458	2.74	********
25 - 26	480	2.87	*********
27 - 28	466	2.79	********
29 - 30	539	3.23	**********
31 - 32	536	3.21	**********
33 - 34	517	3.09	*********
35 - 36	550	3.29	**********
37 - 38	499	2.99	*********
39 - 40	481	2.88	*********
41 - 42	504	3.02	*********
43 - 44	478	2.86	*********
45 - 46	511	3.06	*********
47 - 48	506	3.03	*********
49 - 50	532	3.18	**********
51 - 52	472	2.83	********
53 - 54	490	2.93	*********
55 - 56	519	3.11	*********
57 - 58	549	3.29	**********
59 - 60	490	2.93	*********
61 - 62	519	3.11	*********
63 - 64	490	2.93	*********
65 - 66	464	2.78	********
67 - 68	464	2.78	********
69 - 70	430	2.57	********
71 - 72	428	2.56	********
73 - 74	373	2.23	*******
75 - 76	336	2.01	******
77 - 78	315	1.89	******
79 - 80	275	1.65	*****
81 - 82	184	1.10	***
83 - 84	204	1.22	****
85 - 86	129	0.77	**
87 - 88	138	0.83	**
89 - 90	102	0.61	**
91 - 92	82	0.49	*
93 - 94	36	0.21	*
95 - 96	21	0.12	
97 - 98	20	0.12	
99 - 100	19	0.11	

表13　科目別成績分布図

科目名	地学 I

満点	100	平均点	37.27
最高点	98	標準偏差	12.45
最低点	0	受験者数	8,245

点数	人数	比率(%)	
0 - 2	4	0.05	
3 - 4	3	0.04	
5 - 6	4	0.05	
7 - 8	8	0.10	
9 - 10	16	0.19	*
11 - 12	27	0.33	*
13 - 14	51	0.62	**
15 - 16	88	1.07	***
17 - 18	139	1.68	*****
19 - 20	183	2.22	*******
21 - 22	270	3.27	**********
23 - 24	297	3.60	**********
25 - 26	395	4.79	***************
27 - 28	462	5.60	******************
29 - 30	532	6.45	********************
31 - 32	577	7.00	**********************
33 - 34	588	7.13	**********************
35 - 36	640	7.76	************************
37 - 38	549	6.66	**********************
39 - 40	516	6.26	********************
41 - 42	501	6.08	********************
43 - 44	419	5.08	****************
45 - 46	372	4.51	**************
47 - 48	321	3.89	************
49 - 50	241	2.92	*********
51 - 52	195	2.36	*******
53 - 54	156	1.89	******
55 - 56	120	1.45	****
57 - 58	90	1.09	***
59 - 60	93	1.13	***
61 - 62	68	0.82	**
63 - 64	51	0.62	**
65 - 66	52	0.63	**
67 - 68	34	0.41	*
69 - 70	34	0.41	*
71 - 72	32	0.39	*
73 - 74	22	0.27	*
75 - 76	19	0.23	*
77 - 78	17	0.21	*
79 - 80	18	0.22	*
81 - 82	12	0.14	
83 - 84	8	0.10	
85 - 86	6	0.07	
87 - 88	5	0.06	
89 - 90	6	0.07	
91 - 92	2	0.02	
93 - 94	0	0.00	
95 - 96	0	0.00	
97 - 98	2	0.02	
99 - 100	0	0.00	

表14　科目別成績分布図

科目名	基礎理科

満点	200	平均点	73.01
最高点	155	標準偏差	26.19
最低点	35	受験者数	63

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	0	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	0	0.00	
13 - 16	0	0.00	
17 - 20	0	0.00	
21 - 24	0	0.00	
25 - 28	0	0.00	
29 - 32	0	0.00	
33 - 36	4	6.35	******************
37 - 40	2	3.17	**********
41 - 44	0	0.00	
45 - 48	6	9.52	**********************
49 - 52	5	7.94	********************
53 - 56	0	0.00	
57 - 60	9	14.28	**********************************
61 - 64	0	0.00	
65 - 68	5	7.94	********************
69 - 72	4	6.35	******************
73 - 76	4	6.35	******************
77 - 80	2	3.17	**********
81 - 84	0	0.00	
85 - 88	4	6.35	******************
89 - 92	2	3.17	**********
93 - 96	5	7.94	************************
97 - 100	4	6.35	******************
101 - 104	0	0.00	
105 - 108	2	3.17	**********
109 - 112	1	1.59	*****
113 - 116	0	0.00	
117 - 120	0	0.00	
121 - 124	0	0.00	
125 - 128	2	3.17	**********
129 - 132	0	0.00	
133 - 136	1	1.59	*****
137 - 140	0	0.00	
141 - 144	0	0.00	
145 - 148	0	0.00	
149 - 152	0	0.00	
153 - 156	1	1.59	*****
157 - 160	0	0.00	
161 - 164	0	0.00	
165 - 168	0	0.00	
169 - 172	0	0.00	
173 - 176	0	0.00	
177 - 180	0	0.00	
181 - 184	0	0.00	
185 - 188	0	0.00	
189 - 192	0	0.00	
193 - 196	0	0.00	
197 - 200	0	0.00	

表15　科目別成績分布図

科目名	英語B

満点	200	平均点	120.78
最高点	196	標準偏差	27.15
最低点	2	受験者数	39,114

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	1	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	1	0.00	
13 - 16	0	0.00	
17 - 20	2	0.00	
21 - 24	2	0.00	
25 - 28	1	0.00	
29 - 32	10	0.02	
33 - 36	9	0.02	
37 - 40	21	0.05	
41 - 44	42	0.11	
45 - 48	77	0.20	*
49 - 52	114	0.29	*
53 - 56	178	0.45	*
57 - 60	191	0.49	*
61 - 64	273	0.70	**
65 - 68	367	0.94	***
69 - 72	484	1.24	****
73 - 76	595	1.52	*****
77 - 80	727	1.86	******
81 - 84	888	2.27	*******
85 - 88	1026	2.62	********
89 - 92	1177	3.01	*********
93 - 96	1343	3.43	**********
97 - 100	1478	3.78	**********
101 - 104	1718	4.39	**********
105 - 108	1744	4.46	**********
109 - 112	1964	5.02	**********
113 - 116	2085	5.33	**********
117 - 120	2107	5.39	**********
121 - 124	2208	5.64	**********
125 - 128	2250	5.75	**********
129 - 132	2139	5.47	**********
133 - 136	2137	5.46	**********
137 - 140	1982	5.07	**********
141 - 144	1853	4.74	**********
145 - 148	1684	4.30	**********
149 - 152	1429	3.65	**********
153 - 156	1277	3.26	**********
157 - 160	1014	2.59	********
161 - 164	783	2.00	******
165 - 168	622	1.59	*****
169 - 172	445	1.14	***
173 - 176	292	0.75	**
177 - 180	186	0.47	*
181 - 184	111	0.28	*
185 - 188	49	0.12	
189 - 192	23	0.06	
193 - 196	5	0.01	
197 - 200	0	0.00	

表16　科目別成績分布図

科目名	ドイツ語

満点	200	平均点	135.00
最高点	196	標準偏差	46.90
最低点	57	受験者数	10

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	0	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	0	0.00	
13 - 16	0	0.00	
17 - 20	0	0.00	
21 - 24	0	0.00	
25 - 28	0	0.00	
29 - 32	0	0.00	
33 - 36	0	0.00	
37 - 40	0	0.00	
41 - 44	0	0.00	
45 - 48	0	0.00	
49 - 52	0	0.00	
53 - 56	0	0.00	
57 - 60	1	10.00	**********
61 - 64	0	0.00	
65 - 68	0	0.00	
69 - 72	0	0.00	
73 - 76	0	0.00	
77 - 80	1	10.00	**********
81 - 84	0	0.00	
85 - 88	0	0.00	
89 - 92	0	0.00	
93 - 96	2	20.00	**********
97 - 100	0	0.00	
101 - 104	0	0.00	
105 - 108	0	0.00	
109 - 112	0	0.00	
113 - 116	0	0.00	
117 - 120	0	0.00	
121 - 124	0	0.00	
125 - 128	0	0.00	
129 - 132	0	0.00	
133 - 136	0	0.00	
137 - 140	0	0.00	
141 - 144	0	0.00	
145 - 148	0	0.00	
149 - 152	1	10.00	**********
153 - 156	1	10.00	**********
157 - 160	1	10.00	**********
161 - 164	0	0.00	
165 - 168	0	0.00	
169 - 172	1	10.00	**********
173 - 176	0	0.00	
177 - 180	0	0.00	
181 - 184	0	0.00	
185 - 188	0	0.00	
189 - 192	0	0.00	
193 - 196	2	20.00	**********
197 - 200	0	0.00	

表17　科目別成績分布図

科目名	フランス語

満点	200	平均点	125.25
最高点	191	標準偏差	59.04
最低点	45	受験者数	8

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	0	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	0	0.00	
13 - 16	0	0.00	
17 - 20	0	0.00	
21 - 24	0	0.00	
25 - 28	0	0.00	
29 - 32	0	0.00	
33 - 36	0	0.00	
37 - 40	0	0.00	
41 - 44	0	0.00	
45 - 48	1	12.50	**********
49 - 52	0	0.00	
53 - 56	1	12.50	**********
57 - 60	1	12.50	**********
61 - 64	0	0.00	
65 - 68	0	0.00	
69 - 72	0	0.00	
73 - 76	0	0.00	
77 - 80	0	0.00	
81 - 84	0	0.00	
85 - 88	0	0.00	
89 - 92	0	0.00	
93 - 96	0	0.00	
97 - 100	0	0.00	
101 - 104	0	0.00	
105 - 108	0	0.00	
109 - 112	0	0.00	
113 - 116	0	0.00	
117 - 120	0	0.00	
121 - 124	0	0.00	
125 - 128	0	0.00	
129 - 132	1	12.50	**********
133 - 136	0	0.00	
137 - 140	0	0.00	
141 - 144	0	0.00	
145 - 148	0	0.00	
149 - 152	0	0.00	
153 - 156	0	0.00	
157 - 160	1	12.50	**********
161 - 164	0	0.00	
165 - 168	0	0.00	
169 - 172	0	0.00	
173 - 176	1	12.50	**********
177 - 180	0	0.00	
181 - 184	0	0.00	
185 - 188	0	0.00	
189 - 192	2	25.00	**********
193 - 196	0	0.00	
197 - 200	0	0.00	

表18　科目別成績分布図

科目名	英語 A

満点	200	平均点	70.00
最高点	159	標準偏差	22.52
最低点	11	受験者数	525

点数	人数	比率(%)	
0 - 4	0	0.00	
5 - 8	0	0.00	
9 - 12	1	0.19	*
13 - 16	0	0.00	
17 - 20	1	0.19	*
21 - 24	2	0.38	**
25 - 28	0	0.00	
29 - 32	5	0.95	***
33 - 36	7	1.33	****
37 - 40	15	2.86	*********
41 - 44	17	3.24	**********
45 - 48	26	4.95	**********
49 - 52	42	8.00	**********
53 - 56	40	7.62	**********
57 - 60	33	6.28	**********
61 - 64	62	11.81	**********
65 - 68	35	6.67	**********
69 - 72	28	5.33	**********
73 - 76	37	7.05	**********
77 - 80	32	6.09	**********
81 - 84	18	3.43	**********
85 - 88	28	5.33	**********
89 - 92	24	4.57	**********
93 - 96	12	2.28	********
97 - 100	13	2.48	********
101 - 104	7	1.33	*****
105 - 108	4	0.76	**
109 - 112	9	1.71	******
113 - 116	4	0.76	**
117 - 120	3	0.57	**
121 - 124	4	0.76	**
125 - 128	5	0.95	***
129 - 132	5	0.95	***
133 - 136	1	0.19	*
137 - 140	0	0.00	
141 - 144	3	0.57	**
145 - 148	0	0.00	
149 - 152	1	0.19	*
153 - 156	0	0.00	
157 - 160	1	0.19	*
161 - 164	0	0.00	
165 - 168	0	0.00	
169 - 172	0	0.00	
173 - 176	0	0.00	
177 - 180	0	0.00	
181 - 184	0	0.00	
185 - 188	0	0.00	
189 - 192	0	0.00	
193 - 196	0	0.00	
197 - 200	0	0.00	

4 選択状況表（人数別）

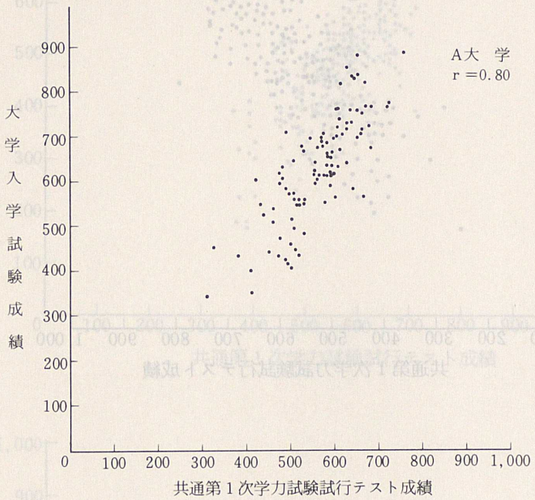
項目	国語	理科 選択－1	理科 選択－2	社会 選択－1	社会 選択－2	数学	合計	外国語	平均得点	人数	累積人数（比率）
1	109.99 23.77	化学Ⅰ 56.21 18.09	物理Ⅰ 68.87 21.36	日本史 51.22 13.30	政治・経済 51.65 11.11	数学Ⅰ 124.50 43.06	125.09 35.40	英語B 118.24 26.86	580.68 116.87	4082	4082 10.29%
2	119.41 23.20	生物Ⅰ 47.08 21.14	化学Ⅰ 43.18 20.04	世界史 51.86 18.18	日本史 56.42 15.47	数学Ⅰ 106.90 41.85	90.26 29.05	英語B 127.72 25.61	552.57 115.02	3677	7759 19.56%
3	116.39 24.28	化学Ⅰ 58.08 18.69	物理Ⅰ 68.39 22.97	世界史 48.81 17.63	日本史 50.92 14.22	数学Ⅰ 129.93 42.63	126.47 36.07	英語B 128.58 27.12	601.09 122.06	3213	10972 27.66%
4	114.65 23.36	化学Ⅰ 61.36 17.94	物理Ⅰ 74.76 19.69	世界史 50.70 16.47	政治・経済 53.73 11.04	数学Ⅰ 133.48 40.97	136.12 33.92	英語B 126.87 25.94	615.55 114.82	2424	13396 33.77%
5	117.19 22.35	地学Ⅰ 37.10 12.09	生物Ⅰ 52.39 19.36	世界史 52.22 17.00	日本史 56.07 14.60	数学Ⅰ 92.94 40.66	89.49 24.51	英語B 122.50 25.51	530.41 105.31	1853	15249 38.44%
6	110.37 23.60	生物Ⅰ 45.33 20.53	化学Ⅰ 40.14 18.45	日本史 52.80 14.02	政治・経済 49.90 11.19	数学Ⅰ 95.11 40.95	85.47 30.44	英語B 112.13 26.69	505.78 108.69	1605	16854 42.48%
7	108.96 23.54	化学Ⅰ 59.36 17.94	物理Ⅰ 71.77 19.94	地理A 59.38 13.25	日本史 52.87 14.16	数学Ⅰ 130.69 40.69	131.13 33.73	英語B 121.45 25.96	604.48 114.19	1385	18239 45.97%
8	113.26 23.77	化学Ⅰ 57.03 18.68	物理Ⅰ 69.11 21.66	日本史 52.92 14.20	倫理・社会 50.34 12.18	数学Ⅰ 125.92 43.33	126.14 36.21	英語B 123.05 27.60	591.64 122.05	1129	19368 48.82%
9	109.12 22.30	化学Ⅰ 61.20 17.55	物理Ⅰ 74.85 18.91	地理A 66.43 14.27	政治・経済 53.72 10.96	数学Ⅰ 133.57 39.84	136.05 32.79	英語B 121.32 25.60	620.21 108.81	1118	20486 51.64%
10	113.95 23.08	化学Ⅰ 63.98 16.72	物理Ⅰ 75.34 19.48	地理A 62.26 13.71	世界史 53.97 15.80	数学Ⅰ 137.12 40.06	139.32 32.17	英語B 128.26 25.14	634.88 110.93	1094	21580 54.39%
11	106.09 23.47	化学Ⅰ 56.66 18.07	物理Ⅰ 68.08 20.39	地理B 46.37 12.85	日本史 51.11 13.66	数学Ⅰ 121.99 41.83	124.74 34.28	英語B 117.22 26.51	567.52 113.38	1011	22591 56.94%
12	117.87 23.35	化学Ⅰ 61.67 18.48	物理Ⅰ 73.89 20.87	世界史 52.07 16.29	倫理・社会 52.98 12.47	数学Ⅰ 133.23 40.65	135.56 35.60	英語B 129.64 25.51	621.35 118.04	988	23579 59.43%
13	110.82 22.39	地学Ⅰ 35.73 11.48	生物Ⅰ 46.14 19.03	日本史 53.90 13.43	政治・経済 49.82 11.12	数学Ⅰ 85.03 37.27	81.87 23.11	英語B 111.46 24.39	492.90 96.08	803	24382 61.46%
14	113.14 24.03	化学Ⅰ 61.28 18.40	物理Ⅰ 73.56 20.24	地理B 48.85 13.62	世界史 53.27 15.43	数学Ⅰ 132.25 41.35	134.84 34.72	英語B 127.75 26.41	610.10 117.96	786	25168 63.44%
15	107.42 23.33	化学Ⅰ 53.45 19.05	物理Ⅰ 66.75 22.18	政治・経済 53.17 11.62	倫理・社会 49.96 12.78	数学Ⅰ 120.35 43.67	120.20 37.14	英語B 113.85 27.47	564.94 121.82	773	25941 65.39%

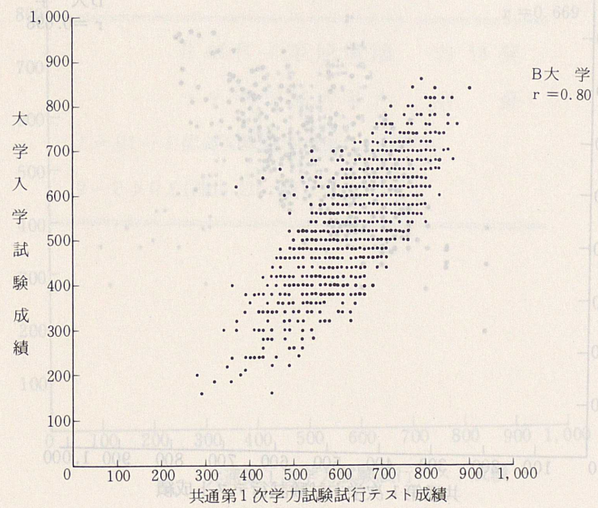
項目	国語	社会			理科			数学	外国語	平均得点	人数	累積人数（比率）
		合計	選択－1	選択－2	合計	選択－1	選択－2					
16	118.37 22.22	112.41 28.21	世界史 54.95 16.71	日本史 57.46 15.32	90.62 25.09	地学Ⅰ 38.02 12.83	化学Ⅰ 52.60 19.02	数学Ⅰ 108.80 40.27	英語B 127.07 25.66	557.28 107.85	755	26696 67.29%
17	111.42 22.75	100.69 21.25	日本史 51.81 13.62	倫理・社会 48.88 11.62	83.74 30.46	生物Ⅰ 44.39 19.79	化学Ⅰ 39.34 18.77	数学Ⅰ 91.05 41.10	英号B 113.10 26.24	499.99 108.37	712	27408 69.08%
18	113.12 23.58	102.95 24.04	世界史 50.41 16.03	政治・経済 52.55 11.90	93.53 32.17	生物Ⅰ 49.49 21.35	化学Ⅰ 44.04 19.75	数学Ⅰ 103.53 40.16	英語B 119.53 25.09	532.66 106.70	674	28082 70.78%
19	120.01 24.10	107.93 28.35	世界史 51.52 18.00	日本史 56.42 14.42	98.37 32.97	生物Ⅰ 48.07 20.58	物理Ⅰ 50.30 25.23	数学Ⅰ 111.73 44.05	英語B 128.17 27.03	566.21 121.16	671	28753 72.47%
20	109.22 23.09	111.93 23.78	地理A 57.58 14.74	日本史 54.35 13.58	89.71 29.42	生物Ⅰ 47.33 20.33	化学Ⅰ 42.38 19.48	数学Ⅰ 99.11 41.16	英語B 117.10 25.19	527.06 108.83	570	29323 73.91%
21	101.23 22.97	102.61 23.13	地理B 50.03 15.95	政治・経済 52.57 11.58	122.66 36.56	化学Ⅰ 54.37 19.24	物理Ⅰ 68.29 21.45	数学Ⅰ 118.26 43.57	英語B 110.55 29.27	555.30 122.99	460	29783 75.07%
22	110.34 21.01	103.43 19.74	日本史 53.97 12.98	倫理・社会 49.46 11.15	79.90 22.65	地学Ⅰ 34.80 10.50	生物Ⅰ 45.10 18.80	数学Ⅰ 79.17 37.02	英語B 111.11 23.61	483.94 89.88	440	30223 76.18%
23	105.74 23.67	98.92 24.91	地理B 46.49 16.16	日本史 52.43 14.60	84.54 30.52	生物Ⅰ 45.08 20.58	化学Ⅰ 39.46 19.22	数学Ⅰ 94.39 41.79	英語B 110.86 26.42	494.44 110.82	435	30658 77.28%
24	110.62 21.95	115.99 24.58	地理A 58.96 14.89	日本史 57.03 13.86	88.92 23.41	地学Ⅰ 37.88 12.29	生物Ⅰ 51.04 18.97	数学Ⅰ 91.91 39.01	英語B 114.73 24.50	522.16 100.83	428	31086 78.36%
25	117.88 24.37	121.73 27.93	地理A 64.90 15.44	世界史 56.83 16.52	99.94 31.78	生物Ⅰ 53.35 21.73	化学Ⅰ 46.58 20.50	数学Ⅰ 114.73 41.09	英語B 127.34 25.10	581.61 114.06	381	31467 79.32%
26	116.69 21.46	102.64 24.04	世界史 49.70 16.73	倫理・社会 52.94 11.05	93.48 33.54	生物Ⅰ 51.26 21.52	化学Ⅰ 42.22 19.73	数学Ⅰ 97.72 41.54	英語B 121.61 24.81	532.14 107.63	348	31815 80.19%
27	113.24 24.69	105.81 24.83	世界史 51.57 16.15	政治・経済 54.24 11.94	86.98 23.49	地学Ⅰ 36.68 10.90	生物Ⅰ 50.31 19.91	数学Ⅰ 88.01 39.14	英語B 119.64 25.79	513.68 103.35	339	32154 81.05%
28	110.33 22.85	103.09 21.14	日本史 51.93 13.53	政治・経済 51.16 11.80	91.25 34.17	生物Ⅰ 44.71 20.81	物理Ⅰ 46.54 23.36	数学Ⅰ 95.98 42.70	英語B 111.98 25.69	512.63 113.97	337	32491 81.90%
29	109.49 24.08	104.35 23.15	日本史 53.66 14.49	政治・経済 50.69 11.91	80.46 24.03	地学Ⅰ 35.67 10.97	化学Ⅰ 44.78 18.40	数学Ⅰ 94.08 40.31	英語B 112.14 25.64	500.52 104.51	335	32826 82.74%
30	111.34 23.89	107.40 28.09	地理B 52.59 17.25	世界史 54.82 15.26	95.75 33.75	生物Ⅰ 49.30 21.35	化学Ⅰ 46.45 20.51	数学Ⅰ 101.80 42.01	英語B 120.15 26.46	536.45 113.10	299	33125 83.50%

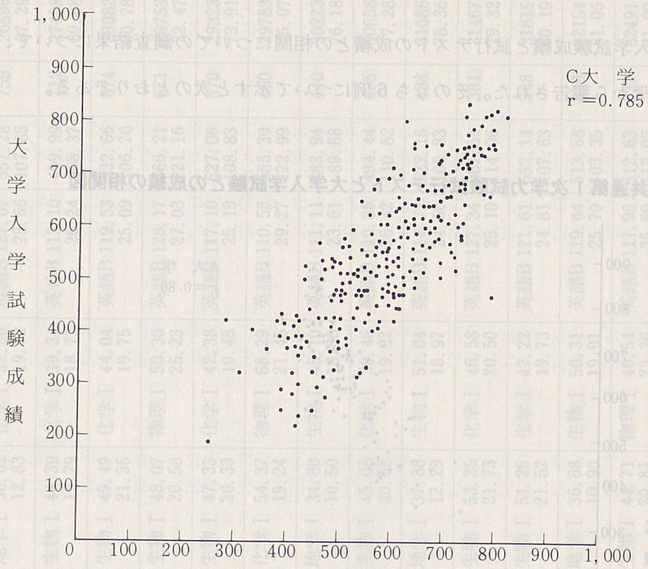
Ⅴ　共通第１次学力試験試行テストに関する追跡調査について

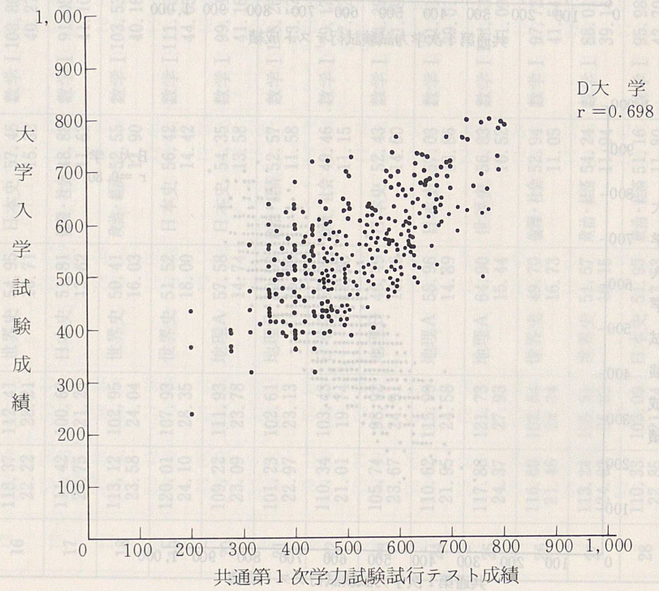
53年度大学入学試験成績と試行テストの成績との相関についての調査結果について、87国立大学のうち、21大学から報告された。そのうち６例について示すと次のとおりである。

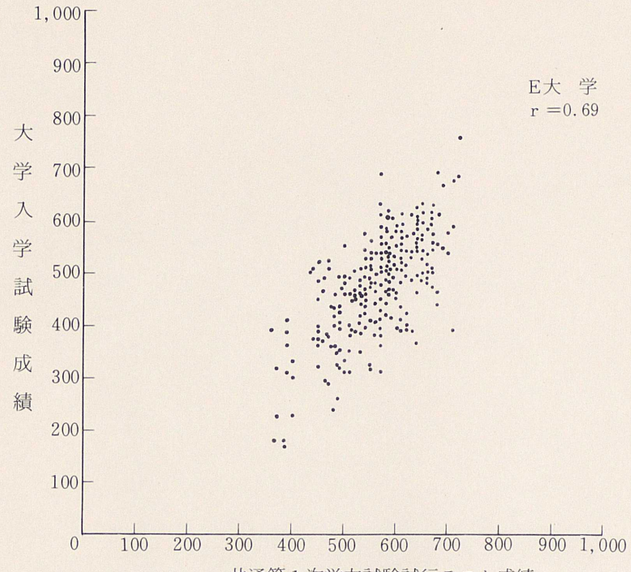
共通第１次学力試験試行テストと大学入学試験との成績の相関図

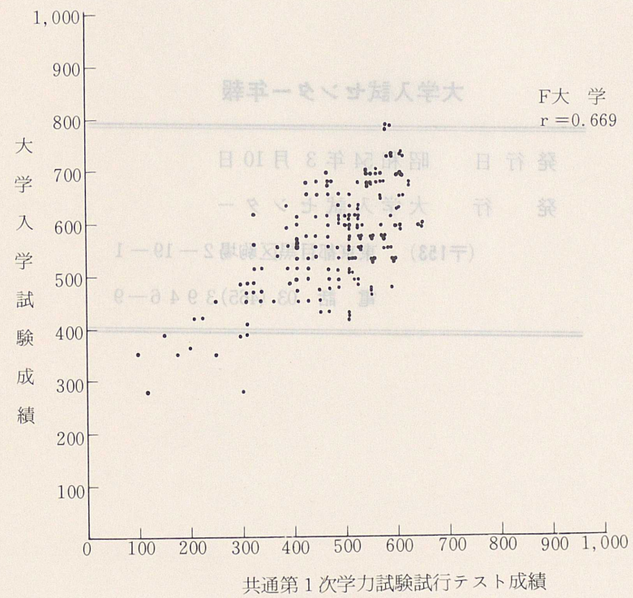


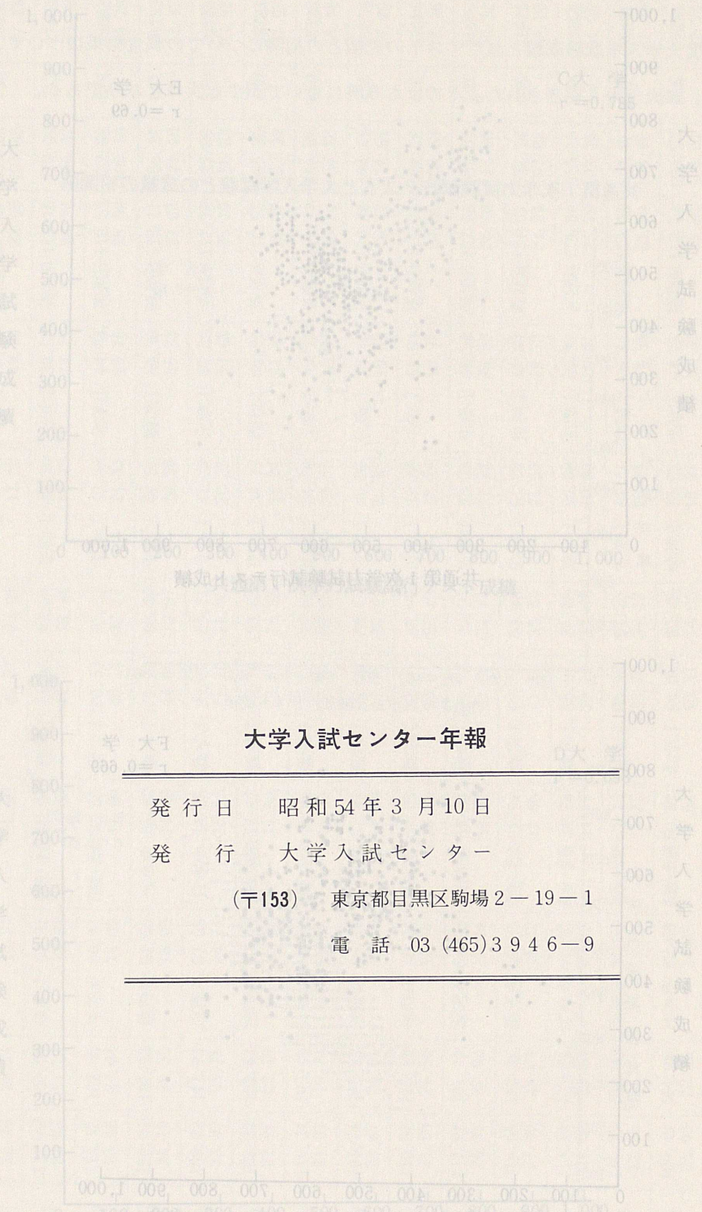



C大　学
r ＝0.785
大学入学試験成績
1,000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1,000
共通第１次学力試験試行テスト成績


D大　学
r ＝0.698
大学入学試験成績
1,000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1,000
共通第１次学力試験試行テスト成績


E大　学
r ＝0.69
大学入学試験成績
1,000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1,000
共通第１次学力試験試行テスト成績


F大　学
r ＝0.669
大学入学試験成績
1,000
900
800
700
600
500
400
300
200
100
0
100
200
300
400
500
600
700
800
900
1,000
共通第１次学力試験試行テスト成績



大学入試センター年報

発行日　昭和54年3月10日

発　行　大学入試センター

（〒153）　東京都目黒区駒場2－19－1

電　話　03（465）3946－9